

俺は遠くから尊いを眺めていたんだよ！組み込むんじゃないやねえ！～
ゴッドイーター世界に転生したからゴッドイーターになって遠くか
ら極東支部尊いしたかったのにみんな率先して関わってきて困る～

三流二式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴツドイーター世界に転生した男が周囲に勘違いをばら撒きながら神器使いとして生きていくお話です☆

なお主人公はゲーム基準。他の人たちは漫画とかアニメとかシビアな価値観しています。

目次

『ゴッドイーター編』

プロローグ 1

第1話 新型ですよ新型！……え？俺がやるの!?主人公はどうした！ 7

おいらは案山子！名無しの案山子！ 16

オウガテイルはやっぱりバースト維持のために生きているんですね！ 27

飛翔 36

申し訳ないが死人はNG 46

神と人 60

グボグボパニック 75

鯨、猿、鳥、そして串つきおでんパン 87

ある少女 97

蒼穹の月 112

惨劇 121

ダッセーコートなんか着やがって！ 141

変化 150

希望の子 167

極東支部第一部隊隊長『名無之カカシ』 180

空を駆ける狂犬 192

塩、またはsalt 212

異邦人 220

原初の螺旋 240

帝王様にも二種類あるけど、一纏めにするのはどうなんだい！

月を呑む	266
悪い子	291
神、人、化物	308
エイジスへ	330
希望（前編）	343
希望（中編）	360
希望（後編）	378
第2章『ゴツドイーターバースト編』	
リスタート・ニューデイズ	405

『ゴッドイーター編』 プロローグ

突然だけど、皆は入り込んでみたいゲームや漫画とかはあるかな？

そういう人は、例えばドラクエとかファイナルファンタジーとかに入り込んで、原作知識生かして早い段階で凄い魔法を習得したりして皆をあつと言わせたり、事前に事件の発端の黒幕をぶつ飛ばして物語をそもそもスタートさせないとか。

そういうことをしてみたいとか考えたことは、一度くらいはあるのだろうか？

俺はもちろんあるぜ！

モンハンの世界に入り込んでスリンガー溜め3ムロフシ叩き込みまくって周囲にハンマーのすばらしさを説いたり、坂でのハンマーの強さを教えてえ！とか安易に妄想してはウヘヘと一人にやっついていたりしていた。

勿論それはしよせんゲームに沿った世界そのままであることが前提の妄想な訳だから、じゃあその世界にマジで飛ばされたら、俺はきつとライトボウガンを担いで遠くから通常速射を顔面にぺちぺち当てるマンになっている事だろう。そもそも俺は人にものを教えられないような人間じゃないし。

前置きが長くなってしまったが、結局俺が何を言いたいのかという
と。

転生してしまったのだ。しかも俺がプレイしていたゲームの世界に。

俺が転生する前にプレイしていたゲームの名は『ゴッドイーター』。それも無印だ。

無印だぞ無印。バーストや2のように調整された奴じゃなくて、アラガミが捕食の際の移動で阿呆みたいに体力の減るあの悪名高き無印だ。

何でそんな古臭いゲームをやっていたのかというと、部屋の中を整理していたら発掘されたPSPがぽろつと出てきたからだ。

もう長いこと遊んでいなかったから、久々に見たPSPが何だか新鮮に思えた。カセットを覗いてみるとゴッドイーターのディスクが入っていて、しかも電池も十分残ってたから、整理の事もほっぽり出してプレイしていたのだ。

久々にプレイした無印ゴッドイーターは相変わらず阿呆みたいに難易度が高かった。アイテール（スカートはいた宙に浮かぶおっさん。キモイ）2体の任務は分断しようにも視野の広さのせいですぐに乱戦に持ち込まれ延々床ペロされる羽目になり、ハガンコンゴウ（電気びりびり猿、大型アラガミとの戦闘の際に乱入してくるんじやねえ！）4体の任務は当時と同じようにクリアできなかつた。これがバーストや2とかならクリアできたのだけどね。

夢中になってやっていると、気が付けば空は紅色。俺は慌ててPSの電源を消し、充電器につないで部屋の整理を再開した。

しかしその最中も、俺は目の前の事に集中しなやかたつて夢中になってゴッドイーターをプレイしていた時の事を懐かしく思い出していた。

当時の俺はモンハンばかりやっていたハンターだったけど、友達に勧められて何となくプレイしてみたのがこのゲームとの出会い。

そして移動の速さ、遠近ともに対応できる神機、クリーチャーのデザインはたちまち俺をゴッドイーターの世界の虜にした。

以来俺はゴッドイーターのゲームは無印から3までずっと追いかけてきた。何度も何度も周回した。(3以外は)

好きなゲームは何ですか？ と聞かれたら、俺は迷わずゴッドイーターと答えるだろう。(3以外は)

好きなゲームだよ、ほんと。(3以外は)

でもこの世界に入りたいかと聞かれたら、俺は確実にNOと言う。

だってこの世界、基本詰んでるんだもん。

そもそもアラガミ(オラクル細胞)が出現したのは地球が危機を感じ、自らを再生させようとした、いわば地球の新陳代謝？ あるいは自浄作用？ みたいなもんである。

その際に地球上にいたあらゆる生命が絶滅してしまうが、自分の体の中に棲む寄生虫やらの心配などする奴がいないのは当然のことで、それを何度も妨害するせいでどんどん状況が悪化していくのがゴッドイーターという物語の流れなのだ。

地獄である。糞である。

物語としては好きだが(レイジバーストでロミオが復活するのと3以外)、現実として生きたいとは到底思えない世界なのだ。

なのに転生してしまった。ぶこ丁寧に子供の姿である。この世界で子供の姿で転生とか、神様は俺に死ねってか？ ふざけてるぜ。

え？　そもそも何で転生した世界がゴッドイーターの世界だって
わかったのかって？

だって意識を失って目が覚めた瞬間、目の前でオウガテイル（現物）
が大口開けて突っ込んできてたんだもん。

びつくり何てもんじゃない。危うくりアルエリック（序盤でオウガ
テイルに食われて死ぬチャライイケメン。通称上田）になるところ
だった。

咄嗟の判断で身を投げ出せなかったらと思うとぞつとする。良く
身が竦まず体が動いたもんだ。命の危機を味わったことが無いなり
にナイス判断だと自分を褒めてやりたい。

尤もその後がまた大変だった。

ゲームではオウガテイルなんて雑魚そのもので、動きがすつとろい
のを良い事にバースト維持のためにあえてそこらへんに放置してた
ような敵だった。

でも現実ではそうはいかない。こんな雑魚でも文字通り人外の身
体能力は、オラクル細胞を持たぬただの人間、加えて子供である俺に
は、ディアウスピター（顔がおっさんの猫。リザレクションは許さんか
らな）並みの脅威に映った。

偶々近くに人の死体があり、その懐に偶々スタングレネード（アラ
ガミを怯ませられるくらい強力な閃光手榴弾）が無かったら、俺は今
頃奴に食い荒らされ、薄汚い肉塊になり果てていたこと請け合ひであ
る。

俺がいたのは通称贖罪の街（ゲームで一番初めに入る事になるス
テージ）と呼ばれている場所で、アラガミが現れた直後に多くの人が
住んでいた街だ。今はアラガミの侵攻で誰も住んでおらず、いるのは
俺と同じはぐれ者かアラガミくらいのものだ。

このステージは好きだよ。程よい広さで遮蔽物も多くて分断も楽だし、フレーザーバーテキストもGOOD！

でも子供の姿で駆けずりたい場所じゃねえなあ！

オウガテイルを撒いた俺は必死になってマグネシウムとモーリウを求めて贖罪の街を駆けずり回った。

この二つを組み合わせるとスタングレネードが出来上がる。戦闘の出来ない俺の生命線となる物なので、ぜひとも今の内に集めておきたかった。ゴッドイーターになった後も使うしね。備えあれば患いなし！

うち捨てられたこの街で素材を求めて地面をガサガサあさる姿は、はたから見たらそれはもう滑稽に映ったことだろう。

しかし他人から見たら滑稽な姿でも、当人である俺にとってこれは命を繋ぐ尊い行為であり、燃える血潮のパトスなのである。

うろうろするオウガテイルやドレッドバイク（二足歩行の緑色の虫みたいなやつ。雑魚そのものだが、3でなんか地中潜行なんか覚えやがった）、をやり過ぎし、コクーンメイデン（キモイ繭みたいなやつ。遠距離からいきなり撃ってくるの止めろ！）に絶対感知されないように夜にこそこそ動き、何日もかけてついにスタングレネード30個分の材料が集まった。

「やったあ！」

両手放しで喜んだのも束の間。

「やば、俺スタグレの作り方知らねー！」

俺は途方に暮れ、考え抜いた挙句、この街を離れて人のいるコミュニティを探すことに決めた。

ていうかそうしないと死ぬ！ ゴッドイーターになってもいけないにくたばるなんざごめんである。死ぬにしたってせめて神機使いとして死なせてほしい。できれば主要人物の目の前で。

ゴッドイーター世界に転生したのだから、やっぱりゴッドイーターになってみたいという願望があった。できれば主要人物とお近づきになりたい。あわよくば彼ら彼女らを見て遠くから尊いしてえ！

だから俺は拠点を離れ、人を求めてさ迷い歩いた。

その過程で今は2061年、原作開始からちょうど10年前だという情報を手に入れることが出来た。

10年。さすがにそれだけの時間があれば、俺もこの地獄めいた世界に馴染むことが出来るだろう。

先の展開を知っているだけに憂鬱な気分は晴れないが、逆にもう少しましに出来るんじゃないかという希望も胸にあると言えはあるのだ。

先行きは不安。頼れるものは知識以外何もありません。いけれど、それでも生きていこうと俺は決意を新たに、今日もスタングレネードを投げてアラガミを怯ませつつ素材を回収するのであった。

第1話 新型ですよ新型！……え？俺がやるの!? 主人公はどうした!

場所はフエンリル極東支部の支部長室。

そこに一人の男が机の上に手を組んで座していた。

彼の名は名はヨハネス・フォン・シツクザール。この極東支部の支部長である。

彼は手を組んだまま、じっと前方を見つめていた。まるで何かを待っているかのように。身動き一つしないでじっと。

と、そこで手元に置いてあるノートパソコンから通信があり、『新型神機の適合候補者』が見つかったと報告があった。

「ふむ、名前は何という?」

「ええと、それが……」

言い淀むオペレーターにシツクザールは訝しみ、ノートパソコンのキーを軽快に叩き、モニターに映し出されたその『適合候補者』のデータをざっと眺めた。

「ふむ……、む? この候補者、名前が無いようだが?」

シツクザールはやや眉を顰めた。

候補者は数多くいる。中には孤児や後ろ暗い過去を持つ者も少なくないが、それでもみな偽名であれ自らで付けた名であれ、名前を持っていた。

そんな中で名すら持っていない者がいたとすれば、それはすなわち

暗闇のさらに奥、深淵とすらいえる暗黒の中に身を置く闇の住人に外ならない。

「面白い」

シックザールは口の端をわずかに上げてほくそ笑んだ。

「よろしいのですか？ このような得体の知れない者に適合試験を、ましてや『第二世代神機』の適合試験を受けさせるなどと「良い。彼には早速適合試験を受けてもらう。これは命令だ」「かしこまりました」

オペレーターの疑問の声をシックザールは払いのけ、この存在しない者に適合試験を受けさせるように命じた。

「極東支部初の新型神機の初の適合試験が名無しとは……ふつ、『ペイラー』じゃないが、なんだかロマンチックじゃないか」

ノートパソコンを消し、再び静寂が戻った支部長室に、しばしの間シックザールの静かな笑い声が響いた。



月日は流れ、2071年。俺は（推定）19歳になった。

そう2071年。ゴッドイーターの本編が開始される年である。

いやあ月日が経つのは早いね。ここまでの間ひたすら素材稼ぎと金稼ぎと人助けに奔走して、気が付いたらこの年代になってたんだもの。

正直勘弁してほしい。ここから怒涛の様に糞みたいなイベントのオンパレードだ。気を引き締めていかねば！ と俺は決意を新たに、さっそくゴッドイーターになるための適合試験を受けに行くべく、我、極東支部二突撃ス！（#。D。）

手続きは意外なほどあっさり済んだ。

まあ適合候補者Ⅱありふれたモルモットみたいなもんだから、それも当然か。

それから何か待合室みたいなとこに連れてこられ、俺は何時間も待たされることになった。

まだかなまだかなとそわそわしながら、果たして俺に適合する神機は何型だろうか、不安で不安で今にも卒倒しそうな時間だった。

まあまず間違いなく旧世代型神機だろう。だって『新型神機』神薙ユウ君（ちゃん）の物だもん。

ああ神薙ユウ君（ちゃん）は原作の主人公のデフォルト名ね。彼（彼女）が適合試験で『新型神機』（近距離神機と遠距離神機の両方が使える凄腕）に適合してから物語は始まる。

神薙ユウさんの事は置いておこう。今は自分の適合神機の事が心配だ。

神機というものは自らに適合する『偏食因子』によって選ばれるから、俺の得意な『アサルト』や『ロング』の神機が選ばれるかどうかは本当に自分次第なのだ。

うう……これで苦手な『バスター』や『スナイパー』に当たったらどうしよう。

お願いロングかアサルトでお願いします最悪『ショート』か『ブラスト』でもいいです『コウタ』や『リンドウ』さんとキャラ被っても

いいんでお願いします元から目立つ気とか無いんです遠くから彼らを尊い出来ればいいんですお願いしますアルダノーヴァ様ツクヨミ様アマテラス様スサノオ様オグルマは死ねアリウス・ノーヴァ様世界を拓く者様世界を閉ざす者様紅蓮のオロチ様！

「準備が完了しました。速やかに適合試験会場まで行ってください」
「——はっ!？」

ひたすら祈祷していたら、ついにその時がやって来たようだ。

俺は立ち上がると、ドキドキと緊張で高鳴る胸を押さえつけながら、ゆっくりと指定された部屋まで向かった。

適合試験の行われる部屋は殺風景かつ物々しい雰囲気満ちていた。部屋には大きささまざまな傷がついており、適合に失敗した者の末路を感じさせるようで、俺はひそかに震えた。

しかしムービーで見ていた場所に自分がいるなんて、なんだか感慨深いものがあるなあ。

俺は自分が適合に失敗するかもしれないという不安を頭の隅に押しやり、湧き上がる恐怖をこまかすように部屋の中をきよろきよろと見まわっていた。

『長く待たせてすまない』

と、そこでスピーカーから声が聞こえた。

こ、このイケボは……!？

その声を聴いた瞬間、それまで感じていた不安が頭から吹き飛んだ。俺は満面の笑みを浮かべながら、上にあるガラス窓に映る人を見た。

(お、黒幕さんちつすちつすwww)

そこにはフェンリル創設者兼この物語の黒幕『ヨハネス・フォン・シツクザール』支部長が、胡散臭さ満点の顔で俺を見下ろしていた。

彼、ヨハネス・フォン・シツクザールは主要キャラである『ソーマ・シツクザール』の父親であり、このフェンリルの創設者の一人で、同時にこのゴッドイーターの物語の黒幕の一人である。

彼は表では『エイジス計画』という人工島に残った人類を移住させる計画をやったんだけど、それは『アーク計画』という本来の計画を隠すための隠れ蓑だったのだ。

『アーク計画』の詳細は省くが、とりあえず計画が遂行されると今の人類は滅ぶよ！ つて事だけ覚えとけばええ。

彼の事は好きだよ。『アーク計画』だって彼なりに人類を思ってる事だし。正直あの計画はこれから先の事を思うと最適解だと思う事さえある。

だからか俺はシツクザール支部長の事を嫌いになれないのだ。

「心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ」

なんてことを考えていたら、話はすでに終わってしまっていた。

しまった！ あれこれ考えていたらシツクザール支部長のお話を聞き逃してしまっていた！

勿体ない事をしてしまった。あくあ。

ま、過ぎたるは及ばざるがごとし。まだまだ彼のイケボは聞けるん

だし、そう気を落とすことも無い。俺は気持ちを切り替え、きびきびした動作で中央のケースの前まで進んだ。

そしてケースにおいてある、銃と剣がくつついた神機を新鮮な面持ちで見……てえ!?

「へえっ!？」

俺は驚きのあまり目を剥いた。

そこには新品ぴかぴかの第二世代型神機が鎮座していた。

いやちよつと待て！ 待て待て待て！ 何で!?

新型ですよ新型！ ……え？ 俺がやるの!？ 主人公はどうした

！

と、そこで俺の記憶の中に、いつだったかアラガミから逃げている親子をスタグレを投げまくって助けたことがあったのを思い出した。その時助けた幼い少女、やけに印象に残る子だった。

え？ もしかしてその子？ 神薙ユウだったんか!？ 他とは隔絶した雰囲気を感じていたのもそういう事!?

マジ？ 君がゴツドイーターになった動機は復讐だったんかい!?

俺もしかして計らずしも主人公になる筈だった子の動機潰しちやっただの!?

え、俺がやるの!?

いや待て早まるな！

俺は混乱の極みにあつた脳味噌に残つた僅かな冷静さをフル動員し、何とか落ち着きを取り戻した。

そう俺は嘯ませた。俺が主人公の役割なんてするわけないじゃん。きっと俺が失敗して、その後には本命の神薙ユウちゃんか颯爽と出てきて、見事新型神機に適合するに違いない。

そうだそうに決まつてる。まさか俺がそんな……。

俺は恐る恐る装置に腕を突っ込む。

あれ、でも失敗したら俺死ぬんじや。

そう思った刹那、ガシャーンという音と共に装置が作動して、プレス機めいて俺の腕を挟んだ。

「おおっ!?!」

心の準備が出来てなかつた俺は、はらはらしながら展開を窺つた。しかしどこか冷静な自分がいた。

多分心のどこかでは分つていたのだと思う。でも、やっぱり納得がいかねえー!

沈黙が、場を支配する。俺だけじゃなくシツクザール支部長も固唾をのんで見守っていた。

そしてプシューツという音と共に、装置が開き、俺の腕にはゴッドイーターである証、赤い腕輪がはめられていた。

ええ……。

俺は自分如きがこんなものに適合してしまった申し訳なさと、自分

に主人公の代役が務まるのかという不安がないまぜとなった複雑な心境で、はめられた腕輪と神機を見上げていた。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

俺の心境をよそに、シツクザール支部長は嬉しそうに言った。

ええんか俺で？ いいんですかワタクシで？

「適性試験はこれで終了だ」

複雑な心境のまま見上げている俺に、特に気にした様子も無くシツクザール支部長は続ける。

「次は適合試験後のメディカルチェックが予定されている。始まるまでその向こう側の部屋で待機してくれたまえ。気分が悪いなどの症状があったらすぐに申し出るように。良いかね？」

こうなりややるつきやないか。

「……………はっ」

俺は支部長の言葉にしびしび了承すると、とぼとぼとした足取りで出口へと向かった。

あーあ、後方支援者面したかったなあ。

でも主人公になれば、もつと間近で彼らを尊い出来るじゃん？ そもそもゴッドイーターでの主人公の役割なんて都合の良いデウスエクス・マキナで良いんだ上等だろ。

やってやろうじゃねえか！ なってやろうじゃねえか！

！
自慢じゃないがロングとアサルトに掛けちゃ俺はなかなかやるぜ

うおーっと決意を新たに、俺はゴッドイーターとしての一步を踏みしめるのであった。

おいらは案山子！名無しの案山子！

「おお……」

適合試験を終えた俺は部屋から出て、アナグラを見渡して感動に震えていた。

だって、ずっと画面の向こうから眺めていた拠点なのだ。初代からリザレクションまで、随分長い事この極東支部のアナグラは使われてきた。

感慨深さは『フライヤ』の非じゃない。だって10年以上の付き合いだぜ？　そこに俺は今立って、呼吸し、自らの目で見ているのだ。要するに俺はいま非常に興奮していた。

そして、適合試験のイベントの後には『彼』との初対面があった。俺は今にもアナグラ内を見て回りたい欲を抑えつけ、『彼』の座っている長椅子の端っこに腰かけた。

『彼』も俺の事に気が付いたようで、俯いていた顔を上げ、気さくに話しかけてきた。

「ねえ、ガム食べる？」

すつとぼけた顔でそんな事を言ってくる、まだあどけなさの残る顔立ちのこの少年は『藤木コウタ』。

ゴッドイーターの物語で主人公と同日に配属された新人神機使いで、同じ第一部隊の所属となる物語の主要人物である。

コウタ君は、言うなれば第一部隊のムードメーカー的な存在だ。滅茶苦茶明るくて、家族思いな優しい彼は全編通してすごい頼りになる。

特に任務6まで暗い話が続くから、彼の存在は凄く有難いのだ。

あーあ、本当なら神薙ユウちゃんとコウタ君のキヤツキヤウフフな会話が見れたはずなんだけどなあ。それを遠くから見て尊いしていたかったのになあ。

うう、ごめんよコウタ君。

……まあ神薙ユウちゃんがこんな糞血生臭い場所に身を投じなくて済むようになったのは良いことなのだがね。寧ろ家族と団らんできてると思うと、ヤバ、めっちゃ尊くね!?

「ああ、ごめん。今食べてるので最後だったみたい。ごめんごめん」

俺の心境など露知らぬ彼は、ガムをくちやくちや咀嚼しながら肩を竦めた。

俺はニコニコと顔をほころばせながら、気にしなくていいという事を伝えたくて手をひらひらと振った。

ここで彼に話しかけるのもいいんだけど、原作では基本主人公は喋らんし、俺の場合は絶対余計な事を口走ってしまう自信があったので、身振りだけに留める事にした。

結果的に原作主人公と同じ対応になってしまったけど、まあ彼はコミュ力が高いし、その仕草だけでも俺の意図はばっちり伝わった様だ。

「あんた良い奴だな！」

そう言って、コウタ君は足をパタパタさせながらニカツと笑った。

やっぱり良い子やでえ〜。

彼の良い子ぶりに、俺の顔はますますだらしなく緩んでゆく。

でもコウタ君、一つ訂正があるぜ。俺は良い人じゃなくなつて、身の程を弁えているだけですよおくん。

「あんたも適合者だろ？」

彼からの質問に、俺は頷いて同意の意思を示す。

「俺と同じか……少し年上っぽいけど、ま、一瞬とはいえ俺の方が先輩ってことで、よろしく！」

俺は親指を立てた。コウタ君はにつこり笑った。その時微かな安堵の様なものが一瞬だけ垣間見えたのを、俺は見逃さなかつた。やっぱり彼みたいなる明るい子でも不安はある物なのねえ。

その事を初対面の人にばれないようにひた隠しにするコウタ君……。

うう……健気……尊し！

思わず口走りそうになったその時、カツンカツンとヒールが地面を打つ音が聞こえた。

コウタ君と一緒に音の方を見ると……。

(うわああああああああ痴女だああアアア!!)

俺たちの視線の先には、胸元を大きく開け、上半身も下半身も大変露出過多な女性が立っていた。

彼女の名は雨宮ツバキ(29歳)、主要キャラである雨宮リンドウさんの実の姉で、第一〜第三部隊の指揮・統括と、新人神機使いの教官

を兼任している凄い人だ。

ただこの人、俺が叫んだ通り、ていうかこのゲームの大体のキャラに当てはまる事なのだが露出が大変多いのよ。

何だその、何だ、上も下も風通し良さそうな服装は！

こんなエッチな格好して教官だなんて新人神機使いに対して失礼だよ。

エッチだね♡。オラ、脱げ！

「立て」

ツバキさんは有無を言わさぬ威圧的態度で、俺たちに「命令」した。そう命令である。

「え？」

コウタ君は突如やって来て命令してきた彼女に呆けた顔で聞き返した。

俺は彼女の姿を認識した瞬間に立ち上がった。いたから標的にはなかったけど、彼はまだ彼女が誰か知らないから、彼女の威圧的な眼光をもろに食らう羽目になった。

「立てと言っている。立たんか！」

「は、はいー」

ツバキさんの鋭い眼光と、短いながらも強い口調で放たれた命令に、コウタ君はびくりと身を震わせながら勢い良く立ち上がった。ついでに背筋も伸ばした。胸まで張って後ろに手まで組んでいる。

(おお……すさまじいまでの新兵ムーブ)

俺はその姿にいたく感動し、片手で口元を覆った。

「これから予定が詰まっているので、簡潔に済みます」

彼女は俺をひと睨みして（俺は慌てて姿勢を正した）、言葉の通り物凄く簡潔にこれからの予定を説明した。

「という訳で、早くメデイカルチェックへ行ってこい。……何をしている？ お前。お前だお前、『名無し』」

説明を終えた彼女は早速メデイカルチェックに行ってくるように命じてきたけど、俺がコウタ君のどっちに言っているのか分からなかったから、俺らはほげーっと彼女の事を見つめていた。

そしたらツバキさんは『名無し』と言いながら、俺の事を指さした。

「へ、『名無し』？」

俺は首をかしげた。

「そうだ。お前、適合候補者として手続きをする際に名を書かなかつたそうだな。何故だ？」

「え、何あんだ。もしかして名前記入するの忘れたのか？ ドジだなー」

「お前は記入漏れが多すぎだ」

「うえ!？」

コウタ君がバインダーで頭を小突かれ、涙目になって小突かれた箇所を摩っている間、俺は腕を組んで頭を捻っていた。

「何だ？ どうした？」

「いやあなんでもないです。ただ……」
「ただ？」

齒切れ悪く言う俺に、彼女は訝しそうに眉を寄せる。

「俺、改めて考えたら名前無かったっす」

2人の体が固まった。さつきまでキリツとしたクールフェイスだったツバキさんの顔が、目尻に涙を滲ませて痛がっていたコウタ君の顔が一瞬でこちらに向き直り、心なしか温度が下がったかのような錯覚を覚える真顔へと変化した。

うん、まあそりや、いきなり俺名前が無かったなんて痛い事言い出す奴を目の当りにしたら、何を言っているんだこいつと、思考停止になるのも無理はない。

でも仕方ないじゃないか。今生での名前を名付けてくれる人なんていなかったんだから。

親はいなけりや友達もない。考えてみれば人と話したことだつて、片手で数えられるくらいしか記憶には無い。

俺の今生での記憶は人助けと素材集めとスタングレネードの事しかない。それ以外無い。何も無い。

しかし名前か。名前なあ……。

ドン引きする二人尻目に、俺は顎に手を当てて沈思黙考する。

名は体を現すという言葉がある。風子なら風の子、風の如く軽やかな子とか、花子なら花の様に綺麗な子、とかであろうか。

じゃあ俺はどうだろう？

俺を表す名は……俺は何だ……？

俺は……都合デウス・エクス・マキナの良い神様？

俺は……置物？

俺は……突っ立っているだけの人形？

俺は……案山子？

……そうか！ 俺の名は！

「うん、そうだ」

俺は一人頷き、にっこり笑って俺の名前を二人に告げた。

「俺の名前は名無ナナシ之カカシ！ 今決めました！」
「なっ!?!」

絶句したように目を剥く二人に、俺はふと腕時計を見て、ビツクらこいた。

やべ、そろそろメデイカルチェックの時間だ！

「あ、待」

いきなり走り出した俺にコウタ君は何か言った気がするけど、ごめ

ん、話なら後で聞くよ！ 今は『榊博士』に会うのが優先なりね。

俺は階段を駆け上がり、エレベーターに飛び込むように駆け込むと、榊博士のラボがある階を連打した。

初対面で遅刻は嫌よ。

ラボのある部屋にエレベーターが止まり、開いたと同時に俺はカタパルト射出されたかのごとく勢いよく駆け出した。その途中台場カノン（通称ちゃん様、あるいは誤射姫）さんがいたので、これからもよろしくという意味で肩に手を置いて親指を立てた。

それから再び走り出し、エントランスから駆け出してざっと30秒ぽっきりでサカキ博士のラボの前までやって来た。

俺は緊張で乱れる息を整え、それからゆっくりとラボの中へと入ってゆく。

ラボの中にはすでにヨハネス支部長と、白髪的眼鏡をかけた糸目のイカしたおじさんさんが、モニターのあちこちに視線を這わせながらせわしなくキーを叩いていた。

この胡散臭さ満点の彼が『ペイラー・榊』博士。アラガミ研究の第一人者で、オラクル細胞の技術利用を可能とした偏食因子を発見した最大の功労者で、胡散臭さの割に最後まで味方でいてくれた凄い人だ。

実は途中で絶対裏切ると思っていました。（小声）

「ふむ、予測より726秒も早い。よく来たねえ新型君」

博士はキーを打つ手を止め、モニターから視線を外して俺に向き直

りながら自己紹介をした。

「私はペイラー・榊。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後、君とはよく顔を合わせる事になると思うけど、よろしく頼むよ」

俺はにつこり笑って手をひらひらと振った。それで十分伝わったみたいで、博士は口元を緩めて少しだけ笑った。

それから再び博士は俺から視線を外し、止めていた手を動かし始めた。

「すまない、見ての通りまだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

「……榊博士。そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい」

ヨハネス支部長は窘めるけど、榊博士はどこ吹く風といった感じで、初めから聞く気が無いようだ。

この気安い二人の関係……うーん、尊し！

俺が一人感動していると、ヨハネス支部長はため息を吐いて視線を博士から俺に向け、自己紹介と自分の（表向き）行っている計画を話し始めた。

「エイジス計画とは」

「うお、この数値は……！」

「簡単に言うところの極東支部沖合旧日本海域付近に、アラガミの脅威から完全に守られた楽園を作るという計画なのだが」

「ほほおー！」

「この計画が完遂されれば、少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来る」

「おつやべ！ ちよつとイク♡」

「……ペイラー、説明の邪魔だ」

「凄い、これが新型かあ！」

まあその格好つけた説明も、合間合間で博士の興奮した声で遮られて台無しなだけだね。

心なしか額に青筋が浮かんでいるヨハネス支部長の言葉は、しかし興奮した榊博士にはいささかも届いてはいなかった。

その後も何とかヨハネス支部長は話を続けたけど、博士の独り言に悉く潰され、非常にグダグダな感じに説明は終わった。

まあ、俺は計画の事は知っているから、あまり問題にはならなかったからいいけどね。

「ペイラー、後はよろしく。終わったらデータを送っておいてくれ」

そう言ってヨハネス支部長は去って行った。

後に残された俺は、にこにこしながら榊博士の準備ができるまで待った。

「よし、準備は完了だ。そこのベッドに横になって」

俺は指示された通り、ベッドに横になった。

「少しの間眠くなると思うが、心配しないで良いよ。次目覚めるときは、自分の部屋だ」

博士は頷くとキーをタイプした。その途端装置が何か作動したのか、俺の意識はぼやけ始めた。

「戦士のつかの間の休息というやつだね。予定では10800秒だ」

……えくとお1分が60秒だからあゝ……10800を60で割るとおゝ……………。

「ゆっくりお休み」

博士がエンターキーを押した。俺の意識は闇に消えた。

オウガテイルはやつぱりバースト維持のために生きて
いるんですね！

「何だ……この数値は……！」

カカシがラボから自室へと運び出されてからしばらくの時が過ぎ、
ペイラーからのデータが届き、さっそく目を通してヨハネスが発した
第一声がこれである。

彼は目を見開き、しばしの間モニターに映る研究データを前に茫然
としていた。

彼が驚愕したのも無理はない。

ペイラーから送られてきたカカシのデータは、あまりにも彼の理解
の範疇を超えていた。

今でこそペイラーに研究者の座を明け渡してはいるが、彼は、ヨハ
ネスだってれっきとしたアラガミ研究者だ。

故に、カカシの肉体とオラクル細胞との適合率が人間の範疇を超
え、アラガミと同じ、それもヴァジュラやボルグ・カムラン並みの大型
アラガミとほぼ同じ数値であることに驚愕を禁じ得なかった。

「バカな、いくら新型神機に適合したからといって、これはあまりにも
高すぎる！ ……それともデータが少ないだけで、新型神機の適合者
とはこういう者ばかりなのか？ ……否、そんな訳があるか!!!」

声を荒げ、ヨハネスは思わずデスクに拳を叩きつけた。

「君は何者だ『名無し』！ まさか、私の計画に異を唱える神が遣わし
た現人神だともいうのか！」

声を荒げて激情を露にする今の彼の姿をペイラーが見たら、さぞ驚いた事だろう。何せヨハネスはここまで感情を露にすることなど滅多にないのだから。

「ハア……ハア……落ち着け。そうだ落ち着け私」

ヨハネスは自らに言い聞かせるように呟くと、しばしの間目を閉じた。

そして再び目を開けると、いつものフラットな精神に戻っていた。

「彼の数値が予想を上回る物だったとしても、計画に変更は無い。寧ろ彼が優秀であることがほぼ確定したのだから、これは嬉しい収穫だ。そうだろうか？」

そう結論付け、ヨハネスはため息を吐きながら背もたれに体重を預け、虚空を睨んだ。

まるで自らの不可逆の運命に戦いを挑むかのように。



「さてさて、一体どんなじゃじゃ馬なのやら……」

自室のベッドに腰かけて煙草を吸いながら、雨宮リンドウはこれから会う新型神機の適合者『名無之カカシ』という新人について思いを馳せていた。

新型神機の適合者という肩書だけでリンドウの興味を引くには十

分な物だが、それに加えて鬼教官と名高いの姉が、絶対に目を離すな！ と見た事も無い程の悲痛な表情で釘をさしてくるのだから、彼の興味はとことん高まってきた。

あの鬼教官がそのような顔をするとは、一体彼女はその新人に何を見たのだろうか？

リンドウは紫煙を吐きながら頭の中で考えるが、結局会ってみるまでいくら考えようが無駄な事だと結論付けた。

丁度時計を見ればその新人の初任務の時間が近づいていた。

「よし、そろそろ行くとしますか」

リンドウは煙草を灰皿に押し付けて火を消すと、肺に残った紫煙を吐き出しながら立ち上がり、ゆっくりと自室から出ていった。

リンドウの自室があるのはベテラン区画の最奥。エントランスからやや距離がある場所だった。

時間ギリギリまで自室でくつろいでいたから、この分じゃ遅刻してしまうな、とリンドウはゆっくりと歩きながらそう思った。

エレベーターから出て、リンドウはきよろきよろと見まわしてそれらしき姿を探すが、見当たらない。

ふーむ、と顎に手を当てて姉から伝えられた名無之カカシの容姿を思い出しながら階段を下ると、オペレーターである『竹田ヒバリ』に話しかけられた。

「あ、リンドウさん！ 支部長が見かけたら、顔を見せに来いと言っていましたよ」

「オッケー、見かけなかったことにしてくれ」

と、リンドウはヒバリを軽い感じであしらい、再び名無之カカシを

探すためにあちこち見て回り、そしてようやく見つけた。

赤いフェンリルの正式制服を身に纏い、黒髪をポニーテールにまとめた細身の優男が長椅子の端に腰かけ、行き交う人々をニコニコと眺めていた。

中々人目を引きそうな見た目なのに、どういう訳か印象にあまり残らない男だとリンドウは思った。

このまま吹けば飛んで行ってしまふかのような存在感の薄さ。それに加えてふと目を離せばどこかへ勝手に行ってしまうかのような危うさを、リンドウはこの優男の中から感じ取った。

（何だ何だ。てつきりどんなおつかない奴なのかと思えば、とんだ肩透かしだぜ。さては姉上、俺を脅かそうとして話を誇張したな？）

ツバキの話と現実で見たカカシの印象のずれに拍子抜けしたリンドウは、意気揚々とカカシの下に向かった。

「よう新入り」

リンドウに話しかけられたことでカカシは彼の存在に気づいたように、リンドウの姿を見るや、カカシはぎよっと目を見開き、慌てて立ち上がって直立不動の姿勢を取った。

「あーあーそんなに畏まらなくてもいい。俺は雨宮リンドウ。形式上はお前の上官に当たる」

堅苦しいのを好まないリンドウは姿勢を正すカカシを窘めながら、そのまま話を続ける。

「が、面倒臭い話は省略する」

そう言い放つリンドウに、一對のゴールドオーカー色の視線が突き刺さった。

細められていたカカシの瞳が開かれ、さながらそれでいいのか？と問いかけているかのようだった。

「良いんだよ。とりあえずとつと背中を預けられるくらいに成長してくれば、な」

肩を竦めるリンドウに、それもそうかというように、カカシはにこりと笑った。

(ふくん、なかなか面白い奴だなこいつは)

そう思いながらにこにここと微笑むカカシを見ると、後ろから声をかけられた。

振り返ると、そこには彼にもなじみ深い人物『橘サクヤ』が立っていた。

「あく今厳しい規律を叩き込んでるんだから、あつちへ行つてなさいサクヤ君」

彼女と話したいのは山々だが、生憎今はこの新人とのコミュニケーションの最中だ。

仕事の優先順位はしっかりしておきたいので、リンドウは彼女にそれとなく伝わるように茶化しながら言った。

「了解です、隊長殿」

ツーカーの仲であるサクヤは彼の思いをすぐに察知し、そのノリに応じながら去って行った。

「とまあ、そういう訳、でだ」

何故か先ほどよりも笑みが深くなったカカシの視線を訝りながら、リンドウは姉と同じようにこれからの流れを短めに説明した。

「さっそくお前には実戦に出てもらうが、今回の初戦の任務には俺が同行する……と時間だ。そろそろ出発するぞ」

時計を見たリンドウは任務の時間になった事に気づき、話を切り上げてカカシにそう言った。

カカシは両手を頭の上でくっつけて丸サインを作ること、リンドウの言葉に了承したことを伝えた。

(やっぱりこいつは面白いな)

後ろからひよこひよこついて来るカカシをしり目に、リンドウは再びそう思った。

そしてカカシの初任務の場所、贖罪の街にやって来たリンドウたちは、今回の任務の対象であるオウガテイルを求めてしばらくの間ヒバリのオペレートをもとに崩壊した街の中を彷徨った。

「ここも随分荒れちゃったな」

これよりも前の光景を知っているだけに、記憶よりもずいぶんと荒れてしまっているこの場所を見たリンドウは感慨深げに一人呟いた。

「おい新入り。これから実地演習を始めるが、命令は3つ」

持っていたロングブレード型神機を肩に担ぎながら、リンドウはカ

カシに言った。

「死ぬな。死にそうになったら逃げろ。そんで隠れろ。運が良かったら不意を突いてぶっ殺せ……あ、これじゃ4つか」

自分で3つと言っておいて、結局4つになってしまったが、そこはリンドウ。いつものまあいいかの精神でそのまま続けることにした。

「ま、とにかく生き延びろ。それさえ守れば後は万事どうとでもなる」

リンドウの言葉にカカシはその通りだと言うように、こくりと頷いた。

「よおーし、おっばじめるか!」

カカシの反応に概ね満足の行ったリンドウは作戦開始を告げた。

足を止めていた二人はそれを機に再び歩き出し、そしてついにお目当てのオウガテイルの姿を眼中に収めた。

「いいか新入り? あれがオウガテイルだ。見るのは初めてか?」

振り返って聞くリンドウに、カカシは首を横に振って答えた。

「そうか。なら話は早い。あいつはそこまで強いアラガミじゃない。いわゆる小型アラガミだが、尻尾攻撃は結構強力だ。なるべく食らわないように」

カカシは頷きかけ、それから何かに気づいたのか、首を傾げてリンドウを見た。

「ああ、そうだ。まずお前ひとりで戦ってみろ。ヤバそうなら俺が助

けてやる。行けそうか？」

問いかけるリンドウに、カカシはいったんオウガテイルの方に顔を向け、それからリンドウに再び顔を戻し、頷いた。

「よし、じゃあ行ってこい」

リンドウは軽い気持ちでカカシに向かってそう命令を下した。後に彼はその事を死ぬほど後悔する羽目になるのだが、いま未来の話をしたところでしようがない。

カカシはリンドウに向かって頷くと、彼の前に出て、ロングブレード型神機とアサルト型神機の備わった新型神機を片手に持ち替え、まるで投げるかのように後ろに引いた。

(何だ……？　こいつなにをする気だ……？)

そう思った束の間、カカシは思い切り踏んだ。その瞬間、カカシの姿が掻き消えた。

「なにっ!？」

バカな、何処へ!？」

慌てて周囲を探そうとリンドウが顔を正面に向けた瞬間、短い断末魔と何かの咀嚼音が聞こえた。

バツとその音の方へ振り返ると、そこには顔を失い力なく倒れ伏すオウガテイルと、その死骸を歯牙にもかけず、捕食形態の神機を興味深そうに眺めるカカシの姿があった。

「何……だと……？」

今までリンドウは新人を相手に同じような訓練をしたことがあった。

誰も彼も、新たに手に入れた力を持って余し、振り回されている者ばかりだった。

しかし彼は、カカシは今まで相手にした新人とは明らかに違っていた。

彼は振り回されていない。持て余してもいない。

まるでそうするのが当たり前と言わんばかりに、捕食形態プレデタースタイルの一種、シュトルムというオラクルを噴出し、その推進力で突っ込んで噛み千切る形態でオウガテイルに突っ込んだのだろう。

(なんて奴だ……！　これが新人の動きだと!?)

カカシのあまりの特出した才能に舌を巻くと同時に、ツバキの言っていた目を離すなどという言葉の意味をようやく理解できた。あの悲痛な表情の訳も。

その溢れんばかりの才能のままに、彼は突っ込んでいくだろう。今しがた見せたシュトルムと同じように。

真つすぐに食い破る。まるで死に急ぐかのように。

「カカシ……お前は一体……」

リンドウの眩きはオウガテイルの死骸がぐずぐずと崩れていく音にかき消されて消えた。

その様を興味深そうに眺めるカカシの顔は、リンドウには初めて蟻を見る幼子の様に見えて仕方がなかった。

飛翔

「何なのよあの子は……」

橘サクヤは自室のベッドに腰かけ、手で顔を覆っていた。

事の発端は今より数時間前、サクヤは新しく入ってきた新型神機の使い手、名無之カカシのミッションの同行者として、環境の変化の影響で常に天候が不安定な平原『嘆きの平原』へとやって来た時の事だ。

「今回のミッションはコクーンメイデン2体の討伐。コクーンメイデンは知ってる？」

スナイパーライフル型神機を油断なく構えながら、後ろをひよこひよこついて来るカカシに彼女は振り返りながら語り掛ける。

カカシはもちろん、と言わんばかりに二度三度と頷いた。

「ちよつと緊張してる？ 肩の力抜かないといざという時に体が動かないから」

サクヤはカカシの肩を軽く叩き、緊張を解きほぐすように柔らかな口調でそう言った。

とその時、遠くでアラガミの遠吠えが微かに聞こえ、サクヤはそれまでの柔らかな表情を引っ込め、仕事人として気持ちを切り替えた。

「来たわね……さっそくブリーフィングを始めるわ」

サクヤは先ほどまでの気のいい同僚でなく上官としての口調で、これからの作戦の動きについて話してゆく。

「今回の任務は君が前線で誘導、私が後方からバックアップします。……遠距離型の神機使いとペアを組む場合、これが基本戦術となるから、よく覚えておいて」

話を切り、カカシに理解したかどうか聞くと、彼は手で丸サインを作つてにこりと笑つた。

「よろしい。では早速作戦を始めましょう。くれぐれも、『先行しすぎない』で。『後方支援の射程内にいるように』いいわね？」

サクヤはリンドウとツバキにきつく念を押されていたことを頭の中で反芻しながら、念を入れて釘を刺すことにした。

カカシはもちろんですとも、と言わんばかりに胸の前で握りこぶしを作つてぐつと握つた。

「（不安ねえ〜）上官の命令はきちんと守るようにね」

果たして理解しているのかどうかさつぱり読み取れ無い笑顔に、サクヤは内心で不安を隠せないでいた。

上司としての面目もあるため、表情を崩さずさらに念を押すが、やはりカカシはただにこにこ、にこにここと笑っていた。まるでそれ以外の表情を知らないかのように。

「……素直でよろしい。じゃ、さつそく始めるわよ。付いて来て」

サクヤは内心の不安を押し殺しながらカカシに追従するように命令を下し、討伐目標であるコクーンメイデンがいる地点まで走りだした。

「あれがコクーンメイデンよ。準備は良い？」

サクヤは目線の先、中世ヨーロッパの拷問器具とさなぎが合わさったような奇妙なアラガミ『コクーンメイデン』を指さし、確認した。カカシは短く頷いた。

「オーケー……作戦内容は覚えてるわね。君が『突っ込んで』私が支援」

「Σ―」

サクヤが最後の確認のために言った。しかし簡潔に言ってしまったのが良くなかった。

突っ込むという単語に強く反応したカカシは神機を捕食形態に変え、オラクルを勢いよくふかして上官の命令通り突っ込んでいった。

「あ、ちょ、ちが!？」

言い直そうとしたが時すでに遅し。その時にはカカシはコクーンメイデンの眼前へと迫っていた。

カカシは勢いを落とす事無くコクーンメイデンに突っ込み、コクーンメイデンが反応するよりも早く稲を刈るかのごとく地面ごと食い千切った。

そこでようやく接近に気づいたコクーンメイデンが血を吹き出しながらバタバタと悶えるが、カカシはその様を興味深そうに見ながら神機の口を閉じ、コアごと胴体を噛み千切った。

残った頭の残骸がぼとりと地面に落ちる。

サクヤは口をあんどりと開け、呆然とカカシを見つめていた。

この間僅か2秒の出来事である。

カカシの凄まじい戦闘力にサクヤは言葉も出ない。

とここでヒバリから通信が入った。

『すみませんサクヤさん、カカシさん！ どうやら今の戦闘音に気づいた小型アラガミが複数匹そちらに向かって来ています。予測では20秒程でお二人とぶつかります。注意してください』

「え、ええ、わかったわ……」

ヒバリからの通信にサクヤは生返事で答えた。

あまりの出来事に、ヒバリからの通信もほとんど耳に入ってこなかった。

しかし彼女の驚きは、これから起こる事への前座に過ぎなかった。

それから20秒後、彼らの前に姿を現したのは卵と女体が一体化したかのような造形のアラガミ『ザイゴート』という飛行型アラガミだった。

このアラガミの特徴は何と言っても視力の良さ。そして他のアラガミをおびき寄せるといふ点だった。

一番最初に二人の元までやって来たザイゴートは、カカシの姿を確認すると目を見開き、奇妙な雄たけびを放った。

すると、続々とザイゴートがやって来て、最終的にその数は10体になった。

「チツ、これだからザイゴートは！ カカシ君！ 一旦引きなさい！
そして銃形態で遠距離から攻撃しましょう！ 急いで！」

しかしサクヤの言葉が終わるころには、カカシはすでにザイゴートの真下にいた。

「ゲツ？」

ザイゴートはいつの間にも!? とばかりに目を見開いた。
それが彼の最後の動作となった。

カカシは神機を捕食形態へと変え、勢いよく空中に跳び上がった。
それは勢いよく跳び上がりながら捕食するという捕食形態の一つ。
翔鷹。

それでザイゴートを食い殺し、カカシはザイゴートの群れのど真ん中に躍り出た。

「ゲーツ！」

無防備に空中に出てきたカカシに、すかさずザイゴートたちは襲い掛かった。

「ッ!? カカシ君！」

その光景を見たサクヤは最悪の光景が脳裏に過る。

新兵の死因の大半は無理な突撃からの袋叩きだ。実際にその目で何度も見た事があり、何度後悔したか分からない最悪の光景。

(またあんな思いをするの!? 冗談じゃないわ!)

サクヤは叫ぶようにカカシの名を呼ぶと神機を構えた。今から撃ったところで、あの数を撃ち落とす事など到底できない。

もう無駄と分かっている、彼女は自らを止める事は出来なかった。

だがその逡巡の間にも無情にも時は進んでおり、ザイゴートの群れはどんどんカカシに近づいて行く。

(ああ、私が止められなかったせいであの子が死んでしまう！)

諦めが胸に満ちる。後悔の念でどうにかなってしまいそうだった。ザイゴートの一体がカカシの前にたどり着き、今まさに食らいつこうと大口を開けた。

サクヤはこれから起こるであろう最悪の光景を想像し、思わず目を閉じる。

それと同時に、短い断末魔と咀嚼音が聞こえた。そしてその後、間を置かずに聞こえた何かを強く吹かす音に、彼女は反射的に目を開き、驚きの光景に目を剥いた。

「え……？」

想像ではそこに胸を噛み千切られたカカシの死体が地面に落ちている、はずだった。

しかし現実はまだカカシは空中におり、逆に地面に落ちていたのはザイゴートの体の一部である女体像だった。

「え？…はっ…」

サクヤは訳が分からないと言った感じに目をしばたいた。が、真に驚くべき光景はこの後だった。

カカシはオラクルをふかしたまま空中に留まり、あろうことかそのまま前進してザイゴートを食い殺し始めたではないか。

「えー……」

サクヤは驚きあきれ、口からはもう掠れたような言葉しか出てこな

かった。

その光景は、言うなれば小型の鳥を次々と食らう鷹の様にも似ていた。

カカシは未だ硬直しているザイゴートを手あたり次第食らい、やつと気づき始め、蜘蛛の子を散らすように逃げだすザイゴートよりもはるかに優雅に空を飛び、次々と捕食してゆく。

「ギ……ギャ……アバーツ!？」

そして最後一体。他の個体よりも少しだけ足の速い個体はほんの僅かばかりの間カカシから逃げる事が出来たが、結局は追いつかれ、捕食形態の一つである『穿顎』で地面を抉りながら捕食された。

「君は……君は何なの?」

ツカツカと近寄り、何事も無かったかのように平然としているカカシに、サクヤは思わず聞いてしまった。

カカシはその間ずっとにこにこ笑っていたが、その質問を聞くと困ったように眉を下げ、頬を掻いた。

その返答とすらいえないような動作に、サクヤは何処か儂い気配を感じて思わず握りしめていた手をほぐして手を伸ばし――。

「お〜いサクヤ君」

顔を覆っていた手を放し、俯いていた顔を上げると、そこにはリンドウとツバキが心配そうに彼女を見下ろしていた。

「ああ、リンドウ、ツバキさん」

「奴さんの任務に同行したんだって？ どうだった……かは聞くまでもなさそうだな」

リンドウの言葉にサクヤはため息を吐いた。それで十分伝わったようで、彼は彼女の心労を労わるかのように肩に手を置いた。

「きちんと目を離さない様にしていたのだろうか？」

「おいおいおい姉上。サクヤの仕事ぶりは知っているだろう？」

「疑っているわけではない。が、そうかサクヤでも首輪はつけられなかったか……」

リンドウの言葉にそう返すと、ツバキは苦い顔で顎に手を当てた。

「あの子は一体何なの？ ねえリンドウ、信じられる？ あの子ザイゴートがやって来てから討伐するまでずっと空中にいたのよ？」

「あいつそんなことやったのか」

サクヤの証言に、リンドウは姉と同じように苦い顔をして引いた。

「あいつは体内のオラクルの量が大型アラガミとほぼ同じだそうだな。だからそんな離れ業が出来るんだらうな」

「感心している場合ですか？」

何処か感心したように言うツバキに、サクヤは非難の言葉を上げる。

「あの子は今までの新人とは比べ物にならないわ。あのまま行けば、きっとあの子は私達の手の届かないところへ行ってしまう」

「あるいはとつとくたばっちゃうかだな」

隣に腰かけてきたリンドウをキツと睨むと、サクヤは再び俯いてため息を吐いた。

「ねえツバキさん。あの子ちよつと変よ。だってミッシヨンの間はずつとにこにこしてたのよ。ずつとよ。まるでそれ以外の表情を知らな
いみたいにならずつとにこにこしてるの」

サクヤは力なく顔を上げ、悲痛な表情でツバキの顔を見上げる。

「……あいつは孤児だそうだ」

「書類にはそう……？」

「いや、自己申告だ。あいつ曰く自分という個を自覚しだしたのが9歳くらいの時、だそうだ」

「それって!？」

サクヤは嫌な想像が脳裏に浮かび、思わず口をついて出た。

「あまり想像はしたくないが、あいつがあのような表情しかしないのも……
そうしなければならなかったからかもしれない」

「虐待か……」

リンドウは煙草に火をつけながら、眉間に皺をよせてぼそりと呟く。

「そんな……」

あまりにもあんまりな話で、サクヤの表情はみるみる曇ってゆく。
しかしどこかその話には納得が出来た。

虐待されている子供は何よりも他者の顔色を窺うようになるとい

う。

なるほど。確かにそれならばカカシが常に笑顔なのもつじつまが合う。

要は自分たちの機嫌を取っておこうというのだ。笑顔なら誰にも親しまれるだろうし、常に同じ表情ならば顔つきの事で咎められたりしないから。

「サクヤ、リンドウ。お前たちに改めて伝えておく。あいつから目を逸らすな」

ツバキの言葉に、二人は頷いた。

それを機に部屋の中に沈黙の帳が落ちる。誰も口を開かないで思いいに名無之カカシという男について考えていた。

（一体どういう経験を積んでいけば、あんな悲しい笑顔を浮かべるようになってしまうのだろうか？）

サクヤは自分が無意識に口に出してしまった質問に対し、困ったように頬を掻いていたカカシの事を思い返していた。

沈黙の帳は、リンドウが換気扇をつけなかったため、紫煙が部屋の中に充満して女性二人にしこたま叱られるまで続いた。

申し訳ないが死人はNG

サクヤさんとミツシヨンを終えてアナグラに帰還し、彼女ともっと親交を深めようと話をしようとしたが「少し時間が欲しい」とすげなく断られてしまった俺は、ふてくされた様にそのまま自室へと直行した。

そして一夜明け、すつきりした朝を迎えた俺はエントランスに向かうと『カレル』（攻め）くんと『シユン』（受け）くんを見つけた。

この二人は犬猿の仲で、事あるごとに口喧嘩をしては班長の『タツミ』さんやら『ブレンダン』さんやらに窘められている。

しかし、そんな関係でもしつかり信頼関係が出来ており、2の防衛班の帰還やキャラエピでもその関係性が窺える。

うう、そういう背景を知っているとこの二人の口喧嘩……尊し！

二人の喧嘩を遠くからにこにこ眺めていたら、シユン君（受け）が俺の存在に気づき、次いでカレル君（攻め）も俺の存在に気づき、先ほどまでの喧嘩っぷりが嘘のように二人そろって俺への嫌味が始まった。

そのコンビネーションの鮮やかさときたら！ うう……尊いよお。
どれだけ嫌味を言おうが堪えない俺に、二人は呆れたように見つめ合い（尊ッ!?）、肩を竦め、すごすごとどこかへ行ってしまった。

もう少し二人の仲のいい所を見たかっただけに、ちよつとだけ残念に思っているとコウタ君がやって来て、あの二人の愚痴を言いだした。

「あの二人、絶対新人イジメするタイプだぜ！ あーあ……あんな奴

らと一緒にミッション行きたくないなあ」

まあ確かに、コウタ君の言う事は分らんでもない。あの二人は極東支部でもかなり口が悪い方だから、初対面の人からすればそのような印象を持つてしまうのも仕方がない。

でもあの二人は付き合ってみれば結構楽しいもんだよ。だからあんまり気にすんなよ！

そういう思いを込めて肩に手を置いたのだが、彼のぶつくさはミッション開始時間までずっと続いた。

さて次のミッションだが……。

「来たか『鉄の雨』！」

ミッション名『鉄の雨』

このミッションの概要をシンプルに言うと、『ソーマ』君の初登場回であると同時に、あの有名な『エリック、上だ!』である。

このムービーでゴッドイーター世界のシビアさを思い知らされるわけなのだが、残念ながらそういう酷い展開はNG。俺の前で死者なんて出させませえくん！

『裕福な少女』が悲しむ展開は申し訳ないがキャンセルだ。例え自己満足でも死者は出させねえぜ！

そう思い、俺は意気揚々とヒバリさんからミッションを受注し、コウタ君に別れを告げて、いざミッションの地点である『鉄塔の森』へ！



廃工場地帯である『鉄塔の森』についた俺は、ソーマ君とエリックさんの姿を探してうろちよろし、そして見つけた。

エリックさんが一方的にソーマに向かつて話しかけているのが遠目からでも分かった。だって彼物凄い派手な格好だし、身振り手振りも大仰だからすぐに分かった。

俺はシュトルムで一気に二人に近づいた。移動に便利なよねえシュトルムと穿顎。

オラクルが噴出される音で俺の存在に気づいた二人はこちらに顔を向けると、そのうちの恰好が派手な方、エリックさんが俺の方に近づいてきた。

「お、君が例の新人クンかい？ 噂は聞いているよ」

と髪をかき上げながら、エリックさんは自己紹介を始めた。

「僕はエリック。エリック・デアーフオーゲルヴァイデ。君も精々僕を見習って人類のため華麗に戦ってくれたまえよ」

さて、俺はこの自己紹介の際に彼が何度髪をかき上げたか真剣に数えていたのだが、後ろで我関せず立っていたソーマ君が血相を変えてこつちに突っ込んで来るではないか。

来た……言え……言うんだソーマ君……！
フロイライン

「エリック！ 上だ！」

(w w wッ！ w w wッ！)

俺は内心草を生やしながら、事態を理解していないエリックさんの前に立って落下忍殺を仕掛けてくるオウガテイルにブレード序を振り下ろし、真つ二つに叩き割った。

その際にオウガテイルの血を頭からかぶる羽目になったのだが、まあ人を助けられたんだからこん位屁でもねえや。

「うわっ!？」

血液は俺が全部被るように、また切り払った残骸が後ろのエリックさんに当たらないように調整して切ったけど、突然真横を残骸が通過すれば驚いてしまうのも無理はないか。すまそん。

それにしても、酷いやっちゃ。

腰を抜かし、あわあわと立つのに難儀しているエリックさんに手を貸して立たせながら、俺は思った。

俺が傷つく分には別にいい。悲しむ人もいないし、何より俺自身がそう思っているから。

でも彼らの様な善良な人間が傷つくなんておかしいよなあ！

この10年でそういう場面に出くわす度に、俺は思わずにはいられない。

そんな事をつらつらと考えていたら、背後から敵意を感じた。

でも俺は振り返らなかつた。

(お生憎様、この場に居るのは何も俺たち二人だけじゃないのさ)

俺は誰に言うでもなくぼそりと呟いた。

それと同時に、何か重い物を振るう音がして、背後から迫る敵意が唐突に消え去った。

俺はゆつくりと背後を振り向いた。

視線の先には、胴体を真つ二つにされたオウガテイルの死骸を踏みつけるソーマ君の姿があった。

(お見事！)

俺は迅速な仕事ぶりのソーマ君に、心の中で拍手を送った。

「……………ようこそ、クソツタレな職場へ……………」

二つになったオウガテイルの死骸の上半身の方を蹴り飛ばしながら、ソーマ君は吐き捨てた。

「俺はソーマ……………別に覚えなくてもいい」

そう言うと、残った下半身の方を踏みつけながら、ソーマ君は言った。

「言つとくが今回はたまたま運が良かっただけで、普通あそこまで油断した奴が送る末路は死だけだ。ここではそれが日常だ」

「ははあ……………」

言いながら睨みつけてきたソーマ君に、エリックさんは返す言葉も無いと言った風に頬を掻いた。

「お前は」

と、ソーマ君は唐突に視線を俺に移し、バスター型神機を突きつけて問うた。

「お前は、どんな覚悟を持って『ここ』に来た？」
「……」

どんな、ね。

ソーマ君に尋ねられ、俺はこの10年間の事を思い返していた。助けられた人、助けられなかった人。素晴らしい人。素晴らしい人。どうしようもない出来事。思わず涙した出来事。尊い事。醜い事。

死と暴力が遥かに横行するようになった世の一端を見て、俺は心底この世界を良い方向にしたいと思った。

……己自身の全てを賭けて。

でも、そんなことを初期状態のソーマ君に言ったら鼻で笑われるかと請け合いである。推しにそんな事されたらショックで寝込んでしまう！

だから俺は困った風を装った笑みを浮かべる事で誤魔化すことにした。悪いね。恥ずかしがり屋なのん。

それを彼がどう受け取ったのかは分からない。

ソーマ君はそれ以上何も言っただけ、舌打ちを一つするだけで神機を下ろし、俺に背を向けて歩き始めた。

その際一瞬だけ垣間見えた彼の横顔は、何かに耐えるかのように歪められ、口は堪えるかのように噛みしめられていた。

今の返答ともいえない様な返答に、彼は一体何を思ったのだろうか？

き、気になる……！ 滅茶苦茶気になる！ 今すぐ追いかけて問

詰めてえ！

俺はエリックさんの歩調に合わせてながら気持ち速めに彼の背を追って歩いて行くと、ソーマ君は唐突に足を止めた。そのせいで俺は彼の背に危うくぶつかりそうになり、エリックさんは間に合わずに俺の背にぶつかり、結局俺はソーマ君の背にぶつかる羽目になってしまった。インガオホー！

「チツ……」

ソーマ君は俺たちに一瞥をすると、一つ舌打ちを零し、担いでいたバスターブレードを構えた。

「おいお前ら、構えろ。仕事の時間だ」

「え……？　そ、ソーマ君、どゆこと？」

「……！」

エリックさんはまだ敵が見えてもいないにも拘らず武器を構えたソーマ君に疑問を投げかけるが、俺はというと彼に言われてようやく俺らを囲むように敵意が渦巻いている事に気が付き、己の不注意さを恥じた。

ありや、ソーマ君へ注意を向けすぎてここまで接近されているのにすら気付かないなんて、情けないにもほどがある。

恥ずかしくって、穴があつたら入りたい気分だ。何を浮かれているのやら。ここは戦場ですぜ？　浮かれた者がどうなるかは、たった今見たじゃないのよ。

俺は火照った頬を押さえ、恥ずかしさを抑えるかのようにぼんぼんと二度ほど張って気分を落ち着かせると、神機を水平に、所謂『ゼロスタンス』の時の構えを取った。

ソーマ君に倣って神機を構える俺を見て、ようやくエリックさんも今の状況を理解できたようだった。

彼がおたおたと何度かブラスト型神器を取り落とし、深呼吸を一回行い、そして構えた瞬間、待ってましたとばかりに俺たちの周りに10を越す数のオウガテイル、コクーンメイデンが地面から文字通り生えてきた。

『付近に複数のオラクル反応を確認！ このままでは囲まれてしまいます！ いったん退避を！』

「うわあ!？」

エリックさんはほぼ真横に突如生えてきたコクーンメイデンにビックラ仰天して、慌てて後ろに下がるも、今度はオウガテイルに後ろからぶつかり、ひーつと悲鳴を上げながら俺の方に退避してきた。

うん、エリックさんや。俺のどこに來ても包囲されている事には変わりませんか？

「このままじゃ分が悪い。お前ら一旦ここは引」

「はいスタグレ」

ソーマ君は俺たちに振り返って何か言いだしたけど、その時には俺はスタングレネードを地面に叩きつけ終えたところだった。

瞬間放たれるのは凄まじい光量と音圧の暴力。

「グワーツ!？」

俺を除くその場にいた全ての者が悲鳴を上げて怯んだ。

ソーマ君やヒバリさんはいったん退避を考えたようだけど、オウガテイルだけならいざ知らず、あれだけのコクーンメイデンがいたとなれば退避している間に蜂の巣にされかねない。

だから俺はいつそ内側から包囲網を食い破る事に決めた。
戦力的にもベテラン一人、新人だが新型神機の使い手である俺が一人、支援役の砲撃職が一人。十分じゃない？

それを伝える時間があれば良かったんだけど、あんまもたもたしてたら再び「上だ！」をされてしまうかもしれない。そんなのは御免である。

せつかく助けた一つの命。ここで死守させてもらうぜー！

俺は早速オラクルをふかし、エリックさんの真横に生えていたクーンメイデンを食い千切り、捕食してバースト。
ヌンヌンヌン、準備完了。システム総じ緑な！

あー！漲う!!! (バチギレ)

神機がオラクルを取り込んで活性化。その恩恵で俺の体の各種能力が飛躍的に跳ね上がる。掛けられていた枷が外される素晴らしい感覚が、胸に満ちる。

たまんねえ！ ポルシエ並みのエンジンだぜ！

その間に一体また一体と復帰してくるが、こっちの準備も完了だ。
オツシ、どんとこいやー！

「ッ!? あのアホ！ おいエリック支援しろ！ くそ、死にたがりだ！」

と、ここでソーマ君も復帰し、エリックさんの援護の元、猛スピードで俺を追い越してわらわらと向かって来るオウガテイルに突っ込んでいった。

俺はというと、彼がオウガテイルを受け持っている間にコクーンメイデンを始末する事に決めた。

遠くから近づかせまいと乱射される光弾の弾幕を縫うようにかわし、内一体の背後に回り込んで後ろから一突き。コアをぶち抜いて殺す。

その間に他のコクーンメイデンが俺をハチの巣にしようとするが、エリックさんの援護射撃が的確にそれを阻む。

俺はそれでも撃ってくる根性のあるコクーンメイデンの光弾を死骸を盾にしてしのぎ、神機を銃形態に変えて、撃った。

アサルートの強みは連射力と移動しながら撃てる点だ。

俺は動き回りながら負けじと弾幕を張り、エリックさんと協力して何とかコクーンメイデンを全滅させることに成功した。

『コクーンメイデンの殲滅を確認！ カカシさん、エリックさん。急ぎソーマさんの援護を！』

「わ、分かった！」

「あいあい」

ヒバリさんに急かされ、俺は急いでソーマ君の方へ向かおうとして、唐突にガツン、と後頭部にかなりの衝撃が炸裂した。

俺は衝撃がした方向に目を向けると、何と高台に一体のコクーンメイデンが生えているではありませんか。にやんと！

『え？ う、嘘!? どうして? お二人が殲滅したはずなのに……!』

「ま、まさか戦闘音を聞きつけてやって来たのか!? か、カカシ君！ 平気かい！」

光弾を受け、確かに血がダラダラと流れちゃいるが、頭というのは軽傷でも結構血が出たりするのだ。

駆け寄ってくるエリックさんに、大したことないという事を伝えようとしたけど、その声は叫ぶように声を張り上げるソーマ君の声にかき消された。

「エリック！ 避ける！」

「え？」

「！」

ソーマ君は全身全霊でエリックさんに駆け寄りながら、声を張り上げる。エリックさんは未だ事態を掴めず、オウガテイルから射出された針を、ただ漠然と眺めていた。

俺はというと、オラクルをふかした高速移動でとつくに彼の元までたどり着いており、彼を優しく押して、位置を交替した。

残念ながらその短い時間の内で俺にできるのはそれまで。神機を振って針を弾く事は出来なさそうだった。

エリックさんが尻もちをついた瞬間に、ゆっくりになった時間の感覚が元に戻り、俺の脇腹にオウガテイルの針が突き刺さった！

(イツツツタあゝい!!!)

脇腹に突き刺さった針は深く食い込み、確実に俺の臓器に穴をあけ、何なら先つちよが少し反対側から突き出ていた。

あまりの痛みに視界がちかちかと瞬き、脳味噌の芯からしびれるような感覚を覚えた。

が、その現象も瞬きする間に終わった。痛みももうすでない。

ありやりや？ と疑問に思い、今すぐ確認した上でさっさと引っこ抜きたいけど、しかしここは戦場である。さらに敵味方入り混じつての乱戦の最中だ。

引き抜いてる暇なんて無いのだあ〜！

俺は突き刺さった針をそのままに、高台に生えているコクーンメイデンから発射された光弾を蹴つ飛ばして今まさに飛び掛ろうとしてきたオウガテイルの顔面にぶつけて体勢を崩し、その体勢が整えられる前に接近してコアをブレードで貫いた。

そしてロングを引き抜くと同時に、背後から馬鹿の一つ覚えみたいに同じ動作で飛び掛ってきたオウガテイルの鼻面に柄をぶち当てて怯ませ、その反動で一回転して真一文字に叩き割った。

叩き割られ、ぽーんと上空を飛んでいた上半分が地面に落ちてべちゃりと音を立てて落下した。

俺は一旦ゼロスタンスで呼吸を整えると、残心した。

コクーンメイデンはソーマ君の怒りのチャージクラッシュを受け、て哀れ、爆発四散。

コクーンメイデンの肉片が周囲にバラバラと散り、それを機に場が静寂に満たされた。

聞こえる音はソーマ君の粗い息と、風に晒された工場の部品が鳴らすキイキイという異音だけ。

『戦闘……終了……。敵の制圧を確認しました……。あの、カ、カカシさん』

「ん〜？」

ヒバリさんの歯切れの悪い言葉に、俺は軽い調子で返事を返す。

『け、怪我は平気なんですか?』

「ん? ……あ」

「そーいや俺針が刺さってたわね。あまりにも痛みが無いから忘れてたや。」

俺は脇腹に突き刺さった針を見た。

「わー!!! 大丈夫かいカカシ君! い、医者ー!!」

「おい平気か!」

次いで駆け寄ってきて俺の事を心配してくれるソーマ君とエリツクさん。あー二人の優しさがマジ染みるぜ!

二人の優しい言葉に決心がつくと、俺はおもむろに針を握りしめ、力いっぱい引っこ抜いた。

「なっ!」

(痛あゝい!!!)

突き刺さった時と同じかそれ以上の痛みとチカチカ現象が起き、そして同様に一瞬で消えた。

脇腹を見ると、傷は綺麗さっぱり消えていた。まるで何事も無かったかのように綺麗にである。怪我をしていた時の名残は大量に飛び散った血飛沫だけ。

顔を上げると、絶句して固まる二人と顔があった。

うん、まあこんなスプラッタを見せられたら固まってしまいうのも無理はない。多分二人は映画版サイレントヒルが見られないと見た。あれエグすぎんよお。

「なんて再生能力だ……これは適合率が大型アラガミ並みまである恩恵か……？　だとしたら……だから……」

と、我を取り戻したソーマ君は俺の脇腹に手を添え、俺に起きた現象について自分なりに考察していた。さすが未来の研究職。この時からその片鱗を覗かせていくスタイル。

「……チツ、こういうことは二度とするな。いいな？」

思考を中断し、指を指しながらそう釘をさすソーマ君に、俺はもちろんですとも、という思いを乗せて頷いた。

伝わったのかどうかわからないけど、彼は舌打ちし、俺にくるりと背を向けて帰投に向けて歩き出した。

俺は未だ呆然としているエリックさんの肩をゆすつて正気に戻し、その後続いた。

推しとの初対面に加えてエリックさんを助け出せた。

うーん、作戦は大成功と言わざるを得ませんな！

俺はこの後ある裕福な少女とエリックさんとの感動の再会を想像し、思わず笑みを浮かべた。

神と人

アナグラに帰投した俺は、裕福な少女とエリックさんの感動の再会に涙を禁じ得なかった。

『裕福な少女』はエリックさんの妹で、初代やバーストの時点では時々エントランスに居るだけのチョイ役だった。

本格的に物語に関わるのは2からなのだが、まあその話は置いて、今は目の前の光景に集中せねば。

任務中に危うく死にかけたという話を聞くや、彼女はぼろぼろと涙をこぼし、エリックさんに抱き着きながら泣きじゃくった。

そんな妹をもう大丈夫、もう大丈夫だからと優しく語りかけながら頭を撫でる彼の姿はあまりにも尊く、俺だけでなく他の人も感動に涙ぐんでいた。

と、尊すぎる……！！

彼らの周囲だけ、殺伐とした雰囲気から隔離され別空間を作り上げていた。

放たれる尊いオーラは伝染し、普段は顰め面ばかりで難しい顔をしているゴツドイーターの皆さんも、この時ばかりはエリックさんの無事をたたえ合っていた。

だがそんな風に感動して遠くからにこにこ尊いしていると、何処からともなく現れたリンドウさんとサクヤさんに両脇をがっちり固められ、あれよあれよと俺は医務室へと連れて行かれた。

えー何でー！ もつと見てたいよー！

そういう思いを込めてじたばたと暴れていたけど、二人の拘束は決して放すまいという強い意志が宿っており、俺如きの貧弱ゴツドイー

ターではどうやっても振りほどけなかった。

俺はいっぱい悲しい思いで遠ざかってゆく尊い空間を、エレベーターが閉じられて遮られるまで未練がましく見つめていた。

医務室にはすでにソーマ君と榊博士が待機しており、俺は博士に指示されたままベッドへと寝かされ、博士が装置を稼働させてスキャン開始！

困惑する俺をよそに、博士が物凄い勢いでタイピングを始め、抽出されたデータを博士の後ろから見ていたソーマ君たちが難しい顔をしながら小声で何か言いあっていた。

「……どうだった？」

「これは……更に上がって……」

「これ以上上がったらどう……」

チラチラと断片的に聞こえる言葉はなんだか不穏な単語ばかりで、もしかして俺研究材料として解剖されたりとかしないよな？ とはらはらしながら事の成り行きを見守っていた。

「うん、これで検査は終了だよ……さてカカシ君」

と前置きも短く、博士は俺の体の説明という名目のもと、事実上のお説教が始まった。

新兵なのだからあまり前に出すぎるなどサクヤさんがくどくど。命が惜しくないのかとリンドウさんがたらたら。もつと慎重に動けるとツバキさんがガミガミ。

そしてツバキさんのお説教が終わると、それまで壁にもたれて腕を組んでいたソーマ君がぎろりと俺を睨んだ

ぎゃー！

それまでの説教より、その視線の方がよほど堪えた。俺はガーンと
なつて俯いた。

「うむ、検査の結果、君の体の適合率がさらに上がっていた」

シユンと俯いている俺に、榊博士は言った。

「その恩恵で君の各種身体能力は驚異的に上昇した。先ほどの作戦時
の回復能力もその内の一つとみていいだろう。要するに我々が何を
言いたいのかというとね」

榊博士はソーマ君に目をやった。ソーマ君は舌打ちして目を逸ら
した。

「その力を過信して、あまり無茶をして欲しくないのだよ。君は貴重
な新型神機の適合者であるし、何よりまだ若い。無茶な先行で命を落
としてほしく無いのさ」

それでようやく俺は彼らが何を言いたいのか理解できた。
なる程、確かに今回の任務では少し独断専行が過ぎたかもしれない。
い。

しかしそうせねば助られない命だったわけだし、俺の体はどうも
ちよつとやそつとの事では揺らがないというではないか。それなら
別にいいではないか。例え失敗したとしても痛い目を見るのは俺だ
けなんだし。

だが彼らからすれば俺は部下で、部下の勝手な行動は許せないと。
つまりはそう言いたいわけだ。

ならば俺の返答は……。

「うん、分かりました。次はもつとうまくやります！」

好かれる部下とは失敗しない部下である。ならば次やる時は失敗しなきゃいいのだ。簡単だな！

自信満々でそう言ったら、何故かみんな顔を見合わせて、ため息を吐いた。解せぬ。

お説教はそれでお開きになり、俺は晴れて自由の身となった。

俺はこの場に居た誰よりも早く動きだし、医務室を飛び出してエントランスへと急いだ。

まだだ……まだ間に合うはず……！

しかし俺の思いはあっさりと撃ち砕かれ、エントランスについた頃には尊い空間はとつくに解除され、各々が元の仕事に戻っていた。

偶々近くにいた『ゲン』さんにエリックさんと裕福な少女は何処へ行ったのかと聞くと、何とエリックさんはゴッドイーターを辞めるといふ衝撃の事実が発覚した！

曰く、今回の事で己の実力不足を痛感し、フォーゲルヴァイデ家の次期当主としての仕事に専念することだった。

本日2度目のガーン！

そんなあ、もつと二人の尊いを見ていたかったよ！ 酷いよ！

俺は手をついてむせび泣いた。

突如その場に頽れる俺に、ゲンさんはどうしたんだ！ と心配して背中を叩いてくれた。

うう、その優しさは尊いけど、やっぱりそれだけじゃこの悲しみを払うのは無理だよー！

俺は不貞腐れて、自室に帰って、寝た。



藤木コウタは目の前でニコニコと顔を綻ばせながら自分の話を聞きたった一人の同期に、気味の悪さを覚えずにいられなかった。

時はしばし遡ること数分前、ヒバリからここ最近姿を見せていなかった中型アラガミ『コンゴウ』が姿を現したという報告があった。その討伐を、新兵であるコウタとカカシの二人に任されることになった。

先にコウタが受注してエントランスでカカシが来るまで待つており、程なくして受注したカカシと合流したコウタはミッシェンの打ち合わせ兼交友を深めるために軽く雑談しようとして、そして今に至る。

カカシは先の任務で、先輩であるエリックを助ける代わりに大けがを負ったそう。しかしその傷も瞬く間に癒えてしまったという。

よくもまあそんな無茶が出来る物だと感心する反面、何故そんな自分を疎かにできるのかと恐ろしさも覚えた。

初日の対面の時に自分には家族がいないと彼は言った。だから、家族が、思っていてくれる人がいないからそんな無茶をできてしまうのだろうか？ 死んだとしても思ってくれる人がいないから。

家族がいる自分からすれば、そんな事は到底考えられなかった。自分には家族がいる。妹が、弟が、母が。自分が死ねば彼女たちは路頭に迷うだろう。いや、それだけでは済まない。

ゴッドイーターの家族は何かと優遇される。食料の供給にも生存の有無も。

自分が消えれば、ただでさえ貧しかった家族たちはその瞬間に死がほぼ確定してしまう。

そんな事は許されない。絶対に生きて名声を掴み、家族を防壁内に住ませる。それまでには死ねない。死ねるものか。

だからこそ、平然と身を投げ出す様な事をした目の前の同僚に、コウタは気味の悪さを覚えたのだ。それと、僅かばかりに同情も。

言うなれば彼は家族がいなかった自分だ。何か間違つて家族が殺されていれば、自分とて自暴自棄になつたりするかもしれない。

あるいは自分にも家族がいなかったら、やはり彼の様に他者のために平然と身を投げたりするのだろうか？

任務の場所である、かつては神仏に縋る人々が住んでいた隠れ里『鎮魂の廃寺』の探索の最中、後ろをひよこひよこついて来るカカシを尻目に、コウタは考えた。

(でも……やっぱりおかしいよ)

コウタは試しに自分が死ぬ想像をしてみた。

ぞつとした。怖い。恐ろしい。

想像ですらこれなのだ。実際に死ぬ目にあつたのに、それでも平然とにこにここと笑えるカカシに、コウタは怖れた。

気まずい沈黙の中、二人は無言で嘗て祈っていた神々に見放された里の中を徘徊した。

そして程なく任務の目標の内の一つであるオウガテイルの集団を見つけた。

「あ」

いたぞ。そう続けようとした。

しかし、彼が指を指して後ろの同僚に伝えようとしたときには、すべては終わっていた。

後ろにカカシの姿は無かった。

何処へ？

そう思つて前を向くと、3体目のオウガテイルを貫いて高々と掲げているカカシと目が合った。

「へ？」

間拔けな声が、口から洩れた。

ほんのちよつと前まで、確かに自分の後ろにいたのだ。不安を隠すように捲し立てられる自分の言葉にうん、うんと相槌を返していたのだから。

じゃあいつの間？ まさか自分が認識した時には既に彼は認識を終え、攻撃に移っていたというのか？

カカシの足元に倒れている2体の頭が抉るように消えていたことから、捕食形態で2体を処理したことは推察できたが、いくら何でも早すぎる。まともじゃない。

「あ……うあ……」

コウタは恐ろしさのあまり、一步二歩と後退った。

初めてオウガテイルを前にした時の事を思い出した。恐ろしさのあまり、何度も逃げだしそうになったが、それでも家族の事を思えば立ち向かうことが出来た。

カカシの戦闘力については事前にツバキから聞いていた。曰くベテラン神機使いにも匹敵するという。

しかし、聞きしに勝るとはこのことだ。まさか予想や妄想を全て置き去りにするようなものが現実にお出しされるなど、想像だにできなかった。

人は未知を恐れる。

コウタはついにその言葉の意味を真に理解することが出来た。

彼の様子を、突き刺さったオウガテイルに驚いたと解釈したのだろうか？ カカシは神機を振って突き刺さっていたオウガテイルを振り払い、ほーらもう大丈夫とばかりに手を振りながら、ツカツカと近づいてきた。

「ひ……い！」

友好的に近づいて来るカカシが、コウタには下手なアラガミよりも恐ろしげに見えた。コウタは思わず背を向けて逃げ出した。反射と言ってもいいだろう。

脱兎のごとく離れてゆくコウタに、カカシは首をかしげて不思議そうにしていた。

「ハア……ハア……」

神機使いは身体能力が強化され、驚異的なスタミナを誇る。にも拘らず、コウタの息は既に切れ掛け、汗が絶え間なく噴き出て払っても払っても無限に流れてくる。

息も絶え絶えになったコウタは廃寺の階段の横に座り込み、そこで息を整えていた。

「何なんだよアイツ……なんなんだよアイツは!!!」

脳裏にフラツシユバツクされるのは、オウガテイルの死骸を高々と掲げたカカシのゴールドオーカー色の一对の瞳。人外の、怪物の瞳。それを振り払うように頭を振るが、焼き付いた光景は一向に消えなかった。

コウタは頭を抱えた。

と、その時、すぐ真上から怖ろし気な雄たけびが上がった。

「えっ?」

コウタはぼっと立ち上がり、神機を構えた瞬間、目の前に軽自動車ほどもある何かが地響きを立てて落下してきた。

それはゆっくりとコウタの方を向き、裂けた口を剥き、吠えた。

「ホギヤアアアア!!!」

「こ、こいつは……!」

それは巨大な猿人のような体躯を持つアラガミ『コンゴウ』だった。コンゴウはコウタの姿を認識するや立ち上がり、威嚇するように両手を広げた。

「へ、このお！」

コウタはその隙だらけの姿にありつたけオラクル弾を撃ち込んだ。任務前にツバキから聞いた話では、コンゴウは『雷属性』に弱いという。

その話を聞いていたコウタは教えの通り撃ち込んだ弾丸は全て雷属性の物だった。

弱点の属性の弾丸を全身に食らったコンゴウは、仰向けにひっくり返ってバタバタと悶えた。

「は、はは……何だお前、た、大したことないじゃん」

それまでの気持ちの反動か。それとも誤魔化す為か。コウタは引きつった笑みを浮かべながら追撃を撃ち込みまくった。

が、新兵ゆえか、少々考え無しに撃ち込みすぎてしまった。

カチンという音がした。その音の後、いくら撃とうと思っても、弾丸が放たれなくなった。

「しまった弾オラクル切れ……！」

気付いた時にはもう遅い。おたおたとアンプルを取り出して飲むうとして、体勢を整えたコンゴウの剛腕をもろに食らった。

「うわああああ!?!」

咄嗟に神機でガードをしたが、防ぎ切れずに神機を取り落として吹き飛び、廃寺の壁に背中から勢いよくぶつかった。

「カツ……!?!」

肺からすつかり空気が吐き出され、コウタは胸を押さえてえづいた。

「ごほ……げほ……」

「ゲゲゲ！」

そんな彼をあざ笑うかのように喉を震わせながら、コンゴウはゆつくりとコウタに近づいて行く。

流石にあれだけの弾幕をもちに受けたコンゴウの体はボロボロだった。顔面には罅が入り、自慢のパイプは無残にも破損していた。

しかしそれでもコンゴウは生きていた。

そこらの雑魚アラガミとは明確に違う格。コウタは自分の認識が間違っていたことによく気付いた。

オウガテイルやザイゴート。コクーンメイデンなどの小型アラガミを余裕をもって倒せるようになったから気が大きくなっていった。余裕が出ていたともいうが、唯々自分が何も知らず、増上慢になっていただけの事だった。

(ああ……畜生。これがアラガミか……)

自分の元までたどり着き、腕を振り上げるコンゴウを見上げながら、コウタは心が諦念に支配されつつあった。

だがコウタは失念していた。これは新兵二人に任されたミツシヨンであるということに。

コンゴウの剛腕が振り下ろされるまさにその瞬間、横合いから飛び出してきた黒い何かがコンゴウを押し倒した。

「グワーツ!？」

「え?」

黒い何かは、良く見たらそれは捕食形態をとったカカシの神機だった。カカシはコンゴウの腕に神機を噛みつかせてコンゴウの上に乗る、ぐりぐりと捻って傷を広げようと……否、違う。

「嘘だろ?」

コウタが呟くのと同時に、カカシはコンゴウの腕ごと上空に跳び上がった。

「アバーツ!？」

コンゴウはひっくり返り、失った右腕の付け根から噴き出る血を残った手で押さえながら、バタバタと身悶えた。

カカシは上空で一回転し、ちぎり取った腕を放り捨て去りながらコウタの真横に流麗に着地した。

「あ……」

コウタが何かを言う前に、カカシはコウタに手を差し伸べた。

「大丈夫。君が思っているほど怖くないよ」

その顔は相変わらずこちらを気遣うように柔らかく、何処までも優しかった。

「あ、ありがとう……」

手を取って立ち上がり、渡された回復錠を口に含みながら、コウタはこんなに優しくしてくれる人を疑った自分を心から恥じた。

人は未知を恐れる。それはどんな面があるか分からないから怖れる訳であつて、さつきまでのコウタは彼が家族がいないという点と、恐ろしく強いという面しか知らなかった。だから怖れる事しかできなかつた。

しかし今はカカシはその面だけじゃなくつて、弱つていた人を労わり、手を差し伸べるような人となりであることを知つた。それだけで恐ろしい未知の怪物から、化物みたいな強さを持つ自分と同じ等身大の人間へと印象ががらりと変化した。

同時に、なぜ彼が命を惜しまず他者を助けるのかも何となく理解できた。

(こいつはきつと優しいんだ。優しすぎて、自分の事を顧みずに手を差し伸べてしまふんだらうなあ……)

そういう事に思い至ると、先ほどまでのカカシへの恐怖が憐憫へと変化した。

(こいつはこのままじゃ誰にでも手を差し伸べまくつて、いつか抱えられないほど多くの物を背負つちまう。俺が支えてやらねーと……！
今更一人二人そういう対象が増えたところで大して変わらない……うん、よし)

コウタは神機を拾い直し、構えた。

「もう大丈夫。ありがとな！」

カカシは気にしないでとばかりに手を振り、そして体勢を立て直して怒り心頭で突っ込んでくるコンゴウに向かって負けじと突っ込んでいった。

カカシは力任せに振るわれた拳を潜り、すれ違いざまに胴体を深く切り裂いた。その傷跡にこそぞとばかりにコウタは弾丸を撃ち込んだ。

「ガアアアア!!」

うっとおしいとばかりに今度はコウタに向けて圧縮された風を放とうとするが、背後からカカシに雷属性オラクル弾を撃ち込まれ、がくんと前につんのめった。

「今だー!」

コウタとカカシに前後から滅茶苦茶に撃ち込まれたコンゴウは、少しばかり抵抗したものの、ついにはぼったりと倒れ伏し、動かなくなった。

「は、はは……やった、今度こそやつつけたぞ!」

コウタは疲労と痛みには耐え兼ね、がつくりと膝をつきそうになった。

すかさずカカシが肩を貸して倒れるのを防がなければ、そのまま気絶していたかもしれない。

「さつきは悪かった。その……色々考えすぎちゃってさ」

恥ずかしそうに頬を掻くコウタに、カカシはただただ柔らかい笑みを受けただけで何も言わなかった。

(ああ……俺がこいつと一番近いんだから、俺がこの笑顔を守らなきゃな！)

コウタはこの頼もしくも危なっかしい同期に、心の中でそう思った。

グボグボパニツク

「グボロ・グボロというアラガミがいる。発生地はユーラシア大陸南東部の沿岸と言われており、巨大なヒレと頭、そして顎を持つ水棲のアラガミである……」

エントランスにあるターミナルで、一人の男がグボロ・グボロの項目を読み上げていた。

彼の名は名無之カカシ。この物語の主人公にして新型神機の適合者である。

エントランスは現在がらんとしており、彼の読み上げる声だけが空しく響き渡っていた。

リンドウは『デート』により不在。サクヤは新人であるコウタと二人で演習のため不在。防衛班の面々も見回りのため不在。ソーマは勝手に出撃して不在。

カカシも本来なら新人としてサクヤとコウタと共に演習に行くべきなのだが、サクヤとツバキが二人してお前は待機！と口をそろえて命令してきたので、カカシは不本意ながらアナグラで一人寂しくターミナルを弄っていた。

そうこうしている間に人はどんどん出撃してゆき、最終的にエントランスに残ったのがカカシとオペレーターであるヒバリのみとなっていた。

無論アナグラ内にはまだまだ人はいるが、ツバキは書類仕事で役員区画にいて不在。博士は言わずもがなで不在。メカニックである『楠リツカ』は神機保管庫でカカシの神機を調整中とのことではない。

そういう訳で話す相手も見ると相手もない。ヒバリは現在オペレーターの真つ最中なので話しかけるのも憚られる。

そうなるややる事と言えば鍛錬かターミナルを見るくらいしかやる事が無くなってしまう。

本日分の鍛錬はすでに終えたから、必然的にやる事がターミナル弄りしかなくなってしまった。

カカシはシュンとした気分を隠しもせず、口をへの字に曲げながら自分の神機の項目を開いた。

そして自分の神機本体の強化をするために必要な素材にグボロ・グボロの物が必要であることが判明し、グボロ・グボロの項目を開いたのであった。

「グボたんねえ……」

カカシはどこか感慨深げに、親しみを込めて呟いた。

彼にとってグボロ・グボロとは楽しいであり、憎むべき悪魔であつた。

前者はゲームでのグボロ・グボロは大した強さのアラガミでは無く、それなりに慣れていれば大した相手ではないからだ。では後者の理由はというと、とにかくこのアラガミの素材、その中でもなぜか一番出てきやすいはずの『龍種鱗』が全くとっていいほど集まらず、やりたくもない討伐を延々とさせられる羽目になつたからである。

「あーあ、ほんとなら今すぐにも出撃してグボグボパニックとしゃれこみたいんだけどなあ〜」

「で出撃するななって言われちゃつたからねえ……」。

そう呟き、カカシは残念そうにため息を吐いた。

その祈りが引き金にでもなったのだろうか？ アナグラにヒバリの声が放送された。

『緊急連絡をいたします！ 平原地帯にてグボロ・グボロの大量発生を確認！ 出撃可能なゴッドライダーは速やかに現場へと急行してください』

「アイエツ!？」

カカシは素っ頓狂な声を上げ、ぼつと振り返り、エントランスを見渡した。

何度直してもエントランスはがらんとしており、何処をどう見てもこの場に居るゴッドライダーは彼を除いて他にいなかった。

「すみませんカカシさん、そういう事ですので出撃お願いします！」

ツバキさんやサクヤさんには私から言っておきますので！」

「は、はぁ〜い！」

目をぱちくりさせて硬直していたカカシは、ヒバリからの再度の催促を受け、慌てて神機保管庫へと走りだした。

保管庫にはすでにカカシの神機の調整を終えたリツカが、待っていましたとばかりにカカシに神機を受け渡した。

「あ、来たね。放送は聞いていたよ。ちょうど調整を終えたところだったから、もう持っていていても大丈夫だよ」

「アリガトゴザイマス！」

お礼もそこそこにカカシは神機を引つ摺むと、いつでも出撃可能なへりに飛び込んで現場へと急行した。

へりは限界ぎりぎりまで飛ばし、あつという間に嘆きの平原付近へとカカシを送り届けた。

しかしそれでも遅いと感じたカカシは辛抱堪らんとへりをこじ開け、パイロットの制止の声も無視して飛び降りた。

上空600メートル地点から落ちたカカシは垂直に落下した。轟々と風が足元から頭へと流れ去る。

普通の人間ならば、否、ゴツドイーターですらこの高さから落下すれば無事では済まないが、このカカシというゴツドイーターはそんな物の範疇では収まらない。

カカシは神機を捕食形態へと変え、思い切りオラクルを吹かした。

瞬間、落下速度はみるみる落ち、ついには空中200メートルあたりで滞空した。

それに満足そうに頷くと、カカシはキャンキャン小言を言ってきたヒバリを宥めすかしながら、目標地点へと飛んだ。

そう、それは飛翔だった。大型の飛行アラガミにも劣らない速度で（途中何度かオラクル補給のために崩れたビルを蹴ったりはしたものの）カカシは瞬間に現場に到着した。

カカシはすさまじい飛行速度を維持したまま地面へと隕石めいて落下。そして今まさに大口を開けて負傷したゴツドイーターを食らわんとしていたグボロ・グボロを真上から強襲した。

「グワーツ!？」

「うわーなんだあ!？」

「キヤーなに!？」

「援軍……つてコト!？」

突如強襲されたグボロ・グボロと助けられたゴツドイーターの困惑の聲が同時に響き渡った。

カカシは本当ならばゴツドイーターの方に声をかけてやりたかつ

たのだが、先にこちらの方を処理する方が先と判断した。

カカシは万力の力を神機に籠め、凄まじい膂力の元、グボロ・グボロの胴体を噛み千切った。

「なっ!？」

負傷していたゴツドイーターと、その仲間である2人のゴツドイーターはその驚くべき光景に目を剥いた。彼らは自分が今見た光景が信じられぬとばかりに口をあぐりと開け、呆然としていた。

カカシはそんな姿に目もくれずにちぎり取った頭を神機に食わすと、速やかに確認し、そして落胆のため息を吐いた。

必要な素材はやはり出なかった。

だがまだまだ機会はある。そう悲観する物ではない。

そのように自らを納得させると、カカシは手元から顔を上げ、負傷していたゴツドイーターに手を貸して立たせてやり、回復錠を渡した。

「あ、ありがとう……」

礼を言うゴツドイーターにカカシは気にするなと手を振り、再び上空に跳び上がると次の地点へと飛び去って行った。

「な、何だったんだ今の……」

「私に聞かないでよ……」

「化物……!」

三人は嵐のように去って行ったカカシに思い思いに呟くと、しばらくの間カカシが飛び去って行った空を茫然と見上げていた。

『カカシさん、そのまま真っすぐ行った500メートル先に複数のオラクル反応が!』

「あいあい」

ヒバリからのオペレーターの元現場へと急行したカカシは先ほどと同じように上空から奇襲を仕掛け、一体を撃破。そこにはたった今仕留めた個体の他にもう三体のグボロ・グボロがいた。

突如飛来し、瞬く間に同胞の命を奪ったカカシに一瞬彼らは呆けたものの、すぐに自分を取り戻し、怒り心頭で襲い掛かった。

「グオオオオオ!!!」

当然そんなもので怯むカカシでは無く。

「テメツコラー!」

負けじと声を張り上げ、黄金の瞳を爛々と輝かせながら神機を構えて突っ込んでいった。

「グオオオオ!」

カカシはジャンプして押しつぶしてきたグボロ・グボロのプレス攻撃を避けると同時にブレードで深く切り付けた。

「グオオオオ!」

噛みついてきたグボロ・グボロを横ステップでよけると、カカシはその無防備な胴体に放射型のインパルスエッジを叩き込んで吹っ飛ばした。

「グオオオオ!」

後方から離れた地点から背びれを立たせ、砲撃の準備に入っていたグボロ・グボロに、カカシは神機を銃形態へと変え、見もせず雷属性オラクル弾を砲塔に撃ち込んで暴発させた。

「グオオオオ！」

インパルスエッジを受けて崩れた体勢を立て直したグボロ・グボロが勢い任せの突進を放ってきた。

「ダツテメツコラーツ！」

カカシは落ち着いた様子で、アサルトの技能であるドローバックショットで後方へと下がりながら雷属性オラクル弾を乱射。

突進で勢いが乗っているため当然避ける事などできず、弱点属性の弾丸を真正面から受けたグボロ・グボロの勢いはみるみる衰え、カカシに追いつく頃にはすでに息絶えていた。

「アツコラーツ！」

カカシはシュトルムで息絶えたグボロ・グボロを齧りながら前進。そのまま後方で酸の雨を降らすための準備動作をしていたグボロ・グボロに噛みついた。

「グオオオオ!?!」

突然噛みつかれたグボロ・グボロは一瞬だけ硬直。

「ソマシャツテコラーツ！」

無論カカシはその隙を見逃すはずも無く、あろうことかその巨体を

一本背負い。目の前でヒレで殴りつけようと接近してきたグボロ・グボロに叩きつけた。

「グワーツ!?」

互いに勢いよくぶつかった2体のグボロ・グボロは折り重なって互いを引き離そうとバタバタと見悶えた。

「チェラツコラーツ!」

カカシは神機を銃形態から剣形態へと変えるところで大跳躍。放物線を描いて折り重なるグボロ・グボロに向かって落下してゆき、その勢いで2体まとめて深々と貫いた。

「アバーツ!?」

2体のグボロ・グボロは断末魔の悲鳴を上げるとぐったりとなり、二度と動くことは無かった。

「ガブリンチョ!」

カカシはすかさず2体とも神機で齧り、素材の確認。そして再びのため息。また既定の量が揃わなかった。

『カカシさん! まだ敵のオラクル反応は残っています! 申し訳ありませんが他の人が来るまで迎撃をお願いします!』

「……アツハイ」

……幸いまだチャンスはあるようだ。嬉しくも無いおかわりの報告に、カカシは低いテンションで返答を返した。

(こ、この流れ……良くないぞ！ 非常に良くない！)

カカシは流れが確実に良くない方向へと向かっていることをひしひしと感じながら、現場へと向かうために再び空へと飛翔した。

彼の予想は見事に当たり、三日連続で出ずっぱりになる羽目になった。

「そ、揃わねえく!!」

三日間ひたすら狩り続ければ流石に大量発生も収まってきたようで、初日に比べれば発生頻度はだいぶ減ってきた。

しかしまだちらほらグボロ・グボロは残っているようで、その駆除を戻ってきたゴツドイーターたちで行っていた。

他の者たちが戻るタイミングでカカシの出番は終わりで、お前はアナグラで待機！ とリンドウとツバキとサクヤとコウタとヒバリとソーマと顔を見せにきたエリックと榊に命令されていたが、カカシはこれを巖と拒否。

本音は素材調達のためだが、それをそのまま言うほど彼は馬鹿では無く、与えられた仕事は最後までやりたいと、普段の笑顔を引っ込めて頭を下げて懇願したのが利いたのか、皆渋々彼の作戦参加を認めた。

「出ねえ……出ねえよく……鱗が出ぬよお……」

カカシは幽鬼の如くふらふらとした足取りで神機保管庫へと向かい、神機を手にとろうとした。

その時。

「ハイスストップ」

カカシの手は何者かの手によって掴まれた。

そちらを向くと、リツカがにつこりと笑みを浮かべながらカカシの顔を見つめていた。

彼女の額には内心の怒りがこれでもかと思える程血管が浮かんでおり、心なしか背後に炎の如きオーラが浮かんでいるようにも見える。

(あ、これヤバい奴だ……)

カカシはこれから来る説教の予感に、ぶるりと身を震わせた。



楠リツカは激怒した。

必ず、邪知暴虐の神機使いを叱らなければならぬと決意した。

リツカには戦が分からぬ。

リツカは、アナグラのメカニックである。神機を弄り、機械と遊んで暮して来た。けれども仲間に対しては、人一倍に敏感であった。

「君はさあ……」

持っていたレンチでカカシをべしべしと叩きながら、リツカはジト目を向けた。

「もしかして……物を丁寧に扱えない人？」

リツカはカカシから視線を外し、彼の神機に目を向けた。

「君入って来てまだ2週間くらいだよな？ それなのに神機の疲弊具合が半年間くらい戦ってきた人並みにあるんだけど……どうしてかなあ？」

リツカに追及され、カカシはひたすら申し訳なさそうに縮こまっていた。

「はあ……いまさら言っても遅いけどさ、整備するこっちの身にもなってよね」

「モ、モウシワケアリマセン……リツカさん」

消え入りそうな声で謝罪をするカカシを見て哀れに思ったのか、リツカはため息を吐きながらカカシの手を離した。

「大事に扱ってね。でないと次は整備なんてしないんだから！」
「善処しまあす！」

許可が出るやカカシは神機を引っ掴み、リツカへの返答もそこそこにゲートをくぐり、保管庫から飛び出してあつという間に見えなくなった。

「……」

カカシが出ていったゲートを見つめながら、リツカはカカシの神機について思いを馳せていた。

リツカが正式にフェンリルに配属となったのは今から2年程前だが、実は学生時代から整備班のクルーとして働いており、その経験の

長さゆえに神機の傷が「仲間を庇って受けた傷」なのか「ビビって逃げた傷」なのか見て判るようになった。

カカシの神機は全て前者だった。全て。刀身にも銃身にも盾にも本体にも。全て他者のためについた傷だった。

初めて見た時、リツカは絶句したものだ。

その神機にはあまりにも自分が無かったのだ。

「物もそうだけどき、君はそれ以上に自分を大事にしなすぎだよ……」

カカシが出ていったゲートを見ながら、リツカはぼそりと呟いた。

「そんなことしていたら、壊れちゃうよ……?」

リツカは壁に背を預けながら胸の前で、悔し気に拳を握りしめながら項垂れ、口を真一文字に噤んだ。

誰もいない保管庫で悲しげにつぶやく彼女の言葉を、ただ神機だけが聞いていた。

鯨、猿、鳥、そして串つきおでんパン

サクヤさんとリンドウさんのグボロ・グボロ討伐のミッションに行き、頭を噛み千切って殺し、乱入してきたコンゴウに零距离でインパルスエツジを叩き込みまくってドン引きされたのは、まあ、そこまで重要な事じゃない。

少し夢中になって撃ち込みすぎて、何発かカウンターを食らって内臓が破裂して血を吐いてドン引きされたのも重要ではない。

今回の任務で重要だったのはですね……。

リンドウさんとサクヤさんのイチヤイチャを間近で見られたことなんですYO！

ワタクシ彼らの会話を遮りたくなくて後方で少し離れた距離で二人についていたのです。

その甲斐あって、彼らは俺の存在を忘れたみたいに滅茶苦茶リラックスした状態で会話し始めるじゃないですか！

「神機使いは……すごい人ほど早死にするから……」

「ってことは、俺はまだまだってことか」

「もう、ばか……、相変わらず重役出勤ね」

「重役だからな……」

「ふふ……、そうね」

あゝあゝ!!! (絶頂)

「今日の相手はグボロ・グボロか……うし、ちやちやと終わらせて帰るぞ」

「せっかくの機会なんだし、もう少し上官らしいことでも言ったら？」
(含み笑いをしつつ)

「そういうの苦手なんだがなあ……まあ考えとくわ」
「できればやる気が出そうなのをお願いね？」

あゝあゝ!!!!
(爆発)

「アラガミとの戦いは習うより慣れろだ」

「死なない程度に、ね？」

「そうそれだ！ サクヤ君それだよ、俺が言いたかったのは！」

「はいはい、もちろん分かっていますよ。上官殿」

あゝあゝ!!!!
(昇天)

お前ら分かかって言ってるだろ？ 俺がこうなるの分かかってイチャイチャを見せてるんだろ？

最高です！ (感泣)

この時の俺は二人のイチャイチャを見せつけられ、過去最高のテンションだった。

だから戦い方も控えめな普段よりもやや過激な方向へシフトしていた。

グボロ・グボロを見つけた瞬間接近して砲塔を噛み千切ってバーストし、突然の事で叫ぶしかできないグボタんの口にスタングレネードを放り込んで射撃。

下顎を吹き飛ばしてあたふたしているグボタんの頭に乗って残っ

た方の頭に神機を噛ませ、捻るように降りながら噛み千切った。

と、そこでいつの間にもいたのだろうか？ コンゴウが2体ほど乱入してきて、その内の一体が俺に向かって飛鳥文化アタックで突っ込んできているじゃありませんか。

もしここでリンドウさんが注意喚起を叫んでいなかったら、俺はもろに食らって怪我をしていたかもしれない。

俺は飛鳥文化アタックをジャスガで受け止め、受け止められて驚いてるコンゴウの顔面にインパルスエツジを叩き込んで仰向けに転倒させた。

そして俺はコンゴウちゃんのお腹に乗り、お腹に向かってインパルスエツジを無茶苦茶に叩き込みまくった。

カカシ！ 気合！ 入れて！ いきます！

まああまりにも考え無しにぶっ放しまくったせいとか、後神機が育つてないのもあってか普通に反撃食らっちゃったのよね。

マウント取られて腰の入ってないフックだったけど、それでも腐っても中型アラガミの攻撃。骨は折れるわ内臓が爆ぜるわでもう散々。

でもそんなの気になりませんよ。だって俺二人のイチヤイチャでとつても幸せなんだから！

痛みより尊しが勝っていたから全然ダメージにならねえぜ！

華麗なる連携で俺なんかよりも早くコンゴウの討伐に成功した二人にやや遅れて、俺もコンゴウを仕留めることが出来た。

めっちゃ口元を血で汚した俺を二人はまるで自分の事の様に心配してくれて、俺は本日二度目の昇天を味わったのは、まあ仕方のない事だと思う。

任務の帰り、二人は身を寄せ合って、時折俺の事を振り返りながらこそ話をしていたけど、やはり行きの際にオープンにイチャついてたのが恥ずかしかったのだろうか？

こそそそイチャイチャも良いが、やはり俺はオープンにイチャつてるのを見るのが好きなので、できれば行きみたいに自然に振舞って欲しかったなあ。

で、次の日の任務で俺は第一部隊の面々でコンゴウとコンゴウが引き離れた小型アラガミの群れの掃討をすることになった。

リンドウさんは『デート』（支部長からの直々の依頼の隠語……後に俺がやらされる羽目になる奴）で不在のため、サクヤさんの指揮の元俺たちは贖罪の街へ。

別れる際の会話で一切入り込めず、なんだかハブられているみたいでこの世の終わりみたいな顔をしてる俺に水を向けてくれるリンドウさんはたぶん神様かなんかだと思う。

その後リンドウさんが任務に同行しない理由を知らないコウタ君が彼に疑問の言葉を投げた際に、私理解してますよ風な顔が出来たのは、なかなか良い体験だった。

何つう顔してんだこいつという視線をひしひしと感じながら、俺はリンドウさんの話が終わるまでにこにこと黙っていた。

リンドウさんが去ってから任務開始の早々に飛び立とうとする俺に釘をさすサクヤさんに付き従い、短いブリーフィングの後、ようやく散開して任務開始。

俺に任された役は群れの中であるコンゴウの足止めだ。

と言っても、二体同時ならいざ知らず、一対一ならコンゴウというアラガミは大して強くない。

小型アラガミを掃討し終え、コウタ君たちが合流し終える頃には俺はとつくにコンゴウを討伐していて、何なら一服していたくらいだった。

煙草を吸う俺を、大層意外そうにみんなは見えてきたけど、放浪の最中のストレスのはけ口がこれくらいしかなかったと伝えたら納得してもらえた。

でも帰り際に、昨日みたいに皆が肩を寄せ集めてこそこそ話をしていたのは何だったのだろうか？

理由を聞いてみたいけど、第一部隊の皆が仲睦まじくお話をしている姿を後方から眺められるという大変美味しいポジションにいる事に気づいた俺は、何もすることなくそのままにこにこと彼らのこそこそ話を後ろから見つめていた。

任務から帰投し、アナグラに戻っていると、エントランス上階にある出撃口の真ん前にあるソファーにリンドウさんがふんぞり返って俺たちを待っていた。

「先に帰ってたのね」

ツカツカと近寄るサクヤさんに続き、俺たちも彼に近寄って行った。

「ああ、何とか早めに切り上げられた。そっちはどうだ？」

「ご命令に従って『いつも通り』だ」

ソーマ君は目も合わせずにぼそりと言った。

「そうね。任務は滞りないし、人も欠けて無いわ」

そう言いながら、サクヤさんは俺の方にちらりと目を向けた。

「俺たち3人の華麗な連携を見せてやりたかったよ！」

「お前そんなに役に立ってたか？」

嬉々として報告をするコウタ君に、ソーマ君は辛辣な一言を浴びせる。

「なっ!!？」

コウタ君は呻き声を上げてがっくりと項垂れた。サクヤさんはそんなコウタ君に笑いながらそんな事ないとフォローを入れ、瞬く間に復活したコウタ君にまた一つ笑いを零した。

「そうか、これならこっちももう少しデートの回数を増やしてもよさそうだな」

「……」

「……」

「……」

「まず俺に女の子を紹介するのが先じゃないツすかね？」

『デート』の事を少なからず知っている俺、サクヤさん、ソーマ君はリンドウさんの顔を無言で見つめていたが、事情を知らぬコウタ君は額面通り受け止めており、そのデート相手を紹介してくれとリンドウさんに詰め寄った。

が、リンドウさんは大人の対応でこれを華麗に受け流す。

「ええー、良いじゃんケチー」

「……ふっ、お前がいっぱいしの神機使いになったら教えてやるよ」

そう言つてリンドウさんがコウタ君の頭をわしやわしやと撫でま

わしていると、放送が響き渡った。

『業務連絡、本日第七部隊がウロヴオロスのコアの剥離に成功。技術部員は第五開発室に集合してください』

「ウロヴオロス!? どのチームが仕留めたんだ!？」

「ワースゴーイ！」

「しかもコア剥離成功かよ……ボーナスすげえんだろうな」

放送の内容は『ウロヴオロス』のコア手に入ったから技術屋はよ来い、という内容だった。

ウロヴオロスは超大型アラガミで、触手うねうね、複眼ぴかぴかで大変キモイ。

しかしデカさの割に動きがのろい、触手が切断属性にすこぶる弱いのでぶっちゃけ鴨。ロング使いのワタクシには体力の多いオウガテイルと大差なかつたりする。食らえ昇り飛竜！

でもそれはゲームだけの話で、現実である今ではコンゴウの右フックで内臓が一発で弾けちゃうのだから、多分実際に相手する事になったら俺なんて一発でぺちゃんこであろう。

そしてそんなのが仕留められたという事もあって、アナグラ内では驚嘆の声やたかりの声がそこかしこで上がっていた。

「ウロヴオロス……って何? 強いのか?」

と、まだ新人な事もあって知らない事も多いコウタ君は頭上にはてなマークを浮かべて疑問の声口にした。

「ターミナルを調べりゃ出てくる。たまには自分で調べてみる」

と、ソーマ君はにべもなく言った。

しかしソーマ君よ。それで辛辣に振舞ったつもりかもしれないが、調べればわかるという事を教えてくれる時点で、素の優しさというものが滲み出ているんですぜ？

無意識の優しさ……尊し！

「そうね……今の私達4人じゃ、まだ無理じゃないかな」

と今度は俺の事を凝視しながらサクヤさんが言った。

「マジでええええ!! このメンツでも?」

コウタ君も俺を凝視しながら、驚きの声を上げる。

「1人2人は死人が出るだろ」

ソーマ君までが俺を凝視しながら言った。

「まあアレだ、生き延びていればそのうち倒せるだろ……。今は余計な事を考えず、とにかく死なない事だけを考えろ」

「その台詞、いい加減聞き飽きたぜ……」

リンドウさんのポジティブシンキング溢れる言葉に、ソーマ君はうんざり気味に吐き捨てた。

「……ああ、特にお前ら2人にだけは何度でも言っとくわ。ほつとくと一人で死に行っちゃうような奴らにはな」

リンドウさんは手間のかかる子供を見るような少し困ったような笑みを浮かべながら、ソーマ君に対して釘を刺した。

しかし2人？ 一人はソーマ君だとして、もう一人は誰だ？ コウ
タ君？ サクヤさん？

俺がうんうん唸って考えていると、いつの間にかお開きになってい
たようで、気が付くとみんなどこかへと行っていた。

もしかして俺、ハブられてる？

そんな疑問が沸き上がり、悲しい気持ちになって自室へと向かい、
不貞腐れた様に、寝た。

で、次の日リンドウさんに呼び出され彼の自室へと向かうと、何と
近々新型神機使いがここに配備されるとの情報が！

まじかーもうかー。

リンドウさんに新しく来る新型神機使いの痴女を支部長がどう
言っていたかを教えてくれるように頼みを仰せつかった俺は、了承し
て再びエントランスへ。

そしてヒバリさんから『シユウ』の討伐任務が本来はリンドウさん
を除いた第一部隊で受けるはずだったが、贖罪の街でコンゴウとグボ
ロ・グボロが同時に出現したため、俺を除く第一部隊で受け持つこと
になったと伝えられた。

あらそう、と俺はそれでもかまわない事を彼女に伝えると任務を受
注し、いざ『煉獄の地下街』へ！

煉獄の地下街はマグマが湧き出る嘗ての地下街跡で、ケロイド上の
アラガミの残骸が壁面を覆い、そしてマグマが湧き出ているわけだか
ら滅茶苦茶熱い。

そんな中で初見のアラガミであるシユウ先生を討伐せよという訳
なのだが、ぶっちゃけ特筆する事なし！

だって隙を見てインパルスエツジ叩き込むか、隙が無い時は下半身
に放射系か爆発系バレット撃ち込むだけだし。

一回だけミスって突進を避け損ねて撥ね飛ばされて壁に叩きつけ
られたけど、言う事と言えばそれ位で、後は暑すぎて汗でびっちり
になって不快だったことしか言うことがないです。はい。

素材もいいのが出ないわ汗で不快だわでとてつもない不機嫌状態
でアナグラへと帰還した俺だが、エントランスに入った途端そんな気
持ちなど吹き飛ばされる事態に直面した。

丁度そこにはいつものメンバーが揃っており、ツバキさんの横には
見慣れない女の人が立っていた。

そしてその姿を見るなり、俺は心の中で叫んだ。

(うわああああああああ痴女だああアアア!!!)

アリサさんを前にした俺は脳内で3度目の絶叫を上げた。(2度目
はサクヤさん)

ある少女

『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』

彼女は無印、バーストにおいてメインヒロインとして物語に、特に無印のストーリーに深くかかわる主要人物である。

彼女を一言で表すなら『下乳』、あるいは『被害者』、あるいは『愛に飢えた幼子』。

彼女について語る事は多々あるが、実際に前にした今、俺が彼女に對して思う事は一つしか無かった。

(何ちゅー格好してんねん！)

ゴッドイーターに登場するキャラクターたちは大なり小なり奇抜な格好をしている人が多い。その中でも一際変な格好をしているのがアリサさんなのだ。

下からおっぱい丸見えな露出過多な服装は初めて見た時はびっくりしたものだ。肩は剥き出し、短いスカート。何やお前、イクサなめとんのか？ ワドルナツケングラー！

しかしそれでもサクヤさんよりマシと思えるのは、なんだかなあ。ていうかサクヤさん。あなた何か私いかにも清楚系です似的な雰囲気をしているが、あなたも大概な見た目なんですぜ？

と、彼女の自己紹介の途中に鉢合わせる語りで合流した俺は、物凄く気まずい思いで出撃ゲート前で固まりながら、そんな事を思っていた。

「ああ、帰ってきたか。紹介するアリサ。こいつがこの極東支部の新

型神機使いである名無之カカシだ」

「…………この人が『極東の狂犬』ですか」

ここで俺の存在に気づいたツバキさんの紹介の元、俺は彼女の前に来させられた。

アリサさんは俺のつま先から頭までつぶさに観察し、疑わしそうにツバキさんの方を見ながらそんな事を呟いた。

……ていうか狂犬ってなんぞ？　ワシそんなこと言われるような変なことしたか？

「全然そうは見えないのですが……。ていうか強そうに見える要素が皆無です。ていうか汗臭いです。『ドン引きです』」

自分の過去の行動をうんうん唸って思い返していると、アリサさんの口からとてつもなく聞き逃せない単語が！

ドン引き！　生ドン引ききた！　ウヒョーたまらんぜ！　しかも記念すべき初ドン引きが俺とは！　光栄です!!!

「なんか急に笑顔になったんですけど……何なんですかこの人？」
「気にするな。こいつはこういう奴だ」

急ににつこりしだした俺に引き気味のアリサさんに、ツバキさんはバツサリと切って捨てた。

その後コウタ君の女の子大歓迎発言に対して辛辣な一言を送り、旧型の皆さんに対して見下した発言をして最悪になった雰囲気のまま自己紹介は終了。

ツバキさんはリンドウさんと共にエレベーターへと去って行き、俺はアリサさんにマシンガントークを仕掛けるコウタ君に別れを告げ自室へと直行。

とにかく今の俺は自分と敵の血と汗でドロドロになった体を清めたかった。

本当はコウタ君とアリサさんのトークを後方からにこにこしながら見ていたかったけど、こんな汚いなりであんな神聖な空間に立ちたくねー！

推し二人の間に立つなんて以ての外。汚い外見でいるのは更に論外。

そもそも同じ空間にいる事すらおこがましいのだから、せめて綺麗になつてから会わないとね！

でも人間の印象というものは初対面の時にだいたい決まってしまうというもの。

だとしたら俺の彼女の印象は汗臭い変な奴という事になつてしまふのではないか!?

そんなの嫌ー！ 別に彼女に気にされないのは良いけど、汗臭い男という印象はどうしても撤回したかった。

彼女の後方からにこにこするためにも、俺はやるぜ！

うおー！ と決意を新たに、明日からの任務に備えるため、寝た。



榊博士の新人合同授業を終えたのち、アリサは同じ新型神機使いであるカカシと、上官であるリンドウと共に任務のため、贖罪の街へとやって来た。

「お……今日は新型二人とお仕事だな。足を引つ張らないように気を付けるんで、よろしく頼むわ」

遅れてやって来たリンドウがカカシ、次いでアリサに目をやりながら言った。

「旧型は旧型なりの仕事をしていただければいいと思います」

新型のプライドゆえか、高慢で高圧的な態度でアリサは言い放った。

「はっは、ま、せいぜい期待に添えるように頑張るさ」

しかし経験豊富で年期も重ねた大人なリンドウはこれを軽く受け流し、アリサに対し軽いスキンシップのつもりで肩に手を置いた。

「——ッ!?!」

瞬間、アリサの脳裏に過去の記憶、そして刷り込みがフラッシュバック。

「キヤア!?!」

結果、肉体は反射的に後方へと大きく飛んで距離を開けるとい行為を出力し、無意識の内に精神の防衛を凶った。

「あーあ……、随分と嫌われたもんだな」

アリサの事情を多少なりとも知っているリンドウは彼女の無意識の自己防衛に納得し、出来るだけ彼女に配慮した上で茶化すような発言を取った。

「あ……す、すみません！ 何でもありません、大丈夫です！」

アリサはそう言うが、誰がどう見ても大丈夫ではなさそうだった。先ほどの高圧的な態度からは考えられない程、今の彼女は参っていた。頭を抱えてふらつく体を神機を立てて杖代わりにしてどうにか立っている有り様だった。

「……ふつ冗談だ……。んー……そうだなあ……よしアリサ」

リンドウはやや思案したように顎に手を当て、それから頷き、口を開いた。

「混乱しちまった時にはな、空を見るんだ。そこで動物に似た雲を探してみる。落ち着くぞ」

「えっ？」

顔を上げるアリサに、リンドウは穏やかな顔つきで続ける。

「それまでここを動くな。これは命令だ。その後でこつちに合流してくれ。いいな？」

「な、何で私が……そんな……事を……」

リンドウの命令にアリサは息も絶え絶えに苦言を呈すが。

「良いから探せ。な？」

とリンドウは穏やかに言い放ち、それで話は終わりとはかりに黙って話を聞いていたカカシの方に顔を向け、彼を引き連れて先に進んだ。

(しかし新型使いつてのは何かしら問題を持つてなきやいけないのかねえ)

後方でにこにここと笑みを浮かべるカカシを尻目に、リンドウは思わずにはいられなかった。

経歴不詳。年齢不詳。親も友人もいないと豪語し、他人の為に躊躇無く命を投げ出せるメンタル、尋常ならざる強さを持ち、榊博士をしてゴッドイーターになるために生まれてきたと言わしめた『名無之カシ』。訓練では抜群の結果を叩きだしたものの、『主治医』のメンタルカウンセリングをしなければならぬ程精神が不安定な『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』。

「あいつの事なんだが……、どうもいろいろと訳アリらしい」

リンドウは心の中で彼らを不憫に思いながら、おもむろに切りだした。

「まあこんなご時世、皆いろんな悲劇を背負てるっちゃあ、背負っているんだが……」

リンドウは歩みを止め、後方を振り返りカカシに向き直って言った。

「同じ新型のよしみだ。あの子の力になってやれ。いいな？」

リンドウはカカシの肩に手を置いた。今度は拒絶されなかった。カカシはにっこりと笑みを浮かべ、頷いた。

「うっし。じゃあ彼女が来たら行くぞ！」

リンドウはそう言って、その場に腰を落として煙草を吸い始めた。その姿を見て、カカシは笑った。



空を見上げ、言われた通りに動物の姿を見つめようと躍起になっていると事数分、いつの間にか乱れていた息は整えられ、心は落ち着きを取り戻していた。

(大丈夫平気……何も問題はない……大丈夫平気……何も問題はない……よし)

アリスはひとしきり深呼吸をすると、意を決して高台から飛び降りた。

(アДИН……ドВА……トРИ……ОДИН……ドВА……ТРИ……)

心の中で『先生』に教えられた呪文を唱えながら歩き進むうちに、カカシたちに合流する頃にはすっかり元の高飛車な彼女が戻っていた。

「ご迷惑をおかけしました。命令通り、空を見上げ、動物に似た雲が見つかりましたので合流しました」

「おう、そりゃあいい」

自分のアドバイスが効いたのかは分らないが、それでも時間を与えたおかげで元の調子に戻ってくれたようだ。

高飛車な態度が取れないのはいただけだが、それでも辛そうにされるより余程良い。

リンドウは心の中で安堵しながら、カカシに休憩は終わりだというジエスチャーを送った。

「じゃ、アリサが合流したところで作戦開始だ。話した通りカカシはあっち。俺らはこっちだ」

「え？ この人は一緒に行かないんですか？」

アリサはリンドウに顔を向けながら、懐疑心を隠しもしないでカカシを指さした。

「おう。こいつならシユウ一体ごときちよちよいのちよいだろうからな。お前は実戦経験が少ないから俺と一緒にだ」

「私と同じ新型で、私と同じ新人のこの人がですか？」

アリサはカカシの方に顔を向け、初対面の時と同じようにつま先から頭までじっくりと観察した。

赤いフェンリル正式制服を身に纏い、無造作に伸びた黒髪をポニーテールにして纏めている。柔和な顔つきをしており、彼女の視線を小首をかしげて不思議そうに受け止めている姿は、噂に聞く『狂犬』とは一つとして結び付かなかった。

アリサはカカシからリンドウに顔を戻した。その顔はいかにも納得がいていない事が窺える顰め面だった。

「はっは、まあお前の気持ちは分る。でもま、何事も一見にしかず、だ。俺らの方が上手くいけば、こいつの戦いぶりが見れるかもしれないぜ？」

「はあ……」

結局アリサは納得ができないまま作戦は開始され、二人はカカシと

別れて二体いる内の一体の方にしめやかに駆け出した。

そして二人はシユウの姿を発見。攻撃の姿勢に移った。

「当たってー！」

シユウの姿を見つけるや、アリサは神機を銃形態へと変え、先手必勝とばかりに撃ち込んだ。

「グガッ!？」

アリサのアサルト型神機から乱射された火属性のオラクル弾がシユウの顔面に殺到した。

虚を突かれたシユウはそれをもろに食らい、仰け反って怯んだ。

「よーし、ナイスショットだアリサ！」

リンドウはシユウが怯んだ隙に一気に接近して胴体に一線。深い切り傷をつけた。

「ガアアー！」

体勢を立て直したシユウはこれに激怒。

怒りで活性化して上昇した身体能力で翼手を広げて回転。接近を拒絶した。

「おっと」

リンドウは軽い調子でこれをよけ、そのままシユウの間合いから飛びのいた。

「やあ！」

入れ替わる形で、今度は銃形態から近接形態へと切り替えたアリサがシユウを相手に切り掛かった。

「ガアッ！」

接近してくるアリサに向けて放たれた翼手による振り下ろしを、アリサは身を捻って避け、すれ違いざまに切りつけた。

(硬い……！)

シユウの下半身は結合崩壊していないとかなりの硬度を誇り、近接武器ではなかなかダメージを与えられない。

シユウと戦う場合は、基本的に下半身を銃破碎攻撃で破壊してから近接要員が切り込むというのがセオリーだ。

そして新型はこの役割が一人でこなせるため、アリサはリンドウを陽動に、後方から火属性破碎のオラクル弾で攻め立てる事にした。

「ガオオ！」

「ハハア！ 良いぞ新人！」

アリサの援護の元見事に結合崩壊した下半身に、リンドウは思い切り切り込んだ。

「グオオオオオオン!!？」

リンドウは初撃で付けた傷に向かって勢いを乗せた突きを放った。傷ついていた上に結合崩壊した下半身はこの一撃を易々と受け入れ、神機に貫かれたシユウは断末魔の悲鳴を上げ、ぐったりとなつて

活動を停止した。

「はあ……はあ……」

「ははは、初陣にしちや中々だ」

「ツ馬鹿にしないで！」

肩で息をする自分に差し伸べられた手をアリサは強引に振り払い、カカシのいるエリアをヒバリから聞き出し、足早に駆け出した。

自分ですらこれだったのだ。同じ新人で、尚且つ一人で戦っているカカシはもつとひどい様になっているだろう。

アリサの中でカカシは自分より格下で、更にへっぴこであるという図式が成り立っており、居てもたつてもいられなくなった彼女は急いでカカシに合流するために足を速めた。

「そんなに急がなくても大丈夫だと思っぞ〜」

「あなたは何でそんな楽観的な事を！」

「……楽観じゃないさ」

そんな会話を続けていると、ヒバリからもうすぐカカシのいるエリアにつくという情報が。

アリサはリンドウの言葉にすら反応せず、ただ全力で走る事に集中し、ついにカカシとの合流を果たした。

しかし、駆け付けた時、すべては終わる直前だった。

「なっ——!?!」

目に飛び込んできた光景に対し、アリサはただ目を見開いて固まる以外にできなかつた

「アババババーッ!」

捕食形態になった神機に下半身を丸ごと呑み込まれ、バリバリと噛みつく度に硬いはずの下半身がメキメキと破損してゆく。

掲げられたシユウの有様は酷い物だった。

背中から生える翼の先端にある拳は両方とも切り飛ばされており、彼のすぐ足元に落ちていた。翼自身も完膚なきまで破壊されており、彼のこの状況から脱せたとしても、もう飛行する事は不可能であろう。顔面にいたっては半分が吹き飛ばされ、見るも無残な有様だった。

絶句。それに尽きる。

アリサは呆然と立ち尽くし、ただひたすら目の前の光景に圧倒された。

「アバババババーッ!」

「うーわ……予想していたよりひどいなーこりゃ」

アリサと同じように驚き、顔を引きつらせながらリンドウはカカシに近づき、彼の肩に手を置きながら呟いた。

そこで彼らの存在に気づいたカカシはリンドウの方に顔を向け、次いでアリサの方へ顔を向けた。

「ッ!」

そこで彼女は初めてカカシの瞳を見た。

ゴールドオーカー色の瞳。人知を超えた、超人の瞳が彼女と一時の間交わった。

カカシはしばし彼女の事を見つめていたが、いい加減断末魔が鬱陶

しくなったのか、シユウの方へ顔を向けると、神機に力を籠めた。

「アバーツ!？」

途端に神機の噛みつく力がいや増し、次の瞬間バキンツという音を立ててシユウの下半身を完全に噛み砕いて呑み込んだ。

上半身だけになったシユウはがさがさと力なく悶え、そのうち動かなくなった。

「……お前会うたびに何というか、更新していくよな」

「(▽)()」

カカシはにっこり笑って親指を立てた。

リンドウは苦笑いを浮かべた。

(ナニ……あれはナニ?)

一方アリサは現状が理解できぬまま、ただひたすら未知に対しての疑問と恐怖で震えていた。

(あれはナニ? あれは何なの……? あんなの……あんなの人間じゃない!!!)

アリサは自らを掻き抱き、ガタガタと身を震わせた。

その時アリサの脳裏に、痛烈に過去の映像をフラッシュバックさせた。

自分の両親を襲ったアレ。アレの姿と似ても似つかない黒髪の優男が、どうしてか重なり合い、彼女の脳裏で恐ろしい金色の巨人となつて顕現した。

「あ——」

そこからの記憶は曖昧だった。

ふと我に返ると、彼女は新人区画に設けられた自分の自室にいた。

「はっ……いっ……はっ……いっ……」

アリサは呼吸を荒げながら、『先生』に落ち着いたら見る様に言われた映像媒体を手に取ると、震える指でどうにかターミナルに挿入し、その中の映像を見た。

（私は平気……大丈夫平気……何も問題はない……大丈夫平気……何も問題はない……大丈夫平気——）

それは神機から抽出されたカカシの戦闘データだった。

カカシは飛び上がり、空中のザイゴートをむしやむしやと食べ始めた。

（私は平気大丈夫平気何も問題はない大丈夫平気何も問題はない大丈夫平気——）

針が突き刺さっているにも拘らず平然と動き回り、光弾を蹴り飛ばして怯ませ、瞬く間に小型アラガミを殲滅するカカシ。

（ОДИН……ДВА……ТРИ……ОДИН……ДВА……ТРИ……
……ОДИН……ДВА……ТРИ……）

グボロ・グボロの群れに突貫し、一体に噛みついて放り投げて別の一体にぶつけ、2体まとめて刺し貫く怪物。

(ОДИН! ДВА! ТРИ! ОДИН! ДВА! ТРИ!
! ОДИН! ДВА! ТРИ!)

小型アラガミの中心に文字通り着弾して蹴散らし、その中心で神機を捕食形態にして一回転。悪魔は周りにいた小型アラガミをまとめて食い殺した。

「もうやめて!!!」

少女は未だ流れようとする映像をターミナルを強制的に止める事で終わらせた。

「うう……」

少女はふらふらとした足取りでベッドへと向かい、倒れ込んだ。

「やだよう……もうやだあ……」

ぼろぼろと涙をこぼし、少女は胎児の如く蹲った。

彼女の脳裏には未だ過去の幻影がリフレインされており、それは彼女が気絶するように眠りにつくまで続くことになる。

しかしこれは未だ地獄の入り口でしかない事に、彼女はまだ気付いていない。

蒼穹の月

ヴァジュラ襲来。

その情報は瞬く間に極東支部中に広まり、ゴッドイーターたちを騒然とさせた。

『ヴァジュラ』

トラに似た容姿を持つ大型アラガミで、その巨体からは想像もできないほど俊敏に動くことが出来る。背中から生えたマント状の器官からは強力な電撃を放つ。

発生起源はユーラシア大陸南東地域とされ、その機動力からユーラシア全土で確認されている。

最近では中型アラガミが現れるのですら珍しいとされていただけに、このニユースは極東に所属する者たちにとって大きな緊張をもたらした。

そしてこの怪物の討伐を果たして誰が請け負うことになるのか、それについて至る所で自分なりの憶測を捲し立てていた。

リンドウさんは確定だろう、ならサクヤさんも確定だな、噂の新人はどうだ？ アイツについての話題は出すなつたらうが、どうせソーマの奴だろ、そりゃ無いだろあんな死神、何だとお前この俺が間違うとでも、ただの僻みだ、何をテメエ殺すぞ、止めろ馬鹿たれ、うるせえ老いばれ、何をぬかす糞垂れが等々。

売り言葉に買い言葉で、いつの間にか殴り合いにまで発展しそうな雲行きの話し合いも、件の新人がヴァジュラ討伐の任務をヒバリから受注した事でぴたりと止まった。

その瞬間、至る所で行われていた話し合いの声が止んだ。

皆が例の新人を凝視した。

当の新人はというと、なぜ自分が凝視されているのかで理解しておらず、本任務のリーダーを務めるサクヤに呼ばれるまで、ただただ困惑したように小首をかしげていた。

討伐任務に駆り出されたメンバーは、おおむね彼らが予想した通りと言えた。

第一部隊のサブリーダーであり、リンドウの右腕ともいえるサクヤ。リンドウに次ぐベテランで、曰くつきではあるが実力は誰もが認めるソーマ。新人だが、異常な適合率でアラガミと遜色ない戦闘力を持つ名無之カカシ。同じく新人だが、サポート能力に長けるコウタ。

理想的なチームと言えた。

ただリンドウがいない事に彼らは疑問を浮かべたが、サクヤから彼はアリサを連れて別の任務を遂行中と聞かされて納得した。

大型アラガミの討伐に赴く彼らを、極東支部の所属員たちは軽い調子で見送った。

“久しぶりの大型アラガミだが、彼らなら一人の犠牲者も出す事なく倒せるだろう”

誰もがそう思っていた。ヒバリはきつと大丈夫だろうと信じていた。ツバキはカカシとコウタの事が少しばかり心配だったが、サクヤとソーマがいるから大丈夫だと高を括っていた。リツカは完璧に調整した神機を満足げに眺めていた。防衛班の面々も笑って見送り、一部の者が誰が止めを刺すか賭けをして、班のメンバーに小言を言われていた。

色々思うことはあれど、誰もが彼らの完全勝利を疑ってはいなかった。よもやあんな結末を迎えるなど、誰も予想だにしていなかった。

仮に、仮にであるが予想していた人物は……

『たった一人だけである』



場所はアナグラより離れ、贖罪の街の一区画に、サクヤ、コウタ、ソーマはいた。

彼らは作戦のために離れたカカシからの通信があるまで、じっと息をひそめ、ソレの動向をつぶさに観察していた。

『ソレ』、ヴァジユラは開けたエリアを悠々と歩き、時折立ち止まってはきよろきよろと辺りを見回したり、その場に座り込み、後ろ足で顔を掻いたりした。

それはまさしく己に敵がない事を雄弁に語っていた。事実これより少し前にヴァジユラは中型アラガミを1体屠っており、その態度が実力に裏打ちされたものであることは言うまでもない。

(くっそく何だよあれ！ あの余裕しやくしやくって感じが何かムカつく〜！)

その様子を遠巻きに見ていたコウタが、苛立たしそうにしていた。

(それも仕方ないわ。だって大型アラガミに敵う中型アラガミなんていないし、並の神機使いだって彼にはかなわないもの)

とサクヤ。

(おい、頼むから静かにしてろ。気が散る)

ソーマはにべもなく言った。

(だってさ)

唇を尖らせてソーマに訴えるコウタだが、そこで通信が入り、彼は口を閉じて無線に耳を傾けた。

『位置についたよくん』

気の抜けるようなカカシの音が、通信から聞こえた。

初の大型アラガミの討伐作戦だが、彼からすれば今までの任務とあまり大差ないらしい事が窺わせるような声色だった。

軽口をたたかねば不安でいてもたってもいられなかつたコウタには、いつも通りのカカシのその言葉は安心感を覚えるのと同時に、カカシがまた恐ろしい物に一步近づいたような気がして密かに胸を痛めていた。

「オーケー……ヒバリちゃん、周囲に敵はいない？」

『はい、周囲にオラクル反応はありません』

「よし、良いわカカシ君。そのまま奇襲を開始して頂戴」

サクヤは頷き、ヒバリに確認を取った。そして邪魔の心配が無い事を確認すると、作戦の開始を告げた。

『了解。このまま空爆するね』

「はっ。」

帰ってきた返答に、サクヤは素つ頓狂な声を漏らした。どういふことか問いただそうと口を開きかけた時、轟音がした。

サクヤたちは音の方向へ勢いよく顔を巡らし、そして呆気にとられて固まった。

カカシはいつものように神機を捕食形態に変えて空にいた。ただしその捕食形態がおかしかった。

彼は銃形態で捕食形態に変えていたのだ。神機が捕食形態に形態変化する際、その時の刀身、または銃身は捕食形態の口の中に縮こまる。

それを応用する形で、カカシは捕食形態のまま、空中に浮かんだまま射撃するという荒業をやったのけた。

「ガアアアアア!!!」

突然真上から撃たれたヴァジュラは驚いてたたらを踏み、煤けた頭を振って上空を睨み据えた。

大型アラガミの威圧感は今までの小型アラガミ、中型アラガミとは文字通り一線を画す。並のゴッドイーターなら恐怖で動けなくなり、最悪背中を向けて逃走するような怪物なのだ。

しかしカカシは遙か先を見据えていた。

こんな程度の敵で身を竦ませている程度ではやっていけない事を

この男は知っている。ヴァジュラ以上の脅威を知っているのだ。
だからこそ、ヴァジュラを目の前にしてもカカシは全く心を揺ら
せる事無く対峙できたのだ。

尤もそんな物がなくてもそのスペック故、彼はヴァジュラというも
のに一切脅威を感じていないのだが。

「グオオオオン!!!」

「第二射、発射!」

ヴァジュラはマント状の器官を逆立たせ、雷球を生成して発射して
きたが、カカシはドヒヤアと凄まじい音を立ててオラクルを吹かして
かわすと、氷属性の特性オラクル弾を乱射した。

発射されたオラクル弾は途中でばらけ、ヴァジュラに命中する頃
は数十の弾幕となって着弾した。それが滅茶苦茶に発射され、まるで
旧時代の絨毯爆撃じみた有り様となってヴァジュラの体を文字通り
包み込んだ。

「グラアアア!!!」

このヴァジュラは発生してから数ヶ月程度の比較的若い個体だっ
た。だからか不測の事態に対応する事などでできず、ただただ困惑と全
身余すことなく弱点属性で撃ち抜かれる痛みでその場に棒立ちに
なっていた。

「ッ!? もうあの子は! コウタ君私たちも加わるわよ! ソーマは
今の内にチャージクラッシュの準備!」

「お、オッス!」

「クソ!」

苦し紛れに放たれる雷球を悠々とかわしながら、上空にいるというアドバンテージをフルに活用して撃ちまくるカカシに悪態を隠せなかったサクヤはコウタとソーマに急ぎ指示を出し、二人を引き連れて隠れていた建物から飛び出して応戦を開始した。

「はあー！」

「おりゃおりゃー！」

コウタとサクヤはヴァジュラの側面に陣取ると、カカシに負けじと氷属性のオラクル弾を発射した。

「グオツ!!？」

上空からの豪雨の如きオラクル弾に加え、突如真横から加えられた衝撃により、ついにヴァジュラは立っていられずに転倒。

「食らえー！」

ソーマはその隙を逃さずチャージを終え、禍々しいエネルギーを纏った刀身を渾身の力で振り下ろした。

「グオオオオオン!!!」

これが中型アラガミであったらこの時点で勝負ありだったであろう。

しかし仮にもヴァジュラは大型種。チャージクラッシュで腹を割かれ、血液をばたばたと垂らしながら尚も生きていた。

「糞、しぶとい奴だなー！」

悪態をつきながら再度チャージクラッシュの態勢に入ったソーマ

だったが、それは突如として真横から生じた衝撃により押し倒されたために不発となった。

「チッ！ カカシ何を」

ソーマがそこまで言いかけたところで、彼らの真上を莫大な電気の手束が通過。射線上にあった物体を融解させた。

「……すまん」

「(△▽)」

カカシの手を取って立ち上がったソーマは、改めてヴァジユラに向き直った。

カカシの射撃が無くなったため弾幕が薄くなった隙を狙って、ヴァジユラはその場から離脱。体勢を立て直していた。

そして、自分をここまで酷く傷つけたカカシとソーマに向かって射殺さんばかりに睨みつけていた。

「グオオオオン!!!」

『ッ！ つ皆さん！ 気を付けてください！ ヴァジユラが怒りで活性化します！』

ヒバリの忠告が無線から聞こえるのと、ヴァジユラが憤怒の咆哮を上げたのはほぼ同時だった。

鬣を逆立て、咆哮を上げるヴァジユラの体は絶え間なく稲妻が走っていた。体内の電気を生成する器官が活性化に伴って出力が上がった証拠だ。

「嘘だろ……？ あれだけの傷を負ってまだ動けるのか？」

カカシに全身を撃ち抜かれて殆どの部位が結合崩壊を起こし、ダメ押しとばかりにソーマによって腹を割かれてもなお立ち上がるヴァジユラに、コウタは戦慄を隠せなかった。

「大型アラガミを中型アラガミなんかと一緒にしたら駄目よコウタ君。彼は貴方が戦ってきた相手とは文字通り次元が違うわ」

「う、ウツス！」

サクヤからの言葉に、コウタは気を引き締めた。

「チツあまり耐えるな」

ソーマは不愉快そうに眉値を顰め、神機を構えなおした。

「……頼むから無事に終わってくれよな」

そんな彼らを横目に見ながら、カカシは祈るように呟いた。

「G A A A R H !」

己が発する雷光に目を輝かせながら、天上の雷は咆哮を伴って眼前敵に向かって行った。

……これはまだ劇の前の前座に過ぎない。惨劇の幕は、未だ上がらない。

惨劇

ズズン……ドドン……。

断続的に地響きが足を伝って来る。

「何だ？ 誰か戦ってるのか？」

リンドウは音の方向に顔を向け、訝し気に眉を顰めた。

(ここいらで任務があるなんて話は聞いてない……支部長の伝え忘れか……？ いや、あの人に限ってそんなことは無いだろう……)

リンドウは後方のアリサを気に掛けながら黙考する。

「これは、いよいよキナ臭くなってきたな」

「え？」

リンドウの呟きを聞き取ったアリサが、疑問の声を上げる。

そんな彼女に何でもないとはいつつ、リンドウはついに支部長が何かしらのアクションを起こしてきたという事を、敏感に察していた。

“死ぬな、生きて戻れ”

自分が他者に、そして外ならぬ自分自身に散々言い聞かせてきた言葉が、嫌に頭に響いていた。



カカシたちとヴァジュラとの戦いも、いよいよ大詰めを迎えようとしていた。

「オオッー！」

ソーマの渾身の一撃がヴァジュラの右前足を捉えた。

バスターブレードの分厚い刀身は結合崩壊を起こし脆くなった前足を、「豆腐めいて切り飛ばした。切り飛ばされた前足は宙を舞ってぼとりと落ちた。

「ARRRRGH!？」

間髪入れずにコウタとサクヤによつて撃ち込まれる氷属性オラクル弾に、さしものヴァジュラの動きも精彩を欠き、はじめの俊敏さを見る影もない。

しかしそれだけやっても苦しみこそすれ大人しくならないのは、さすが大型種といった所だ。

ヴァジュラが怒りで活性化してからすでに30分が経過していた。腹を割かれ、全身を撃ち抜かれてすでに大きくダメージを受けているにも拘らず、そんな傷など知らぬとばかりにヴァジュラは怒りに任せて大暴れした。

あちこちを縦横無尽に駆け回り、背後を取っては出の早いフックで攻撃。それで危うくコウタは死にかけたが、カカシがオラクルを吹かして超速でヴァジュラの脇腹に噛みつき、怯ませることで事なきを得たのだった。他にも無数の雷球を生成して四方八方に飛ばして遠距離組二人を阻害したり、莫大な電撃を体から放つことでソーマとカカシの接近を拒んだりと。

その生命力に、3人はいい加減うんざりしていた。

が、それもいよいよ終わろうとしていた。

「くたばれー！」

サクヤの狙いすました一撃でヴァジュラの片目を奪い、その隙に接近していたコウタがホールドラップでヴァジュラの動きを一時拘束。

その隙にソーマはチャージクラッシュでヴァジュラの胴体を深く切り裂いた。

「G、GRRRRRRR！」

それでもなお死なぬヴァジュラに、射撃に徹していたカカシがついに動いた。

カカシは神機を銃形態から剣形態へと変形させると、捕食形態をとった。

「イヤーツー！」

そして弓めいて引き絞り、思い切り突き出すと同時にオラクルを吹き出し、凄まじい速度でヴァジュラに向かって突貫した。

「ARRRRGH!？」

ヴァジュラはその突貫を防ぐ手立てがなかった。ヴァジュラはやすやすと懐に入られ、カカシはヴァジュラの背中に生えるマント状の器官に勢いのまま神機を噛みつかせた。

「GRRRRRRR！」

ヴァジュラは当然振るい落としにかかるが、弱った体ではそう大きく体を動かせぬ。カカシは依然背中におり、ただひたすら神機の噛みつく力を強めていった。

「イイイヤアアアーツ！」

そしてカカシは万力の力を籠め、ヴァジュラのマント状の器官を、根元から引きちぎった。

「アバーツ!？」

ヴァジュラは断末魔の悲鳴を上げた。

「イヤーツ！」

カカシは引きちぎったマント状器官を放り捨て、間髪入れずに傷口に神機の刀身をねじ込んだ。

「アバーツ!？」

「終わりね」

「……だな」

「うわー……」

断末魔の悲鳴を上げて絶叫するヴァジュラを解体するカカシを、サクヤたちはドン引きしながら見守っていた。

「イヤーツ！ イヤーツ！ イヤーツ！」

そんな事など知る由もないカカシはそのままの姿勢で、インパルスエッジを零距离から連続で叩きこんだ。

さて話は変わるが、カカシの今の刀身はオブリビオンという刀身だった。インパルスエッジという機能は刀身ごとに発射する弾種が異なる。この刀身のインパルスエッジの弾種は『弾』であった。

ところで、ヴァジユラ神属という種は胴体が貫通系の攻撃にすこぶる弱い事が分かっている。

それが何を意味するのかというと。

「アババババーツ!?!」

ヴァジユラは氷に次いで弱点属性である神属性の弾丸を、傷口に零距离から連続で撃ち込まれるという想像を絶する地獄を味わうことになる。

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

「イヤーツ!」

「アバーツ!?!」

もうどれだけ撃ち込んだことだろう。ついには悲鳴すら上げられなくなったヴァジユラにカカシは止めの一撃を食らわせるため、突き

刺さっていた神機を引き抜き、一時空を飛ぶために捕食形態に変えて上空へと飛び上がった。

「イイイイイヤアアアーツー！」

そしてオラクルの噴射方向を下から上へ、即ち真下へと急降下突撃を繰り返した。当然弱ったヴァジュラにそれを避ける事など不可能。

「アバーツー!？」

結合崩壊して脆くなった頭部はあっさりとカカシの急降下刺突攻撃を受け入れ、断末魔の絶叫を上げるとついに巨虎は動かなくなった。

「これで任務終了だね」

動かなくなったヴァジュラにとことこ近寄りながら、コウタは安堵したように呟いた。

「そうね、これで終わりね」

「なら帰るぞ。時間の無駄だ」

「えー！ もう少し位いてもいいじゃん！ 俺とカカシは初めての大型種の討伐なんだぜー！」

「……」

やいのやいのと言ひ合う彼らを遠くから無言で眺めるカカシの表情は、険しい。

これから先、何が起こるのか彼は知っている。故に、初の大型アラガミ討伐という偉業を前にしても、依然として警戒を解いていなかったのである。

「さて、そろそろお喋りは終わりにして、皆行きましょう」

任務のリーダーであったサクヤの号令に3人は（1人は渋々だが）従い、サクヤを先頭にして進み始めた。

そして廃教会の入り口付近で、アリサを連れたリンドウと鉢合わせしたのであった。

「何？」

真っ先に疑問の声を上げたはソーマであった。

「お前ら？」

次に反応したのは向こう側にいたリンドウで、次にコウタが何故リンドウがここに居るのか分からずに疑問の声を上げた。

「どうして同一区画に二つのチームが……どうということ？」

最後にサクヤが皆が思っている疑問を代弁して、リンドウへと尋ねた。

「考えるのは後にしよう。さっさと仕事を終わらせて帰るぞ」

しかしリンドウははぐらかすようにそう言い、自分たちは廃教会内を見てくるから、カカシたち4人は入り口を固めておいて欲しいと言ふとアリサを連れ、すたこらと中へと入っていった。

言いたいところは多々あったが、サクヤは渋々とそれに従わざるを得なかった。

リンドウとアリサは注意深く廃教会内を進んでゆく。そして通路

を抜けステンドグラスが照らす広間に足を踏み入れた途端、彼らを待ち伏せていたかの如く、教会上部に開いた大穴から一体のアラガミが姿を現した。

それは『プリティヴィ・マータ』という第二種接触禁忌種に指定されているアラガミだった。発生地はユーラシア大陸北東部と言われているが、極東では一度として目撃例のないアラガミである。

(そんなアラガミが何故ここに!?)

リンドウの驚愕も無理はない。しかし、どれだけ珍しかろうと目撃例がなかりうと、現れたのなら倒し、生きて帰らねばならぬ。

穴から飛び降り、臨戦態勢をとるプリティヴィ・マータに、リンドウは神機を構えアリサに指示を飛ばした。

「下がれ!! 後方支援を頼む!」

「GRRRRRRR!」

それと同時にプリティヴィ・マータは咆哮し、リンドウとアリサを睨んだ。

瞬間、まるでプリティヴィ・マータと示し合わせでもしていたかのよう、過去のトラウマがアリサの脳内にあふれ出し、一瞬で彼女の精神を退行させた。

「パパ……!?! ママ……!?! ……やめて……食べないで……」

ボロボロと涙を流し、後退りながらアリサは譫言めいて呟いた。

「!?! アリサあ! どうしたあ!?! ……うお!?!」

突然のアリサの変貌に驚愕を隠せないリンドウは、プリティヴィ・

しかしそれで体勢を立て直せたリンドウは瞬時にプリティヴィ・マータとの間合いを詰めると、神機を一閃。プリティヴィ・マータの顔面に深い傷をつけた。

「ARRRRGH!?!」

プリティヴィ・マータはそれで体勢を崩し、ひっくり返ってバタバタと身悶えた。

「イイイイ……」

「こいつの事は俺に任せろ！ お前はアリサを！」

据わった眼でプリティヴィ・マータを睨みつけながら追撃を放とうとするカカシをリンドウは制し、情緒不安定になったアリサを助けるように指示を飛ばした。

「ッ！」

カカシは電撃的な速度で逡巡し、リンドウに向かって頷くと、瞬間移動めいた速さでアリサの目の前に立っていた。

一方アリサはあふれ出した過去のトラウマ、そして先生の教えが渦を巻き、彼女の心をかき回していた。

『そうだ！ 戦え！ 打ち勝て！』

男の声が轟く。

『こう唱えて引き金を引くんだよ。ОДИН、ДВА、ТРИ！』

先生の教えが、彼女の耳を汚す。

「ОДИН……ДВА……ТРИ……ОДИН……ДВА……ТРИ……」

しかし壊れかけた彼女はそれに継ぐ外なかった。アリサは夢遊病患者の如くゆらゆら揺れながら祈るように唱え続ける。

『そうだよ。それを唱えるだけで君は強い子になれるんだ』

「そんな訳あるか——ッ!!」

過去の情景がそんな大声によって引き裂かれて、消えた。

かわりに現れたのは、長い黒髪をポニーテールに結わいた柔和な顔つきの青年だった。

彼の顔に普段の笑みは無く、その顔は痛ましい物を見るかのように悲しげに歪んでいた。

「あ」

彼の顔を見た彼女に再び過去の映像が去来する。

『いいかいアリサ。こいつは君の敵だが、また新たに恐ろしい敵が現れた』

そうやって『先生』はいつものように敵の写真が複数張られた画面を出した。その中にいつもは見られない写真が一枚貼ってあった。

『これは敵だが、有用な敵なんだ。分かるねアリサ。殺してはいけない。しかし目の前に現れたのなら』

『先生』は振り向き、薄汚い笑みを浮かべてにこやかに言った。

『撃退するんだ』

先生はそう言った。ならばそうしなくちゃいけない。だって『こいつ』は私たちの敵、アラガミなのだから。

しかし、目の前の敵は彼女を攻撃せず、ただ悲しそうな表情で何か言うだけで何もしてこなかった。

「アリサさん、君は強い人だよ。そんな気味の悪い呪文なんかなくなつたって、君はずつと昔から強い人だった。だって今こうして二本の足で立っているんだから、ね？」

アラガミの敵はそう言つて、笑つた。とつても悲しくて、でもどこか懐かしい、柔らかく優しい笑みだった。

「――」

この笑みは知っている。ずっと昔に何度も見てきた。全てを失うあの日まで、いつだってどんな時だってそうやって笑つてくれた。この時アリサが思い出したのは、両親の事だった。

「パパ……?」

「――ッ!？」

無意識にアリサの口から出た一言に敵は驚愕したように目を見開くが、それも一瞬だった。すぐに動揺の表情は消え、気遣うような表情に再び戻った。

「君は元から強いんだ。『あんな男』の言葉に惑わされちゃだめだ！」
「ああ……」

アリサの肩を掴み、必死になって訴えかける敵^{アラガミ}。その顔は優しく、記憶の中に埋没したパパのそれと重なる。

『これが君たちの敵、アラガミだよ』

『それを唱えるだけで君は強い子になれるんだ』

『そうだ！ 戦え！ 打ち勝て！』

『君は強い人だよ！ そんな呪文なんか無くたって！』

ぐるぐると、頭の中で『先生』の教えと目の前でパパと同じような笑みを浮かべる敵^{ババ}の言葉が渦巻いて巡り、彼女はいったいどれを信じればよいのかさっぱり分からなくなってしまった。

彼女は揺れている。彼女は揺れている。彼女は揺れている。

そんな彼女に敵^{アラガミ}は必死になって言葉を連ねた。言葉は届かなかつた。

『戦え！』

「ああ……」

『殺せ！』

「ああ……」

『大丈夫、きつとうまくいくよ！』

「ああッ！」

強制、強要、抑圧、悪意、そして裏表のない善意。碌でも無い感情の中に不意に生じた強烈すぎる善の感情によって、ただでさえ不安定な彼女の心は更に混沌となった。

きつとうまくいく。彼女が任務に赴くときにカカシが言った一言は、彼の想定以上に彼女の心に深く食い込んでいた。

もし彼の敗因を上げる事になるならば、少々自分という存在を過小評価しすぎていたことだった。

父性にも母性にも飢えていた少女にとって、カカシという存在はあまりにも自分の欲求に叶いすぎていた。

アリサという少女の心は今臨界点を迎えようとしていた。このままではアブナイ！ 彼女の体は急速に破滅へと向かう自らの心を救うにはどうすればよいのか？ ニューロンの速度で思考し、思考し、思考し、そして結論を出し、実行に移した。すなわち……

ターン……！！

混乱させるものの排除である。

敵は目をしばたき、己の腹に空いた穴を不思議そうに見ていた。理

解が及んでいなかった。自分がまさか、撃たれているなどは。

敵はしげしげと腹に空いた穴を見つめ、それから少女の方に顔を移し。

「アバツ」

そして思い出したかのように吐血し、その場に崩れ落ちた。

「アバツ……アバツ……」

ペタンとその場に尻もちをつくような姿勢で、敵はひたすら血を吐いていた。

「え……あ……へ？」

少女もまた、混乱の真ただ中にいた。

どうして敵は倒れたの？ どうして敵は血を吐いているの？

どうして？ どうして？ どうして？ どうして？
どうして？ どうして？ どうして？ どうして？
どうして？ どうして？ どうして？ どうして？
どうして？ どうして？ どうして？ どうして？
どうして？ どうして？ どうして？ どうして？
どうして？ どうして？ どうして？ どうして？

「私がやったんだよーん！」

デフォルメされた自分の像が、凄まじく場違いな仕草で、きっぱりと、一切の言い訳もできないほどはつきりと言いつ放った。

「あゝっ
!!!!!!???!」

恐ると言った様子で少女に手を伸ばす。

しかし少女は。パパ……。パパ……。とまるで取り付く島がなかった。

「ッ！」

話にならないと判断したサクヤは瓦礫の除去を試みたが、先の激戦で自分のオラクルの大半が失われていたため、碌な弾が撃てず、どれだけ撃ち込んでも無駄だった。

頼みの綱のカカシは御覧の通りの有様で、全くのお手上げだった。

「不味いな、こつちも囲まれていやがる！」

「うわわわ！ 何だこいつらキモッ！」

一方外で警戒を行っていたコウタとソーマも、プリティヴィ・マータの群れに囲まれており、とてもじゃないが中の加勢に向かうことは不可能だった。

「GRRRRRRR！」

そうこうしている内に、教会内にも一体のプリティヴィ・マータが侵入してきた。

「このッ邪魔しないで！」

サクヤは少女とカカシの前に守るように立つと、侵入してきたプリティヴィ・マータの顔面にオラクル弾を叩き込んだ。

「ARRRRGH!？」

プリティヴィ・マータは堪らず怯み、教会の外へと退避していった。

「命令だ！ 2人を連れてアナグラに戻れ！」

それと同時に瓦礫の向こう側から、リンドウの吠えるような声が聞こえた。

「でも……」

「聞こえないのか！ アリサを連れて、とつととアナグラに戻れ！」

サクヤ、全員を統率！ ソーマは退路を拓け!!」

難色を示すサクヤに、畳みかけるようにリンドウは叫ぶ。

「だったらリンドウも早く!!!」

「わりのいが、俺はちよつとこいつらの相手して帰るわ。……配給ビール、取っておいてくれよ」

「そんな……だったら私も残って戦うわ！」

リンドウの言葉に察しがついたサクヤは駄々をこねる子供の様にこの場に残るといいだしたが、リンドウは頑としてこれを拒み、最後まで彼女に命令を突きつけ続けた。

「全員必ず生きて帰れ!!!」

「イヤああああああ！」

「サクヤさん行こう！ このままじゃ全員共倒れだよ！」

「くそ、クソ、畜生！」

サクヤは悲鳴を上げながら泣きじゃくった。ソーマはカカシを、コウタはアリサをそれぞれ抱えながら、リンドウを残し、その場から立ち去って行った。

■
どれだけの時間が経った？
少なくとも1時間2時間は経っているような気がする。

リンドウは力無く体を壁に預けながら、煙草を吸っていた。彼の傍らにはプリティヴィ・マータの死骸が無造作に転がっている。倒したのだ。この閉鎖空間の中で。第二種接触禁忌種を。

「行ったか……」

ステンドグラスを見上げながら、リンドウは呟いた。

ソレに呼応するように、大穴から漆黒の死神が彼の前に姿を現した。

「はあ……ちよつとぐらい休憩させてくれよ……体がもたないぜ」

リンドウは捨て鉢に笑うと、煙草を一吸いした。

それから煙草を投げ捨て、神機を担ぎ、死神に向かって行った。

死神は高らかに吠え、不遜にも向かって来る愚か者を叩き潰すべく、飛び降りた。

それからいかなる戦いがあったのかは、誰にも分からない。

ただ少なくとも、死神は逃げおおせ、リンドウは行方不明になった。

こうして、惨劇の幕は閉じたのであった。

ミッション名：蒼穹の月

負傷者：名無之カカシ

・腹部に大穴が空いていたが、アナグラに帰投する頃には腹部の穴はほぼ完治していた。しかし依然として意識は回復せず。

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ

・肉体的な負傷は見当たらないが、心神喪失のためアナグラに帰投後すぐに医務室へと収監された。精神の安定化は未だ目処が立たず。

M I A

雨宮リンドウ

ミツシヨンの遂行中、アラガミの攻撃により部隊の者たちと分断され、腕輪の反応が喪失。生きているのか死んでいるのか当局では判断が付かないため、雨宮大尉をM I Aと判断した。

ダツセーコートなんか着やがって！

声が聞こえるんだ。

微睡みの最中、ふと意識が目覚め、眠気が抜けきっていない瞼をうつすらと開く。

開いた薄眼から覗くのは見慣れた自室の風景でなく、延々と続く虚無の暗闇。

目覚めたばかりでまるで働かない頭で、一体ここは何処なのだろうか、『私』は何とはなしにぼうっと考えてみた。

しかし目覚めたばかりの頭は考えるところという行為を行うには、いささか荷が重かったようだ。

しばらくの間『私』は、寝転がったままの姿勢でぼうっとしていた。

そして目が覚めた後はいつだってそうしてきたから、いつものように上半身を起こそうとして、優しく、されど明確な意思を感じる手つきで、そつと押し戻される。

“このままもう一度眠ってしまえばいい”

『ソレ』は押し戻した手つきと同じ優しさと慈愛に満ちた声で、そう言った。

『私』は『ソレ』の言葉を眠気が抜けきらぬ頭で理解しようと努力したが、どうやっても無理だったので、眠気を覚ますために目をごしごしと拭った。

“ダメだ。そんな事をしてはいけない。眠ってしまえ”

まだ何か言っている。まだ頭に入って来ない。だから『俺』は大きく欠伸をし、それから伸びをして完全に眠気を払い去ってから耳を澄ませた。今度こそ『ソレ』の言う事を理解するために。

“ああ、やはりお前は停滞を望まないのだな”

俺の目の前に居た、金色の光に覆われたヒトガタが、心の底から残念そうに首を振った。

一目見て、『ソレ』の正体が分かった。そしてなぜこうも頑なに俺を眠らせようとしてくるのかも。

リンドウさんの『ソレ』も、半身をただ助けようと死に物狂いで奔走していた。俺の『ソレ』も方向性こそ違うけど、きつと俺を助けようとして、これ以上この先の悲劇を見せないように、眠るように促しているのだろう。

『彼』からの提案は確かに魅力的に思えた。正直いい加減しんどくなってきたところだった。

だってこの世界に生まれ落ちてから、良いと言える事なんてただの一度も無かったし。

「でもそうはいかない」

俺の言葉に、『彼』はため息を吐いた。

深く長い、まるで魂を吐き出そうとしているかのような長いため息だった。

“パパ……ママ……”

どこからか、声が聞こえる。

「泣き出してしまいたい悲しみも、叫びたいほどの苦しきも、誰かを助けた時だけ、ほんの少しだけ和らぐんだ」

俺は言いながら『彼』に近づいていった。『彼』は近づいてくる俺を、唯々悲しそうに見ていた。

“辛いぞ”

「知ってるよ」

“苦しいぞ”

「だろうね」

“報われんぞ”

「そうでなきやいけない」

“……馬鹿め”

俺は笑った。

“助けて……誰か助けてよう……”

何処からか、声が聞こえるんだ。誰かが俺に、助けを望む声が。

「行かなきゃ」

俺は『彼』を見上げた。

“……よかろう。それがお前の望みであるのならば”

金色の巨人はそう言って、俺に手を伸ばした。俺も巨人に手を伸ばした。

俺の手と巨人の手が触れた瞬間、世界が金の光に包まれる。

闇が、晴れる。



「知ってる天井だ……」

目が覚めると、俺は自室のベッドに横たわっていた。起き上がろうとして、腹に鈍い痛みが走った。

服をめくって確かめてみるが、そこに傷なんて物はさっぱり存在しなかった。

不思議に思っ腹を摩ってみたり、腹筋に力を入れてみたりしたけど、痛みなんてこれっぽっちも走らなかった。

「まあ、いいか」

俺はまくっていた服を戻し、そもそもどうして俺はここに居るのか思考を巡らせようとした瞬間、間欠泉の様に俺の頭の中から記憶が噴き出した。

リンドウさん、プリティヴィ・マータ、泣いているアリサさん、鈍い痛み、轟音、瓦礫の山、誰かの叫び、悪態、わらわらと追いつがる女帝の群れ。

「ああそうか、俺はしくじったのか……」

全てを思い出した俺は、起こした上半身を再びベッドに沈め、腕で顔を覆った。

悔しかった。それ以上に情けなかった。

いけると、確信していた。

リンドウさんと一緒に教会内のマータをぶち殺し、アリサさんを説得ないし連れ出せると。出来ると。思っていた。

「思っていたんだけどなあ……」

結果は御覧の通りだ。

エリックさんを助け出せたから、リンドウさんもいけると思っていた。だが俺には細々とした流れは変える事は出来るようだが、大規模な流れを変える力は無いらしい。

結局のところ、俺はただ手前勝手に場を乱してみんなに迷惑をかけただけだった。

「軌道修正を……せねば」

しかしそういう事が分かった事は大きな収穫だった。幸い筋書きが変わらないのならば、リンドウさんは生きている。かろうじて、だが。

「最終目標は変わらない。筋書きも変わらない。シオは月に行くし、ロミオ君は死ぬし、ケイトさんも死ぬし、ジユリウス君も終末捕食に囚われるし、シツクザール支部長も死ぬ。でも、最後の終末捕食、こいつだけは何とか出来るはずだ」

これから俺は様々な戦いに身を投じて行く。シツクザール支部長の嫌がらせの様な『特務』、シツクザール支部長の作り出した『偽神』、『堕ちた英雄』に、もしかしたら『第二のノヴァ』、『傲慢なる狼』、『世界を拓く者』、『原初のアラガミ』、『世界を閉ざす者』。

そしてその果てに、俺の望む物はある。

「3年だ。3年ですべてを終わらせる。世界を滅ぼす。俺の命の全てを賭けて」

俺に大いなる流れを変える力はない。しかし、少しずつ小さな流れを変え続ける事によって、もしかしたら、大いなる流れに干渉できるチャンスが生まれるかもしれない。

塵も積もれば山となるように、一筋の小さな流れが束となり、大いなる流れを変えるだけの流れを俺自身が作り出せるのやも知れぬ。

答えは分からない。そんなもの死んだ後に考えればよい。

「よし。なら早く動かなきゃな。俺はやるぜ！」

うおーっとベッドから跳ね起き、着替えてから部屋を出ようとする
と、ベッドの隅に置かれた黒い服と一通の手紙が置いてあることに気が付いた。

何ぞ何ぞと俺は手紙を手に取り、差出人を改めると何と支部長から
あてられたものであることが！

俺はおったまげながら手紙を読んでもみると、リンドウさんの『特務』
の引継ぎと、そこに置いてある服を着るように、という内容だった。

「えっ、っ、もうですかい!?!」

俺は驚愕に目を見開きながら綺麗に畳まれていた服を持ち上げ、更に驚愕に大口を開けた。

「す、『スイーパーノワール』!?」

それはスイーパーノワールという黒いコートだった。

「あ、あの人は！ どうしてこう、人の心を傷つける様な事をこうも簡単にできるんだ！」

俺は黒コートを掲げながら、怒りでわなわなと震えながら叫んだ。

だって黒コートですよ！ 黒コート！ こういうのはめっちゃくちゃかつこいい人が、ソーマ君とかリンドウさんとかが着る様なものじゃん！ 俺みたいなちんちくりんが着たってダッセーだけじゃん！ ?キリト?じゃん！

「もー!! もー!!」

俺はぶんぶん怒りながら、仕方なくコートに袖を通す。

これは命令ゆえに仕方なくですー！ 俺の意思じゃないですー！

せっかく意気揚々と出かけようとしたのに、あの腹黒支部長のせいで台無しだ！ こつちの事情も考えてよ！ (憤怒)

「つと、その前に髪を結わなくちゃ」

俺は出かける直前で自分の髪が結われていない事に気づき、慌てて机の引き出しからゴムを引っ掴むと、鏡の前で髪を結わえ、どたばた

と部屋から出ていった。

とほほ、これじゃ決意も台無しだよー！

俺は部屋から出ると、真っ先に向かったのは榊博士のラボだった。ラボの中に入ると、博士は相変わらず忙しそうにモニターとにらめっこをしていた。

「おやかカシ君、目が覚めたよう……君、そのコートは」

俺の姿に気づき、モニターから目を離れた博士が着ているコートについて言及しようとするのを、俺は手で制した。

分かる。分かりますよ博士。不貞腐れて寝ていた奴が部屋から出てきたら？キリト？だったら、そりやあなた、一言いいなくなるのも分かるってもんですよ。

でもただでさえしくじった事と支部長からの嫌がらせで神経すり減っているっていうのに、その上知り合いから格好について言及されたら貴方、『彼』の提案に乗っちゃいますよ。マジで！

「そう……か、うむ。それが君の覚悟であるというのなら、私は尊重しよう」

とか何とかよく分からない事を言っただけで肩をバシバシと叩いてくる博士に、俺はウツス！と生返事を返すしかなかった。

それから体調の事と意識を失っている間に何が起きたか説明を聞き、俺はその場を後にした。

エレベーターに乗り込み、エントランスがある階を押しながら、俺はこんなダッセー格好について皆に一体どんなことを言われるのであろうか気が気でなく、テンションは地の底に沈みそうな程急速に萎

えていた。

変化

フェンリル極東支部、アナグラのエントランスはどんよりとした重苦しい雰囲気沈んでいた。

雨宮リンドウの喪失。

彼という存在はこの極東支部の柱と言っても差し支えなく、彼が消えた事の影響はたかが一週間程度の時間が経過したところで、払われることは無かった。

そして今日この日、ついに決定的な事が起きた。

雨宮リンドウがM I A扱いになったことが、フェンリル極東支部教練担当雨宮ツバキの口から発表されたのだ。同時にアリサの体調が快調に向かいつつあるという朗報もあったのだが、聞かされた側からすればそんな些細な事などどうでも良かった。

「そんな……まだ腕輪も神機も見つかってないんですよ!？」

抗議の声を上げたのは、言わずもがなサクヤだった。彼女の血を吐くような声が、墓場めいて静まり返ったアナグラに木霊した。

リンドウと特に親しかった彼女からすれば、その決定は当然受け入れられる物では無く、ツバキに掴み掛らん勢いで詰め寄った。

「上層部の決定だ。それに、腕輪のビーコン、生体信号共に消失したことが確認された」

一方ツバキはそんな様子のサクヤとはまるで真逆な過剰なまでの無感情で淡々と言いつつ放った。

「未確認アラガミの活動が活性化している状況で、生きているかもわからぬ人間を探す余裕はない」

額が付かんまでの距離で睨みつけてくるサクヤを無感情に見つめながら、ツバキはやはり何一つ感情の読めない無表情で続けた。

「ッー」

サクヤは胸の内から湧き上がる罵声を、しかし呑み込んだ。彼女とて上層部の言い分は頭では分かつてはいるのだ。未確認アラガミがうろついてる中、不用意に人員を割くことなど愚の骨頂だ。

分かつてはいるが、しかし心まではどうにもならなかった。

サクヤは唇を噛んだ。悔しさと悲しみで握られた拳は深く食い込み、鮮血が垂れた。その様を見ていたコウタとソーマはサクヤに憐れみの目を向ける。

「……」

そんなサクヤに、ツバキは何を思うのだから。唯一の肉親を失った姉のその顔はやはり無表情であり、胸の内の思いを窺わせる要素は皆無であった。

彼女はそれで話は終いとばかりに、背を向けてエレベーターへと向かった。

そして役員区画行きへ向かうため、エレベーターのボタンを押そうとした瞬間、エレベーターのドアが開いた。

「ああお前か、目が覚め……ッ?! 貴様、そのコートは?!」

エレベーターから出てきたのは意識不明であった名無之カカシであった。

ツバキは意識の戻った彼にやはり淡々とした様子であったが、彼の

着ている服を見て、一瞬無表情の仮面が剥がれる程の驚愕を露にした。

彼はアラガミの攻撃により腹に大穴をあけられ、任務の最中に意識不明となつてしまったのだ。しかし、アナグラに戻るころにはすっかり怪我が治っており、昏睡中にもかかわらず体調はすこぶる快調であつた。

医務室にはアリサを収監する必要がある関係上、意識は無いが体調に問題の無いカカシは自室へと運ばれたのだ。

それから一週間の時が流れ、意識の戻つたカカシはいつも通りの柔らかな表情で、いつも通り笑みで細まつた目をしていて、いつもと違う肅清のコートを纏つて彼女たちの前に姿を見せた。

彼の着ているコートはかつてフェンリル本部に存在した懲罰部隊の者が身に着けていた物であつた。懲罰部隊の面々の主な仕事は『裏切り者の肅清』である。

神機使いにとつての裏切りとは、即ち腕輪が外れ、アラガミとなつた者を指す。

「て、テメエ……！」

「カカシ君、あなた……そんな……！」

ツバキに次いでソーマとサクヤも同様に驚愕、そして片方は怒りの、もう片方は絶望をより深めた声を上げる。一方コウタはたかがコートを着たくらいで何をそんなに、とツバキやソーマたちの驚愕を訳も分らず見つめていた。

「お前は、お前は……！　それが何を意味するのか、そのコートが誰のための物か、知つてて着ているんだろうな？」

ずかずかと大股で近づき、カカシをあらん限りに睨みつけながらソーマは声を荒げる。

カカシは何も言わなかった。ただいつものように、彼は困ったように頬を掻いた。

「~~~~ふざけるな!!」

その仕草に、ソーマはキレた。サクヤやツバキが止める間もなく、ソーマは拳を振り抜いた。

加減などまるでないゴツドイーターの、その中でも一際特別であるソーマという存在の本気の殴打である。

凄まじい音がした。およそ人体が人体を殴りつけた音では無い音が、静まり返ったアングラの中に響き渡った。

それを受けた側はたまったものではない。思い切り吹き飛び、背中を壁に強打……はしなかった。

カカシはわずかに顔を傾けただけだった。仰け反りも、ましてや吹き飛ぶことも無かった。殴打により出ていた鼻血もすでに止まり、乾き、パラパラと乾いて足元に落ちた。

「—————」

ツバキとサクヤとコウタと、そして殴りつけた側のソーマまでもが先ほどの怒りすら忘れてカカシを凝視した。

「……」

凝視されたカカシは相変わらず困ったように笑うだけで、やはり何も口にしなかった。殴られたことへの怒りも、問い詰められたことの困惑に対しても、舌打ち一つ、愚痴一つ零すことは無かった。

カカシはただ申し訳なさそうにもう一度頬を搔くと、下の階へ向かい、そしてすぐに戻ってきた。

されど彼はそのままサクヤたちを素通りし、ゲートから出ていった。任務を受けたからである。

「アイツ……」

遠ざかってゆくカカシの背中を茫然と見つめている面々の中、ソーマだけが声を発することが出来た。

出来た、というのはやや表現が違う。彼とてサクヤたちと同じように頭が真っ白になっていたのだから。正しくは思っていたことが無意識に出た、が正解だ。

「変わった」

まず至近距離で感じたカカシへの感想は、山だった。

胸倉をつかみ上げた時、ソーマはカカシの後ろに見上げるような、天を突かんばかりの黄金の巨人を幻視した。それは彼の体内に計り知れないほどのオラクルを感じたが故である。

加えてソーマは、見た。殴りつけた瞬間のほんの一瞬だけであったものの、カカシの見開かれた目を確かに見たのだ。いつものゴールドオーカー色の瞳に、悲しみが居座っていたことに。

装い以外、カカシには何の変化はなかった。いつも通り柔らかな笑みを浮かべており、いつも通り吹けば飛びそうな雰囲気を感じており、いつも通りただそこにいた。

しかし確かに変わったと思えるだけの何かがあった。

そういう事に疎いコウタですらそれを感じたのだ。これはよほど

の事である。

「ぐくっ……」

生唾を飲んだのは、果たして誰だったか。静まり返ったアナグラに、それが嫌に大きく聞こえた。



「はっはっ……！」

台場カノンは走っていた。しつこいくらい追ってくる新手に目の端に涙を浮かべながら、隠れられる場所は無いかしきりに目を走らせながら、地獄の地下道を駆ける。

彼女は現在煉獄の地下街にいた。

リンドウの探索の口実に簡単な小型アラガミの討伐任務を受注したつもりだった。しかし、近ごろの異常の影響か、想定外のアラガミの出現。それも小型アラガミだけではなくシユウといった中型アラガミまでも現れたのだ。

ただでさえ誤射率の高い彼女はその小型アラガミを相手にも予想以上のオラクルを使ってしまっていた。それ故この予想外の増援に使えるだけのオラクルは残っていないかったのだ。

今の彼女にできる事は2つ。このまま座して死を待つか、援軍が来るまでひたすら逃げ隠れするのみである。

彼女が選んだのは当然後者。だから彼女は灼熱の地下街を死に物

狂いで駆けまわっている。

(こんなところで死ねない！ だってまだリンドウさんへの恩返し、一つも出来てないんだもん！)

シユウの放ったエネルギー弾を横つ飛びでかわし、オウガテイルの棘をキヤーキヤー言いながらカノンは避けて避けて避けまくる。

だが何事にも限度というものがある。ましてや彼女は疲弊した身。ゴッドイーターが人並み外れた体力を持つとしても、限界はあるのだ。

「あっ!？」

そして追いかけてこの終わりは唐突に訪れる。体内のオラクルが少なくなり、それに加えて蓄積されていた疲労が集中力を低下させていたのもある。

彼女は足を纏れさせて転倒してしまった。その拍子に手に持っていたプラスチック型神機も滑るように転がってゆく。

「あ、ダメー！」

言った所で戻ってくる訳も無く、神機は彼女から数メートルほどの地点で止まった。

「うう………」

カノンは呻きながら、倒れた体を正面に向けた。ちようど尻もちをつくような姿勢で、彼女は迫りくる神の群れに、目の端から涙をこぼしながら待ち受けた。

歯が噛み合わずがちがちと鳴る。したいこと、見たいものがまだた

くさんあった。それがこんな事で終わりを迎える事に、彼女は悔しくてたまらなかった。

カノンは目を逸らさなかった。碌に事を成せなかった我が人生だった。なら最後くらい胸を張って、潔く受け止めてやろう。

「うううううー！」

「ギャワワーツ!!!」

オウガテイルが、ザイゴートが、シユウが、我先に新鮮な乙女の柔肌を食い千切らんと怒涛のように迫るさまを、カノンは反射的に閉じようとする目をこれでもかと思開いて最後の光景を己の網膜に刻み付けようとした。

その時である。彼女の横を黒い風が吹いたのは。

「え?」

カノンは呆けた声を出した。

それもそのはず。今まさに自らの肉体を食い千切ろうと迫って来ていたオウガテイルたちの首から上が、不意に消失したのだ。それはシユウとて例外で無く。

彼らは首が無い状態でしばしその勢いのままてんでバラバラな方向へ駆け、思い思いのタイミングでばったりと倒れ伏し、二度と動くことは無かった。

「え? ほへ?」

カノンはすっかり困惑した様子であわあわと狼狽えていたが、肩を叩かれてはっと正気に返ると、肩を叩いた人物の方へ体ごと向けた。

「え、カカシ……さん？」

「(▽)(▽)」

そこにいたのは『あの』名無之カカシだった。援軍が来るにしてもブレندانかジーナあたりと踏んでいたのも、この予想外の援軍にカノンは驚いた。

防衛班でも彼の事はしきりに話題になっていた。尤も彼の話題は防衛班のみならずアナグラ中で囁かれていたのだが。

『狂犬カカシ』

誰が言い出したか分からぬあだ名。しかし今やその名を否定するものは何処にもいない。

曰くへりの助けなく空を駆ける天の覇者。曰く地を這う荒神を食り食らう貪食の王。曰くどんな相手であろうとも躊躇なく噛みつく狂犬。

およそ数週間前に神機を手につけた新人につけられるはずもないあだ名ばかりだ。

先輩のゴツドイーターたちも、そんな噂などあてになる物か、と当初は鼻で笑っていたものだ。防衛班のメンバーでも2名ほどが同じような事を言っていたのをカノンはよく覚えている。

しかし、彼と共に任務に出たものは、全て一人の例外も無く彼についての話題を口にしなくなつた。

不思議に思つて聞いてみると、皆が言い方の違いはあれど全く同じことを言うのである。

あれは人ではない、と。

そうこうしている内に彼と任務に赴こうとするものがほとんどいなくなつた。

結果としてカカシはゴッドイーターになつてからわずか数週間しか経っていないにも拘らず、長年に渡りゴッドイーターとして活躍していたソーマ並みの腫れ者扱いをされる事になつたのだつた。

カノンは幸いにして一度もカカシと任務に赴いたことが無かつたので、その噂の真偽を確かめるすべはなく、それを聞こうにも誰も話したがらないので、彼女の中でカカシの印象はふわふわとしたまま滞つていた。

その上カカシと絡んだのは初対面で一方的な自己紹介をされたのが最初で最後であり、なかなか話す機会に恵まれないまま今日まで来た。

そしてこの日、ついにカカシの戦い（全く見えなかつたが）を目の当たりにし、彼女は彼が何故狂犬といわれるのか、しかと理解したのであつた。

「ええ……と、その、あのう……あ、ありがとうございます？」

何故疑問形？ 自分でも分からない。しかし、助けられたことへの感謝よりも困惑の方が大きい事に、より彼女は困惑を高めていた。

「ふえ？」

そんなカノンにカカシはにこやかに笑いかけながら懐をあさり、無言でガラス筒を、オラクルを回復させる効果のあるOアンプルを手渡した。

「ふへ!? あ、ありがとうございます！」

何を過剰に反応しているのやら。カノンは心の中で自分を叱咤しながら羞恥に顔を真っ赤に染めて捲し立てるように礼を言うと、ひつたくる様にアンプルを受け取り、顔を背けながらちびちびと飲んだ。時折カカシの顔色を窺うようにチラチラと視線を送るが、彼はただにこやかな顔で、カノンの横顔を見つめていた。

何も言っていない事が、彼女には嬉しかった。今の状態で話しかけられても羞恥で碌な会話にならなかったことだろう。

カカシの無言の優しさに、カノンは噂などあてにならない事を確信した。

(だってこんなに優しい人なんだから！)

やがてアンプルを飲み終えたカノンは、空瓶を懐にしまうと、頭を下げて改めてカカシに礼を言った。

「危ない所をありがとうございました。カカシさんが来なかったら、私、どうなっていた事か」

「。 X 。 ; 」

頭を下げるカノンに、カカシは止めてくれとでもいう様に手をばたつかせた。

噂とは欠片もかすらないそんな様子がおかしくて、カノンはくすり、と笑ってしまった。

「() () 。 X 。 ; () () 」

笑われたことにより一層手をばたつかせるカカシに、余計にツボに入ってしまったのか、カノンはここが戦場であることも忘れて腹を抱えて笑った。

「。 X 。 ;)」

????????????????

大笑いするカノンを一体どうしたらいいのかさっぱり分からないといった顔で、カカシは彼女が笑い終えるまでただひたすら頭の中で疑問符を浮かべながら待ち続ける事になった。

「ふふ……、ごめんなさいカカシさん。でも……うふ」

謝りながらも未だツボから抜けきらないカノンはまさしく年相応の少女のようで、いつも遠巻きから見ているカカシからすればその表情を見ただけで、ほんの少しだけ心が軽くなったような気がした。

が、そんな小さな幸せの空間も、突如として舞い込んだ緊急入電によつて終わりを告げた。

『カカシさん、緊急入電です！ お二人のいるエリア付近にボルグ・カムランが現れました！ このままではすぐにでも会敵します！』

「ぼ、ボルグ・カムラン!？」

通信を聞いたカノンは驚愕に目を見開く。中型アラガミのみならず、まさか大型アラガミまで現れるとは、今日の自分の運勢を見たら、まず間違いなくドベであろう事は間違いなしである。

「……ヒバリさん」

『へ？ は、はい何でしょうか!』

と、ここでカカシが口を開いた。

普段ろくに口を利かぬカカシからの言葉に、一瞬間を開けてしまったヒバリは慌てて返答を返した。

「ちよ〜つと遅かったかな〜」

『へ？』

カカシの言葉に女性二人の声が重なった。

それと同時に、彼らのすぐ目の前の壁を突き破って、『ソレ』は現れた。

金属的な外皮が全身を覆っており、一見すると騎士のようだ。4本の脚は細身で、されどその巨体を持ち上げるには十分なパワーを感じさせた。巨大な尾針と盾の様な鋏を持つサソリ型のアラガミ、それがボルグ・カムランだった

壁を突き破り、カカシたちの姿を認識したボルグ・カムランの動きは迅速であった。そしてまるで躊躇というものが無かった。

彼はこの場で最も弱い者に向かってその長大な尾を思い切り突き出したのである。

カノンはボルグ・カムランが壁を突き破った衝撃に耐えられずに尻もちをついていた。避ける間など無かった。

彼女は脳内物質が過剰分泌されゆっくりとなった主観時間の中、緩慢に迫りくる針を漠然と眺めていた。

せつかく命を助けられたのに、また失う羽目になるなんて。なんてついていない日だろうか。

迫り行く死の気配を感じながら、カノンは諦念を感じながら自嘲気味に心の中でそう呟く

どうしようもない事はいつだって唐突で、いつだって理不尽なのだ。

そうこうしている内に針は目前まで迫っていた。

カノンは目を閉じた。

彼女の主観時間が戻ると同時に刺突音が一つ。しかし。

(あれ……痛くない?)

カノンは目を瞑ったまま痛みが無い事に訝った。
不思議に思い、思い切って目を開ける。

足元は流れ出した血で真っ赤に染まっていた。だが自分には傷一つないのに、これだけの血が流れているのはおかしなことである。

自分の血じゃない。じゃあこの血は一体誰の血?
カノンは目を見開いて、顔を上げた。

「ああ……!」

彼女の目の前に黒い背中が映った。
言わずもがな、カカシである。

黒一色であったその背中に、しかし鈍い銀色と赤い染みがじわりじわりと広がり、いびつなマーブル模様を作り上げていた。

「か、カカシさん!!」

返答はない。当然だ。あの長大な針に貫かれれば普通は即死である。それでも呼びかけずにはいられなかった。それはカノンが純粹で優しさに満ちた女性であったがゆえに。

「カカ……シ……さん……?」

カカシが動かないのは死んでいるからだろう。ではなぜボルグ・カ

ムランも動かないのだ？ カノンは自分が何か勘違いをしているような気がして、もう一度カカシを見て、そして驚愕に目を見開いた。

カカシは死んでなどいなかった。何と彼は歯を食いしばり、引き抜かれようとする針を片手で押さえつけていたのだ。

カノンは遅まきながらようやく気付いた。ボルグ・カムランは動かないのではない。動けないのだ。この目の前の人間の尋常ならざる膂力に、大型アラガミが力負けしているのだ。

「

この時の感情を、口にするのは難しい。しかしどうにか、感じていた感情や思っていた気持ち、助けてくれた感謝などを棚上げすれば、どうにか言葉にすることはできた。

あれは人間ではない、と。

「つ・か・ま・え・た」

「ギッ!!?」

カカシは片手で神機を銃形態に変え、その無防備な頭に照準を合わせながら、まるで地獄から響く死神の呼び声めいて、言った。

基本的にアラガミに感情と呼べるものはない。しかしどういう訳かこの時ばかりはボルグ・カムランはまるで恐れ戦いたようにしきりに盾状の腕を振り回して離脱を試みたが、頭を下げた姿勢で尾を突き出していた彼に、そんな機会など、ましてや猶予も与えられることは無かった。

「とっておきだア」

カカシの神機の銃形態、支部長より装備を一新され、神機の銃部分

は『ギガス砲』というものに変えられていた。

この銃の特徴は何と言っても髑髏状の銃口であろう。

そしてカカシは引き金を引き、オーダーを受けた死神はその口から特製の氷属性オラクル弾を吐き出した。

「ギギギイイイ!!!???!」

死神の接吻^{キス}は過たず騎士の頭部に突き刺さり、着弾箇所からさらに弾丸が連続して放たれ、奥へ奥へと少しずつ抉って行き、ついには反対側から突き抜けてようやくその効果が消え去った。

力なく倒れ伏すボルグ・カムランに一瞥もくれることなくカカシは銃形態から近接形態に変えると、針の半ばに神機を叩きつけ、砕いてから無造作に抜き放った。

当然貫かれていた個所は大きな風穴があいていたが、それも瞬く間に塞がり、ついにはまるでそんな事実など無かったかのように塞がってしまった。怪我をしていた名残は服に空いた穴だけだ。

「ほ、ほへえ……」

カノンはすさまじい光景に完全に腰を抜かしていた。

こんな光景を見せつけられたら誰だってそうなる。それは仕方のない事だった。

だがそれ以上に、体を貫かれ、本来は激痛であったはずなのに平然としており、自分の事でなくこちらの身を真つ先に案じるカカシの姿に、カノンは怖れるよりも悲しみを覚えた。

(一体どう生きてゆけば、こんなに自分の事を蔑ろにしてしまう様に

なるのだろうか？)

腰を抜かして立てない彼女を背に乗せ、全く苦も無く帰投に向かつて歩を進めるカカシの背に揺られながら、カノンは何とはなしに考えを試みた。

きっと凄惨な事があったに違いない。恐らく自分の様な半端ものでは太刀打ちできない様な事を、一度でなく何度も経験しているのだろう。

彼のあまりに自然な気遣いに、彼女はそれをしかと感じていた。

カノンはカカシの背に顔を埋めながら、どうかこの優しい死神にも幸いがありますようにと、願わずにはいられなかった。

そしてアナグラに帰投したカカシはカノンを医務室に送り、そのまま別の部屋のベッドで未だ眠るアリサに近づいて行った。

彼はやや躊躇ったように自分の手と彼女の手を交互に見て、やがて観念したように彼女の右手に自らの右手を重ねるのであった。

希望の子

実のところ、ここに来るつもりはなかったんだ。

だって容態が安定してきてるとはいえ、それでもまだ面会できるような状態じゃない事は彼女の体内オラクルを感知してみれば明らかだったし。

それなのに俺はカノンさんを医務室に送った後、まるで導かれるようにここに足を運んでいた。

本当に無意識だった。だって気づいたら彼女のベッドの傍らに置かれている椅子に座り込んでいたのだから。

俺は無意識に腕輪のついた右手を見た。右手は何かを待っているかのように、俺の意思とは無関係にびくびくと震えていた。

まるで早くやってしまえ、と俺を急かしているかのようだ。

俺は何度か彼女と震える右手とを交互に見やり、3度ほど視線を往復したところでついに観念し、緩慢な動作で彼女の右手にそつと自らの手を重ねた。

その途端、俺の体にビリリ！ と電流めいたものが走り、彼女とながったような感じが、恐らく感応現象が発生した。

ちやうど眉間のあたりが熱を持ち、白い光が頭の中を覆いつくし、外に飛び出して視界を真っ白に染め上げる。

そして俺の頭の中に、アリサさんの記憶が津波のごとき勢いで押し寄せてきた！

「ぬわー！」

膨大な情報量に、俺は堪らず悲鳴を上げた。

記憶の潜行が始まる。



“……じゃな……オレー……呼んで……しいな……”

声が聞こえるんです。

気が付くと、私は何処か狭く重ぐるしい場所で膝を抱えて座っていました。

すぐにここが何処か分かりました。そう、ここは一度は出たはずのクローゼットの中でした。

一度？

私は自らの思いに違和感を覚えました。

何を言っているのでしょうか。私はこのクローゼットから出られたことなど一度としてなかったではありませんか。

それなのに、一体どうして私は出られたことがあるなどと思ってしまうたのでしょうか？

その事について考えようとはしましたが、そうするとなぜか私のこめかみと胸の中央の部分がずきりと、時には立っついていられない程の痛みが走るのです。

ですので私はその事について考えるのを止めました。

もううんざりしていました。誰かを傷つけるのも傷つけられるのも。

このままずっとここに座って居よう。

この果てすら見えぬ永遠の虚無の微睡みの中で、身も心も朽ち果てるまで座りこけて居よう。

そう思いました。

あんなことさえなかったら、私はずっとこのままここに居たに違いありません。

私が暗い決心の元、瞼を閉じようとしたその時です。

黄金の光が突如として闇の中に閃きました。

私は驚いて思わず閉じかけていた目を開け、顔を上げました。

そして見たのです。果てすら見えぬ闇の中に、煌然と輝く黄金の光球が静かに自転している様を。

私は思わず後退り、しかしその背はすぐに壁に当たりました。

当然です、だってここはクローゼットの中なのですから。

私は何の脈絡も無く現れたこの光が怖くて堪りませんでした。恐らくそれは、私が真実の一端に触れるのを無意識の内に拒んだゆえの反応でしょう。

私は縮こまり、この光球の放つ黄金の光を遮断しようと必死になつてあの手この手を使いました。

ですが私が何をやってもこの光は私の瞼を貫通し、網膜を焼き尽くすのです。

次第に私は目を逸らすことを止め、光球に目を向けました。

光球の放つ光は柔らかく、じつと見つめても決して眩しくなく、柔らかな光を私に投げかけ、ただ静かに自転していました。

まるで私が自分から触れようとするのを待っているかのように。

その様が、誰彼構わず拒絶していた自分にただ一人手を差し伸べてくれたあの女性ひとの姿と重なった。

手を、伸ばしても良いのでしょうか……？

“当たり前じゃん！ 掴んじゃえ！”

何処からか、声が聞こえました。

今度はノイズがかっていない、確かな声がちゃんと私の耳に響いてきました。

まるで太陽のような温かさを携えたその声は、私の耳からするりと入り込み、頭に、胸に、そして手足に、心にも浸透し、冷え固まった私の全てをあつという間に溶かしてしまいました。

「ありがとう ■■■」

無意識の内に出た、名前も思い出せない誰かへの感謝の言葉。

私はすつと立ち上がると、光球に向かって歩き出しました。

それを待っていたかのように、光球の放つ光はいや増し、私が近づく頃にはそれこそ太陽の如き輝きになっていました。しかしそれでも決して眩しくないのです。

私は決然とその光に手を伸ばしました。

瞬間、光が爆発し、私の頭の中に膨大な量の記憶が流れ込んできました。

そして私が見たのは、ある一人の青年の話。

その人は生まれた時からずっと一人だった。
そう、一人だ。親はいる。コミュニティーにも属している。

なのに一人だった。それは親が、コミュニティーに属する者が、誰一人として彼を見ていなかったから。

そしてコミュニティーは、親はたった一頭の小型アラガミによって全滅した。

それが皮肉にも彼を解放する切っ掛けとなった。彼はその時初めてようやくこの世界に産まれたのです。

そこからの旅は、私の想像をはるかに超える過酷な物だった。頼れる肉親も、信頼できる友人もおらず、周りはほぼ全て敵だった。

“軽機関銃は我が半身。手榴弾は我が恋人”

記憶の中で、彼はそう言っていた。

神々に食い荒らされ、絶望と虚無が蔓延する地獄の中を、彼はただ一人、歩く。

沢山の事があった。人を初めて撃った時の罪悪感。助けたはずの人に物資を奪われた時の怒り。助けようとしても助けられなかった時のやるせなさ。自分の無力感への失望。

沢山の人がいた。よく笑う人。よく怒る人。いつも泣いている人。平気で人を傷つける人。絶望の世界でそれでも立ち上がれる強い人々。自暴自棄になって関わる人全てを害する人々。

怒った顔。悲しい顔。楽しそうな顔。喜びの顔。無表情。

それらの記憶が混然一体となり、混ざり、溶け合い、やがて一つの揺るぎない思いとなって、彼は突き進む。

“この世界を少しでも良くしたい。己自身の全てを賭けて”

その思いだけを頼りに、あの人は今日まで来た。

ああ……。

私は思いました。

何て優しい人なのだろうか。

だってそうじゃありませんか。彼の記憶は人から受けた優しさより、人に傷つけられた方がよほど多かった。何より放浪の身という事もあってアラガミ防壁の恩恵すら受けられず、アラガミという脅威に気が狂いそうになる感覚を、私は記憶の中で何度も感じました。

それでもなお、彼は人を救う手を止めなかった。

記憶はいよいよ大詰めへと差し掛かり、彼はゴッドイーターになった。

ゴッドイーターになった彼は今までの無力を埋め合わせるかのように、鬼神の如く暴れ、韋駄天の様に空を駆け、雷神の怒りの如くアラガミを殺し回った。

全ては世界をほんの少しでも良くするために。自分の様なものを生まぬために。

そして、彼は一人の少女と出会う。生意気で、世間知らずで、傲慢で、寂しがりやな一人の傷ついた少女に。

記憶の潜行が終わり、私は再び暗闇の中に居ました。

しかしさつきとは違い、暗闇の世界には亀裂が走っており、私は意識が覚醒に近づいている事を悟りました。

世界が揺れる。その度に暗闇に亀裂が入り、隙間から金色の光が漏れ出ていました。

黄金の光は私如きの抱える矮小な暗闇など造作も無く破壊してゆき、ついに欠片たりとも粉碎し、私の全てを染め上げてゆきました。私の絶望。私の後悔。私の虚無。私の悲しみ。全部全部包み込んで、黄金の光はなお光量を増してゆき、私自身も光に飲まれ、そして……。

意識が覚醒する。



少女はぱつちりと目を覚ました。彼女にはかなり強力な薬品を使われていたというのに、まるで自然に目を開けた。

少女はしばしの間目をぱちくりとさせ、医務室の天井を見ていた。

やがて少女は自らの手に誰かの手の感触を感じ、それで自らの傍らに誰かがいる事に気がついた。

ゆつくりと目を動かす。金の瞳と目が合った。

金の瞳の持ち主である男は少女の紫の瞳と目が合わさると、やがてにこりと笑みを浮かべた。

見ている安心するような、そんな柔らかな笑顔を。そして言った。

「おや、希望の子のお目覚めだ」

「——ッ！」

その言葉は知っている。かつて自分を闇の底から救い上げてくれた、自分にとっての希望の内の一つである女性が自分に向かって言ってくれたものだった。

「見……たんですね、私の記憶を……」

「……うん」

「私も……あなたの記憶を見ました……」

「……うん」

「私なんかじゃ及ばないくらい……酷い記憶ばかりでした……」

「……」

「それでもあなたは笑うんですね……」

「うん……」

重ねられるように置かれていた男の手を、少女はぎゅっと握った。柔らかな顔つきからは想像がつかないほど、その掌はごつごつとしていた。かつて握ってくれた柔らかな感触とは似ても似つかない。なににどうしてかその掌の感触から、あの女性を思い起こさずにいられない。

少女は男の手に両手を重ね、持ち上げて頬に当てた。

ごつごつとした掌の感触が、頬に広がる。あの柔らかな掌とはまるで違う、ともすれば不快にすら感じるような感触が、どういう訳か心地よい。

それはきつと、この掌の持ち主の優しさが同じものだからだろう。

「話を……聞いて欲しいんです」

掌から感じた思いやりの温もり、溢れんばかりの優しさに決心がついたのか、少女はそのような前置きを置くと、やがてぽつりぽつりと語りだした。

忘れて居た記憶。目の前で失われた両親の事。自分の事を妹のように扱ってくれた優しい女性の事。先生の事。

男は少女の話をうん、うんと相槌を挟みながら、ただ黙って聞いていた。

「新型の神機使いの候補だって聞かされた時は、これでパパとママの敵が討てるって思ったんです」

少女の声に震えが生じ始めた。

「……そう……ふ、2人をこ、こここ殺したあのアラガミを……わ、私の手で」

少女の脳裏には両親の死の風景が、先生の教えがフラッシュバックしていた。少女はボロボロと涙をこぼし、唇を震わせながら頭を抱えた。

男は少女を抱きしめた。父親が泣きじゃくる我が子をあやすように。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

「……君は何も悪くないよ。何一つ。何一つとして」

男は泣きじゃくる少女を抱きしめ、頭を撫でながらそっと囁いた。やがて少女は泣き疲れたのか、すうすうと寝息を立てて彼の胸の中で眠りについた。

「……」

男はそのままの姿勢で医務室のドアの方を、その正面で目を剥いて固まっているバンダナをつけた中年を凝視していた。

「ば、馬鹿な……なぜ目覚めているッ!？」

男はバンダナの中年を凝視している。

「ひっ!? な、何だ? 何を見つめている!？」

男はバンダナの中年を凝視している。

「や、止めろ! 私を見るな!」

名無之カカシは大車ダイゴを凝視している。

「み、見るな……その目で私を見るな!!!」

大車は逃げるように医務室から出ていった。

「……」

カカシは大車が去った後も、しばらくの間彼が立っていた場所を憎悪に燃えた目で睨みつけていた。

彼の目は燃えていた。黄金の炎に燃えていた。

大車が去った事で、医務室は再び静寂が戻ってきた。聞こえる音といえは少女の穏やかな寝息と、時計の立てるコチコチという音のみ。

「……はあ」

カカシはため息を吐くと首を振り、それからアリスの体をそつとベッドに横たえると、押し殺した声でぼそりと呟いた。

「……逃しはしない」

■

ゴツドイーターの強化された聴覚が、遠くで微かに聞こえる潮騒の音を拾う。

何とはなしにそちらの方に目をやると、丁度夕日が沈む瞬間が垣間見えた。

瓦礫だらけの湾岸部を夕日が真っ赤に染めるのは、どことなく退廃の美を感じさせるような気がしないでもなかった。

(全く、何をセンチメンタルになっているのでしょうか……)

アリスは自嘲気味に笑うと顔を戻し、自分の成果を見上げた。

ひっくり返って足を折り畳み、動かなくなったサソリ型のアラガミ、ボルグ・カムランの死骸を。

あの医務室の一件の後、アリスは驚くほどの勢いで回復してゆき、ついには現場復帰が出来るほどにまで回復した。

しかし完全復帰とはいかず、カカシの手を借りてリハビリがてら簡単な討伐任務をいくつか受け、その最終段階の任務が、廃棄された空母が座礁している瓦礫だらけの湾岸部『愚者の空母』にいるボルグ・カムランの討伐任務だった。

カカシの手を借りたとはいえ、ほぼ一人で彼女は見事ボルグ・カムランの討伐を成し遂げた。

その任務の達成はつまり、新型神機の使い手、アリサ・イリーニチナ・アミエーラの完全復活を意味していた。

感慨深げにボルグ・カムランの死骸を見上げていると、コツコツと誰かが近づいてくる足音が聞こえた。

アリサは振り向き、自分の様な半端者のリハビリに根気良く付き合ってくれた底抜けのお人よしに顔を向けた。

「ここまで付き合っていたら、本当にありがとうございます」

アリサは改めて彼に礼を言った。カカシは気にするなとばかりに手をひらひらと振った。

「あとは私の方で何とかしてみせます。……実戦への復帰はまだ決まってはいませんけど」

アリサはカカシの手を取った。

「でもすぐに復帰できるようにします。あなたとあの人の言葉があれば、きっと出来ると思うんです」

手に取ったカカシの手を、そっと頬に当てる。

「頑張ります。私、頑張つて生きようと思います！」

「……うん」

決意表明をする彼女の屈託のない笑みは夕焼けと相まって、とても可憐だった。

カカシは一瞬だけ見惚れ、それからつられる様ににこりと微笑ん

だ。

「それが良い……」

潮騒の音が、一際大きく響いた。

極東支部第一部隊隊長 『名無之カカシ』

「はい……ええ、まさか意識を取り戻すとは……」

大車ダイゴはトイレの便器に腰かけ、息を嚙めながら捲し立てるように通話相手へ報告を続ける。

心臓の音がうるさい。こめかみの辺りがずきずきと痛み、否応なしに荒くなる息を止められない。

『……？』

「詳しくは分かりませんが……ええ、『例の狂犬』が……」

額から流れ落ちる汗を払いながら、大車は自分の考えを告げる。

『……』

「そうです……私の考えでは、新型同士の感応現象が起きたのではないかと……」

『感応現象』

新型神機の適合者同士の間で稀に意識や記憶の交差が起きる現象である。現在発生条件などの研究が進められてはいるが、詳細は今も分かっていない。

今回はそれが作用して、本来は目覚めるはずも無かったアリサが目を覚ましてしまった。これは彼と『あの男』にとっては想定外の事だった。

本来ならこのまま意識不明のままにしておき、時が来たら証拠隠滅のために処分するつもりだったのだ。

「はい、どうしましょう。隔離しますか？」

自分で言った言葉に、大車は何を馬鹿な事と突っ込まずにはいられなかった。

(あの狂犬の前でそんな事をしてみる。いったいどうなる事か……)

思い起こされるのはあの黄金のパルスが走る悍ましき一對の瞳。逸らされる事無く見開かれた目は、ほんの少ししか見ていないのにもかかわらず大車の心に深い傷跡を残した。

アレに再び晒されるなぞまっぴらごめんだった。

「うっ!?!」

せつかく吐いたばかりで嘔吐感の波が引いたばかりだというのに、あの瞬間を思い出してしまったせいで、また吐き気が込み上げてきた。

大車は通話中に吐かない様に、どうにか込み上げてくる物を飲み込みながら通話を続ける。

「ウツ……え? いえいえい何でも……うぶありません……そうですかしばらくこのまま……このまま!?!」

しばらくこのまま。その言葉を聞いた時、大車は手足を縛られたまま狼の前に差し出されたかのような錯覚を覚えた。あの冷酷な男の事だから、おそらくその思いは間違いではあるまい。

(あの男……まさか奴の怒りの矛先を私に向けさせる気か!!?)

大車は何とかしてこの場から消えられるように通話相手にあれこれと喚きたてんとするが、その時にはすでに通話は切られていた。

怒りを向ける矛先を失った大車はしばらくの間放心し、それからブチギレてトイレのドアを蹴つ飛ばしながら喚き散らした。

「ぐ……くそー！ 畜生！ 畜生あの野郎！ ちく……うぶ!?」

だがそれも、憎悪に満ちた金の瞳がフラッシュバックした事により込み上げてきた吐き気によって中断された。

大車は便座を上げ、無様に膝をつきながら嘔吐した。

彼はゲーゲー吐いた。ついに胃液しか出る物が無くなっても吐き出そうとした。まるでつい今しがたの光景を吐き出そうとするかのよう。



アリサさん復活ツツツ!!!! アリサさん復活ツツツ!!!! アリサさん復活ツツツ!!!! アリサさん復活ツツツ!!!! アリサさん復活ツツツ!!!! アリサさん復活ツツツ!!!!

アリサさんが戦線に復帰したナウ!

現場復帰できるほど回復したのも喜ばしいが、何より別人かというほど彼女は変化した。

何て言うかもう態度が、身に纏う雰囲気明らかに違う。

以前はとげとげしく、ソーマ君と似た様に他者との繋がりを拒絶していたのだ。自分の中に閉じこもっていた。

しかし綺麗なアリサさんはぎこちないながらも、でも明確に、我々

に対して少しずつではあるが自分をさらけ出し始めたのである！

す、す、す、スバラシー！

これはもうただアリサさんと呼ぶのは失礼である。これからはアリサさん改善と呼ばせてもらおう！

後そのお祝いがてら彼女から『ティーストーン』っていう青いバックラーを貰ったんだけど……ごめんねアリサさん。私バックラーよりもシールド派なの。

……っか復帰祝いはこっちがするもんであって、どーして君がびんぴんしているおいらに復帰祝いを渡すのか、コレガワカラナイ！

いやーでも綺麗になったアリサさんは本当に尊い。

今もコウタ君と夫婦漫才めいた口論を遠巻きに見てるのだけど、ずっと見たかった光景を見れて、僕、満足！ 尊いに体が押しつぶされそうだあ……。

終末捕食とかもうどうでもいい。この光景をずっと見ていたい。

(恍惚)

……冷静になって考えると終末捕食完了させて平和にしなきゃこれと見られないじゃん！ ダメじゃん！

これはなおさら終末捕食を完遂させ無くてはならないな！

俺はやるぜ！

とか何とか考えていると、ようやくツバキさんが姿を現した。

現在俺、サクヤさん、アリサさん、コウタ君、ソーマ君の5人はエントランス上部の出撃ゲート前で待機していた。どうもブリーフィ

ング前に何か話があるそうなので、おいらは興味津々でツバキさんの言葉を待った。

「どうやら全員いるようだな」

ツバキさんは一人一人の顔を確認するように見ると、咳ばらいを一つした。それからまるで未練を断ち切るかのように目を閉じた。

そして目を開けると、もう未練なんて物は欠片も見受けられず、いつもの様なきびきびとした口調で話を始めた。

「本日、執行部より正式な辞令が降りた。今回の任務完了をもって、名無之カカシをフェンリル極東支部、保守局第一部隊隊長に任命する」

「――！――」

その場に集められた全員（俺を含めた）が、ツバキさんの言葉に大小関わらず驚いた顔をした。

あー……もうそんな時期ですかー……。

膨らんでいた興味の風船が、あからさまに不満そうな音を立てて萎んでいく感覚があった。

だって俺の事とかどーでも良くねえ？

俺よりソーマ君とかサクヤさんの方がよほど適任だと思っんですけど？

……あーそうか。支部長の犬の役目があったわ。じゃあ俺じゃなきゃダメかーマジかー。

「これからはお前がリーダーだ。よろしく頼むぞ」

うん、まあよろしく頼まれるよ。どーせその内コウタ君に丸投げす

るんだし。

コウタ君が育ちきるまでの間の仮初のリーダーとしてなら、まあやってやらん事も無いな? (糞上から目線)

俺は了承の意味を込めてツバキさんに頷き返した。

「す……すげえ! 大出世じゃん! うひょー! こういうのなんて言うんだっけ? ゲコクジョー?」

「それ裏切りですよ? 馬鹿なんじゃないですか?」

まるで自分の事のようにはしゃぐコウタ君に、すかさずアリサさんが突っ込みを入れる。

ふ……夫婦じゃ、夫婦がおる……! 二人のあまりに息の合ったコンビネーションに、全世界の俺が泣いた!

「……」

嬉しそうにしている二人とは反対に、サクヤさんは複雑そうな顔をしていた。

そりやそうだ。だってそれはリンドウさんがもういない事を公式に認められたような物なのだから。

ああ、今すぐ彼女の前でリンドウさんはまだ生きているよってことを言いたい。それで皆で探しに行きたい。

でもそれはダメ。それはいけない。大筋から外れてはならない。流れを変えるときは今ではないのだ。

「改めて……よろしくお願いします。ね、サクヤさん!」

「え、ええ……そうね……おめでとうカカシ君……」

だから俺はいつものように胸の内に蓋をして、笑顔の仮面を被る。

悲しみを抑え込み、精一杯の明るい笑みで上書きするサクヤさんに、無責任な笑みを送る。

「リーダーとなれば相応の権限も与えられる。しかし同時に相応の義務も負ってもらおう。チーム全員を無事に生還させるといふ義務を、だ」

ツバキさんはつかつかと歩み寄り、弟そっくりな動作で俺の肩をばしばしと叩いた。

「お前は強い……死ぬなよ。全員生きて戻れ。これは命令だ」

これまた弟と同じような命令を、弟と同じような優しさたつぷりに含んだ言葉を俺たち全員に言った。

その時の声音の柔らかさは、リンドウさんとの血の繋がりをしかと俺たちを感じさせた。

「さあ何をボサツとしている。任務に向かえ！」

ツバキさんのお話はそれで終わりのようで、彼女に促されるまま俺たちは出撃ゲートを潜った。

(全てはより強く愛ある世界のために)

俺は目の前でやいのやいの言い合うコウタ君とアリサさんを見つめながら、心の中でいつものように欺瞞の言葉を吐いた。



ところ変わって、俺たちは鉄塔の森へとやって来た。

本日の任務、工場地帯に現れた『サリエル』の討伐をもって俺は隊長になれる訳だから、優しいアリサさんとコウタ君は普段より二割り増しくらいのやる気で任務に挑んでいた。

俺はというと、皆とは離れた場所でふよふよ浮いていたザイゴートを神機に食わせてバーストしてヌンヌンしてた。

『カカシさん！ 他の方たちはすでにサリエルを発見、交戦しています！ 急いで合流してください！』

「はいはい」

何と皆もうサリエルの奴を発見して戦っているらしい。

こうしちゃおれねー！

俺は飛び上がり、オラクルを吹かして合流するために急いだ。

空を駆ける事10秒くらい。サクヤさん、アリサさん、コウタ君たちが、青銅色の蝶を思わせる奇妙な女性型アラガミ『サリエル』を相手に激しい銃撃戦を繰り広げていた。

「宅配ピザでえ——す!!!」

俺はサリエルが彼らに夢中になっているのを良い事に、その無防備な胴体に思い切り神機を噛みつかせた。

「La!!?」

当然サリエルは俺の強襲なんて想定もしていないから、これをまともにも食らった。(文字通り)

「来た！ カカシ来た！」

「ちよ!? 早くないですか!? 私たちと別れてからまだ2分くらいか経ってないですよ!」

「また大概訳の分からない事を……」

サクヤさんたちは三者三様の感想を口にしてはいるらしいけど、生憎それを聞き取っているだけの余裕は今の俺にはない。

「La！」

意外にもサリエルの振り払うパワーは強く、空中だからあまり踏ん張りの利かない俺はちよっとしか肉をかじり取らせてもらえなかった。

「むむむ、ならこれを食らえい！」

俺は神機を銃形態のまま捕食形態に変え、そのまま特製のオラクル弾を発射しながら空中を直進！

発射されたオラクルの玉は俺の周りをぐるぐる回りながら追尾レーザーをばら撒いた！

「La!!」

奴はそれを嫌って空中をジグザグに駆けた。

「逃がすか！」

俺はオラクルを吹かして空を駆けるサリエルの背を追う。

うおー人カドツグファイトじゃー!!!

俺とサリエルは空中で激しく上下を奪い合いながらオラクル弾をばら撒きあった。

奴が一発レーザーを打てば、俺は負けじと十発のオラクル弾をぶつ放した。さらに俺の周りを飛び回る光球が追尾レーザーをばら撒くから、つまり俺はあいつの百倍撃っているという事だ。わかるか？この算数が。エエツ？

が、さすがに空中戦はサリエルの方に分があつたみたいで、俺は一発の追尾レーザーを避け損ねて肩を撃ち抜かれてしまった。

「ぬわー!」

バランスを失つた俺はきりもみ回転しながら墜落し、地面を二転三転した。

「痛てー!」

すぐさま立ち上がって俺は再び空に飛び立とうとしたけど、駆け付けたコウタ君たちの一斉砲撃を受けてサリエルは地面に叩き落とされてた。

「みんなナイス!」

俺は近接形態に神機を変えると再び捕食形態をとらせ、オラクルを吹かして前進!

叩き落されてジタバタしているサリエルの頭にあるぎよろつとしたキモイ目ん玉をかじり取った!

「アバツー!?!」

サリエルが絶叫の悲鳴を上げた。

「まだだぜー!」

俺はサリエルのマウントポジションを取ると、胴体に向けて神機を、黒紫の刀身『呪刀』を振り下ろした。どうもこの呪刀、凄く不安定らしく、これを俺の装備にすると支部長がりツカさんに言ったら猛然と抗議したらしいが、その話はまた別の機会にでも。

「La……!?! La……!?!」

逃れようとサリエルは一層手をばたつかせているが、下半身はアリスさんが神機を捕食形態に変えてがぶがぶと齧り、脚を欠損させた。

更にサクヤさんが封神弾で弱体化させ、コウタ君がホールドラップを仕掛けて動きを阻害するから逃れる事は不可能である。

皆がサリエルを飛び立たせないようにしていたから、俺は安心してこいつを解体出来た。

サリエルが腕で払ってきたが、俺は片手でこれをつかみ取り、もう片方の空いた手で何度も呪刀を叩きつけた。

「……ッ!? ……ッ!?」

次第にサリエルの動きが鈍くなり、俺は止めとばかりに神機を捕食形態に変えて奴さんの胴体に噛みつかせ、思い切り引きちぎった!

「ムシャムシャー!」

神機はサリエルの上半身をうまそうに咀嚼し、呑み込んだ後にでかいゲップを一つした。

(行儀悪いーなー)

神機の捕食形態を解除しながら、俺はそんな事を思った。

「うへえーゴア」

コウタ君がサリエルの死骸の上にいる俺に向かってのんきに呟いた。

「流石ですね」

一息ついたアリサさんがつこりと微笑んだ。

「……もう、無茶しすぎよ」

サリエルの死骸から降りた俺の頭に拳をこつんと当てながら、サクヤさんは聞き分けの無い子供に言い聞かせるみたいにそう言った。

俺は軽く頬を掻きながら、曖昧に笑った。

帰投準備にはいる皆を横目に、俺は空を見上げた。

相変わらず雲はどんよりとした曇り空。途切れの見えない雲は見ているだけで心が憂鬱になってゆくのを止められない。

この空模様がこれから先の人生を表すものでないと、俺は願わずにいられなかった。

何にせよ、これからはカカシ隊長である。気を引き締めないとね！

空を駆ける狂犬

「本日、執行部より正式な辞令が降りた。今回の任務完了をもって、名無之カカシをフェンリル極東支部、保守局第一部隊隊長に任命する」

「――！――」

ツバキの放ったその言葉に、集められた第一部隊のメンバーに緊張が走った。

場所はアナグラエントランス出撃ゲート前。そこに呼び集められたアリサ、サクヤ、コウタ、ソーマ、そしてカカシたちは集められた理由も分からぬまま、ツバキが来るまで待っていた。そして先の言葉である。

言い渡された内容への反応は三者三様だった。

一人は大はしやぎし、一人は当然とばかりに納得し、一人はやるせなさとしやしさに呆然自失となり、一人は奥歯を噛みしめ、一人はどこか諦めたように薄く笑っていた。

「これからはお前がリーダーだ。よろしく頼むぞ」

「ハハア……」

ツバキからの言葉に、カカシはどうにも感情の読み取れ無い曖昧な表情で頷いた。

「す……すげえ！ 大出世じゃん！ うひよー！ こういうのなんて言うんだっけ？ ゲコクジョー？」

コウタはカカシの出世に、まるで自分の事のように喜び、彼と肩を組んで大はしやぎだった。

「それ裏切りですよ？　馬鹿なんじゃないですか？」

一方アリサは大はしやぎをするコウタに冷めた目を送り、さらりと毒を吐いた。しかしすました顔をしてる彼女だが口元が緩んでおり、コウタ同様にカカシの出世に喜んでいる事は見え見えだった。

「……」

「……チツ」

そんな二人とは対照的に、サクヤとソーマの表情は暗かった。

サクヤの顔は白を通り越して青ざめており、人の目がなかったら足元にへたり込んで恨み言の一つは吐いていたかもしれない。

何せこの発表はつまり上層部がリンドウが死んだという事を正式に決定したという事だ。

自分が彼の死を確認できていないのに、そんな決定など認められる物か！

もしこれがツバキと二人きりの時に言われた事だったなら、サクヤはそう叫びながらツバキに掴み掛っていただろう。あるいは手が出てもおかしくなかったかもしれない。

しかしそうはならなかった。人目があるのはそうだが、頼もしい後輩が上層部に認められて昇進したことは素直に嬉しかったし、自分以上で怒り悲しんでいるであろうツバキを差し置いてそんな真似をしたくなかったからである。

怒りと悲しみ、素直に称賛する心が相殺し合い、サクヤの心の中は奇妙な空白が生まれていた。

サクヤは真っ青な顔で、ただツバキの顔を見つめていた。

怒ればいいのか喜べばいいのか。さっぱり分からなかった。サクヤは何も考えられなかった。このような状態を、世間の人々は茫然自失と呼ぶのだ。

次にソーマだが、彼はフードを深くかぶり直していた。今の自分の浮かべているであろう怒りの形相を、誰の目にも触れさせたくなかったからだ。

ソーマは怒っていた。勝手に死んでいった上官に。自分の非力さに。……この世界に。

「……」

そして昇進を言い渡された当の本人はというと、喜んでいるまでも無く悲しんでいるまでも無く、いつものようにただ曖昧に笑っているだけだった。

心なしか浮かんでいる笑みに諦めの様なものを感じはするが、それでもやはり胸の内を読み取る事はいつものように出来なかった。

「改めて……よろしくお願いします。ね、サクヤさん！」

「え、ええ……そうね……おめでどうカカシ君……」

突如アリサに話を振られたサクヤは咄嗟に言葉を絞り出したものの、次第に尻すぼみになり、ついには俯いて口をつぐんでしまった。

（……ッ！ 私の馬鹿！）

小刻みに震える自らの体を掻き抱き、少しでも心の悲しみに耐えようとする彼女の内心を察したアリサは自分の迂闊さに反吐が出る思いだった。

サクヤとリンドウが深い仲である事は分っていたはずだったのに。軽率な己の行為を恥じた彼女は心の中で謝りながら、無言でサクヤの肩に手を置いた。それが気休めにもならないことなど分かり切った事だが、それでもしなければ自分の気が済まなかった。

「……」

ツバキはあえてサクヤの悲しみに言及しなかった。それをすれば自らの悲しみにまで触れなければならず、それはお互いにとってあまり良い結果にはならないだろう。

「リーダーとなれば相応の権限も与えられる。しかし同時に相応の義務も負ってもらう。チーム全員を無事に生還させるという義務を、だ」

だから彼女は己の悲しみに蓋をして、カカシについての事柄だけに集中する事にした。

そうすれば、今胸の内にあるのは感慨と可愛い部下への頼もしさだけになった。

ツバキはつかつかと歩み寄り、弟そっくりな動作でカカシの肩をばしばしと叩いた。

「お前は強い……死ぬなよ。全員生きて戻れ。これは命令だ」

ツバキはカカシの両肩に手を置き、普段の彼女からは想像できないほど柔らかな笑みを浮かべながら、彼にそのように命じた。

カカシは強い。現時点でも経験以外ではリンドウやその他のベテラン神機使いの戦闘能力を遥かに凌駕している。

だがこのまま宙ぶらりんで放置していれば、いずれふとした拍子に

どこかへ行ってしまうだろう。首輪が付けられていない飼いの犬の様に。空を揺蕩う雲の様に忽然と。

これは首輪だ。吹けば飛んで行ってしまうような彼を縛り付ける立場という名の首輪。大狼を封じ込めるための聖なる枷。フエンリル
グレイブニル

この枷があれば、彼は否応無しに仲間の事を考えざるを得なくなる。仲間の事を考えて作戦を立てるとなると、必然的に自身も生き残るような作戦を考えなければならなくなる。

彼女はこの目の前で困ったような笑みを浮かべる青年の内に潜む心の闇を、漠然とだが感じ取っていた。

故に彼女は強調した。死ぬな。生きて戻れと。

カカシは彼女の言葉を反芻するように舌で転がし、それから笑みを消し、真剣な表情で頷いた。

「

その顔つきを、彼女は知っている。

嘗てリンドウが第一部隊の隊長に抜擢された時、あれこれ言い訳をすべて吐き出した後に彼女に向けた表情とまるで同じものであった。

即ち、誰かの命を背負って戦う決意が、この線の細い優男に宿った瞬間だった。

ツバキの心の中に、様々な感情が去来した。懐かしさ。愛しさ。……悲しみ。

無意識の内に手を伸ばす。伸ばされた手はカカシの頬に添えられ、ツバキは衝動のまま口を開きかけた。

その時。

「だから『ゲコクジョー』では無く『下剋上』だと何度言ったらあなたは理解するんですか!? 本当にあなたは馬鹿ですね!」

「別にイーじゃんどっちだって! それに、馬鹿っていう方が馬鹿なんです—!」

「何を—!」

アリサとコウタの口論が耳に飛び込んできて、ツバキはドキリとし、伸ばしていた手を反射的に引っ込めた。

「……?」

「ツ! き、さあ何をボサツとしている。任務に向かえ!」

ツバキは不思議そうにこちらを見つめるカカシからプイッと恥ずかしそうに顔を逸らすと、羞恥をぐまかすように彼らを任務に追い立てた。

「わ????」

「わ! ツバキさんが怒ってる—!」

「ひゃあ!」

「あ、あはは……」

「チツ……」

カカシたちは急に追い立てられた困惑よりも、鬼教官が語気を荒げて任務に行くように催促する恐怖の方が勝ったようだ。慌てて会話を中断し、どたばたと出撃ゲートを潜っていった。

彼らの会話する声が徐々に遠ざかってゆく。

「死ぬんじゃないぞ……」

去り行くカカシたちの背を見つめながら、ツバキはぼそりと呟いた。



「いいですか？ これはとても重要な任務なんです。あなたみたいな注意散漫な人がへまする事が合つてはならないんです。分かっているですか？」

「へんだ！ 俺はそんな心配方に一つもないもんね！ 俺とカカシが何度一緒に任務に出ていると思ってるんだ？ 誰かさんと違って信頼関係が出来てんのさ信頼関係が！」

「むむく!!!」

カカシの隊長就任が懸かった任務というだけあって、つるむこと多い同期であるコウタ、助けられて随分と態度の改善したアリサは隊長に就任する本人以上に張り切って任務に挑んでいた。その一歩後ろから二人を微笑ましそうに見ているサクヤ。さらに後方に三人を眩しい物でも見ているように目を細めるカカシがいた。

「しっかし俺の同期がリーダーになるだなんて、改めて考えるとスゲー話だよな！」

ちらりと背後を振り返りながら、コウタは感慨深げに言った。

「当然でしょう。あれだけの戦闘能力を持っている人なら遅かれ早かれ隊長に就任して当たり前です。……でも、確かに速すぎますね。さすがカカシさんです！」

「だよねえ〜！」

先ほどとは一転して、二人できやいきやいと会話に花を咲かせていた。

「ふふ……カカシ君は良い友達に恵まれたわね？ 羨ましいわ〜」

二人の会話を柔らかな表情で見守りながら、後方のカカシに向かってサクヤは語り掛ける。

「（ 〇 ）」

相変わらずカカシは口を開くことは無く、サクヤからの言葉にただ笑みを浮かべていた。

『皆さんに入電です。今向かっている場所とは別方向に複数の小型アラガミの反応が現れました。恐らく本日の任務の討伐目標であるサリエルが呼び寄せた可能性が高いです！』
「だそうだけど、どうする新隊長さん？」

ヒバリから告げられた情報に、サクヤは振り返ってカカシに指示を仰ぐ。

カカシはやや思案したように顎に手をやり、それから満足げに頷き、自身の考えを告げた。

「じゃ、みんなは当初の予定通りの場所に向かってザイゴートの殲滅をお願いします。俺は新しく湧いてきた奴を『喰って来る』ね」

「それは……無難に2組に分けた方が良いのでは？」

カカシの提案にアリスは反論を上げるが、カカシは首を振って神機をポンと叩いた。

「増援に大型アラガミが混じっていたらそうしてたけど、小型だけな

ら俺だけでも大丈夫でしょ？ それに、俺の使っている神機はまだ不安定だし、何より全然育っていないんだ。こういう機会にコアを取り込めるだけ取り込んでおきたいんだ……ダメかな？」

カカシは指と指をつんつんさせながら、自信なさげにアリスたちにお伺いを立てた。

「もう、あなたは隊長になるのよ？ そんな自信なさげにしてどうするの？ こういう時はバシツと言ってみなさい！」

と、サクヤ。

「おう、そういう事なら任せとけ！ お前が来る前にザイゴートもサリエルも俺が撃ち落としてやる！」

コウタが自信満々に親指を立てて見せた。

「サクヤさんの言う様に、カカシさんはもっと自信を持ってください。私達なら平気です。どうか貴方のお好きなように、ね？」

アリスはにつこりと笑みを浮かべながらそう言った。

「……うん、じゃあ、よろしく頼もうかな。サクヤさん、俺がいない間彼らの指揮を頼みます」

「分かったわ」

「そこなくちや！」

そういう訳で、カカシは増援を一人で殲滅するために一時パーティから離脱した。

また離脱の際に当然とばかりに空を飛び去って行く彼の姿に、三人が苦笑いを浮かべたのは言うまでも無いだろう。

だが流石に何度も見てるだけあって初回の頃より驚きは少なく、カシが離脱した後ヒバリのオペレートの下、彼らは速やかに行動を開始した。

「お、ザイゴート発見！」

いの一番にザイゴートを発見したコウタが、すかさず火属性のオラクル弾を発射した。

「ギツ!？」

コウタの奇襲は完璧に成功し、驚いたザイゴートはオラクル弾を食らった拍子に地面に落下してしまった。

「よっしゃチャンスだぜ！」

「ナイスです！ はあっ！」

アリサは落下したザイゴートに向かって瞬く間に距離を詰めると、紅き刀身『アヴェンジャー』を裂帛の気合と共に振り下ろした。

「グエツ!？」

潰れたような断末魔を上げ、ザイゴートは哀れ、真つ二つになって絶命した。

と、それが合図となったのか。彼女たちの後方にあつた破壊されて段差の様になった建物の残骸の向こう側から、それはふわりと重力を無視した動きで彼女たちの前に降り立った。

ソレの上半身だけを見たら、人間の女性とさえない事も無かつた。滑らかな腰のライン、豊満な胸、閉じている瞳はどこことなく愁いを帯

びているようにも感じられる。それだけなら、なるほど。男からすれば垂涎ものだろう。

ただしそれは上半身に限っただけの話。腰から下はがっしりと肥大化しており、上半身と下半身のアンバランスさの歪さが見る者に酷い嫌悪感を感じさせた。

何よりこのアラガミの頭部にある扇状の器官の中心にある邪眼がぎよろりとこちらを睥睨する様は、さながら悪徳な貴婦人の様だ。

「こいつがサリエルか……で、デカイ！」

とコウタがサリエルを見るや否やそう漏らし、思わずアリサの胸と見比べて感嘆のため息を漏らした。

「ぶっ殺しますよー！」

そんな事をされて面白い訳も無く、敵の前だというのにアリサはコウタに噛みついた。

「だ、だつてさー！」

「っ！ 二人ともふざけてる場合じゃないわ！」

反論を言いかけたコウタにサクヤからの叱責が飛んできた。それで2人は慌ててサリエルに向き直り、直後、サリエルは邪眼から複数の光の束を発射した。

「うひゃー!?!」

「わっ!?!」

「くっ!?!」

3人は慌ててその場から飛びのいた。一拍子遅れて彼女たちがい

た場所を複数のレーザーが貫き、地面に穴を穿った。

体勢を立て直した三人はサリエルを囲むような位置につくと、一人はスカート状の器官、一人は頭部の邪眼、一人は胴体に狙いをつけて一斉に射撃を開始した。

「La!?!」

瞬く間にサリエルの全身はオラクル弾に包み込まれた。

「La!」

当然サリエルはただ的になってやるつもりは無く、滑るように横にずれて弾幕から抜け出すと負けじとレーザーを乱射した。

アリスたちはレーザーをかわしながら銃撃の手を緩めない。静寂に包まれていた工場地帯はたちまち激しい銃撃戦の騒音に塗り替えられた。

降り注ぐ光線の雨、空に向けて放たれるさまざまな色をした光球は、遠くから見れば様々な光が飛び交う美しい光景に見えるかもしれない。

が、しかし、当人たちにとってそれは死の光。美しさとは程遠い物騒な物の応酬であった。

「La!!」

いい加減鬱陶しくなったのか、サリエルはぐつと身構えるような動作をとると、光の壁を展開した。

攻防一体の光の壁はバリアーの役割を果たし、彼女たちのオラクル弾を全て弾き返してしまった。

「ああ!? これじゃ俺たち攻撃できないよー!」

「慌てないでコウタ君、こういう攻撃は長続きしないわ。待ってれば次第に途切れる。それまでにこちらも体勢を立て直しましょう!」

「はい、サクヤさん!」

「サリエルが光の壁を展開して攻撃を拒絶している間、3人はOアンブルを飲んで体内のオラクルを回復し、機会が来るまでじっと待っているつもりだった。

つ・も・り・だ・つ・た。

予定は未定。戦場では常に予想外の事が起きるように、今回も例にもれず彼女たちの思惑は全くのイレギュラーが粉碎していった。

光の壁を展開していたサリエルが、突如として消え去った。その一瞬遅れて。

「宅配ピザでえ——す!!!!!!」

というすさまじく場違いな声が彼女らの耳を貫いた。

呆気にとられた3人は声のした方向を目で追うと、飛行の勢いを緩めることなく捕食形態に変えた神機をサリエルに噛みつかせる力カシの姿が飛び込んできた。

「来た! カカシ来た!」

「ちよ!?! 早くないですか!?! 私たちと別れてからまだ2分くらいしか経ってないですよ!?!」

「また大概訳の分からない事を……」

アリサたちは衝動のままに感想を口にした。それと時期を同じく

してサリエルはカカシの拘束を振り払い、カカシから距離を取った。

「むむむ、ならこれを食べらえい！」

カカシは神機を銃形態のまま捕食形態に変え、そのまま特製のオラクル弾を発射しながら空中を直進してサリエルを追う。発射されたオラクルの玉はカカシの周りをぐるぐる回りながら追尾レーザーをばら撒いた。

「La!!」

サリエルはそれを嫌い、空中をジグザグに駆けた。

「逃がすか！」

カカシは叫ぶと、捕食形態に変えた神機からオラクルを吹かして空を駆けるサリエルの背を猟犬の如くしつこく付きまとった。

「こわ〜……」

「これはさすがに……」

「あの子は一体どこに行こうとしているの……?」

3人は呆れたような感心した様な、何とも言えないような顔で上空で熾烈なマウンント争いを繰り広げる両者を見上げた。

当然だろう。いったいどこの世界に大型の飛行アラガミとドッグファイトするゴツドイーターがいるというのか？

これを見ていない者にそれを聞いたところで、良くて鼻で笑われるか、最悪頭の心配をされることは明白である。

「って、感心してる場合じゃないわ！ 何とか援護をしないと」

年長者らしく一番に我に返ったサクヤが行動に移そうとするが。

「ああッ!？」

というコウタの悲鳴で出鼻をくじかれてしまった。

コウタは見た。

激しいマウント争いでこちらとの距離はずいぶん離れていったが、それでも強化された視力はカカシが一条の光に貫かれる瞬間をばっちりととらえていた。

「アイツ——!」

真っ先に動いたのはコウタと、彼同様にその瞬間を見ていたアリサであった。

自慢の仲間が撃ち落とされ、あつという間に怒りのボルテージを振り切った二人の若者は、湧き上がる衝動のまま神機を構えて突撃していった。

「え? あ? わ、私も!」

遅ればせながらサクヤも2人の背を追って駆け出した。

サリエルに追いついたコウタとアリサは怒りの赴くままにオラクル弾を乱射した。

「La!？」

カカシにばかり気を取られていたサリエルはこれをまともに食らい、ついにスカート部分が結合崩壊を起こした。

「La!?! La!?!」

サリエルは困惑と激痛のためか飛行に乱れが出ていた。先ほどの機敏さは失われ、死にかけの蝶を思わせるような動作で上空をふらしていた。

「これはおまけよー!」

追いついたサクヤのピンポイント狙撃が上半身に直撃し、ついにサリエルは地面に叩き落とされた。

「ッ!?!」

地響きを立てて地面に落下したサリエルは手をバタバタさせて再び上空へと舞い上がらんと躍起になったが、凄まじい勢いで突っ込んできたカカシに上から押さえつけられて、それは不可能になった。

「うお!?! どっから飛んできた!」

サリエルの邪眼を噛み千切りながら突撃してきたカカシに、コウタはギョツとして驚く。

「どっからだって構いません。それより彼の援護を!」

「援護ならこれね」

サクヤは自身の神機にアラガミを弱体化させる弾丸『封神弾』を装填すると、カカシに当たらない様に見事上半身に直撃させた。

「だったら俺はこれ!」

コウタはサリエルに接近し、サリエルの真横でホールドトラップを起動させて動きを阻害させた。

「私ならこうー!」

アリサは神機を捕食形態へと変化させると、無防備に投げ出されていた両足を食い千切った。

彼女たちの間中、カカシは禍々しい黒紫の刀身『呪刀』を狂ったようにサリエルに叩きつけていた。

その姿はまるで呪われた刀に魅入られた狂人の様な有様であり、アリサはカカシの使用する刀身が呪刀に選ばれた時にリツカが理事長に猛然と抗議しに行く光景を思い出していた。

『あれは凄く不安定な子なんだ! あまりにも不安定過ぎて、今までに何人もの神機使いが命を落としているんだ!』

そんな刀身をよりにもよってカカシのような人に使わせるなんて信じられない! と抗議が却下され、憤懣やるかたない様子のリツカはそのように語っていた。

アリサは改めてカカシの振るう刀身を見た。その時ちようど止めを刺す瞬間であり、呪われた刀身をオラクルで構成された肉が覆いつくし、悍ましき顎が形成され、サリエルの上半身をすっぽりと覆ってしまった。

「……ッ!?! ……ッ!?!」

サリエルは何とか振り払おうと手をばたつかせたものの、カカシの万力の如き力で上半身ごと引きちぎられて絶命した。

ちぎられ、残された下半身から血液がまるで泉のようにどくどくと

溢れた。

「うへえーゴア」

コウタがサリエルの死骸の上にいるカカシに向かってのんきに呟いた。

アリサは捕食形態が解除され、再び露になった呪刀をじっと見つめた。

黒紫の刀身は聞いていた不安定さなど微塵も感じさせる事は無く、ただ主に忠実な家臣の如くカカシの手に収まっていた。

大いなる狼は呪われた刀の呪縛すらなんてことないらしい。撥ね退け、屈服させるぐらいには。

「流石ですね」

一息ついたアリサはにっこりと微笑んだ。

「……もう、無茶すぎよ」

サリエルの死骸から降りたカカシの頭に拳をこつんと当てながら、サクヤは聞き分けの無い子供に言い聞かせるみたいにそう言った。

カカシはただ曖昧に微笑んでいた。

つられるようにサクヤも笑ったが、内心は気が気では無かった。

初めて任務に同行した際の不安は今までもずっと付きまといていたが、今回の事でその不安はより一層大きくなった。

ただでさえリンドウが死んでしまっただけで心が平静を保てないというのに、まるで死に急ぐかのような苛烈な戦い方をするカカシに、これ

以上不安になる様な事はしないで欲しいというのが本音だった。

しかしこの任務が終われば晴れて隊長になるというのに、そんな説教をして気分を沈めてやりたくも無いという思いもあった。

複雑にせめぎ合った心はこれ以上彼女の口を開かせなかった。サクヤは口をつぐんだ。

そんな彼女にカカシは何か言おうとするかのように口を開きかけたが、すんでのとこでやめ、頭を振ってサクヤから背を向けた。

4人はサクヤを先頭に帰投準備に向けて歩き出した。

途中アリサは何となく気になって、背後にいるカカシの表情をちらりと盗み見た。これで晴れて隊長就任である。きっといつも以上にゆるんだ顔をしているに違いない。そう思っていた。そして後悔した。

カカシは空を見上げていた。その顔にいつもの笑みは無く、底の無い穴を覗き込んでいるかのような全くの虚無の無表情が浮かんでいた。

アリサはすぐさま顔を戻した。そのタイミングでコウタがアリサに話を振ってきた。

カカシが隊長に就任して俺も鼻が高いとか、お祝いのパーティーでもしようとかどうか。そんな事を言っていた気がする。

しかし今の彼女の心の中は今しがた見た見たカカシの表情の事ではないだった。

(あの表情は、一体何を意味するのだろうか……?)

いつだって微笑みを絶やさなかった男の、虚ろを感じさせるような無表情。

一体何を考えているのだろうか。どれだけ頭を働かせても、ちつともそれらしき考えは出てこない。判断材料が少なすぎるのだ。

(そういえば、私はあの人の事を何も知らないなあ……)

アリサはふとカカシについて分かっていることの少なさに思い至り、愕然とした。

経歴不詳、年齢不詳。分かっている事といえばその強さだけ。思想、趣味、好きな事、嫌いな事どれ一つとして彼女は知らなかった。

(私、自分の事ばかりで、あの人の事を何も知ろうとしてなかったんだなあ……)

アリサは胸の内がきゅつとなり、心細さのために胸の前で拳をぎゅつと握った。何も知らないという事がこんなにも悲しくなることだとは。

アリサはまた一つ学び、また一つ賢くなったのだ。

アリサは空を見上げた。

相変わらず雲はどんよりとした曇り空。途切れの見えない雲は見ているだけで心が憂鬱になっていくのを止められない。

この空模様がこれから先の人生を表すものでないと、アリサは願わずにいられなかった。

塩、または salt

ハイ、本日も皆さんお元気そうで何よりです！ 名無之カカシです！ 訳あって愚者の空母から離れた海上からお送りいたします（半ギレ）!!!

何でそんなところにいるのかだって？ それはだね。

海上すれすれでオラクルをゴオオオと吹かしながら、俺は眼前を飛んでいる『シユウ墮天』の尻を睨みつけた。

そうシユウ墮天。とある理由からこいつを求めて俺、ソーマ君、コウタ君、彼女の4人で愚者の空母にやって来たんだ。

それで4人でシユウ墮天をタコ殴りにしていたのだが、こんにやろう一丁前に群れのリーダーだったらしく通常種のシユウをけしかけてきやがった。

腹立ったから、スタングレネード投げて目が眩んでいる隙に増援で来たシユウの首全部飛ばしてやったら糞つたれ、シユウ墮天の奴一目散に逃げだしたんだ。

当然逃がしてやる道理なんてないから、わたくしオラクル吹かして奴のお尻を追いかけているんですの。うふ。

『か、カカシさん!? どこ飛んでいるんですか!?!』

耳元で取り乱したヒバリさんの声が聞こえるが、まあもうちよつと待ってくれや。すぐに捕まえて戻ってくるからさ。

俺は更にオラクルの勢いを強めると、一気にシユウ墮天との距離を縮める。

「ゲエーッ!?!」

後方を振り向き、驚愕したかのように叫ぶシユウ墮天。その叫びはまるで「そんなのありかよ!?!」とでも言っているかのようで。

シユウ墮天は何としても追いつかれまいと激しく蛇行飛行するも、ワンパターンすぎて近づくのにそれほど苦勞はしなかった。

「はいガブリンチョ」

「グオオオオ!!?!」

易々と追いついた俺は彼の下半身をそのまま神機に噛みつかせた。それで何度か噛みつかせ、おとなしくなったら俺はUターンし、愚者の空母へと戻っていった。

「あ、やっと帰って……うおっ!! おまー!」

戻ってきた俺に気づいたコウタ君は、こっちに駆け寄ってくる途中で俺が神機に啜えさせているシユウ墮天に気づき、ぎよっとして目を見開いた。ソーマ君は何も言わなかったが眉間に皺が寄ってるから、恐らくコウタ君と似たようなことを思っているのかもしれない。

俺は彼らにひらひらと手を振って見せると、まだ弱弱しくも抵抗を続けるシユウ墮天が動かなくなるまで地面に叩きつけた。ヒバリさんからシユウ墮天のオラクル反応が消えた事を教えられると、俺はシユウ墮天を神機から放して地面に横たえた。

「ゴハン!」

途端に嬉々とした様子でやって来た『彼女』は、見ているこっちまで幸せになれそうな笑顔を浮かべ、とつても元氣よく高らかに叫んだ。

「それじゃー、イタダキマス!!」

イタダキマス。確かにそう言った。何を？ 決まっている。アラガミを。彼女はあろうことかそれを口にしようとしているのだ。

当然だがアラガミは食用に適していない。そもそもオラクル細胞を人体にいれること自体本来なら無茶な事なのだ。P53 偏食因子のような低強度のオラクル細胞でようやく一握りの人間が適合できるか否かなのだから、どうやったって人間に合うようなもんじゃない。

それにもかかわらず彼女はそれを取り込むどころか食べようとしている。でもそれを止める者は俺を含めて誰もいない。何故なら。

「あ、ソーだ」

と彼女は思い出したかのようにソーマ君へと振り返り、さも当然とばかりに言い放った。

「ソーま、いっしょにたべよ!」

初めはそれが自分に言われたことだと彼は認識できなかつたようで、その意味を理解するまでしばらくラグが開いた。

「……おいおい『シオ』、俺たち人間はアラガミを食べたりしないんだよ」

苦笑いを浮かべながら、まるで子供に言い聞かせるような声色でコウタ君は言った。

その言い方はまるで彼女が人間じゃないような言い方だったが、事

実彼女は人間ではない。

彼女の正体はしゃべるアラガミ。この無印ゴツドイーターのストリーリーのキーパーソン。『特異点』なのである。

シオちゃんと出会ったのは数日前。榊博士がシツクザール支部長を首尾よく国外へとおいやり、その隙に俺たちを使って確保したのだ。

で、色々あつてシオちゃん用のご飯を調達するために本任務が発行されたのである。

「えー、でもー」

彼女は、シオはゆらゆら揺れ、それから覗き込むようにソーマ君を見ながら言った。

「そーまのあらがみはたべたいっていつてるよ？」

「……え？」

彼女の言葉に、コウタ君は思わずソーマ君を見る。瞬間、我を取り戻したソーマ君は爆発した。

「ふざけるなー！」

ソーマ君は腕を振った。まるで自らに流れる忌まわしいものを振り払おうとするかのように。

「テメエみたいな……バケモノと一緒にするんじゃない!!」

声を荒げて吐き捨てると彼は背中を向け、そのまま去って行った。

「お、おい……」

「いいからもう、俺に……関わるな……」

コウタ君の気遣うような言葉に、ソーマ君はそれまでの荒々しい言動から一転してとても弱弱しく、消え入るような声色で拒絶した。

そんな状態の彼にかける言葉はなかったようで、コウタ君は口をつぐみ、悲し気に首を振った。

「……」

俺は遠ざかるソーマ君の背をしばらく見つめ、それからシオちゃんの方に顔を向けた。

シオちゃんはほんのちよつとだけ考えるそぶりを見せた後、おもむろに駆け出し、ソーマ君の背に語り掛けた。

「シオ、ずっとひとりだったよ……」

それは彼女の心情の吐露だった。混じり気の無い純粋な彼女の、混じり気の無い純粋な言葉に、さすがの彼も足を止めた。

「だれもいなかった……」

純粋故に、彼女の言葉は人の心によく染みる。それがかつて孤独を味わったことのある者にとっては特に。

「うーんと……だから、だから……そーまをみつけて、うれしかった。みんなをみつけて、うれしかった」

「……」

ソーマ君はこちらに背を向けたまま、何も言わない。ううん。きつと言えないんだ。だってそれは自分も同じだったから。頭では否定

しているけど、きつと心は同じ気持ちなんだと思う。だから彼は何も言わないのだ。

「うーんと……だから、だから」

言葉を探すシオちゃんを待つことなく、ソーマ君は再び歩き出した。その歩みは普段からすればだいたい遅く、力無いものだったけど、その背中からは止まるつもりはないと感じさせるものがあつた。

「あ、おい待てよソーマー！」

呼び止めるべく駆け寄ろうとするコウタ君に、俺は手で制した。彼にも思う事があるだろうから、今は一人にしておいてあげて欲しい。そういう思いを込めて俺はコウタ君を見た。

「……分かったよ。お前がそうしろってんなら、俺は何もしないよ。隊長命令だしな」

分かってくれて何よりだ。ついでになぜ彼がああもアラガミを憎むのかも教えてあげちゃうぜ！

「そっか……あいつが、要はゴッドイーターや神機の技術のオリジナールってことなんだよね。そんで、自分が生まれた事で母親まで殺しちゃったって思ってたのか」

そうなるねえ……。そんな事無いし、あれはどう見ても不幸な事故だったんだなあ。悲しいねえ……。……。

「そんなもん、ずっと一人で背負って、カツコつけてんじやねえよ……」

コウタ君はソーマ君に対して今まで自分がどれだけ心無い事を言ってきたか思い返しているようで、口を真一文字に結んで、項垂れながら吐き捨てる様に言った。

気休めにもならないだろうけど、俺はコウタ君の肩に手を置いてあまり気にする必要は無い事を伝えたと、彼に背を向け、シオちゃんの方に歩を進めた。

「ねー、そーまおこっちゃった?」

俺に気づいた彼女は座ったまま悲しそうに眉を落とした顔をこちらに向けた。

「大丈夫、彼は怒ってなんかいないよ」

「えー、でも、そーますつごくおつきなこえだしてたよ?」

驚いたように目を見開く彼女に、俺はその頭を撫でながら言った。

「ソーマ君にも色々あるんだ。でも、彼ならその色々と折り合いをつけられるようになる。そう遠くない未来でね」

「おりあい?」

「そう折り合い。だから君も、そこまで思いつめることは無いよ。だってソーマ君はとびつきりいい人なんだからね!」

俺の言葉は果たして彼女の心に響いたのかは分からない。ただ彼女なりに何かしらの答えは出せたようで、それまでの悲しげな顔は鳴りを潜め、普段通りの天真爛漫な表情に戻っていた。

「うーん、よくわかんない!」

「うん、今はそれでいいよ。そのうち分かればいいさ」

「うん! そのうちー! そのうちー!」

彼女は立ち上がり、そのうち—そのうち—と言いながら駆け出していった。

「うおおお!! ちょ!! シオ待つてくれよ〜!」

コウタ君は慌てた様子でシオちゃんの背を追いかけて駆け出していった。

俺は彼らの姿をしばらく見つめ、それから地平線の彼方へと沈みゆく夕日の方へ目を向けた。ざざあざざあど潮騒の音を友に、俺はこれから先の事に思いを馳せた。

特異点である彼女の登場により、ここから物語は加速的に進んでいく。目下の懸念事項は混沌の怪物なのだが……はてさて、俺に奴の相手が務まるのであろうか……?

そしてその後に、黒き帝王様の相手をしないとイケないのだが、果たしてどちらの帝王様が来るのやら。

問題は山積み。課題は腐るほどあり、計画の筋道はでこぼこ道も良い所。

こんな有り様で俺は計画を無事遂行できるのかしら?

眼前の海は黙して語らず、太陽は何も言うまいとそそくさと海の底へと沈んでしまった。

異邦人

「やあつ！」

「ギヤアツ!?!」

アリサの渾身の一撃が、結合崩壊して脆くなったコンゴウの顔面を叩き割り、絶命させた。

ズズン……。

「オツシヤ、撃破だ！」

コウタは力尽きたコンゴウを前にガッツポーズを決めた。

ドドン……。

「コウタ君安心するのはまだ早いわ！ 次が来たわよ！」

「うえ!? す、すみません！」

隣で神機を構えていたサクヤの注意喚起に、コウタは慌てて下ろしていた神機を構えなおす。その直後に、雪が降り積もった建物の穴からシユウがひよっこり顔をのぞかせ、どしんと地面に降り立った。

コウタ達4人は榊博士の依頼により、現在鎮魂の廃寺にいた。博士からの依頼内容は単純明快、付近のアラガミを掃討してほしいというシンプルな物だった。

ただ突然そんな事を榊が言い出すものだから、どうしてそんな事をするのかと疑問を口にしたものの、榊はいつもの感情の読み取れ無い微笑を浮かべるばかり。

3人は疑問に思いつつも、アラガミの数を減らす事については特に反

対は無いため、どこか引つ掛かりを覚えながらも人類最後の盾として今日も今日とてアラガミと対峙していた。

ギエー……。アバー……。

「ガアアアア!!」

シユウはコウタ達を視界に入れるやすぐさま両翼の先端の掌を合わせ、火球を放ってきた。3人は横に飛びのいてそれをかわし、サクヤとコウタは後方へ、アリサは2人の支援を受けながら果敢にシユウへと切り込んで行った。

ガオオオオ……。グオオオオ……。イヤーツ……。

「だあー」

アリサは首を狙って横薙ぎの一線を繰り出す。シユウは屈んでそれを回避。

「ガア!!」

シユウは屈んだ姿勢のまま両翼を広げて回転。彼女の足を切断しにかかった。アリサは後方に飛びのいてそれをかわす。その隙をカバーするようにコウタとサクヤの狙いすましたオラクル弾がシユウの顔面と胴体に突き刺さった。

「グオツ!?!」

シユウはもんどりうってひっくり返った。アリサはその間に建物を蹴って跳躍。神機を両手で握りしめ、シユウが体勢を立て直す隙を与える間もなく顔面に紅の刃を深々と突き立てた。

「グオオオオオ!!? ガオオオオオ!!?」

シユウは翼手や足をばたつかせてもだえ苦しんだ。アリサは引きはがされないように突き立てた神機に万力の力を籠めた。

顔面を巨大な刃で貫かれているにも拘らず、シユウはちつともおとなしくならなかった。

それもそのはず。アラガミにとって頭は実のところそこまで重要な器官では無かったりする。彼らにとって真に重要な器官はコアだけだ。強大なアラガミは我々人類にとって致命傷にしか見えない傷でも、例えば頭が吹き飛んだり胴体に大穴が開いていたとしても、コアさえ無事なら何事も無く戦闘を続行する個体もいたりする。

アラガミとの戦いはいかにコアを破壊するか、あるいは肉体をどこまで破壊できるかが胆になってくる。

イヤーツイヤーツイヤーツ……。アバーツアバーツアバーツ……。

「もうっ……しっ、こいです……ね!」

アリサは暴れるシユウを押さえ付きながら、神機にある命令を下す。なまじシユウを抑え込むことに精神の大部分を割いているため、下した命令を神機が遂行するのはのろのろとしたものだった。

あの人ならもっと早いのだろうか? 時折頭目がけて振るわれる翼手を何とかかわしながら、アリサはそんな事を考える。

が、もし彼ならこんな状況に持ち込ませず、シユウが着地した段階で首を刎ね飛ばしている事だろう。

容易にその光景が想像できてしまい、危機的状況にもかかわらずア

リサは思わず苦笑いを浮かべる。

そうこうしている内に神機は下した命令をついに遂行できたよう
で、アリサはさらに神機を深く突き入れ、シユウの腹に折りたたまれ
ている銃身を押し当てた。

「食らえー！」

アリサはためらいなく引き金を引いた。瞬間、銃身から爆発が生
じ、シユウの胴体を修復不可能なレベルに撃ち砕いた。

ロングの固有技であるインパルスエッジである。刀身ごとに発射
される弾種は異なり、アリサの刀身である『アヴェンジャー』は爆破
であった。

「ガッ……!? ガッ……！」

流石のシユウもそこまで肉体を破壊されればお終いだった。びく
びくと身を震わせ、翼手で地面を何度かひつかくように藻掻いた後、
ぐったりとなり動かなくなった。

「ふうー……！」

アリサはようやく一心地着いたと言わんばかりに息を吐いた。背
後を見ると、コウタも同じようにしていた。サクヤの方も二人程とは
言わないが明らかに体の力を抜いていた。

ギョエーッ……。

「よし、これでここら辺はクリアかな？　おーいヒバリちゃん、どう
？　まだどっかいる？」

『はい、コウタさんたちの周りにはもうアラガミはいませんよ。コウ

タさんの周りにはもういません。ええ』
「……」

ヒバリの声は酷く澄んでいた。まるで凧いだ海面を思わせるようなその声色に、コウタは酷く同情した。

「ギャーッ!?!」

「ギエーッ!?!」

「グワーツ!?!」

「アババババーツ!?!」

「ガアアアア!?!」

「オオン!?!」

「ぬわー!?!」

「……」

こちらの戦闘音が止んだため、聞こえないふりをしていた様々な悲鳴が否が応にも耳に入ってきた。

「……行くか?」

口の端を引きつらせたコウタが隣にいるアリサに、無駄だと分かっているがそれでも聞いた。

「行くしかないでしょう……」

同じくひきつった顔をしていたアリサは嫌々ながらもそれを口にした。

「その必要は無さそうよ……」

頭痛を押さえられないとばかりに頭に手をやっていたサクヤが、あ

る一点を見つめながらそう呟く。サクヤに倣ってコウタとアリサはサクヤの見つめていた場所に目をやると、丁度壁の一部が膨らんだところだった。

「あー……」

コウタとアリサが何とも言えないような声を出したと同時に、膨らんだ壁が轟音とともににはじけ飛んだ。

凄まじい煙と、それに遅れて何かの破片のような物がバラバラと辺りに散らばった。その一部が地面を滑り、アリサの足にこつんと当たって止まった。

引きつった顔で見つめると、それが今しがた自分らが対峙したアラガミであるシウウの顔の破片であることが分かった。

アリサは周囲を見回した。思った通り。散らばった破片は全てシウウの物だった。

「これ……一体だけのじゃないよね？」

「そうね……軽く見積もっても三体分かしろ？」

コウタの言葉にサクヤが答えた。

三人は互いに目配せし、それからどこかうんざりしたように同時にため息を吐くと未だもうもうと立ち込める煙の中へ入り込み、その奥で戦っているであろう我らが隊長の下へ向かって行った。

一歩進むごとに悲鳴や轟音は大きくなり、その度に三人はどんどん気が滅入っていった。

そして煙を抜けた先に三人が見た光景は、挑発フェロモンを頭からかぶり、付近にいたすべてのアラガミをたった一人で受け持ち、文字通りちぎっては投げちぎっては投げ飛ばすカカシの姿だった。

「ガアアア!!!」

編隊を組み突撃してきた三体のシユウを神機を振り、地面に叩き落とす。

「ウギヤツ!?!」

「グエツ!?!」

そしてカカシは対峙していたコンゴウの破損した顔面に呪刀をねじ込んで一息に殺すと、流れるような動作で振り向きと同時に三体のシユウの首から上を刎ね飛ばした。

「グラアアアア!!!」

「邪魔ー!」

「アババ―ツ!?!」

入れ替わる形で襲い掛かってきたオウガテイルの群れを、カカシは神機の一振りでも事も無げに全滅させた。

「シャ―ツ!!!」

凄まじい勢いで突っ込んできたボルグ・カムランが突進の勢いを乗せた尻尾突きを繰り出した。

カカシは慌てる事無く突っ込んできたグボロ・グボロの砲塔もろとも頭を叩き割り終えると、緩慢ともいえる動作で迫りくる針の側面に呪刀を添え……。

「マジかよ!?!」

あまりの光景にコウタは目を剥いた。あろうことかカカシは突き

出されたボルグ・カムランの針を弾いたのだ。カアンという甲高い金属音と共に、ボルグカムランの針が魔法の様に別方向へと逸らされていく。

「GRRRRR!?!」

逸らされた針の先にはヴァジュラがいた。ヴァジュラは足を止めていたカカシに向かって電を伴った飛び掛りをするために力を溜めていた最中だった。

避ける間など無かった。騎士の渾身の突きが、獣神の眉間に過たず突き刺さった。

「ARRRRRGH!?!」

ヴァジュラは悲鳴を上げ、狂ったように前足を動かして針を抜こうと躍りになった。

「ギエーッ!?!」

一方ボルグ・カムランはというと、一瞬でも針を抜こうと気にかけて、それどころでは無いとカカシに意識を向けた時には、その無防備に空いた口の中に無数のレーザーを叩き込まれていた。レーザーはあつけなくボルグ・カムランの口内を突き抜け、それだけに飽き足らず頭部を木っ端微塵に吹き飛ばした。

カカシは倒れ伏す騎士に目もくれず、未だ針を抜けないでいるヴァジュラに向かって人知を超えた勢いで突っ込んでいった。

「ガアアアア!!!」

やっとの事で針を引き抜き終え、前方から尋常では無い速度で突っ

込んでくるカカシに向かってヴァジュラは雷球を発射した。

膨大な電気が込められた雷球は地面を融解させながらカカシがいた場所に着弾した。

「あ!?!」

三人はそろって声を上げた。しかしそれは心配のための物ではなく、またこいつやりやがったという驚きと呆れの声だった。

カカシは着弾の直前に跳躍していた。空しく外れた雷球の衝撃に背を押され、カカシはさらに速度を上げ、ヴァジュラを飛び越しながら真上から神機を振り下ろしながら前方へ一回転。そのままヴァジュラの背後へ着地した。

その一瞬遅れてヴァジュラの体が左右に真っ二つに裂けた。

世にも珍しいヴァジュラの開きである。

驚異の光景に三人はいろいろ言いたいことがあったが、カカシから逃げようとするアラガミへの対処で手いっぱい、とてもじゃないが口を利けるような状況では無かった。

地獄のような混戦は、おおよそ三十分ほど続いた。また、分かり切った事ではあるが、その混戦の8割ほどを葬り去ったのがカカシであつたのは言うまでもない。



一人を除き疲労困憊の第一部隊の面々は体を引きずるようにして撤収の準備に入っていた。

あれだけ動き回っていたにもかかわらず、息一つ乱していない上にどこか上機嫌に鼻歌No Way Backまで歌いながらシユウ

かろうじて原型が残っているのがこいつしかなかったからコアを摘出しようとしている隊長に、三人は恨みがましい視線を送っていた。

そしてカカシが今まさに捕食形態を展開した神機の顎をシユウに食らいつかせようとしたその時、それを制する声が面々の背後からかけられた。

三人はその声になんな馬鹿など驚愕に目を見開きながら背後へと振り向く。

「やあ」

そこにいたのはソーマを引き連れて悠々とこちらに向かって来る榊博士の姿だった。

「博士!?! 何でこんなところ!?」

コウタの疑問に榊は答えず、ただ第一部隊の面々に説明は後だと言いながら、彼らを物陰へと押しやった。

任務概要の説明の時にも感じた釈然としない思いで博士を見つめていたアリサ、コウタ、サクヤだが、この後の展開を知っているカカシはまあまあと彼らを諫め、博士に倣って彼らの背中を押しした。

胡散臭い榊に言われるより、カカシに言われたのでは仕方がない。渋々頷いた彼らは急かされるまま、物陰へと身を隠した。

彼らが息をひそめた事により、寺院は再び静寂へと包まれた。どんな物音が出ようとも、降り積もった雪が音を吸収し、無音の世界を作り出すのだ。かろうじて聞こえるのはすぐそばにいる仲間たちの息遣いや風の音だけ。

風に揺られて廃屋の一部がキイキイと軋み音を出し、もう少し時が経てば雪の重みで自ずと倒壊するだろうことを予感させた。

この地域には電灯は無く、光源は天に座す月明かりのみである。崩れ、破壊され、誰にも顧みられる事の無い人工物。突如として現れた荒ぶる神の残骸が月明かりに照らされ、それを俯瞰して見ていると何とも言えないノスタルジックな思いを抱かずにはいられない。

人の気配が無く、命の気配すらなくなったこの場所は、もしかすると死者の世界とはこのような場所なのかもしれないという考えが漠然と思ひ浮かんでくる。

ほうつと口から出す息は白く、あまり意識していなかったが動いていないとゴツドイーターといえどもここは少し寒い。

ただでさえ露出の多い服装のアリサが思わず自らを掻き抱き、まだなのかと榊に視線で訴えかける。

榊はというと懐から懐中時計を取り出し、何やら真剣な顔で時間を確認し、それからしまい込むと再び前へと向き直る。

と、次の瞬間榊の真剣な顔は満面の笑顔へと変わった。

「来たよお……！」

響められた声は、しかし喜色に滲んでいて、今にも小躍りしてしまふような雰囲気全身から放たれていた。

何だ何だと榊の視線の先を追っていくと、檻褸布を纏った人影がシユウの死骸に近づいているところだった。

榊を除く全員が物陰から飛び出し、檻褸布の人影を取り囲んだ。

その者は、ソレは彼らの気配を感じ取って、ゆっくりと振り返った。

ソレは、一見すると人間の少女のように見えた。が、良く見てみるとソレは明らかに人でない事が分かった。

病的なまでに白く青白い肌、白い器官が頭から生えており、遠目から見れば髪の毛の様に見える。赤い瞳は興味深げに取り囲む面々らの顔を一人ずつ凝視し、最後に唯一神機を構えておらず榊と同じように笑みを浮かべるカカシに目を向けた途端、目を輝かせた。

ソレは豹の様に身を屈めると、辛抱堪らんといった具合でカカシに向かつて飛び掛かった。

「イタダキマス!!!」

あまりにも突然の事で、誰も反応できなかった。辛うじてソーマが割って入ろうと体を動かしかけたが、そうするにはいささか距離が開きすぎていた。

そうこうしている内にソレはぐんぐんカカシに迫って行き、あわや押し倒される寸前に、カカシの姿が霞の如く消え去った。

「ふにゃ!?!」

ソレも、他の面々も面食らったように呆けた顔をした。何せ一瞬で姿を消し、消えたと思っていたらソレの背後にいて、あまつさえソレの態勢を整えて両足で着地させる手伝いをしていたのだから。

「いやー(´)苦労様!」

うにやうにやと動こうとするソレの肩を押さえるカカシと第一部隊の面々にねぎらいの言葉を掛けながら、サカキはゆっくりと歩み寄った。

「ソーマもここまで連れてきてありがとう。君のおかげでこの場に居合わせることが出来たよ!」

「礼などいい。それより、どういうことか説明してもらおうか」

榊はもちろんだともと呟くと、特に前置きする事も無く口を開き始めた。

「いや、『彼女』がなかなか姿を見せない物だから、試しに付近一帯の『餌』を根絶やしにしてみようかと思ってね」

そう言いながら榊はカカシの方に目を向けた。カカシは目を逸らした。

「どんな偏食家だろうと空腹には耐えられないだろう? そしてそんな時にカカシ君という『ごちそう』が現ればきつと姿を見せると思っていたよ」

「え?!? じゃあカカシはおびき寄せるための餌にされた……って事!?!」

「博士、いくらなんでもそれは酷いです!」

「ドン引きです!」

「チツ……悪知恵だけは一流だな……」

ぎゃあぎゃあ喧しく騒ぎ出した三人を無視し、ソーマは顔を顰めて吐き捨てる。

「えくと……博士、この子は……子? ていうか人なの?」

騒ぐだけ騒いで落ち着きを取り戻したコウタが、拘束を振り払おうと藻掻くソレを指さしながら困惑気味に博士に問いかけた。

「そうだねえ……立ち話もなんだし、一先ず私のラボへ行こうか」

榊はソレの方へ目を向け、意味深に笑った。



「ええ〜!!?!」

榊のラボの中で第一部隊の面々の驚愕の音が響き渡った。

「あの……今、なんて!?!」

とサクヤ。

「うむ、何度でも言おう。これはアラガミだよ」

「あ、アラガミい→!?!」

事も無げに言う榊に、信じられないとばかりにコウタが目を剥いた。

「あ、ああ……」

アリサにいたっては驚きすぎてまともに言葉を発する事すらままならなかった。

「まあ、落ち着きなよ。これは君たちを捕食したりなんかしないよ……一人を除いてね」

そう言つて榊はカカシへと目を向ける。カカシは時折飛び掛つて

くるソレをひよいひよいとかわしており、榊からの視線に気が付くとにこりと笑った。

「知つての通りすべてのアラガミは『偏食』という特性を有している」
「アラガミが、個体独自に持つ捕食の傾向……ですよね？」

アリサの捕捉に榊は満足そうに頷くと、説明を続けた。

「その通り、君たち神機使いにとっては常識だね」

言いながら榊はちらりとコウタを見る。コウタは目を逸らした。

「このアラガミの偏食はより高次のアラガミに対して向けられているようだね。つまり、我々は既に食物の範疇に入っていないんだよ。誤解されがちだけど、アラガミは他の生物の特徴を持って誕生するのではない」

「捕食した物の性質を取り込み進化している、ソレもすごいスピードで。でしょう？」

ソレの額にデコピンを当てて撃退しながら、カカシが言った。

「流石、彼の言ったように凄いスピードで進化していつてる。結果として、多種多様な進化の可能性が凝縮されてるんだ……」

「つまりこの子は……」

博士の言いたいことに察しのついたサクヤはぼそりと呟き、ソレに目をやる。

「うん、これは我々と同じ『とりあえず進化の袋小路』に迷い込んだもの、ヒトに近い進化を辿ったアラガミだよ」

「人間に近い……アラガミだと!？」

ソーマは驚愕や嫌悪やその他さまざまな感情が凝縮された目でそれを凝視した。

「そう、先ほど少し調べたのだが……」

ソーマの生い立ちを知っている榊は彼の激情を理解しており、あえて触れずに流すことにした。それに触れるのは今では無いのだ。

「頭部神経節に相当する部分がまるで人間の脳のように機能しているみたいだね、学習能力もすごいと見える……実に興味深いね」

互いにフェイントをかけながらけん制し合うカカシとソレに目をやりながら、榊は笑みを更に深め、手をワキワキさせていた。好奇心が抑えきれずに外部に現れた証拠だ。本当なら今すぐにも研究したいに違いない。

「センセイー!」

「はい、コウタ君」

コウタに呼ばれ、榊は不気味な笑みを張り付けたままそちらに向き直る。

「大体の事は分ったというか……まああんまり分からなかったんですけどー、こいつのゴハンーとか、イタダキマスーとかって何なんですかね?」

「ゴハン!?!」

コウタのゴハンという発言に敏感に反応したソレは、カカシへの猛攻を止め、目を輝かせてコウタの方へ顔を向けた。

「こいつが言うとは洒落にならないのですけど！」

「言った通りアラガミの「偏食」の傾向の基本として自らと似たような形質の物は食べないんだよ。ただ、そうは言っても本当に空腹の際は不味かろうが何だろうがガブリ、だろうけどね」

身構えたコウタに油を注ぐような榊の発言に、彼はぎよつとなつて更にソレから距離を取った。

「アラガミっていうのは知つての通り彼らの俗称だけど、実際にいくつもの個体が我々のイメージする『神々』の意匠を取り込んでいる例が各地で報告されているんだ。一体彼らが何を考えてそんな生態を取っているのか、実に興味深いじゃないか。そんな中で完全に『人』の形をしたその子は、更に貴重な一つのケースなのさ」

感極まったように天を仰ぐ榊を一瞥し、全員の視線はカカシと熾烈な争いを続けるソレへと注がれる。

「おっと、話が脇に逸れちゃったね。勉強会はこれくらいにしよう」

ぶるりと体を快感に震わせながら、榊は話を締めにかかった。

「……最後に、この件は私と第一部隊だけの秘密にしておいて欲しい……いいね？」

「ですが……教官と支部長には報告しなければ……」

「サクヤ君、君は天下に名だたる人類の守護者ゴッドイーターが……」

サクヤの名を呼ばわりながら、榊は大股で一步一步彼女の下へと近づいて行く。

「その前線拠点であるアナグラに秘密裏にアラガミを連れ込んだと、そう報告するつもりなんだね？」

「それは……しかし、一体何のために……？」

普段通りの柔らかい口調なのだが、その語気には有無を言わせぬものが含まれていた。

「言っただろう？ これは貴重なケースのサンプルなんだ。あくまで観察者としての私個人の調査研究対象さ！ 大丈夫、この部屋は他の区画とは通信インフラやセキュリティ関係も独立させてあるんだ」

榊は顔をずいと近づけた。サクヤは思わず仰け反って顔を離らす。

「君だって、今やっている活動にも余計な突っ込みを入れられたくないだろう？」

「ッ!!？」

たじろぐサクヤに畳みかけるように、榊は他の皆には聞こえない様に耳元でそっと囁いた。

予想外の言葉にギョツとするサクヤに満足気に頷くと、榊は声量を戻した。

「そう、我々はすでに共犯なんだ！ 覚えておいて欲しいね！」

白々しい。カカシ以外の全員がそう思った。

「イタダキマス！」

カカシと両手を合わせ、力比への恰好で踏ん張るソレは元気いっばいに大きな声で言った。

「彼女とも仲良くしてやってくれ……ソーマ、君もよろしく頼むよ」

「ふざけるな！ 人間の真似をしていようが、バケモノはバケモノだ！」

案の定、帰ってきたのは拒絶の言葉であり、吐き捨てるように言う
とソーマはそのままラボを出て行ってしまった。

「……」

コウタはソーマが出ていった後もしばらく扉を見つめていたが、や
がて目を逸らし、ソレの方へと目をやった。

ソレはすでにカカシとの力比べを止めており、コウタと同様にソー
マの出ていった扉を見つめながら悲し気に眉尻を下げていた。

気まずい雰囲気の中、真つ先に動いたのはカカシだった。彼はソレ
の下へと歩み寄った。

困惑気味にソレが見上げると、そこにはやわらかい笑みを浮かべる
顔があった。

「君に伝えたいことがあるんだ」

カカシはソレの目線に合いように屈みながら、ひしと抱きしめ、ソ
レにだけ聞こえるようにそつと囁いた。

「ありがとう」

カカシの言った言葉の意味を、ソレは理解することが出来なかつ
た。これから先、様々な事を学習し、情緒を発達させていっても恐ら
く理解する事は出来ないだろう。

しかし、彼から与えられた温もりの意味だけは、この時のソレでも
理解できた。

それは下げていた眉尻を徐々に戻し、再び天真爛漫に顔を綻ばせると元気いっぱいに叫んだ。

「イタダキマス！」

カカシは瞬間移動めいた素早さでそれから離れ去った。

すったもんだであったものの、こうしてソレ、改め『シオ』と第一部隊の面々との初邂逅は終わった。

その後名前を決めるのにどうのこうの、服を着せるためにあーだこーだとありはしたが、種族の垣根を超え、徐々にその仲を深めていくのだった。

支部長が戻ってくるまでの短い期間だったが、中々どうして優しい日々は過ぎていくのだった。

原初の螺旋

バラバラというローターの音で、ふと目を覚ます。どうやらいつの間にか眠ってしまっていたらしい。

欠伸をし、目尻に生じた涙を払いながら眠気を覚ます。

「お目覚めですか？」

ヘリのパイロットからかけられた言葉に曖昧に答えながら、窓の方へ目を向ける。

窓の外は陰鬱な曇天で、時折生じる稲妻が空を不気味に照らしていた。

見てるだけで気分が悪くなっていく空の光景に、やれやれと首を振ると視線を室内へと戻す。

パイロットと彼、カカシとの間に会話は無く、室内に聞こえる音と言えばローターの音のみである。

そもそもヘリのパイロットはヨハネス支部長直属の部下である。他愛のない会話を仕掛け、ふとした拍子にボロが出て伝えてはいけない情報を口走ろうものなら、たちまち支部長に伝わり、良からぬことになるのは明白である。

元より会話をするつもりは無いのだから、ここは黙っているのが利口というものだ。

カカシは座席に深く身を沈め、はてなぜ自分はこんな空の上にいるのだろうか、未だ眠気の抜けきらぬ頭で思い出そうとしていた。

額に手を当て、頭の奥底に埋没する記憶を掘り送す作業に没頭すること数分、おぼろげながら過去の光景が見え始めてきた。

そうだ思い出したてきたぞ。

カカシは浮かんできた過去のビジョンを再び追体験する。

それは今より1時間ほど前、極東支部へ帰ってきたヨハネスにカカシは呼び出されていた。

「やあ、苦勞、しばらく留守にしていたが、ヨーロッパ出張中も君の活躍は耳にしていたよ」

手を腰の後ろで組んで一枚の絵の前で佇んでいたヨハネスが、カカシが部屋に入ってきて来るや向き直ってそう言った。

「どうやら期待通りの働きをしているようだね。極東支部長としても誇りに思うよ」

ただの一声で人々を掌握できるような朗々とした声が、微笑みと共に放たれる。

通常の間がその声を耳にすれば、たちまち彼の言葉に耳を傾け、聞き入ってしまう事だろう。そしてあつという間に従順な犬の出来上がりだ。

ただ残念な事に彼の目の前に居るのはただの犬ではなく、首輪をつけていてもなお制御の利かない真正銘の埒外の大狼であった。

大狼はヨハネスの声を聴いても何ら反応することなく、ただいつものように曖昧に微笑んで話の続きを待っていた。あたかも従順な犬の様に。

「さて、あまり時間も無いので、手短かに話そう」

元よりそんな程度で従順な犬に仕立て上げられるとは思っていないヨハネスはこれを許容し、言った通り簡潔に話の概要を話し始め

た。

「君を呼び出したのは外でもない。以前手紙で話した特務任務についてだ。特務についての説明は手紙でしたから省かせてもらう。今回君に行ってもらおう特務はコアの回収だ。回収する相手は」

そこでヨハネスはいったん言葉を切り、カカシを注視した。この特務の相手の名を聞き、カカシがどのような反応を見せるのか。怖気づくだろうか？ それとも逆にやる気を出すのだろうか？

リンドウはどちらかと言えば前者側だった。ならば彼はどうであろうか？

「超大型アラガミ、平原の覇者『ウロヴォロス』だ」

さあどうだ？ 怖れか？ 蛮勇か？ ヨハネスはカカシの瞳を見た。何の動揺も無く、凧いだ海面を思わせるような一切の感情のこもっていない瞳を。

「

ヨハネスは面食らった。あのリンドウですら動揺を隠しきれず、弱音すら吐いた相手だというのに。自分が日本を離れている短い間に、カカシは更に制御の利かない怪物へと進化してしまったようだ。

ヨハネスは認識を改めた。すでに平原の覇者程度では、目の前の大狼を動揺させるに値しないらしい。

「前任者のリンドウ君は私によく尽くしてくれた。彼ほどの人物が失われたのは大きい。今はそれに勝る逸材がここにいる」

ならば新しく首輪をかけ直せばよい。何度も。何度でも。要はそ

の時までこちらの制御下にあれば良いのだ。ヨハネスは動揺を悟られまいと、やや語気を強くしてカカシへの信頼をアピールする。

並の人間なら即座に舞い上がり、たちまち虜になるようなヴォイスに、カカシは眉一つ動かさず笑顔の仮面を被り続ける。

「ツ君には期待しているよ、頑張ってくれたまえ」

ヨハネスは顔を背け、カカシに背を向けて激励の言葉を吐いた。カカシにはヨハネスの胸中など微塵も理解しておらず、ただああ、もうそんな時期かあと漠然と思っただけなのだが、それを悟れる者はこの場にも、ましてこの世の何処にもいなかった。

ともかくそんな事があった。

(そーいやそーうでしたねえ……それにしてもウロヴオロスか。はーめんど)

回想を終え、上を向いて息を吐くカカシはそんな事を思った。

『ウロヴオロス』

山のような巨体に見た目通りのタフネスを併せ持ち、並の支部なら一個体で壊滅させられるような真正銘の怪物。

それに対峙する己は、ヴァジュラやボルグ・カムラン、クアドリガのような大型アラガミが相手でもそれなりに動けるだけのゴツドイターだ。

果たしてそんなちんけな己がああの大巨体を相手にどこまでやれるのだろうか？ うんうん唸って考えてみるも、対峙したことが無い相手だと判断が付かず、考えてから三十秒程度で思考を放棄した。

結局のところ百聞は一見に如かず。考えるだけ無駄だ。

考え事を止めて持無沙汰になったカカシはバックバックをあさり、アイパッドを取り出してイヤフォンを耳に取り付け、適当に曲を掛けた。

途端に耳を流れるのはこの地獄のような世界でもなお抗う事を訴える男の曲だった。

「それ、何て曲です？」

イヤフォンから漏れ出ていたらしい。パイロットは後ろをちらりと見ながら聞いてきた。

「こんな世界でも諦めなかった男の曲さ」

「そんな人がまだこの世界にもいるんですね」

「……——ッ」

そうです、だからまだまだこの世界も捨てたもんじゃないですよ。そう言おうとして、開きかけた口をカカシは閉じた。

かわりに立ち上がり、ハンガーにかけられた神機を手を取った。

「ここで下ろしてください。後は自力で飛びます」

「ちよ、まだ投下地点まで距離がありますよ!？」

「そうは言っても、このままだと撃ち落とされますよ」

「……え？」

カカシの言葉を、パイロットは理解できなかった。

撃ち落とされる？ 何に？ まさか……!？」

「そんな訳がありません！ あの怪物とはまだかなり距離が」
「おそらく俺のオラクルを感じ取ったんでしょね。それでも数キロ先から感じ取るとは、こいつは相当強力な個体らしいですね」
「ま、まさかあなたも？」

返答代わりにカカシは扉をこじ開けた。

「と、飛ぶって、ま、まさか！」

「帰りは頼みますね」

カカシは返答を聞くよりも早く、ヘリから飛び出した。後方から掛けられた声は、耳を聳する轟々と言う風の子音にかき消されて消えた。もとより何を言われようが飛び出すつもりだったので、聞こえずとも良かった。

外に飛び出たカカシはあらかじめ捕食形態をとらせた神機から勢いよくオラクルを噴出させ、前方で向きを変えて基地に戻ろうとするヘリを追い越して目的地に向かって全速力で飛ばした。

ヘリすら凌駕する勢いで高速飛行し、ぐんぐん前へ進んでいくカカシ。

「ッ!？」

十分ほど飛んだあたりだろうか。カカシは何か気づき、すぐさま横に逸れた。

その一瞬遅れて極太の光線が通過した。

「チッ」

カカシは舌打ちすると今度は右に逸れた。同じように光の束が一

瞬遅れて通過した。

たちまち光の弾幕に襲われたカカシは右に左に上に下に、とにかく一か所に止まらず、動き回りながら速度を落とす事無く飛行する。

どれだけの間そうしていただろうか。体感では何十分の間そうしていたかと思っていたが、実際はほんの一分ちよつとの出来事だった。その事実には思わず舌打ちが出る。

と、感覚のセンサーに巨大なオラクルの気配が引つ掛かり、カカシは一際太い光線を降下する事でたやすくかわすと、そのまま隕石じみた勢いで地面に降り立った。着地の衝撃で大地がまるで隕石の落下じみて爆発する。

「……」

爆発の衝撃で舞い上がった土埃を抜け、カカシはその先で佇む者を見上げた。

山のような巨体に加え、苔むした体はまさしく山のようにあり、腕の様に見えるそれは束ねられた触手で、あれが紐解かれれば無数の鞭となり、敵対者を津波の如く襲う。顔面は無数の複眼で覆われており、一目見た瞬間に根源的な恐怖を呼び起こされるほど悍ましい。

『……』

「……」

両者に言葉は無い。挨拶はすでに済ませた。後は互いに殺し合うだけだ。

『こちらα、監視対象はすでに目標と相対しております』

『了解、引き続き監視を継続します』

後方の物陰でヨハネスの命で密かに監視していた諜報員をちらりと見やり、それから何事も無く前方へ視線を戻す。向こうはもう待つつもりはないらしい。ならばこちらも待つてやる必要は無い。それに、先ほどの挨拶の礼を早々に返さねば気が済まなかった。

二者はどちらともなく動き出した。

『font:u247』きもちくて……たまらぬ……『font』

カカシが切り込むのと同時に、ウロヴオロスが右腕触手を地面に突き刺した。カカシは瞬時に横に小さく跳ねるようなステップを踏んだ。その瞬間足元から無数の触手が槍めいて飛び出してきた。

カカシは稲妻めいてジグザグに動きながら触手をかわしつつウロヴオロスへと接近。地面からの触手が牽制にすらならないと判断したウロヴオロスは攻撃を中止し、触手を地面から引っこ抜いた。

その隙はカカシからすればあまりに大きく、ウロヴオロスが触手を引っこ抜く間に懐に飛び込み、二度、三度と神機を振り下ろしていた。

『font:u247』しゃぶりたいむ……『font』

カカシの恐るべき斬撃は、しかしウロヴオロスのような巨体には掠り傷に等しい。まるで堪えた様子も無く、億劫そうに腕触手を振るいカカシを弾き飛ばそうとする。

カカシは避けようと思えば避けられるその攻撃を、あえて真っ向から迎え撃つつもりでその場にどっしりと構えた。

後方から見ていた諜報員は思わず何をやっているんだと口走った。ウロヴオロスのような大質量のアラガミの攻撃を前に棒立ちする者

を見ればそれは仕方のない感想である。

常人としては至極正しい。全くもって正論だ。そもそも一人で挑むこと自体狂気の沙汰なのだ。ならば慎重に立ち回る事こそが生存への道なのに、あの狂犬は何を考えているのか？

その感想は当然だ。既存の人類、既存のゴツドイーターですらその通りと頷くだろう。それが名無之カカシでさえなければ。

『なっ?』

『font：u247』お、おっぱげどん! 『font』

諜報員も、何ならウロヴオロスでさえも思わず声を上げた。

カカシは自らに向けて迫ってくる大質量の触手の束を大上段に構えた神機を振り下ろすことで受け止めたのだ。インパクトの中心から強烈な衝撃波が放たれた。衝突の威力のすさまじさを物語るように、彼の足元は陥没し、小さなクレーターが出来ていた。

『ツッ!!』

あの山の一撃を受け止める人類がいるなど予想できる訳が無いのだ。諜報員は人知を超えた光景に目を剥いた。しかしその後起こる光景に、更に驚愕する事となる。

「ガアッ!!」

カカシのシャウトと共に背中に縄めいた筋肉が膨れ上がり、神機にかかる力が二倍めいて膨れ上がった。呼応するように神機に光が灯り、刃が触手にめり込んだ。カカシはなおも力を籠めて踏み込んだ。刃は更にめり込み、半ばまで切り裂かれ、咆哮と共に一気に切断された。

ウロヴオロスはついに立つてられなくなりダウン。カカシは弾幕の密度をさらに濃くし、ここで仕留めにかかった。

さて突然だが、ゴツドイーターというゲームには任務の難易度というものがある。無印は1から10まで。2は1から15まで。リザレクションは1から14までであり、無印でウロヴオロスが登場するのは難易度5からである。

で、例えばリンドウが相対したウロヴオロスが難易度5相当の実力だったと仮定する場合、今カカシが相手をしているウロヴオロスの実力が難易度の何処に相当するかというところ……。

カカシは撃ち方を止めた。ウロヴオロスは度重なる射撃によって生じた粉塵に覆いつくされており、その向こうでどうなっているのか判別がつかない。

油断も慢心も無く、カカシは神機を近接形態へと変え、ゆつくりとウロヴオロスが倒れている地点へと近づく。

そしてある一点まで差し掛かった瞬間、粉塵が吹き飛ばされ、先ほどと比べ物にならない速度で触手が飛んできた。

もしこの個体の難易度を設定するとしたら、おそらく難易度14相当であろう。

「ぐっ?」

その速度はカカシの反応速度をもつてしても早かった。咄嗟に後ろに飛びのいたものの、バラ鞭のようにばらけて振るわれた触手の内の一本をかわし切れず、カカシは砲弾めいた勢いで後方へと吹き飛ばされていった。

『font: u247』 ぷももえんぐえげぎぎおもえちよつちよつ

ちよつさ！ 《font》

粉塵の中から現れたウロヴオロスの顔面はそのほとんどが吹き飛んでいた。辛うじて残った複眼も殆どが破損していたが、残った瞳は憤怒と憎悪で煌々と輝いており、致命傷こそ負ってはいるが力尽きるにはまだまだ程遠そうだった。断面から夥しい血液をぼたぼたと垂らしながら、平原の覇者は激昂して叫んだ。

『あ……あ……』

『どうした、彼が心配か？』

『え、あ……は、はい』

ヨハネスの声に平静を取り戻した諜報員は、あれをもろに食らえばさすがの狂犬といえどもひとたまりも無いだろうと、酷く真つ当な答えを返した。

『ふふん、まあそう思うだろうな。……だがそれは通常のゴツドイーターであった場合の話だ。よく見てみるといい。彼はもつと酷い』
『……え？』

ヨハネスに促されるまま、狂犬が吹き飛び、叩きつけられて倒壊した建物の残骸の方へ目をやった。

狂犬は瓦礫の山の中に埋もれ、動く気配さえない。当然だ。当り前だ。普通はあの巨体に撫でられただけで即死なのだ。人間とはそうあるべきなのだ。

これで勝負はついた。狂犬は草原の覇者の一撃で即死。任務の際に狂犬が何かしら不審な行為をしていないかどうか監視する役目はこれで終わりだ。自分の仕事はこれでお終い。

諜報員の男は瓦礫を刎ね飛ばし、二本足で立ち上がった狂犬の姿を目にしてもまだ否定していた。男の中の常識が、現実への認識を阻害

する。それは自らの正気を保つための致し方ない現実逃避であった。

瓦礫の中から姿を現した狂犬の姿は惨たらしい物だった。インパクトで体が爆ぜたとしか思えないほど胴体は破損し、わき腹からへし折れたあばら骨が肉を突き破って体外へと露出していた。

男はその姿を確認するや思わず吐き気が込み上げ、ヨハネスが見ている事を思い出さなければ吐いていただろう。

足元には夥しい血液が小さな池のように広がっており、その中心で幽鬼のように体をふらつかせていた狂犬は俯いていた顔をゆつくりと上げた。

『ヒイーツ!?!』

持ち上げられた顔を視界にとらえた瞬間、最早恥も外見も無く男は悲鳴を上げた。

狂犬の双眸は黄金の光で眩いばかりに輝き、べつとりと血でぬれた口は頬まで裂けんばかりに開かれていた。

普段の姿とは想像もできない程の変貌ぶりに、諜報員の男は戦慄を隠せない。しかしこの後に起こる変化に比べれば、それはあまりに些細な事でしかなかった。

ドクン、とあまりにも大きな鼓動の音が遠く離れたここにもまで聞こえた。鼓動と連動し、狂犬の体が急激に震える。体の震えはどんどん早くなり、しまいには体の輪郭がブレて見えるほどにまで高まった。

バキバキという悍ましい音がした。呆然とした面持ちで男が音の方向を見ると、狂犬の足元の血が、体に付着していた血が重力を無視して口元に這いあがり、体からバチバチと放出されていたオラクルと混ざり合い、歪み、軋み音を響かせて、それは下顎を覆う『牙』の形を取った。

「グルオオオオオ!!」

対する大狼は避ける素振りすら見せずそのまま直進。無尽蔵に生える触手の海を切り開きながら神速で突き抜ける。彼の通過した後には夥しい数の切断された触手がのたうっていた。

しかしかにかに大狼であろうとも無限とすら思える触手全て切り裂くことはできなかった。体のいくらかを触手で抉られ、あるいは貫かれた。だが一切怯むことなく大狼は突き進み、ついに触手の群れを抜けた。

触手の群れのその先に待っていたのは、瞳を輝かせ、エネルギーを充填し終え、今まさにレーザーを発射しようとしていた平原の覇者だった。

『font：u247』お●んころつくまん!!! 『font』

ウロヴオロスが叫び、レーザーは発射された。避ける間など無い。完璧なタイミングで放たれたレーザーに後方で見えていた諜報員とヨハネスは大狼の死を確信した。

「ガアアアア!!」

最早目前まで迫って来ていたレーザーを前に大狼は歩みを止めず、駆けながら神機を構え、なおも足を速め、そして……。

『馬鹿な!?!』

ヨハネスの絶叫に、男も同意だった。

何と大狼は振り抜いた神機をもってレーザーを弾き飛ばしたのだ。アニメやコミックでしか目にできない冗談のような光景に、二人はもはや言葉も無い。

ウロヴオロスもさすがにこれは予想外だったようで、レーザー発射の姿勢でしばらく固まっていた。大狼はその隙を見逃さず、両手で握りしめた神機でウロヴオロスの胴体を袈裟懸けに切り裂いた。

山のような巨体の大半がバツサリと切り裂かれ、切断面から夥しい血液が噴水めいて噴出した。

『——《font:u247》っおっことぬしい《font》!!!』

激痛で我に返ったウロヴオロスは激情に駆られて襲い掛かろうとしたとき、ふと触手を地面に突き刺したままであったことを思い出した。

「オ、オ、!!!」

それに気づかず大狼はさらなる一撃を加えようと神機を振りかぶった。

『《font:u247》そこ! 《font》』

ウロヴオロスは最早数本しか残っていない触手を集め、目前まで迫っていた大狼の真下から強襲を仕掛けた。

「グロロロロオオオオオ!!!」

大狼はそれを避けられなかった。30本あるうちの28本は切り飛ばせたが、残りの2本は他の触手よりもややタイミングをずらして突き上げられたため、対応が間に合わなかったのだ。大狼は2本の触手に腹部を貫かれ、絶叫を上げた。

『……』

二人の傍観者は怪物同士が戦う光景を愚者のように口を開けて見
ていた。それは様々な地獄を見てきた者の基準から見ても化け物じ
みていた。大狼は腹を貫いた触手を引っこ抜こうと手を伸ばした。

『font：u247』しゃぶりたいむ《font》!!!』

機先を制したウロヴオロスは大狼が掴む前に触手に力を籠め、自ら
の眼前へと高々と掲げた。身悶える大狼を前に平原の覇者は光を収
縮させた。

今度は外さない。瞳に憎悪を滾らせて、収縮する光の中に自らの思
いを込めた。先ほどの比では無いエネルギーが込められた光は、当た
ればさしもの大狼といえど死体すら残さず蒸発するだろう。

その瞬間を思い浮かべるだけでウロヴオロスは堪らなくなり、大狼
へと視線を向けた。どうだ？ 怖ろしいか？ 恐いか？ しかしど
れだけ泣き叫ぼうが止めてなどやらんぞ。貴様など死体すら消し
去ってやるわ！

そしてウロヴオロスは見た。憎悪と憤怒の視線の先の大狼の顔を。
愉悦に目を細めた怪物の顔を。

『font：u247』ふといしーちきん？ 《font》』

訳も分ならず困惑するウロヴオロスを前に、大狼は触手が空けた穴
の中に自らの手をつっ込んだ。

「馬鹿め」

大狼はウロヴオロスが策を察する前に自らの腹の内側の肉を掴み、
渾身の力で引きちぎった。傷口からスプリンクラーめいて血液が

迸った。

『font:u247』ぎろちんちん!? 『font』

勝ちを確信し、油断して近づけすぎたためにウロヴオロスが噴出した血液を眼球の大部分に被る羽目になった。そのせいで頭を振り、発射された光線は明後日の方へ飛んで行ってしまった。

「グワハハハハ!!! グワハハハハハ!!!」

大狼は哄笑し、ウロヴオロスが再び光線を放とうと収縮した光ごと大上段に構えて振り下ろした神機を持って切って捨てた。

『font:u247』うああおれもいっちゃうううううううううううううううううううう!!! 『font』

頭の半分を失い、更に胴体の大半を、そして頭から股下まで叩き割られれば、この世界でも有数の怪物といえどもお終いだった。

平原の覇者は右と左に真つ二つになり、ゆっくりと地響きを立たせながら倒れ伏した。

触手が力を失ってへたれ、着地した大狼は腹に突き刺さった触手を神機で切断して引っこ抜き、腕を貫いていた触手の一部を『牙』で噛みついて強引に引き抜き、ぺつと吐き捨てた。

大狼は引き抜いた触手を踏みしめながら俯き、嗚咽じみて震えた。そして彼は仰け反り、叫んだ。あたかも争いに勝利した獣のように。

「グロロロロオオオオオオ!!!」

『……それでも私は君を従えてみせるぞ』

最早直視できぬと任務をかなぐり捨てて逃げ出した諜報員の残したデバイスの中で、ヨハネスはかつてないほど凄惨な表情で言った。

彼の視線の向こう側で、大狼は延々と叫んでいた。迎えのヘリが来るその時まで延々と。

帝王様にも二種類あるけど、一纏めにするのはどうな
んだい！

何とかウロヴオロスの奴を倒し、コアを引っこ抜いて帰ってたおいは、傷が治りこそしたけど痛みがまだ体に残っており、その事をシツクザール支部長に言ったら今日はもう終わりで良いよと非常にそっけなく言い渡され、不貞腐れて寝た。

それにしても痛みを引き摺るなんて初めての事だった。何せどれだけ傷を負おうが帰還準備が終わったあたりにはもうすっかり治っていたから、何だか新鮮な気分になった。

寝っ転がったまま頭の上で腕を組んでずきずきする体の感覚を味わいながら天井を眺めていたら、気が付けば寝ていた。

次の日、完全回復した俺は支部長に榊博士のラボへと連れてこられて検査をさせられた。

何だ何だと困惑しながら、榊博士と支部長が仲睦まじくあーだこーだ言い合う姿に心ときめかせながらおいらはされるがままになっていた。

で、検査が終わって体調に何の問題も無い事が分かるとラボから出てって良いとモニターとにらめっこする榊博士から言い渡され、俺は頭の中で疑問符を浮かべながらエレベーターに乗り込んだ。また検査の説明の際にしきりに君は人間だと榊博士は連呼していたけど、まあシオちゃんの事調べまくっていたから比べる対象が欲しかったんだらうね。

なんてことを考えながらエントランスをうろついていると、ツバキさんに声をかけられた。

何でもリンドウさんの腕輪の反応が鎮魂の廃寺あたりで確認され

たとの情報が！

なんと！ それは朗報！

そういう訳で俺は第一部隊の面々を引き連れて、別に反応の発信源じゃないけど第二種接触禁忌アラガミだから討伐しなきゃいけない『プリティヴィイ・マータ』をやっつけに鎮魂の廃寺へ我、突入ス！（#
。D。）

ヤツケタ。

でもハズレでした。

腹の中を搔っ捌いて覗き込んでみるも、腕輪も神機も愛も勇気も女王氷鎧も出てこなかった。知ってた。（・ω・）

「あった？」

「コウタ君に俺は首を横に振った。

「無いわね……」

「最近の踏査隊、いい加減すぎます！」

腕輪が無かった事でサクヤさんは落胆の声を上げ、アリサさんは苛立たしげに語気を荒げた。

「まあまあ……、到着前に逃げちゃったかもしれないし……」

アリスさんを戒めるコウタ君だが、その顔は隠しようもなく落胆していた。

と、そこで彼らの疑問に答えるかのように近くで咆哮が聞こえた。俺たちは声の方向へと駆け出し、そしてその声の主である黒いヴァジユラ神属のアラガミを見上げた。

『天なる父祖』！ 天なる父祖じゃないか！ やったぜ！ どっちのピターが来るかひやひやしてたけど、こっちで良かったぜ！

簡単に言うと、無印からレイジバーストまでのディアウス・ピターと、リザレクション以降の捏造ピターがいて、リザレクションでリンドウさんを襲ったのは後者の捏造ピターなのだ。ふざけんあ！

で、わしが天なる父祖と言った無印ピターはクリア後のおまけに格下げされていた。リザレクションに俺が抱いている不満の一つだったりする。(もう一つはアリウス・ノーヴァ、お前だ!!)

ディアウス・ピター(正)は高台の上におり、俺たちを見下すように睨めつけていた。

その視線がうぜーし、どうせ殺さないと話進まないから、サクヤさんが決め台詞を言い終わらないうちに俺は奴に向けて神機を思い切り振った。

ザンツと派手な音を立てて高台ごと奴は切り裂かれた。けれどもやっぱり距離がある事と、別に何か特別な力を籠めたとかじゃないから殺しきる事は出来なかった。

でも情けない悲鳴を上げて反対方向に転げ落ちていった奴の姿を収めることが出来たから、僕、満足！

分かってたけど、やっぱり遠当てじゃ薄皮一枚しか切れないや。ソニツクキヤリバーが使えればこの距離からでも殺せ……殺……うん、無理！

「か、カカシ君、い、今の、何……？」

ただの遠当てだよー。だから殺しきれなくてスンマセ！ ていう思いを込めて謝ったけど、サクヤさんの反応は芳しくなかった。当り前だよなあ？ やるんなら殺し切れって話だもんね。出過ぎた真似をして申し訳ナス！

何か知らんが引いてたコウタ君とアリサさんに尊ゲージを上げつつ、我ら第一部隊は鎮魂の廃寺から撤収した。

その後タツミさんら防衛班の方たちと交流を深めつつ、防衛班が煉獄の地下街に追い込んだヴァジュラとかをなます切りにしたり、コウタ君の家族が住んでいる居住区に突っ込んだアラガミを怒りのままに粉々にしたり、家族が無事であったことに安堵するコウタ君を慰めながら日々を過ごしていたら、ついにその日がやって来た。

「リンドウの腕輪信号が、また確認された様だ。恐らく先日撃退したアラガミと似たタイプのものだろう」

出撃ゲート前でブリーフィングのために集められた俺たちに、ツバキさんはそう言った。

「前と同様、私情を捨てて冷静に任務をこなせ……良いな？」

繰り返し念を押すツバキさんに俺たちは頷き、いざ決戦の地である贖罪の街へ！

マータウゼー！ マータウゼー！ 前座に用はねえんだよ！ オ

ラ、ピター出せ！ ゲシゲシ

発見と同時に吠えて威嚇する癖を利用し、俺は急接近して口を閉じる前に銃形態にした神機の銃身を口内へねじ込んだ。

ふがふがとマータ目の前で見るとホントキモイなこいつが口を閉じる前に引き金を引き、体内から爆破して頭だけにしてやったぜ！

「おい隊長だからって先行しすぎるん……終わってる……」

イカしたヴォイスが聞こえたから後ろを見ると、後から駆けつけてきたソーマ君が唾然宇宙猫とした面持ちで俺を見ていた。その後から息を切らしてくるコータ君、アリサさん、サクヤさんも俺を見るなり同じような顔になった。変なのー。

ピターが来るまでまだ時間があったから、俺たちは集まって軽く作戦会議を始め、ピターが来るまでもう間もなくとヒバリさんからの通信を聞き、俺たちは持ち場に着いた。

「ギャオーー！」

咆哮とともに、ディアウス・ピターは姿を現した。段差上になっている建物の上に降り立ち、そして彼は目の前に俺たちが仕掛けた罠たつぷりのプリティ^エヴィ・マー^サタの死骸に釘付けになった。

周囲に敵がないのを確認し、ディアウス・ピターは歓喜の咆哮を上げて餌にむしゃぶりついた。

途端にベノム、封神、ホールドの状態異常に見舞われたディアウス・ピターー。

「やーい拾い食いして食あたりになってやんのー！」

「食い意地張っているからそうなるんです！」
「遠慮しないでたくさん食べてね！ あの人の分まで！」

状態異常に晒され、身動きの出来なくなったディアウス・ピターの顔面にコウタ君、アリサさん、サクヤさんが各々罵りながら集中砲火を浴びせた。

更にその隙に近づいていたソーマ君が、最大火力のチャージクラッシュを叩きつけた。

そしてダメ押しに上空にいたおいらが捕食形態の神機の顎を大きく開けて急降下。撃ち方が止まり、満身創痍のディアウス・ピターの首筋に噛みつかせ、地面に叩きつけた。

悲鳴を上げるディアウス・ピターに止めの一撃と、俺は眉間に呪刀をねじ込んだ。

ディアウス・ピターはがっくりとその場に崩れ落ちた。

『ディアウス・ピターの反応の消失を確認！ やりましたね！ カカシさん、さっそく確認を！』

勿論そのつもりだ。

呪刀を引き抜いて刀身の血を払い、ぴよんぴよん跳ねて皆に終わった事を伝えた。

コウタ君、サクヤさん、アリサさん、チャージクラッシュを食らわせてすぐさま離脱したソーマ君がゆっくりと向かって来る。

このままゲームのイベントのように、倒れ伏したディアウス・ピターの腹からリンドウさんの神機と腕輪を見つけ、本編は一気にクライマックスへと進行する。

俺はこの時、この後サクヤさんへのフォローをどうしようかとそれしか頭に無かった。もう終わったと思った。

反応が消えていると言われたから。オラクルを感じなかったから。言い訳はいくらだって言える。

ともあれ、様々な理由から、俺は気づくのが遅れた。

向かって来る皆の顔が陰しくなり、吠えるように後ろだという声を聴いて、やっと俺は背後で身動きする者の存在に気が付いた。

感じたのは強烈な憤怒と憎悪。平原の覇者から感じたものと全く同じものが、俺の真後ろ。息がかかるほんの近くから。

振り向こうと、体を動かす前に、俺の胸を、死神の鎌が貫いた。

鮮血が宙を舞い、誰かの悲鳴が空を舞う。

誰の声だろうと、頭を働かせるも、意識が急速に薄れてゆく。

背後で、死神の声が轟き、視界がブレ、気が付くと、俺は建物の壁にめり込んでいた。

全身を衝撃が走り、意識やたやすく闇の中へと沈んでいった。

意識が消える、その時に、頭の片隅で、首輪が外れる音が聞こえた。

月を呑む

「それで、検査の結果は？」

カカシがラボから出ていくや、ヨハネスは榊へと聞いた。

「彼に説明した通りだよ、ヨハン」

榊は振り返り、パソコンのモニターに映るカカシの検査結果を指さしながら言った。

「人間？ 人間だと？ 『アレ』が？ なあペイラー、君も見ただろう『あの姿』を。見たのなら、『アレ』を人間などとは軽々しくも口できるはずが無い！」

「もちろん見たよ。凄かったね。さすがは『人類の到達点』といった所だ」

力説するヨハネスに、ペイラーは笑みすら浮かべてさらりと言つてのけた。

「なに？」

ヨハネスは訝しむように眉を顰める。

「言葉通りの意味さ。君は少々数値だけに囚われ過ぎている。もっと視野を広く持たなくちゃね」

「どういう意味だペイラー？ 私が数値に囚われているだ？ 検査は君と私の手で執り行われた。間違いなどあるはずが無い！ 今の彼の体内オラクルの数値はウロヴオロスすら超えていたんだぞ！ もはや人間かどうかも」

声を荒げるヨハネスに、ペイラーはキーをタイプしモニター画面を検査結果からとある画像へと切り替え、ヨハネスにも見えるように椅子を引き、無言で見るように促した。

「これは……ッ!?!」

その画像を見るなり、ヨハネスは目を見開いた。

「バカな……こんな事が……!」

「凄いだろう。私も初めて見た時は大いに驚いたものさ。それこそ今の君みたいだね」

画像にはカカシの細胞の様子が写しだされていた。オラクル細胞と共存し、あまつさえ逆に取り込んで支配する画像が。

「彼の細胞はね、オラクル細胞を完全に支配しているんだよ。だから彼がアラガミになるなんてことはあり得ない。何せオラクル細胞よりも彼の細胞の方が強いんだからね。要するに彼は人間としてあまりにも強靱だったのさ」

「——ッ!」

その凄まじい事実にも、ヨハネスは絶句した。仮に榊の言葉が正しいとするのならば、それは、それではまるで……。

「人は神を模して造られたという。じゃあ荒ぶる神の力をその身に宿した人間を神に抗う戦士だとして、神の力を自らの物にしてしまった彼は最早神に抗う戦士などではなく、それは」

「——よせ、ペイラー。それ以上は……」

「……ああ、そうだね。すまない。少々気が高ぶりすぎた」

ヨハネスに諭されて落ち着いた榊は咳ばらいをし、脱線した話の軌

道修正を図った。

「ともかく彼は人間さ。どうしようもない程にね」

ヨハネスからの言葉はない。ただ拳をきつく握りしめる音と、ギリツと奥歯を噛みしめる音が聞こえるのみだった。

「……」

ペイラーは聞こえないふりをした。彼にはヨハネスの考えている事が手に取るように分かった。

な・ぜ・も・つ・と・早・く・現・れ・て・く・れ・な・か・つ・た・の・か。

ペイラーは胸中で嵐が吹き荒れているであろう友から意識を外し、去って行った彼について思いを馳せた。

——最早それは神そのものじゃないか。

ヨハネスに遮られ、最後まで言えなかった言葉をそつと胸の内で呟く。

神が人になるのか、人が神になるのか。その競争の果てを見たいと豪語した自分が、まさかその答えの一つを一足先に知る事になるなどとは。

(全く、君といると退屈しないね。……カカシ君)

榊はカカシの名を呟き、それから口の端をわずかに上げて、小さく笑った。

「リンドウの腕輪信号が、また確認された様だ。恐らく先日撃退したアラガミと似たタイプのものだろう」

出撃ゲート前でブリーフィングのために集められたカカシたちに、ツバキは淡々と言った。

調査班のその報告に一喜し、散々あちこちを駆けずり回った拳句に空振りに終わってしまい、その度に一憂していたサクヤたちだが、今度こそ当たりを引けたという確信があった。

というのも、前回空振りに終わったプリティヴィ・マータというヴァジユラ神属の接触禁忌種に指定されたアラガミを討伐した時、同じくヴァジユラ神属と思わしき新種のアラガミが現れたのだ。

その時はカカシが追いついてしまい、それからしばらくの間姿を現さなかったが、調査班によりリンドウの腕輪の反応が贖罪の街付近で確認されたらしい。

「前と同様、私情を捨てて冷静に任務をこなせ……良いな？」

繰り返し念を押すツバキにカカシたちは頷いた。

彼らの間に言葉は無い。言葉は無くとも、彼ら胸中には同じ思いが滾っていた。敵討ち。そして奪われたものを取り返すために。

カカシたちは互いに目配せし、無言のうちに思いを共有し、防衛班やその他のゴッドイーターたちの激励を背に、戦場である贖罪の街へと向かって行った。

「いよいよね。皆、気を引き締めていきましょう！」

街に着くなり、サクヤは全員の顔を一人一人見つめながら言った。アリサ、コウタ、カカシ、ソーマも全員が頷いた。

「俺たちがリンドウさんの敵を討つんだ！」

「いい加減うんざりしてたんです！ 今度こそ終わらせませす！」

「……とつと倒してアイツの神機を取り返す」

「……ええ、そうねソーマ。カカシ君もそう……カカシ君？」

士気は上々。口に出して改めて全員が同じ思いを抱いていることを再確認したサクヤは、胸の内に燻っていた激情をさらに燃え上がり、この復讐を必ずやり遂げようと強く決意した。

第一部隊の面々の力強い言葉に勇気づけられたサクヤは、その隊長であるカカシにメの言葉を言ってもらおうと振り返ったが、すでに彼はオラクルを吹かして駈け出していた。

「あのバカー！」

真つ先に動き出したのはソーマであり、駆けだしたソーマの後を、3人は慌てて追いかけた。

そして瓦礫で塞がれた教会の入り口付近で立ち尽くすソーマの背に追いついた3人は、呆然と佇む彼の視線の先を追い、そして同じように固まった。

そこにはすでに始末されて亡骸となったプリティヴィ・マータの残骸を放り投げ、刀身に着いた血を振って払っていたカカシがいたのだった。

「ええ……」

今まで散々カカシに驚かされた身であって、こういう光景を目の当たりにさせられるともはや驚きよりも呆れの方が上回るようになってしまった。

視線に気づき、カカシはいつも通りの笑みを浮かべてひよこひよことこちらに向かってきた。

「お前は……隊長だからって一人で突っ込むな！」

「そうよ！ ただでさえ何が起るかわからないのに……もつと考えるから動きなさい！」

「そうだよ！ 何かあったらどうすんだよ！」

「アホです！ ドン引きです！」

「(。 X 。 ;)」

全員からくどくどと説教を喰らったカカシはたじたじになり、ヒバリから通信で諫められるまでカカシは延々説教を喰らった。

そして解放されたカカシは黒いヴァジュラ神属のアラガミ、『デアウス・ピター』が来るまでの間に、仕留めたプリティヴィ・マータの死骸に罫を仕掛けようと提案した。

「いいね！ じゃあ俺はホールドトラップを仕掛けるぜ！」

「なら私はヴェノムトラップを仕掛けます」

「私は封神トラップを」

「ソーマ君は機を見てチャージクラッシュお願いね」

「……フン」

カカシの提案に承服し、各々が持ち込んでいたトラップ系のアイテムをこれでもかとプリティヴィ・マータの死骸に仕掛けた。

『皆さん、もう間もなくデアウス・ピターが作戦エリアに到達します！』

「だそうなのでみんな持ち場についてね」

ヒバリの通信とカカシの一声で各々が持ち場へとつき、その時が来るまでひたすらに待った。

(来い……来い……い……い……来い！ 早く来なさい！)

到着までの間はわずか2分。しかしサクヤにとっては永遠にも等しい時間だった。

ディアウス・ピターが姿を現すその時まで、サクヤの脳裏にはリンドウとの日々やそれが失われた時の光景が交互に現れ、心を延々高ぶらせていた。

「ギャオーー！」

(来た！)

咆哮とともに、ディアウス・ピターは姿を現した。

ディアウス・ピターは悠々と地面に降り立ち、そして彼は目の前にカカシたちが仕掛けた罠たつぷりのプリティヴィ^エ・マータ^サの死骸に釘付けになった。

周囲に敵がいなかったことを確認し、ディアウス・ピターは歓喜の咆哮を上げて餌にむしゃぶりついた。

途端にディアウス・ピターはベノム、封神、ホールの状態異常に見舞われた。

「やーい拾い食いして食あたりになってやんのー！」

「食い意地張っているからそうなるんです！」

「遠慮しないでたくさん食べてね！ あの人の分まで！」

状態異常に晒され、身動きの出来なくなつたディアウス・ピターの顔面にコウタ、アリサ、サクヤが各々罵りながら集中砲火を浴びせた。

「ああああああ!!」

サクヤは歓喜した。やっと敵が討てる！ やつとあの人の魂を私たちの元に取り返すことが出来る！

サクヤは引き金を引いた。サクヤは引き金を引き続けた。己の内オラクルが尽きるその時まで、憎悪と歓喜の赴くままにただ只管に撃ちまくつた。

「くたばれ！」

そんなサクヤを横目に、ソーマはふらつくディアウス・ピターの背後から近づき、その無防備な胴体に最大火力のチャージクラッシュを叩きつけた。

吹き上がる血飛沫とディアウス・ピターの絶叫に確かな手ごたえを感じたソーマは急いで後方へと離れた。

丁度その時3人のオラクルが尽き果てて撃ち方が止まり、上空で機を見計らっていたカカシが急降下してディアウス・ピターを地面に叩きつけた。

ディアウス・ピターは悲鳴を上げ、しかしそれもすぐに途絶えた。

「……」

カカシは何の感慨もなくディアウス・ピターの眉間に突き刺した呪刀を引き抜き、無造作に振って血を払った。

ディアウス・ピターはピクリとも動かない。カカシは試しに呪刀の先端で突いてみたが、動く気配は欠片もなさそうだった。

それで最早興味は失せたとしてもいうように死骸から目を離すと、カカシは振り返りぴよんぴよん跳ねて皆に終わった事を伝えた。

コウタ、サクヤ、アリサ、チャージクラツシユを食らわせてすぐさま離脱したソーマがゆつくりと向かって来る。

終わった。全員はそう確信し、ほっと胸を撫で下ろす。

やや拍子抜けだが、これでようやく人心地つけるといふものだ。

『ディアウス・ピターの反応の消失を確認！ やりましたね！ カカシさん、さっそく確認を！』

勿論そのつもりだった。早くあの不愉快なアラガミの腹を割き、一刻も早くリンドウの腕輪と神機の回収をして、それで初めてこの復讐は終わりを告げるのだ。

サクヤの逸る胸は、しかし命が尽きたはずの亡骸がカカシの背後で音も無く身をもたげる様を見て凍り付いた。

「え？」

隣にいたコウタの口から阿呆のような声が漏れた。あまりにも突拍子も無い事態に、全員は体を硬直させた。

凍り付く彼らをあざ笑うかのように、『ソレ』は音もなく姿を変え始める。それは蘇生というより、転生という表現が似合いそうだった。

黄色いマントがするすると縮み、代わりに出てきたのは死神の鎌めいた恐るべき翼だった。さらに破損した手足はより太く再生し、鎧め

いた装飾が付け加えられている有り様だ。

特に破損していた顔はますます禍々しく、雄々しく生える角は冠の如く。完全再生した死神はまるで狂気に取り付かれた帝王が如き血走った目を眼前の、この中で最も不敬な輩へ向けて。

「後ろだ!!!」

時間感覚が圧縮され、泥めいて停滞する視界の中、第一部隊の面々は動き出していた。

視界の先、やっと気が付いたカカシは咄嗟に跳び離れようと体に力を籠めようとしていた。が、そうするには、あまりにも気が付くのが遅すぎた。

早く、早く、早く。

緩慢な世界で、気持ちだけが逸るその先で、脳裏に浮かんだ最悪の光景と寸分違わぬ光景が、彼らの網膜に映し出された。

カカシの胸を、死神の鎌が貫いた。

「カカシ（くん）（さん）!!!」

鮮血が宙を舞い、悲鳴が空を舞う。

死神は串刺し刑に処した不遜にも反逆してきた愚か者を高々と掲げ、高笑いめいて咆哮するとびゅんと刀翼を振った。

カカシは人形めいて飛ばされ、凄まじい勢いで建物の壁に叩きつけられた。

衝撃に耐えられなかった建物は倒壊し、力なく横たわるカカシの体の上に轟音を立てて瓦礫の雨を降らせた。

「G A A A A A A A A A R H !」

死神は生き埋めになつた反逆者に勝ち誇るように咆哮した。
みし

「——テメエ!!!」

咆哮で我に返つたソーマはかつてない激情にかられ、胸の内で超新星爆発めいた感情の赴くままに突っ込んだ。

「G R O W L !」

「はあっ！」

たちまち死神とソーマとの間に火花散る激しい近接戦闘が繰り広げられた。

(速い……クソ！)

死神の鎌は恐るべき速さで振るわれ、攻勢への隙を見出せないソーマは防戦一方を強いられていた。ソーマの頭はすでに冷えていた。それは彼の類稀なるセンスが相手の力量を察したがためである。
みしみし

「何ボサツとしてやがる!!! さっさとアイツの所へ行くなり援護しやがれ!!!」

ソーマは激しい攻防の中で機を見いだすと、瓦礫の山の方向を指差して3人を怒鳴りつけた。

「わ、分かった！ アリサ行くぞ！」

「……はい！」

「ッ！ 分かったわ！」

3人は各々理解し、コウタとアリサはカカシの元へ、サクヤはソーマの援護をするためそれぞれ駆けた。

『……………え？ あ？ ど……………何で……………？ どうして生きてるの!! だつてオラクル反応は完全に消えていたんですよ!! どうして!!』
「狼狽えてる暇があったら……………ツ!!? ……ぐツ、さつさとアイツらのサポートをしろ!!!」

通信機に向かってソーマは怒鳴りつけ、返答を聞くよりも先に一も二も無く体を屈めた。そのほんの少し上を死神の鎌が通過した。

「ソーマー!」

屈み込んだソーマに向けて前足を無造作に振り下ろそうとした死神に向けて、サクヤは咄嗟に引き金を引いた。サクヤの不意打ちは見事成功し、死神を仰け反らせて間一髪の所で追撃を阻止する事に成功した。

その短い隙にソーマは距離を取り、乱れた息を整えた。

(畜生……………早くしやがれ……………! こっちは長く持たねえぞ……………!)

無尽蔵に垂れ落ちてくる冷や汗を乱暴に拭い去りながら、ソーマは眼前の死神を睨みつけた。
みしみしみしみしき

「ああ……………畜生!」

ソーマとサクヤが死神を引き付けているころ、アリサとコウタはカシの上のがれきの撤去を試みていたが、いかんせん大質量かつ大量の瓦礫を素手で撤去などゴッドイーターであったとしても無理な話であった。

「どいてくださいー！」
ばきばき

業を煮やしたアリサはコウタを離れさせると、神機を銃形態へと変え、撃った。

ばきばきばき

破碎音と共に瓦礫は吹き飛ばされ、その下敷きになっていたカカシを救出する事に成功したのだが、カカシの体の惨状を見て二人は小さく悲鳴を上げた。

貫かれた胸を中心に、夥しい血液が地面に広がっていた。叩きつけられた衝撃で手足はあらゆる方向へと折れ曲がり、とても生きているとは思えない有り様だった。

だが二人が悲鳴を上げた原因はそれではない。

ばきばきばきばきバキ

目だ。カカシは仰向けに倒れていて、閉じていた目がいきなり開かれたのだ。瞳孔が縦に細まり、まるで獣の眼のようになった悍ましい目が、二人を見つめ返した。

「か、カカシ……？」

コウタへの返答はなく、カカシはゆらりと立ち上がる。

バキバキバキバキ

「あ、あの、カカシさん……怪我……そんな、血がいつぱい……で……？」

恐る恐る近寄るアリサにすら反応することなく、カカシは、『ソレ』

は、ひしやげた足で一步一步ぎこちなく歩を進めた。

バキツバキツバキツバキツバキツ

一歩歩を進める度、ひしやげていた手足が逆再生の様に元の形へと戻ってゆく。それとは別に、彼の口元辺りから、バキバキという悍ましい軋み音が聞こえた。

「――」

二人はその悍ましい音が止むその時まで放心したように固まり、そしてゆっくりと振り返ったカカシの顔を見た瞬間、全身の毛が総毛立つような恐怖に見合われた。

「ハアアアアア……」

大狼は『牙』から蒸気を吐きながら恐れ戦く二人を一瞥すると、前を向き、ソーマとサクヤを追い詰める死神に向けて神機を向けた。

神機はミシミシと軋み音を立てながら、捕食形態へと移行する。

「フエン……リル？」

大狼の作り出した捕食形態を見て、思わずアリサは呟いた。

形成された捕食形態は従来の姿とは全く異なる姿をしていた。それは狼の頭を思わせるような奇抜な形をしており、まるで血に飢えた獣の如くガチガチと歯を鳴らしていた。

大狼は神機にさらに力を籠めると、『顎』の背部に推進機構を作り出した。推進機構から甲高い音が鳴り始め、音は徐々に高くなってゆく。

「あ……」

ついにジェット噴射めいてオラクルを放出し、力強く一步踏み出してその姿が掻き消えるというまさにその時、アリサは首輪が外れ、駆けだし、永遠に手の届かないところへ行ってしまう大狼の姿を幻視した。

「だ、ダメ!!!」

アリサは咄嗟に手を伸ばしたが時すでに遅く、伸ばされた手は空しく空を切った。

「——あ……」

「ロッロッロッロッロッロ!!!」

口から洩れた声は、人を超えし怪物の咆哮にかき消されて消えた。

大狼は推進機構から放出したオラクルによる高速移動で死神の横っ腹に食らいついた。

「ARRRRGH!?!」

「な、何!?!」

「お前は……!?!」

大狼は横っ腹に神機を噛みつかせたままなおも噴出するオラクルを高め、ついには死神を先ほどのお返しとばかりに建物の壁に叩きつけた。

突如視界から掻き消えた死神と、別人と見まがうほど大きく姿を変貌させた大狼に、サクヤとソーマは酷く動揺した。

「サクヤさん！ ソーマ！ あいつは!?!」

我に返り、後から駆けつけたコウタとアリサが大狼について聞くと、サクヤは震える指で目の前を示した。

サクヤの示す先で、彼らは死神と大狼の人知を超えた死闘を見た。

大狼は死神から肉を齧り取り、バースト状態へと移行していた。大狼の『顎』は従来の捕食器官からは考えられない程の強化比率を誇るらしい。彼のバーストによる変化は普段はうつすらと目が光る程度でしかなかったはずが、この強化では目だけではなく全身が眩いばかりの光に包まれていた。

「グオオオオオ!!!」

大狼は同じく光り輝く呪われた刃を死神の顔面を狙って袈裟懸けに振り下ろした。

「GROWL!」

死神は横に跳ねて斬撃をかわすと、お返しとばかりに刀翼を頭上から振り下ろした。

大狼は無造作に神機を振って刀翼を弾くと、脇をすり抜けるように前進しながら腹を切り裂いた。

「GROWL!」

しかしそれに少しも怯むことなく死神は素早く向き直り、両者は激しくノーガードで切り合った。

死神が前足を叩きつけ、大狼が切り裂き、死神が大鎌で切り付け、大

狼が食い千切り、死神が稲妻で焼き、大狼が突く。両者ともに立ち位置を縦横に変え、互いの命を奪い去るがためにただ只管殺し合った。第一部隊の面々はあまりにも壮絶な光景に動けないでいた。治り切っていない胸の傷が開き、大狼が膝をつくその時まででは。

「ッ！ カカシさん!!!」

反射的に駆け出したアリサは、膝をついて吐血する大狼の前に躍り出て盾を展開した。大狼の首を狙った死神の一撃をアリサの盾はギリギリのところで防ぎ切った。

「ぐうッ……！」

凄まじく重い一撃に、アリサは堪らず膝をついた。

（カカシさんはこんなにも早く重い一撃を受け続けていたのか……！）

思わず出た弱音は、背後から聞こえた苦し気な大狼の吐血の音により引つ込んだ。

「——ッ!!!」

心に生じた恐れや委縮した芯は、あの人の苦しむ声を聴き、たやすく元通りに戻った。

「ああ、ああああ!!!」

今やアリサに心に恐れは無く、唯々あの人の役に立ちたい、あの人と共に戦いたい、その一心で、体に残る衝撃を強引に撥ね退けたのだ。

「G A A A A A A A A A R H !」

「おっとそうはいかないぜ！」

「はあっ！」

「A R R R R G H ! ?」

アリサの決意に死神は何ら心動かされることがなく、ただ憎悪と憤怒の衝動に突き動かされるままに破壊されていない方の鎌を振りかざそうとしたが、立ち直ったサクヤとコウタの支援射撃を受けてたらを踏んだ。

「おい、平気か!？」

「グルル……」

ソーマに助けられながら立ち上がった大狼は、顔を死神に向けたまま目だけをソーマに向け、胸の部分をポンと叩いた。

「——お前……意識あったのか……」

「(U — x — U)」

その目は普段通りの彼の目だった。優しく、柔らかく、でもどこか悲しそうで、いつもどこか遠くを見ている不思議な目。狂気的な戦いぶりからは想像もできないほど落ち着いた瞳に見つめられたソーマは呆気にとられた。てつきり襲われるものだと思っていたから、拍子抜けも良い所であった。

大狼は肩を竦めて見せると、視線を死神へ戻し、再び知性の欠片も見受けられない雄たけびを上げ、影すら置き去りにする速度で突っ込んでいった。

「「アリサ!!!」」

丁度そのころ死神はサクヤとコウタを薙ぎ払って射撃を止めさせ、眼前にいたアリサに向けて雷球を撃ち込んだところであった。

「ああ……」

迫りくる雷球に、絶望的な面持ちをしていたアリサ。

「グルオオオオオ!!」

だが、知性の欠片も見受けられない雄たけびが聞こえたかと思えば、アリサの視界が黒で埋まった。

「え?」

アリサが疑問に思う前に、射線上に割り込んだ大狼は迫りくる雷球を切り裂いた。

切り裂かれた雷球は真つ二つになり、それぞれ別々の個所に着弾した。

「か、カカシさん?! 傷は? 傷は平気なんですか!?!」

「(U・x・U)つ」

大狼は何でもないとでも言う様に左手をひらひら振って見せると、素早く振り返りながら斬撃を放ち、背中を狙った死神の鎌を弾いた。

「——もう、あなたはいつも無茶ばかりして!」

大狼の差し出された手を取って立ち上がったアリサは開口一番、そう言った。今言うべき言葉じゃない事はアリサとて重々承知なのだ、言わずにはいられなかったのだ。

「……」

対する大狼はいつものように曖昧に目を細めた。口元は『牙』で覆われているからわからないが、同じくいつも通り曖昧に微笑んでいるであろうことは察せられた。

「はあ……もういいです。あなたがこういう場面で言う事を聞いてくれたことなんて、一度だつてありませんからね」

言いながら、アリサは神機を構えた。

「……ごめんね」

同じ様に神機を構え、攻め時を窺っていた大狼は不意に謝罪の言葉を述べた。

アリサに言葉は無い。ただ悲しそうに大狼の顔を一瞥すると、口をキュツと結び、果敢に死神へと切り込んで行った。

「やあつー！」

「GROWL！」

死神の前足でのフックを屈んでかわし、跳ね起きる勢いで死神の体を切り裂く。しかし、硬い体毛と強靱な筋繊維によつて阻まれ、アリサ渾身の一撃は薄皮一枚程度を切り裂くのみで終わった。

だが大狼から一瞬でも注意を逸らすことに成功したアリサは、冷や汗をかきながらもほくそ笑んだ。

勝てない事は分っている。それはアリサだけでなくサクヤもコウタも、ソーマとて承知の上だ。

この戦いの勝利条件はいかに大狼に攻撃を当てさせるかである。

自分たちは徹底的にフォローに回る。全員は無言のうちにそれを理解し、各々そのために動き出した。

「ガア!!!」

「ARRRRGH!?!」

アリサの稼いだ僅かな隙に大狼は死神の懐へと入り込み、神機を一閃。咄嗟に避けようとしたところをソーマ渾身のチャージクラッシュがぶち当たり、死神は逆に大狼の方へ勢い良く押し出される羽目になった。

大狼の斬撃は防ごうと掲げられた右前足を切り飛ばした。切断面から血液が噴出し、死神は苦悶の声を上げる。

「まだまだまだああああ!!!」

「いい加減倒れて!」

ダメ押しに撃ち込まれるサクヤとコウタの支援射撃に鬱陶しそうに顔を顰める死神に、大狼は突きを放った。

「GAAAAAAAAARRH!」

死の危険を感じた死神は危険を承知で後方へと跳ねた。が、彼の着地点にはすでにソーマとアリサが先回りしていた。

「ARRRRGH!?!」

驚きつつも死神は残った方の鎌で二人纏めて両断すべく、刀翼を横薙ぎに振るった。しよせんは雑兵。早く片付けてあの大狼に備えなければ!

「来るぞ、踏ん張れ!」

「はー！」

二人は大地に根を張るが如くその場に構え、逃げるどころか残り少ない体力を絞り出して全力で神機を叩きつけた。

「ぐう!？」

「ああ……ああ!!!」

凄まじい力に吹き飛ばされそうになるが、二人は死神の一撃をなんとか受け切った。雑兵と侮り、雑に振り払おうとしたがためにそのままで威力が無かった事と、彼らの意地と根性が、この奇跡を成し遂げたのだ。

「ARRRRGH!？」

「凄いだろう、彼ら」

驚愕したように目を見開く死神の耳元で、声が聞こえた。

「ッ!?!？」

「自慢の部下さ。俺にはもったいない程の」

勢いよく振り向いた先に、大狼がいた。

大狼は微笑んで、死神の後方、肩で息をしているアリサたちを眩しい物でも見るように目を細めて見つめていた。

「G……」

隙だらけの姿に、死神は大鎌を振りかざそうと目論んだ。だが大狼が先んじて振り下ろした神機により顔面を叩き割られて失敗した。

「————カッ……」

短い断末魔を上げると、死神はぐらりと倒れ伏し、完全に沈黙した。

「……」

大狼はダメ押しとばかりに神機を振り下ろし、死神の首を刎ね飛ばすと、ようやく全員は脱力し、戦闘の終了を実感した。

『こ、今度こそディアウス・ピターの沈黙を確認しました！……えつと、大丈夫、ですよ？ もう蘇りませんよね？』

『ええ平気よヒバリちゃん、隊長が蘇らない措置をしてくれたからね』
『そうですか……それなら安心ですね』

乱れていた息を正し、全員が落ち着きを取り戻したところで、いよいよ今回の任務のメインであるディアウス・ピターの腹の中を探る作業に取り掛かった。

「ふん……んツ……アタリ……です」

「……こつちも確認したわ……間違いないわ……これは……あの人の……」

アリサが腹を捌いて確認したところリンドウの神機が、口の中を探ったサクヤがリンドウの腕輪をそれぞれ発見した。

「ああ……リンドウ……！」

サクヤは腕輪を掻き抱いてむせび泣いた。滂沱と出てくる涙を払ってもせずにサクヤは慟哭した。アリサもへたり込んですすり泣いた。

「サクヤさん……」

コウタはかける言葉も見つからず、項垂れていた。

「……」

慟哭するサクヤからソーマは目を逸らした。その視線の向いた先にはカカシがいた。

彼はいつものように自分たちから少し離れたところに立っていた。口元の『牙』はとうに剥がれ落ちており、露になった口元には煙草が啞えられていた。

紫煙を吐きながら空を見上げるカカシは、嘆き悲しむ自分たちを見て果たして何を思うのだろうか？

ソーマの心にふとそんな疑問が鎌首をもたげる。

戦闘中にも見たあの遠い目は、何を見ていたのだろうか？ あの曖昧な笑みの意味は？ そしてあの『牙』は何だ？ あの強さの理由はなんだ？ まさか自分と同じように出生の時に何かされたのか？

分からない。あまりにも何も。何一つとしてこの男の事が分からない。あまり他人と関わらない自分ですらこうなのだ。他の人間だったら多少は理解できるのだろうか？

否、できないだろう。ソーマは確信していた。カカシが『牙』を出した時の反応を見ればそれが一目瞭然だったからだ。

「カカシ、お前は何を目指している……？」

ぼそりと呟かれた言葉はびゅうっと殴りつけるように吹いた風に巻き取られて彼方へと運ばれ、誰の耳に入る事無く消え去った。

後に残されたのは、遺された女の嘆き悲しむ声だけだった。

女の声は枯れ果て、力尽きるその時まで延々と続いていた。

悪い子

神様 神様

私はどうなっても構いません

きっと地獄へ逝きます

ですので どうか 私の願いを聞き届けてください

彼らを 彼女たちを お救い下さい

彼らは十分苦しみました

彼女たちは艱難辛苦を撥ね退けて前へ進み続けております

もう十分でしょう

どうかお救い下さい

偽りの神では無く 人と人が争うだけの世界へ

どうか

どうか

やくしなせて

は



いやーディアウス・ピターは強敵でしたね。(他人事)

……ていうか何なのアイツ？ 何でオラクル反応が消えたのに復活してんだよ！ しかも捏造ピターなんぞになりやがって!!!

俺の怒りはそこだ！ 復活したことはまあいい。何でよりによつ

て捏造ピターなんかになっちゃうんだよおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおお
おおおお!!!

閑話休題

まあ倒せたから問題なし！ 現実逃避は終わりだ！ さあ行くぞ
！ さあやるぞ！ さあ見るぞ！

俺は意を決して明後日の方へ向いていた目を正面へと向ける。と
たんに視界の下半分ほどが白い帽子で埋まった。

「ふんふん♪」

こんな野郎の膝の上で何が楽しいのか、彼女は鼻歌なんか歌っちゃ
りして上機嫌に体を揺らしていた。

彼女が揺れる度にお尻が膝が擦れるから、こそばゆいつたらありや
しない。

そう、そうなのです。どういう訳かワタクシの膝の上に『裕福な少
女』ちゃんがおわしますのですたい。(博多弁)

いやなんで!? 何故に俺の上に? 意味が分からない。

ディアウス・ピターを討伐してから数日、特にその日は何もやる事

が無かったからエントランスのベンチで座ってボーッと行き交う人を眺めていた。

あ、ジーナさんオツスオツス！ やあブレンダンさん、いい体してんねえ！ 通りでねえ！ とか言いながら、今頃サクヤさんが支部長についてこそそやってるんだろうな。怪我とかしないで欲しいなとか考えていたら、気が付いたら俺の膝の上にちよこんと乗っていたのだ。

思わず目が点になりましたね。 ええ。

いったいいつの間に!? 混乱して目を白黒させている俺なんか気にも留めずに『裕福な少女』ちゃんは完全に脱力して俺の腹に身をもたれさせてくる。

や、止めなさい『裕福な少女』ちゃん！ 離れなさい！ 俺なんかに触ってる馬鹿が移っちゃうぞ！ 俺のここに来ちゃダメだよ！
いくならせめてソーマ君やコータ君の方へ行きなさい！ 2での絡み的な意味で早く離れ……はな………え、『エリナ』ああああああ!!! 『エリナ』ああああ!!! 『エリナ』ああああ!!! はやく離れなさい！ 隊長命令！ 隊長命令ですよ！ いい加減にしないと先輩って呼ばせたうえで凄いいことしちゃうぞ！ 凄いい事になる事になるぞ〜！

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお!!

「おい、おっさんがお呼びだ」

あ、うん。

ソーマ君に話しかけられて我に返った俺はそういう訳なのでいてね、とエリナちゃんに伝えた。

途端に露骨に不機嫌そうに唇を尖らせて無言で抗議してきたものの、腕を組んで威圧的に佇むソーマ君に屈した彼女は渋々といった感じで俺の膝の上から腰を上げた。

その時丁度エリックさんがエリナちゃんを迎えに来て、俺の顔を見るや嬉々として近寄って来て再会の挨拶と共に言葉の洪水をワッと浴びせかけてきた。

やれ最近調子どうだの、次期当主としての勉強は着々と進んでいるだの、エリナが最近冷たいだのなんだのかんだの。

このまま彼のマシンガントークを延々聞いていたかったけど、いよいよソーマ君の忍耐が限界に達しそうだったのを見て、俺は戦々恐々しながらぺらぺら食っちゃべっているエリックさんにアイコンタクトを送った。

それで察してくれたエリックさんは苦笑いを浮かべながら会話を切りやめ、エリナちゃんの手を取って去って行った。

それと去り際に「君には本当に感謝している。何かあったら言ってくれ。いつだって力になるよ」と肩をバシバシ叩きながら言ってくれたんだけど、そういう事は俺みたいなしよぼくれた奴なんかよりもソーマ君とかに言っただけで欲しい。

「もう良いか？ なら行くぞ」

去りゆくフォーゲルヴァイデ兄妹の背中を見つめていたら、額に青筋を浮かべたソーマ君が間髪入れずに首根っこを引っ掴んで榊博士の下へ俺を引き摺って行った。

彼の声音には有無を言わさぬ迫力があつたから、俺は何も言わずに黙ってされるがままに引きずられた。

「おや、来たね。早速で悪いんだけど、シオを連れて空母まで行って来てくれないかい？ 食事が必要だね」

そう言つて書類をひらひらさせている榊博士。

「ハガンコンゴウが出現したようだね。栄養価も高そうだし、彼女の口にも合うだろう。他のアラガミもいるが、無視して構わないよ。全部は大変だろう？」

という訳で、俺、シオちゃん、サクヤさん、アリサさんの4人でハガンコンゴウを粉々にするべく愚者の空母までやって来たのだ。

「いやシオちゃんに食べさせるために来たんですから、粉々にしちやだめですよ？」

……ウン、ソウデスネ。コトバノアヤデス。ホントダヨ。

「……」

無言の呆れ顔が染みるぜ……。

「バカやってないで指示を頂戴隊長さん。ヒバリちゃん、敵との距離はどれくらい？」

「ア、ハイ」

『はいサクヤさん、敵エネミーハガンコンゴウの距離前方500。小型のアラガミの反応が5体周りにあります』

ハガン一体に小型5ね。確かこのミッションに出てくる小型つてザイゴート墮天とコクーンメイデン墮天だっけ？ うわ、メンドクサ！

「うくんハガンコンゴウは耳が良いから小型を先に片付けるのも難しいわね。どうしましょうか……」

うんうん唸って作戦を立てるサクヤさんに俺は手を上げて皆からの注目を集めると、提案を手短に伝えた。

「えっと、つまり先に耳のいいハガンコンゴウをおびき寄せて私たちが足止め。その間にカカシさんが小型を強襲、殲滅次第こちらに合流、と」

アリサさんが確認を取るように俺が説明した作戦を口にした。

そゆこと。

「そうね、カカシ君なら小型を片付けるのにその時間はかからないでしょうし……いいわ、それでいきましようか」
「はなしおわったか？ じゃあいこういこう！」

俺らの作戦が固まったタイミングで、暇そうに道端に座り込んでいたシオちゃんが目を輝かせながら立ち上がった。

そうだよ。君もお腹すいてるだろうから、話し合いはここまでにして、行こっか。

「お〜ゴハンゴハン！」

キヤツキヤとはしゃぐシオちゃんを引き連れてサクヤさんとアリスさんはハガンコンゴウをおびき寄せるために俺から離れていった。

3人が離れていくのを見届けると、俺の方も動き始めた。

オラクルの噴射の音で感づかれては意味が無いので、ヒバリさんにナビゲートしてもらいながら瓦礫で身を隠しつつ、回り込んでハガンコンゴウの後方に待機している小型共の背後へと忍び寄った。

丁度その時スナイパー特有の鋭い射撃音が鳴り響き、続いてハガンコンゴウと思わしき悲鳴とアリスさんの気合のこもった声が聞こえた。

それに反応してぞろぞろと移動しようとした小型に、俺は神機を捕食形態にしてオラクルを噴射して間髪入れず襲い掛かった。

「ギエーッ!?!」

手始めに空中を飛んでいたザイゴート墮天（黄）の上半分を食い干切って殺す。

神機がザイゴートを飲み込み、オラクルを肉体へ還元して活性化。それと同時に最早気にもならなくなったバキバキという馴染みの異音と共に口元を覆う黒いオラクルの『牙』が生成され、俺の戦闘準備は完了した。

準備完了！ 後は雑魚の処理をして皆にさっさと合流だ！

俺は頭部から花みたいな器官を生やしてこちらを撃ち抜こうとするコクーンメイデン墮天に接近して叩き割り、空中から突撃して来たザイゴート墮天を返す刀で真つ二つに切り裂いてやった。

「シヤーツ！」

残った2体のザイゴート墮天が左右に分かれ、挟み込むように突進してきた。

俺は突進が当たるよりも早くその場から跳び上がり、丁度2体が重なるくらいのタイミングで銃形態へと変えた神機で特製の破碎属性バレットを撃ち込んでまとめて粉々にしてやった。

「アバーツ!？」

これで雑魚の殲滅は完了である。

『小型種の反応は全て消失。カカシさん、そのままサクヤさんたちの援護を』

勿論ですとも。

俺は喧騒の方向へと駆け付け、サクヤさんたちが戦っている場所からやや離れた位置で立ち止まるとアリサさんとシオちゃんが『そいつ』から離れるタイミングを計っていた。

金色の肌、紅い羽衣のような部位、その名の通り破顔している頭部。コンゴウ種の上位個体『ハガンコンゴウ』が、アリサさんとシオちゃんのコンビネーションアタックに、煩わしそうに手足を振り回していた。

「ウキヤーツ！」

いい加減鬱陶しくなったのか、2人に体を切りつけられているにも拘らず、ハガンコンゴウは防ぎもしないでその場に身構え、ぐっと力

を溜めるようなしぐさを取った。

「!? アリサ、シオちゃん!」

サクヤさんの警告の声に二人はバツと後方へと跳んだ。その刹那、ハガンコンゴウを中心に稲妻がバリバリツと閃いた。もしあの場に居たら、二人は感電して、それからあの太い腕に刎ね飛ばされていただろう。

それは二人が離れるタイミングを窺っていた俺からすれば実に良いタイミングである。丁度狙いであるハガンコンゴウの足も止まっているしね。

という訳で景気づけにドーンと行きますよ〜!

俺はころがるこうげきを繰り出そうとする汚いゴーストに向かつて特製の破碎属性神属性のオラクルバレットをぶつ放した。ちなみにだがこのモジュールはとにかく破壊力だけを追求したもので、コストは当然度外視。ゲームで例えるならL弾丸直進、1が何かに衝突時L爆発というシンプルな構造ながらコストは驚くなかれ159だコノヤロー!!!

普通はどうやっても連射出来ないが、俺にはオラクルが有り余っているのでバカバカ連射可能だぜー!

一護オ! 敵は距離取って月牙擦ってれば勝てるぞオ! 月牙月
月牙月月牙月セロ月牙月月牙月月牙月セロセロセロ月牙月月牙月
月牙月月牙月月牙月グレインレイセロハイリツヒ・プファイル!

「きゃー!」

『か、カカシさん! ハガンコンゴウのオラクル反応は消失しています! もう撃たなくていいです!』

「ダメですヒバリさん! あの人完全にハイになっちゃってます!」

カカシさん！ カカシさあーん！ シオちゃんが！ シオちゃんが食べる分が無くなっちゃいます！ 止めてくださーい！」

あ。

サクヤさんの悲鳴やアリサさんからの警告で我に返った俺は慌てて引き金から手を放し、おっかなびつくり前方へと目を凝らす。

俺の視界は空爆でも撃ち込まれたのかってくらいの爆煙でさっぱり見えず、その中にいるハガンコンゴウがどういいう状態なのかはそれが払われない限り認識する事は不可能だった。

ひやひやしながら見守っていること数十秒。湾岸部だけあつて風が強いからすぐに爆煙は吹き払われ、その中にいたハガンコンゴウの死骸が露になった。

……………ふう。

ハガンコンゴウの各部位は渋いという言葉が生温いほどカチカチ肉質なのだ。それが幸いしたのか、腕とか脚とかもげていたりしたもの概ね原型が残ったまま死に絶えていた。

「うわあ……………あの固いハガンコンゴウがあんなに破壊されてるわ……………」

「ドン引きです……………馬鹿なんじゃないですかあの人？」

「ゴハン〜！」

アリサさんとサクヤさんの言葉に心を抉られつつ、こんがり焼けたハガンコンゴウにむしゃぶりつくシオちゃんの食事を見ながら、俺は煙草に火をつけた。

深々と吸い込んで肺に紫煙を充満させ、少しとどめてから、ため息

に乗せて長く吐きだす。吐き出した紫煙は潮風に吹き流されてあつという間に消え去った。

「……」

風に流されゆく紫煙を目で追っていると、ふと、初めて煙草を吸いだしたころの事を思い出した。

あれはこの世界に転生して1年と少し。放浪の途中に立ち寄った『壁』も無く、神にも人にも見捨てられた集落で起きた抗争に巻き込まれた時の事だ。

移動の際に積み込まれたトラックの中、自働小銃に身を預けていた時に、俺の前にいた名も知らぬ子どもが景気づけに一本、と手渡されたのを吸ったのが、俺の喫煙の始まりだった。

差し出された煙草に目を向け、次いでそれを差し出してきた者の顔を見た。俺と同年かそれより下の、髑髏の様にやせ細った子供だった。

彼は二カツと笑った。口元から垣間見えた歯は煙草の吸いすぎで黄ばみ、ボロボロだった。

初めての喫煙は散々な結果で終わった。むせる俺を見て、積み荷たちは、上は60過ぎの老人。下は5歳になったばかりの子供まで、はげらげらと笑った。

その笑みときたら。みんな幸せそう。数分後に迫る死への恐怖なんか欠片たりともなさそう。

さてその抗争だが、何の事は無い。古今東西、最下層に位置する者たちが徒党を組んで争う理由は食料の奪い以外ありはしない。

尤もその抗争自体は10分程度で蹴りはついた。

アラガミが現れたのだ。

オウガテイル一匹。それだけで両陣営は瓦解。生き残りは一人も無し。

そして肝心の食料はというと。

缶詰一個。それだけ。それだけのために、両陣営含め合計28人の人が死んだ。

オウガテイルから逃げおおせ、(おそらくオウガテイルに襲われて)人っ子一人いなくなった相手側の集落の食糧庫の真ん中に、それがポツンと鎮座していた。ふふ、今思い出しても笑える。実際大笑いしたのを覚えている。

運転手がいなくなってしまうたから、難儀しながらトラックを運転して自陣営側の集落へ戻ると、住人が消えていた。あたかも相手側陣営の集落と同じように。

集落のあちこちに争った形跡や、血飛沫が飛び散っており、その時の人々の慌てようが目に見えるようだった。

呆然とする俺を嘲笑うかのように、集落の中央に我が物顔で居座るコクーンメイデンの無機質な瞳は生涯忘れないだろう。

隠し持っていたオウガテイルが射出した針を頭部にねじ込み、動かなくなつたコクーンメイデンの傍らで、俺はトラックから出る際にもらつた煙草の箱を懐から取り出した。

よそ者なのに手を貸してくれた君へ、と名も知らぬ子どもが俺にくれたそれ。

震える手で箱から煙草を取り出し、口に咥え、火をつけた。

2度目に吸った煙草は、何の味もしなかった。

嗚咽交じりに吐き出した紫煙は、風に吹き流されて消え去った。

過去の情景が、紫煙とともに消えていく。

「……」

こんな話は、この世界ではあまりにも日常茶飯の事だった。実際同じ様な事は何度もあった。あまりにもありすぎて、最早感慨すら湧きはしない。今もどこかで同じような話が、繰り広げられているのだろう。俺にそれを止める手立てはない。少なくとも今はまだ。

過去を思い出すついでに、この世界に転生したばかりの頃の楽観的な自分の言動の数々も思い出し、自嘲気味に鼻で嗤う。

何て下らない。

頭を振って肺に残った紫煙を残らず吐き出し、吸殻を踏み消す。気が付けば横にサクヤさんとアリサさんが並んでおり、俺と同じようにシオちゃんを眺めていた。

程なくシオちゃんの食事も終わり、俺たちは崖の近くへと移動し、遠くに見えるエイジス島を眺めていた。

「大きいよね」

サクヤさんが俺たちの前に出ながら言った。

「エイジス計画の要、人類最後の望み……エイジス島……シオ？」

感慨深げにつぶやきながら、ふとサクヤさんはシオちゃんの方へ目を向けると……。

(ああ、来たか……)

シオちゃんの体に異変が起きていた。輪郭が薄つすらと輝いており、視線は定まらず、どこか虚ろだった。

「シオ!？」

サクヤさんの呼びかけにも応じず、シオちゃんは夢遊病患者の様に切り立った崖の方へ、正しくはエイジス島の方角に向かって歩いて行く。

「シオ、あなた!」

「シオちゃん!」

「ヨンデル……」

シオちゃんは振り返り、譫言めいて言った。でもそれはサクヤさんたちの呼びかけに応じたわけじゃなくて、共鳴した彼女の意思を口に出しているに過ぎない。

「タバタイ……タバタイツテ、ヨンデルヨ」

シオちゃんは再び前を向く。

「オイシソウ」

それだけ言うと、シオちゃんは何のためらいも無く崖から身を投げ出した。

「シオ（ちゃん）!？」

「……」



「……で、そのまま海に飛び込んで姿を消した、と……」

榊博士は俺からの報告を聞き、口に出して考えをまとめながら締めくくった。

「申し訳ありません……」

サクヤさんが先んじて謝った。

「いやいや、まずは君たちが無事で何よりだよ。……サクヤ君、場所は空母北端、エイジス島近郊で間違いないんだね？」

「はい……あの子、一体何があっただんでしょうか？」

「今の状況からでは何とも言えないね」

榊博士は顎に手を当てて思案しながら、サクヤさんへ向けて言った。

「……そうですか、分かりました」

思い悩んでいるサクヤさんに変わり、アリサさんが代わりに言った。

「ともかく、君たちにはシオの捜索をお願いする事になるかもしれない

い。何か判明したら連絡するよ」

だから今はゆっくり悩んでほしいな、とサカキ博士は締めくくり、此度の報告会はお開きとなった。

「予想以上に早いね……実に不味いな」

扉が閉まる瞬間に聞こえた榊博士の眩きを聞こえていないふりをしつつ、俺は一足早めに二人と別れて自室へと向かう。

自室に着くと盗聴やその手の類の物が無い事を確認し、懐からデバイスを取り出してアプリを起動する。

アプリが起動されると画面に地図が浮かび上がり、エイジス島付近のある一点に赤い点が灯っていた。

それは俺がシオちゃんの服に秘密裏に仕込んでいた特製の発信機である。正直リツカさんにはばれないかと冷や冷やしていたけど、存外何とかなるもんである。

「さてと、文章はどんな感じにしようかな」

俺は支部長に向けて匿名のメールを送った。

神、人、化物

支部長へメールを送った。

程なくすればシオちゃんは捕まるだろう。他ならぬ、俺の手引きで。

俺に流れを変える力はないが、流れの中で起きる出来事に多少なりとも介入できるのはエリックさんの件で確認済みだ。それが良いか悪いかは分からないが。

シオちゃんの反応が再び空母付近にあるのを確認し、デバイスの電源を切る。

『カカシはすごいなく！ シオもまけないぞ〜！』

デバイスを人目に付かないように仕舞い込み、衣を手に取り、羽織る。裏切り者を葬り去るための粛清の衣を。他ならぬ裏切り者が。

『シオ、ずっと一人だったからなく。いまな、すつごいたのしいぞ〜！』

それから机の上に置いてあるゴムに手を伸ばし、髪を結わえる。

『シオなく、ソーマにもわらってほしいんだけどなく、どーすればいいのかなあ〜？』

鏡を見る。くだらない男がこちらを見つめ返してきた。

『いつかみんなで、おいしいものをたべような！』

問題なし。準備は済んだ。鏡から顔を背け、扉に向かって歩を進め

る。

『カカシ！ おまえもともだちだぞ！』

心の内から湧き上がる良心の呵責に蓋をして、俺は部屋を出た。



自分の半分はアラガミのバケモノで、だからこそ自分はこの世に存在しない方が良い。誰か他人と関われば不幸しか起きないと、そう思っていた。

幼い頃からずっと疎外感を感じていた。他の子どもと違うと、漠然とだが、確かな確信を胸の内に抱えていた。

そして自分が生まれた時にしでかしたことを知ったとき、それは確信に変わった。

産まれが産まれだから、俺は普通の人間よりも遥かに強靱な体を持っていた。だから、幼いころからずっと危険な任務を受け持ってきた。

任務の性質上、大怪我を負う事が多く、同行者が死ぬこともしょっちゅうだった。

誰かと共に任務に赴き、大怪我をした俺が一人で帰ってくる。そんな日々を送り続けていれば、人々が俺へ悪感情を抱くのは当然の事だった。

『バケモノ』

『死神』

どれだけ死にかけようと数日で治る体。同行した者は殆ど帰ってこない。一度ならず2度、3度と繰り返し返せば、そう呼ばれる事になるのは至極当然だった。

他者にそう呼ばれることに大した抵抗は無かった。俺自身がそう思っていたからだ。

俺自身がそう思っているから放って置いてくれと何度も拒絶したのに、それでも関わってくるお人よしも何人かいたが、俺の心は頑なに諦めに固執していた。

それが揺らぎ始めたのは、陰口をたたかれる事に何の感慨もわかなくなった時の事。

自分が世界一不幸だと思いつつ進む段階はすでに通り過ぎ、胸の内に湧き出すどうしようもないやるせなさや未来を見通せない事への漠然とした怖れに苛立ちを募らせる日々。

そんな時だった。お前が現れたのは。

初めてお前を見た時の事を覚えている。

おっさんのようにずっと笑みを浮かべていて、まるで世界の全てを知っているかのように遠くから人々を見ていたお前。

柔らかい笑顔。柔らかい雰囲気。まるで、穏やかな陽だまりのような男。

しかし、俺がお前に対して感じた感情は。

嫌悪だった。

産まれて初めてだった。誰かに対してあんなに気味が悪いと思っただのは。

榎のおっさんの野暮つたい話し方とか、所謂大人の余裕を感じさせるリンドウの奴に似たような感情を持ったことはあるが、違うんだ。

そうじゃない。もっと、もっと根本的な物。

それは、分からない事、理解できない事への嫌悪。

それは普通の人間が俺に対して抱く印象と、全く同じものだった。

確信を持ったのが、お前と初めて任務に赴いた時の事だ。

俺はお前に問うた。どんな思いを抱いて戦場に立っている？ な

ぜお前は武器を取ったのか？

俺の質問に、お前は笑ったな。困ったような笑みを浮かべて、お前はただ静かにこちらを見つめていたな。

殺伐とした戦場には、決して似つかわしくない、日常と地続きのよ
うな笑み。

気味が悪かった。

何故だ？ この糞つたれな世界で、なぜお前はそんな笑みを浮かべられる？

分からない。理解できない。気持ち悪い。

湧き上がる嫌悪感を悟られるのが否で、自分勝手に話を切り上げて先へ進む。そして、心が平常を保てない状態で戦場に出た者がどういうことになるのかは、火を見るよりも明らかだった。

突如湧いて出たアラガミの対処で手いっぱい、エリックに迫るオウガテイルの針に気づくのが遅れた。

ドクン、と心臓が音を立てて鼓動する。時の流れが鈍化し、世界の動きが緩やかに変わる。

体にあらん限りの力を籠めて、静止した時の中を全力で駆けるものの、まるで泥の中を進んでるかのようで、手を伸ばすにはあまりにも遠すぎて。

俺の前で、また人が死ぬのか？

『バケモノ』

『死神』

後ろ指を指して罵る、名も知らぬ誰かの声が、耳元で聞こえた。

幻聴だ。まやかしだ。頭で分かっているも、心がそれを認めない。エリックに針が迫ってゆく。迫ってゆく。迫ってゆく。彼はそれを見ただけで茫然と見つめている。死が迫る。

彼の足元に、血を流し、倒れ伏す彼の姿を幻視した。更にその傍に、今まで見殺しにしてきた者達の屍が、山のように積み重なっているのが見えて。

無駄だと分かっているのに、手を伸ばし、吠える。それで未来が変わる筈も無いのに。

しかし、俺が想像していたことは、結局起こりはしなかった。

俺の絶望も、失望もまるで関係ないというかのように、静止した時の中を悠々と、俺とは比べ物にならないほど自由に動き、お前は易々とエリックと自分の位置を交換した。

そしてエリックの代わりにお前は針で貫かれた。

俺が恐れたエリックの死が起きることは無かった。だがその代わりに貫かれたお前が死ぬことには変わりはなく、結局俺の心は絶望に支配される。そう思っていたのだ。お前が何事も無く動き出すその時まで。

俺は自分がバケモノだと思っていた。それは今でも変わらないが、戦闘が終わり、駆け寄った俺たちに、まるで何でもないかのように無造作に針を引き抜いたお前に、全身が粟立った。

胸に空いた風穴が一瞬で塞がるのを見て、俺はその時初めて、自分以外の誰かをバケモノと思った。

お前への嫌悪感は、日々を重ねるごとに強くなった。

朝も昼も夜も、任務の時も任務を終えた後も。いつもいつもここにここにこと。お前はいつだって笑っていた。

お前の笑みが視界に入るたびに、俺は気味が悪くて仕方が無かった。希望の見出せない糞つたれな世界で、まるで世界が希望に溢れているかのように振舞うお前への苛立ちで吐き気がした。

何故笑う？ 何が面白い？ 人が死んでいるんだぞ。今この瞬間も、今この瞬間に！ 誰かが、虫のように顧みられることなく死んで

いるのに！

理解できない事への嫌悪は、いつの間にか俺の中に元々あった世界への憎悪と結びつき、心身を焼き尽くすかのような怒りへと変転していた。

煮えたぎる怒りに臓腑を焼かれながら月日は過ぎ……リンドウが死んだ。

俺は愕然とした。心のどこかで、あの男だけは決して死ぬことは無いと思いついてきたから、その衝撃は大きかった。

リンドウの死を受け止めきれないときに、追い打ちをかけるかのように、お前は粛清の衣を纏って俺たちの前へ姿を現した。

黒い衣を纏ったお前はまさしく死神のようだった。

俺たちはこんなにもアイツのために血を吐くような後悔に襲われているというのに、お前はもう諦めたのか！

胸倉をつかみ上げられ、糾弾されているというのに、お前は舌打ち一つ、言い訳一つも零さずに、あの時と同じように困ったように笑ったな。

それで、最早抑えきれなくなった俺は、身を焼き焦がすような怒りの赴くままに殴りつけた。

殴りつけ、我に返った所で、そこではじめて自分の意思でお前に触れた事に気が付いた。

顔を上げる。黄金の瞳と目が合った。

俺は2度目の戦慄に襲われた。

お前がずっと笑みを浮かべていたのは、世界に希望が溢れているからだ。幸せに手が届くと思っっているからだと思っていた。

初めて間近で見たお前の瞳には、何の希望もありはしなかった。喜びなど無かった。ただ底の見えない虚ろが、全てを飲み込んでいた。

黄金の瞳を通して垣間見えた虚無を見て、お前がこの糞つたれな世界への絶望を、怒りを、ただ笑顔という仮面で覆い隠していただけだったのだと、その時やつと気が付いた。

お前に対して抱いていた怒りは、それで消えた。

代わりに湧き上がったのは、疑問だった。

自分以上の物を見ると冷静になると言われているが、俺が抱いている怒りなど足元にも及ばないような果てしない虚無を抱いて、なぜお前はまだ折れていない？

どうしてそれ程の闇を抱えているにも関わらず、お前は前に進めるんだ？

知りたい。何故だ。なぜ……。

晴れない疑問を抱えたまま日々は過ぎて行く。親父に課せられた『特異点』を探しながら、俺は来る日も来る日もお前について考える。

絶望を抱えるのは、こんな世界ではそう難しい事じゃない。破滅の種はそこら中に転がっている。それこそ足の踏み場が無い程に。

しかし、ありとあらゆることに絶望していてなお前に進むことが出

来る者は、おそらく前に進むための何かを持っているはずだ。

俺はそれを知りたいのだ。前に進むための何かを。絶望を前にしても膝を屈さずに済む物を。

四六時中お前について考えていたら、気が付けばそれなりの時が経ち、ついに特異点が見つかった。見つかってしまった。

榊のおっさんに唆されるままに廃寺までやってきた俺は、第一部隊の奴らとともに物陰へと身を隠した。程なくして、お前が倒したアラガミのそばに、何者かが近づいてきた。

俺たちはそいつを取り囲んだ。

そいつは、シオは、囲んでいる俺たちを不思議そうに見降ろしていた。

アリサやサクヤ、コウタがこれは何だと喧しく騒いでいる間、俺はシオから目が離せなかった。

絶対に本人やその他の誰かに話すつもりはないが、荒ぶる神の屍の上に立ち、月光を受けて白く輝くシオを見て、俺は、まるで天使のようだと思っただ。

シオが俺たちの日常に入り込んでからというもの、驚きの連続で眩暈がするようだった。

幼いころから親父に“お前はアラガミを殲滅するために生まれてきた”と口ずっぱく言われて来た俺からすれば、シオという存在は、俺の全てを根本から否定する存在だった。

彼女が言葉を一つ覚える度、彼女をアラガミと思えなくなっていた。彼女が人に一歩近づく度、俺の中の価値観は音を立てて揺らいでいった。

いつからだろうか。彼女が俺の名を呼びながら近寄ってくることに、不快感を抱かなくなったのは。

あれだけ思い悩んでいた過去との折り合いは、いつの間にかついていた。

こんなにも早くシオを受け入れられるようになったのは、きっと、自分以上の、あるいは彼女以上のバケモノの存在を、知っていたからかもしれない。

人間のような化物と、化物のような人間おまえ。

同じようで、全く違う二人を見てみると、人とアラガミとは何が違うのか分からなくなってくる。

アラガミは食う事で進化し、増殖してゆく。人だって同じだ。飯を食い、情報を喰らい、番を作って増殖してゆく。

アラガミはそれはもうたらふく人を喰っただろう。ならば、シオのようなアラガミが今後も出てくるのだろうか？

あれだけの数のアラガミが存在するのなら、シオのような人に近いアラガミが1体だけとは思えない。今後アラガミが人を食べ続ければ、第2、第3のシオが、また現れるかもしれない。

そうすれば、榊のおっさんが言う様に、人とアラガミが理解し合える世界が出来る……かもしれない。

かもしれない。

そうだ、所詮は憶測。妄想の域を出ない。

だが、シオという可能性が、俺の前に、妄想では無く確かに存在している。

確率は限りなくゼロに近いかもしれない。だが、今まで先の見えな
い、0か1かもわからない停滞した暗闇の中に、ほんの0・1%程度
の光が見えた。

そうか……。

これがそうか。

これがお前が絶望の中に居てもなお膝を折らずに済んだ理由か。

この胸の内にある光が……。

希望か。



シオが行方不明になってから数日が経過した。

榊のおっさんの懸命の捜査の結果、行方不明になった場所である湾
岸付近でまた彼女の反応があったという。

すぐにでも彼女を探しに行きたいところだが、湾岸部付近に接触禁忌種である『テスカトリポカ』がいて、搜索の邪魔だ。

それを速やかに排除するために、俺とカカシは湾岸部へと急行した。

「お前ならもう気が付いていると思うが」

陽が暮れなずむ湾岸。世界が滅びても変わらない潮騒の音を聞きながら、俺はおもむろに口を開く。

「支部長が探しているという特殊なコアのアラガミってのは……シオに間違いない」

相変わらず返事はない。だが気にせず俺は話を続ける。返事は無くとも聞いてくれていた事は分かっているから。

「俺はあのクソ親父の命令でそいつの探索を任されてきたんだ」

顔を合わせる度にまだ見つからないのかと言い、そうだと伝える度に落胆した顔が脳裏に浮かび、思わず舌打ちが出る。

「俺は、シオを……あのヤロウに差し出すつもりはない」

あの男の思い通りになるつもりはない。

「勘違いするな」

俺は神機をカカシに突き付ける。カカシは相も変わらず気にした素振りすら見せずに、ただ真つすぐに俺の目を見返す。

「俺やシオをオモチャにして勝手な事を考えているのが気に食わねえだけだ」

絶対に。友を差し出す事など、する訳が無い。

言い切って、カカシがどんな反応をするかじつと見つめていたが、やはりいつものように曖昧な微笑みを浮かべているだけで、めぼしい反応は無かった。

そこでふと、奇妙な既視感に襲われ、思わず笑ってしまった。

「そういうえば……最初に会った時もこうしてお前に剣を突きつけたな……」

突き付けていた神機を肩に担ぎ、空を眺めながら、過去を思う

あの時感じていた嫌悪感はどうに無い。患っていた疑問は消え、己との折り合いも随分ついた。

この目の前に居る男との出会いで、自分もすっかり変えられてしまった。もちろん言うつもりはないが。

「アイツがこの辺りにいる事は間違いないが……あいつの影響か、他のアラガミも随分活発化している……」

カカシへ顔を向ける。彼は微笑んでいる。俺もつられて笑う。

「気を抜くなよ……リーダー」

カカシは頷いた。それから特に示し合わせた訳では無いが俺とカカシは同時に正面を見据え、同時に駆け出した。

■
接触禁忌種 『テスカトリポカ』

クアドリガ神属の接触禁忌種はこのアラガミは、尋常じゃない火力を誇り、一つの街を一瞬にして廃墟にするだけの力がある。

クアドリガ自体アラガミの中でもデカイ部類に入り、テスカトリポカはそのデカイクアドリガよりも一回りほど大きい。

その巨体が、190センチ程度というテスカトリポカからすれば豆粒のような存在に背負い投げされているという絵面は、相も変わらず現実感がおかしくなる。

地響きを立てて背中から叩きつけられた殺戮機械は、衝撃で狂ったおもちやのように戦車の履帯のような前足をばたつかせた。

「オ、オ、オ、!!!」

『牙』を生やしたカカシは、神機を捕食形態にして間髪入れずに突っ込み、テスカトリポカの頭部を食い千切った。

カカシの作ってくれた隙に、俺も遅れながらテスカトリポカへと接近する。

が、その時、テスカトリポカの前面装甲がばかりと開き、ぬらぬらとした肉の中心から巨大なミサイルを発射した。

(しまった……!)

まさか頭部を失った状態でこんな抵抗をしてくるとは思いもよらず、俺はこのまま無防備にミサイルに着弾する……かに思えた。

真後ろから黒き旋風が吹いた。

動かない体の代わりに目だけで黒き風を追う。

カカシは、テスカトリポカの頭部を食い千切りながら空中でオラクルを吹かして俺の後方へと飛び、更にオラクルを吹かして一瞬で俺の元までやって来たのだ。

無造作に束ねられた黒い髪が、まるで狼の尻尾のように揺れ、俺の頬を撫でた。

俺を追い越したカカシはあろうことかミサイルの弾頭を素手でつかむと、強引に向きをこちら側から反対方向へ。すなわちテスカトリポカの方へと投げ返した。

呆気に取られて放心する俺の腕をカカシは掴み、後方へと大きく跳ねた。

それとほぼ同時に、投げ返されたミサイルはテスカトリポカの前面装甲の中身へと吸い込まれる様に着弾した。

瞬間、閃光が辺り一面を染め上げ、爆発が起こった。

紅蓮の炎が立ち昇り、轟音と衝撃にたたたらを踏む。

黒煙が潮風に吹き飛ばされ、応報を返された哀れな殺戮機械の末路を露にした。

一発で都市が壊滅するほどの威力のあるミサイルを直接叩き込まれたのだ。それを発射した本人だって耐えられる物ではない。テス

カトリポカは最早原型が分からないほど粉々に四散していた。

あれほどの威力、直撃すれば、自分があぁなっていたらと思うとぞつとする。

『敵の制圧はこれにて完了ですね、お疲れ様です』

「……引き続き搜索を始める」

『了解しました』

「……恐らくこの近くにいるはずだ。手分けして探すぞ」

ヒバリからの通信を終え、カカシに向き直りながら俺は言う。カカシは無言で頷いた。

と、気合を入れて捜査に向かおうとした矢先に、聞き覚えのある歌声が聞こえた。

俺たちは顔を見合わせ、そちらの方向へと駆け出した。

歌声の主は、瓦礫の山の上にあった。足を延ばし、脱力した姿勢で、気分の赴くままに歌を歌う。

「……あれ……なんだろうー、これ……」

しかし歌声は途中で途切れ、代わりに聞こえてきたのは疑問の声。

「これ……いやだな……」

「別れの歌……だからな、その歌は」

声をかけられたシオは、ハツとなったように顔を上げ、それから俺へと顔を向ける。

「わかれの……うた？」

「大切な人と会えなくなってしまう……そんな事を歌っているんだ」

「そっか……でもまたあえたな！」

「チツ……こつちが探してやってんだろーがよ」

あっけらかんというシオに、舌打ち交じりに文句を言う。

「帰るぞ、シオ」

自然と出たその言葉に、自分でも驚いた。口元に手を伸ばすと、案の定、口元が緩んでいた。

「うん」

シオは満面の笑みを浮かべて頷き、ぴよんと瓦礫の上から降り立った。が、着地と同時に腹から気の抜けるような音が聞こえ、へたり込んでしまった。

「あわ……おなかがすいて……ちからがでない」

「何言ってるんだお前は」

すっかり覇気が無くなった表情で空腹を訴えるシオに、カカシは無言で懐からある物を取り出し、シオに手渡した。

「おおうゴハンだー！ イタダキマス！」

「カカシ、お前……」

「荒切牙、堕龍鱗、帝王爪を混ぜて作った特製のお弁当。きつと元気になるよ」

呆れる俺の事など露知らずに、カカシの奴はにっこりと笑って言うてのけた。

「チツ……やけにこそこそしていると思えば、そういう事だったか」
「……そうだね」

確かに、サクヤが言った事を信じるならば、この数日間でシオが食事をしていない事はある程度予想はつく。それでも事前に準備しているというのはこいつらしい。

「ふわわわわ……ねむ……」

「なっ!? おいシオ!」

腹がいつぱいになったと思ったら、今度は睡魔に襲われたらしい。シオは俺の呼びかけに応じる事無く眠ってしまった。

「おいこんなところで寝るな! おい! 風邪をひくぞ!」

「うくん……むにやむにや……」

どれだけゆすつても、頬をはたいても、まるで起きやしなかった。仕方なく俺はシオの体を抱え上げた。

「まったくこいつは。こっちの気も知らないでいい気なもんだぜ」

「それだけ君のことを信頼しているって事さ」

「くそ、他人事だからって適当言いやがって」

俺が苦々し気に睨みつけてやると、カカシは顔を背けた。

その時だった。

聞きなれた射撃音が、潮騒の音を切り裂いて轟いた。それと同時にカカシの姿が掻き消え、俺の目の端へと吹き飛んでいった。

「なッ!？」

「むにゃ〜……」

理解の追いつかない俺をあざ笑うかのように、バラバラとローターの音が、和やかだった雰囲気を一瞬にしてかき消した。

「ッ!？ 何だ!？ 何だっというんだ!？」

シオを抱えたまま神機を構え、俺は上空のヘリを睨みつける。カカシには悪いが、シオの方を優先させてもらおう。それに、カカシは腹に穴をあけられた程度でくたばる奴じゃない事はとつくに知っているのだ。

ヘリはたいして動きもせず、その場に制止していたが、しばらくしたらドアが開かれ、ヘリの中から続々と神機使い達が降り立った。

アサルト、ロング、ショート、ブラスト、バスターと見慣れた旧型神機使い達に加え、槍の様になっている神機や、鉄塊めいたハンマーのような、おそろく試作型の神機らしきものを持っている無数の神機使いが、俺たちを取り囲んだ。

そして遅れながら、スナイパーの神機を持った神機使いが現れ、俺を囲む輪に加わった。

『ソーマよ、悪いが余計なお喋りは無しだ。特異点を渡してもらおう』

そして、ヘリから聞こえてきた声は、案の定、親父だった。

「ふざけるな!!! 俺がそれに従うと思うか!？」

『ふ、そう言うと思っただぞ息子よ』

「俺を！ 息子と！ 呼ぶな!!!」

俺の絶叫に、親父は哄笑をもって答えた。

『相変わらずの聞き分けの悪さだ。このまま親子の会話に興じるのは悪くないが、やっと目的達成のためのピースが見つかったゆえ……息子と言えど、強引にいかせてもらおう。お前の強情さは骨身に染みているのでね。……諸君、聞いての通りだ。彼は特異点を渡すつもりが無いらしい。殺さず、無力化した後、特異点を奪取せよ』
「ハイヨロコンデー」

親父に命令を下された神機使い達は神機を構え、粛々と命令を実行した。

「う……うおおおおおおおおおおお!!」

機械めいて統制された、神機使い達。頼みの綱だったカカシはダウン。対する俺はシオを抱え、片手が塞がっている有り様で。

結果は分り切っている。無駄だ。意味ないぞ。さっさとそのバケモノを手放してしまえ。

頭の片隅に浮かぶ諦めの二文字を、手放すように促す弱音を、咆哮でかき消しながら、親父の飼いだちに立ち向かった。

しかし。あまりにも多勢に無勢だった。どれだけ抗っても、まるで生きる死者の如く淡々と起き上がり、何度でも何度でもこちらに向かってくる犬ども。

神機を振って蹴散らし、神機を弾き飛ばされ、丸腰になっても空いている方の腕で殴り飛ばし、蹴り飛ばし、四肢が動かなくなっても獣のように噛みつき、己の全てでもって抵抗した。

次第に被弾が増えていった。

意識が薄れてゆく……。

……。

……。

……。

気が付くと、俺は大の字に伸びていた。

空はとつくに陽が暮れていて、満天の空が視界一杯に広がる。

しばらく呆けて、輝く星の海を見つめていたが、片手にあつたはずの温もりが失せている事に気が付き、反射的に顔をそちらに向ける。

俺の腕の中に、シオの姿は無かった。

俺は茫然と、がらんどうの腕の中を見つめた。

俺の希望は、あまりにもあつさりと俺の掌からこぼれ落ちた。

「お……おお……」

エイジスへ

友の慟哭が、風に乗って耳に届く。

ドクンと、心臓が一際大きく音を立てる。

今すぐ背中にめり込んだ鉄骨を引き抜き、彼の下に跪き、全てを懺悔したい衝動に駆られる。

しかし、だめなのだ。

奥歯を噛みしめ、衝動を堪える。

筋書きは変えられない。彼女は月に行ってもらわねばならない。この星にいてはならない。君たちは引き裂かれねばならない。真の平和を実現するためには、彼女には消えてもらわなくちゃならない。

何を悲しむ必要がある？　すべては計画通り。順調に事は進んでいる。寧ろ時期が早まって良い事尽くめじゃないか。それに、お前はこれを望んでいたのだろう？　なにが不満なのだ？　まさかこれ以上を望むのか？　裏切り者の分際で？

心の内から湧き上がる声に嘲笑われながら、震えそうになる体を渾身の力でもって抑える。悟られてはならない。あの状況をどうにかできたと、悟られてはならない。

満天の星空の下、友の慟哭が、潮風に乗って、耳に届く。

心の中に空いた穴に、嘆き悲しむ声が吸い込まれてゆく。

永劫にも続くかと思われる嘆きの声に呼応するように、とつくに割

れて、砕けた心の芯に、また一つ罅の入る音が聞こえた気がした。



はいはい、テステス。こちらフェンリル極東支部のアナグラ。極東支部のアナグラより中継いたします。

現在アナグラは混沌状態にあり。大変な混沌状態であります。

特異点を手に入れた支部長は今まで封じ込めていた情報を解放。エイジス計画改め、アーク計画の情報が解き放たれ、アナグラの構成員たちは賛成派、否定派、中立派の3つに分かれ、混沌を極めていた！

その余波を受けて我が第一部隊も多大な影響を受けました。

コウタ君は支部長に◇家族が大事デッドムーンⅡサン!? ◇な心につけこまれて実家へ帰省。サクヤさんとアリサさんは支部長を問い詰めにエイジスへ潜入。ソーマ君は父親である支部長への怒りで猛り狂って手が付けられない状態であります。

つまり、第一部隊でまともに機能するのは私だけという状態です。第一部隊は事実上まともに機能しない状態にあります。

そして現在わたくし、名無之カカシはカレル君とシユン君とブレンダンさんが消えて人手が足りなくなつた防衛班の穴埋めとして、残つた皆さまと任務へと駆り出されているのであります。

以上、極東支部アナグラより、名無之カカシでした。

「ちよっと隊長さん、手が止まってるわよー!」

おっと、現状確認のために立ち止まっていたらジーナさんに怒られ

てしまったの巻。

俺は背後から飛び掛かってきたオウガテイルの頭を立ち割りながら振り返り、すかさず神機を銃形態に変えた。

それから攻撃をよけそこなつて地面を転がっていくタツミさんに、追撃をかけようとしたコンゴウの顔面にないぞうはかいだんをぶち込んでやった。

着弾しないぞいはいかいだんはコンゴウの体内に残留し、効果が消える直前までレーザーを放ち続けた。

「アババババーッ!？」

コンゴウは腕を振りかぶったままの姿勢で痙攣。そしてレーザーが放たれなくなったと同時に爆発四散した。

「うわっ!？」

何分警告とかがしている間が無かったから、タツミさんは至近距離で爆発四散したコンゴウの組織片をもろにかぶってしまった。

「すまねえカカシ！ 助かったぜー！」

それなのに文句ひとつ言わないで、拳句お礼すらいえる貴方は神様かなんかですか？

流石問題児だらけの防衛班を束ねるだけあって、懐がお太い！

今のコンゴウが最後の一匹だったようで、本のつかの間だが息を整える間があった。

「あ、カカシさん、タツミさん！ 次、次が来ましたよー！」

ここで前方に目を凝らしていたカノンさんが第二波の接近に気づき、次の瞬間には倒壊した建物を飛び越えて、ヴァジュラテイル（赤）が現れた。

「はあー！」

「当たってくださいい〜！」

一番乗りでやって来たヴァジュラテイルはジーナさんの射撃で体を崩し、その一瞬遅れて叩き込まれたカノンのブラストの一撃であつという間に屠られた。

が、当然こいつ一体だけではなく、後続がぞろぞろと俺たちの前に現れた。

たった今倒したヴァジュラテイル（赤）に加え、ヴァジュラテイル（黄）、ザイゴート墮天（青、赤）、シユウ3体にグボロ・グボロが6体の大所帯だ。

「おいおい何て数だよ!?!」

「待ってタツミ、まだ奥から何か……」

わらわらと目の前で蠢くアラガミ達に思わず呻いたタツミさんに、ジーナさんは更に追い打ちをかけるかのように奥を指さした。

倒壊した建物で姿は一部分しか見えないが、かなりの巨体であることとは見て取れた。そしてそれは倒壊した建物を刎ね飛ばしながら、俺たちの前に姿を現した……って。

「何だこいつ!?!」

目を剥いて驚愕するタツミさんと同様に、俺もびつくり仰天して現

れたそいつを凝視した。

見てくれはテスカトリポカそのものだが、そいつは通常種よりも暗緑色が目立つ色合いをしていた。

(ポセイドンじゃねえか！)

心の中で俺は叫んだ。

説明しよう！ ポセイドンとは、無印ゴッドイーターのダウンロードコンテンツのみで出会うことが出来る、手抜きアラガミの一種である！

そう一種と言ったように、他にも色を変えただけの手抜きアラガミは存在しているのだ！ シュウの上位種『セクメト』の色違い版『ヘラ』、サリエル種の接触禁忌種であるスカートはいたキモイおっさんこと『アイテール』の色違い版『ゼウス』。

こいつらは先ほど言ったように無印のダウンロードコンテンツでしか会えないので、影が薄い薄い。作られる武器も盾も大したものじゃないので、戦ったことがある人すら少ないのではなからうか？ 私はそもそも戦った事すらないです？ 正直俺も記憶がだいぶ臆気だぞ！

「ピガガーツ!!!」

ポセイドンは俺らを見るや、壊れた機械めいたノイズ交じりの咆哮を上げた。

「ちよちよちよ！ この量のアラガミを相手にしながらあんな大物なんて戦えませんよー！」

「チイツなんだって接触禁忌種なんか出てくんだよ」

ヒュンカツカとショートブレードを振り回して群がる小型アラガミを処理しながら、タツミさんが歯噛みする。

あーそれなら俺があれ処理するから、皆さんは雑魚の相手してもらっていいですか？

「……正気？ あれ、接触禁忌種のテスカトリポカの変異種でしょ？
一人で戦うなんて無茶よ」

ジーナさんがポセイドンに顔を向けたまま、こちらに目だけを向けて言った。

まーまーダイジョブダツテ！ 少し前にテスカトリポカはぶっ飛ばしたし、今回も平気平気、平気だから。

「……そう、分かったわ。でも無茶はしないでね。あなたが死んでしまったら、私達、第一部隊の子たちに恨まれちゃうわ」

……ハハア。

「……こういう時くらい何か言ったって、罰なんか当たらないわよ？」
「すまねえカカシ！ 俺らも手を貸してやりたいが、こいつら相手に精一杯だ！」

「こいつらは私たちが何とかします！ だからカカシさんはあいつを！」

お任せあれー！

意気揚々と返事をした俺はポセイドンへ向き直り、ゲームでクアドリガ神属がこちらを発見時にする上半身を上げる動作をしているポセイドンに切り込んだ。

地面に前足が着地した瞬間に合わせて、俺は呪刀をポセイドンの前面装甲に叩きつけた。

「ピガガーツ!？」

「ええ!？」

「おいおいマジかよ!？」

「ビュウ♪ お見事、綺麗な花火ね」

鉄球が壁に炸裂する音を何倍にも増幅した様な派手な音を立てて前面装甲は結合崩壊を起こし、破片をまき散らしながらポセイドンは後退った。

なに悠長に威嚇なんざしてやがんだコラツ。ナメツコラー！ ナンオラー！

ゲームじゃロングブレードでクアドリガ神属にダメージを与える手段なんて前面装甲が開いた体内以外存在しなかったもんだが、生憎これは現実で、良いトコに攻撃が当てられれば一発で結合崩壊させられるんだよオ！

後退るポセイドンに俺は神機を銃形態へと変形させながら更に踏み込み、剥き出しになった体内へと銃口をねじ込んだ。

そして引き金を引き、ないぞうはかいだんを撃ち込みまくった。

「ピガガガガーツ!？」

たちまち内部から神属性レーザーが無茶苦茶に体外へと放出され、ポセイドンはおんぼろの洗濯機みたいにガタガタと震えた。

「ピガガーツ!？」

そしてポセイドンは先ほどのコンゴウと同じように爆殺四散した。肉片がまるで花火のようにあたりにあたり四散し、タツミさんたちと戦っていた小型アラガミが吸い寄せられるように肉片に群がり始めた。

力あるアラガミの肉片。大型種ならともかく、大した力も知性も無い小型アラガミは本能に忠実だからそうなるのもさもありなん。

後は消化試合じゃー! 小型と中型の群れなんざなんぼのもんじゃーい!

戦いそつちのけで肉片を食う小型アラガミを倒すタツミさんたちを、背後から襲おうとする中型アラガミを請け負うこと数分。どっからやって来たのか、グボロ・グボロ墮天（青）の砲塔を叩き割り、動揺している隙に銃形態でハチの巣にしてやった。

倒れ伏すグボロ・グボロから目を離し、残心する。だが視界にも感覚のセンサーにも動く者の気配はない。どうやら殺しきったみたいだ。

増援の反応が無い事はヒバリさんに確認済み。ミッション完了だ。

俺が肩の力を抜いたのに気づいた防衛班の皆さんは、安堵のため息を吐きながら体の力を抜いた。

「ふいー……終わったみたいだな……」

「っ、疲れましたあゝ……」

「スコープ越しに撃ち抜く楽しみと言っても限度があるわ……」

流石に連戦続きでみんなお疲れの様子だ。

そりやそうか。日が経つごとに戦いに出る人が減っていくから、残る事を決意した人の負担が増すのもしょうがない事だ。

それから各々が迎えのへりを待っている中で、ジーナさんは無言で俺をじっと見つめてきた。しかもじりじりと距離を詰めてくる物だから、なんだか気ままずくなって、つい顔を逸らした。

顔を戻すと、息のかかる距離にジーナさんの顔があつた。

前に顔を出すだけでキスできるような距離で、俺とジーナさんは見つめ合う。

間近で見たジーナさんの瞳は、とても綺麗だった。

彼女は私の強く、あまり協調性の無い防衛班のメンバーの中で大人の余裕を感じさせ、包容力があり、ストイックで、とても素晴らしい女性だ。

ジーナさんの顔には連日の出撃で疲れが色濃く浮かんでいるけれど、その瞳に宿る優しさと強さには何一つ揺らぎが無かった。

彼女のすばらしさを改めて思い知っていると、黙っていたジーナさんはおずおずと、やや重々しい表情で口を開いた。

「正直な話ね、私は貴方が支部長の『あの』話に賛成していると思っていたの。……ほら、あなたって基本何も喋らないから、勝手な憶測だけだね」

そう言ってジーナさんは俺の頬に手をやり、感情の機敏を見逃すまいと覗き込んだ。

まあそうですね。本当に人類の事を考えるなら、支部長の話は賛成ですね。

「ならどうしてあなたはここに居るの？ 賛成なら、シユンやカレルみたいにエイジスへ行けばいいじゃない」

気が付けばタツミさんとカノンさんも話の内容が気になるのか、近くまで寄ってきて俺たちの会話に聞き耳を立てていた。

そうですね、ジーナさん。確かに俺はあの人の話に賛成してはいません。でもど————しても彼のもとに行けない理由があるんです。

「それは……何？」

ジーナさんの顔は更に近づき、ついには額がこつんと当たり、俺と彼女との距離はゼロとなった。

別になんてことはありません。ただかなえない夢があるってだけです。で、彼について行ったらそれが叶わなくなるってんで。

「だから行かないの？ あなたのその願いは助かる道を捨ててまでしてかなえる価値がある事なの？」

勿論です！ そうでなきゃ困る……いや、そうに決まっています。

「そう……それがあなたがここに残った理由なのね」

ジーナさんは俺の答えを理解するために何度か頭で反芻するかのようによくくりくりと頷き、それから呑み込めたのか、ふと笑みを浮

かべ、俺を解放した。

「……カカシさんはすごいです。自分の叶えたい夢のために助かる道を捨てられるだなんて……私は、私はまだ答えを出せません。助かりたいと思う心もありますし、でもみんなを置いて一人逃げるなんて許せない自分もいるんです。心が二つあるんです……」

「あ、俺？ 俺は悪いがパスさせてもらうわ！ 俺はこれしかできない不器用な奴だからな！ 他の助かりたい奴の枠は多い方が良いでしょう……そんなのカッコよくねーだろ？ ヒバリちゃんに嫌われるようなことはしたくねーからな！」

うんうん、どっちの考えもいいと思うよ。自分で悩み、考え、思い煩い苦しもうとも、その末に出した答えはきつと尊い事だ。残る事も、行くことも、どっちも俺は賛成だ。

そう答える俺にタツミさんとカノンさんは顔を見合わせ、それからジーナさんのようにどこか安堵した様な安心した様な、そんな笑みを浮かべた。

こちらに向き直ったカノンさんが口を開きかけたその時、無粋なローター音が彼女の機先を制し、それに伴い、俺たちの会話は終わりを告げた。

タイミングがいいのか悪いのか分からないけど、それでも俺の考えで多少は楽になったのか、カノンさんは先ほどよりもずいぶんマシな顔つきになっている気がする。

へりに乗り込んだ俺たちは、アナグラにつくまでの短い間に、この際腹を割って話し合った。好きな食べ物、苦手な人について、アラガミについて、この先の未来について。

俺はもっぱら聞き役に徹していたけれど、それでも俺たち4人の繋がりには、任務を行う前よりもよほど強くなっているはずだ。

たとえそれが俺の傲慢な妄想だったとしても、そう思わせるだけの温かさが、そこには確かにあったんだ。

ヘリがアナグラへと到着し、任務完了の報告をしようとエントランスへ向かっていると、前からソーマ君が大股でこちらに近づいてきた。

「すまねえ、あれだけ時間を貰っておいて情けない話だが、博士は見つけられなかった……クソ！」

俺の前で止まると、ソーマ君は苦い顔でそう言った。

ソーマ君は無言で俺を見ている。

……する事は分かっている。でもどうしてもそのための一步を、俺は踏み出せないでいた。

理由は分っている。この一步を踏み出せば、もう後戻りが効かない。

彼を始末してしまえば、俺の計画が始まってしまう。否応なしに。賽が投げられてしまう。

頭の中で思い描いていた計画が、この事件を境に始まってしまう。それが堪らなく恐かった。

覚悟はしていたはずなのに、どうしても足が動かない。

そうやって一步踏み出せずにいると。背中に温もりが三つ。

俺が目を見開いていると、三つの温もりが軽く俺の背を押した。

あ、と。

か細い声が漏れると同時に、足が前に出る。

振り返る。そこにあつたのは3つの柔らかな笑み。

言葉は無くとも、思いは十分に伝わった。

迷いは未だ胸にあり。しかし、前に進むことへの躊躇いは、消えた。

心の中で感謝の思いを伝えながら、正面に向き直り、ソーマ君へ頷きかける。

待つてましたと言わんばかりに、ソーマ君も頷き、俺たちは歩き出した。

振り返らなかつたけど、彼らはきつと、あの笑みのまま、俺を見送っているに違いない事は、突き刺さる視線から十分に伝わった。

彼らの思いを胸に、俺は歩を進める足に力を籠めた。

……一つの物語が、節目を迎えようとしていた。

希望（前編）

ついにここまで来てしまった

ついにここまでたどり着いてしまった

前を見据える 一寸先すら見通せない暗黒の先を

一步踏み出す

背後で扉の閉じる音が聞こえた

もう戻れない

■

一先ずソーマは作戦会議のためにカカシを引き連れて自室へと向かおうとベテラン区画の廊下を歩いていたのだが、背後のエレベーターが開く音が聞こえ、振り返った。

「お前ら……!」

ソーマは目を見開いて、エレベーターから出てきた二人の女性を凝視した。

「シオが連れていかれたのね?」

露出の多い煽情的な衣服に身を包んだショートボブの美女、サクヤはソーマの前に立った。

「勝手に縁を切ったんじゃないのかよ!」

「どーせ、貴方たちだけじゃ心細いと思って、こうして戻ってきたんですよ」

驚愕に目を丸くするソーマに、同じく露出の多い衣服を着た美少女アリサが不敵な笑みを浮かべながら軽口をたたく。

「……実は、エイジスへの再侵入方法を探っていたんだけどね、アーク計画の発動を前に外周が完全にシャットアウトされて、正直打つ手なしなの」

サクヤが苦虫をかみつぶしたような顔で、吐き捨てるように言った。

「……きつと……アナグラの地下に……エイジスへの道はあるよ」

と、彼女の絶望的な状況報告に被せるようにして、そんな声が聞こえてきた。

一人を除いた全員がその声に反射的に振り向き、そこにいた者を見るや先程のソーマと同じように目を見開いた。

「コウタ!?!」

そこにいたのは、アーク計画に乗り、アナグラから離れていたはずのコウタであった。

「どうして? だってあなたはアーク計画に乗ったんじゃないんですか!?!」

皆の思いを代弁するかのようなアリスの言葉に、コウタは気恥ずかしそうにはにかんだ。

それだけで、彼の思いは十分に伝わった。きつとすさまじい苦悩が、葛藤があったはずだ。それでも彼はここに来た。様々な思いをその胸に託して。

察したアリスは何も言わず、ただコウタに微笑みかけた。彼は頭を掻きながら、同じように笑った。

「……行こう。多分こっちだよ!」

コウタに連れられ、アリサたち第一部隊のメンバーはエレベーターに乗り込み、アナグラの地下へと降りた。

しかし、エイジスへ行くためのゲートのコードが分からず、途方に暮れてしまった。

「ダメだ……ゲートを解除できない！」

コウタの焦燥と失望の声が、地下に響き渡った。

「……結局、全員集合したようだな」

エレベーター側からの声に振り返ると、果たして、そこにはツバキが立っていた。

「ツバキさん……！」

「心配するな、誰もお前たちを捕らえたりはしない」

身構えるサクヤに、ツバキは穏やかと言っているほど落ち着いた態度でそう返した。

「この通り、アナグラも方舟騒動で滅茶苦茶だ……。方舟賛成派はとっくに行ってしまったよ」

言い切るとツバキはどこか呆れたように肩を竦めた。

「じゃあ、あなたは？」

「ああ、弟の不始末は、姉が片をつけてやらないとな。そうだろうか？」

恐る恐る聞くサクヤに、ツバキはさも当然とばかりに言ったのけた。

「それにしてもコウタ。どうしてここがエイジスへの道だと気付いた？」
「うえ!？」

と、突然話題を振られたコウタは変な声を出しながらも気づいた経緯について語った。

「扉を見つけたのは、地下の旧居住予定地を見たくて忍び込んだ時です。で、その時は確証があった訳じゃないんだけど、博士が講義の時にアナグラのプラントのリソースがエイジス建築に使われているって言うっていたから。それで」
「なるほど。やるじゃないかコウタ」

コウタの推理を聞いたツバキは、自分の教え子が立派に成長していることが嬉しくてたまらない事を隠しもせず、笑みを浮かべた。

褒められたコウタは照れ隠しのように視線をそらし、頬を掻いた。そんなコウタに顔が赤くなっているとアリサが茶々を入れ、ソーマは肘で突いた。

「解除キーならば私が持っている。エイジスへ行きたいければ、十分に準備してからにしろ」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

「……とりあえずシャワーを浴びたいですね」

「そうね、決戦前に一息つきたいわね」

「のんきだなあ……」

「フン、下らん」

「何ですってえ!」

売り言葉に買い言葉。きやいきやいと仲睦まじく口喧嘩を始めた4人を、まるで眩しいのでも見るかのようにカカシは目を細めた。

「……それと、お前らに言うておく」

口喧嘩はぴたりと止まり、全員がツバキへと視線を送る。

皆からの視線を一人ひとり返し、最後にカカシと目が合うと、ツバキはふと笑みを浮かべ、言った。

「ありがとう」

彼らは顔を見合わせ、それから表情を緩めてツバキへと頷きかけた。



全ての準備を終えた第一部隊のメンバーは出撃ゲート前に集合し、最後のブリーフィングを終え、今まさにエイジスへ向けて出動しようとしていた。

彼らを見送る者たちは少ない。

今アナグラに残っているのはツバキ、エンジニアのリツカ、そしてオペレーターであるヒバリ、そしてよろず屋だけである。

方舟賛同派はすでにここにはいない。残ったものは穴埋めとして今尚どこも知れぬ場所で死に物狂いで戦っている。

牙無き人のために、人類最後の砦たちは今なお戦っているのだ。

残っている彼女たちは、彼女たちなりに彼らを支援して少しでもマシな戦いができるように死に物狂いで整備やサポートをしていた。彼女たちも戦っているのだ。

そして、最後の戦いへ向かう彼らを見送る事に、不謹慎ながらも、彼女たちは誇らしきすら感じていた。

「君たちの神機は万全に整備したよ！ きつと戦い抜けるはずだから、安心して行って来てね！」

「私も出来る限りのサポートは致します！ ですので、絶対に全員戻ってきてくださいー！」

「行ってこいゴッドイーター！ そして帰ってこい！」
「なんとか勝ってくれよ？ でなきやこつちも商売あがったりなんですね」

残った者たちの激励を背に、ソーマを先頭に第一部隊のメンバーは最後の戦いの舞台へ、エイジスへと向かった。

皆の胸にある思いは同じであった。

人類を滅ぼさせやしない。

決意を胸に、彼らは戦場へと歩を進めた。



彼らは走った。

道中に敵は無く、また障害物になる様な物も無かったので、彼ら超

人たちが全力で駆け抜けければ、程なくして、エイジスの中枢へとたどり着いた。

「で、デカイ……………」

それを目にしたコウタは、呻くように言った。

それは逆さに生えた、巨大な女の頭だった。まるで銅像のような質感だが、それは確かに生きていた。

これこそが『ノヴァ』である。今ある全てを喰らいつくして零へと戻し、再分配する破壊と再生の化身。

そしてその額の中心に、決して染まらぬ純白の無垢があった。

「ッ！ シオ!!」

真っ先にシオの存在に気が付いたソーマが我先に飛び出し、それに続く形でアリサ、次にサクヤとコウタが、最後にやや躊躇うようにしてカカシが追う。

シオの真下にまでたどり着いたソーマたちは、そこでようやくシオの前のリフトに立つ影を認めた。

「涙の手向けは、我が渴望するすべてなり、か」

影は、ヨハネス・フォン・シツクザールは振り返りもせず、独白めいて一人呟く。

「ソーマ…………随分このアラガミと仲が良かったみたいだな」

それからヨハネスは振り返り、ソーマを目にするなり皮肉な笑みを浮かべながら言った。

「それは愚かな選択というもので、息子よ」

「黙れ！ てめえを親父と思ったことは無い！ シオを解放しろ！」

息子という言葉に激しく反応したソーマは、ヨハネスへシオを解放するように吠えるように叫んだ。

「……」

対するヨハネスはソーマから目を逸らし、礫にされているシオへと目を移した。

丁度そのタイミングで、シオが張り付けられている額に光が生じ、エイジス中に張り巡らされている触手にも次々と同じ光が生じ始めた。

時を同じくして、空間に異様な力が漲った。

それは命だ。爆発的な命の鼓動。今まさに生れ落ちようと藻掻く胎児のような、剥き出しの生命の力に外ならない。

「よかろう。特異点が手に入った今、器になど用はない」

ヨハネスはその様に満足気に頷くと、ソーマへと向き直り、あつさりと言いつつ放った。

彼の言葉に呼応するように、シオを縛っていた戒めが解かれ、彼女は手放された人形の如く地に落ち始めた。

ソーマは弾かれたように動き出し、彼女が頭から地面に衝突する寸前に、その華奢な体を受け止めた。

「長い……実に長い道のりだった」

必死にシオに呼びかけるソーマから目を離し、ヨハネスはサクヤたちへと向き直った。

「年月をかけた捕食管理により、ノヴァの母体を育成しながら、世界中を駆けずり回り、使用に耐えうる宇宙船をかき集め、選ばれし千人を運ぶ計画が今！ この時をもって成就する!!!」

感極まったように両手を広げ、まるで宣言するかのように語るヨハネスの背で、今まさに彼がかき集めた宇宙船が、次々と飛び立ち始めた。

「今回こそ私の勝ちだよ博士……そこにいるんだろう？ ペイラー」

勝ち誇るヨハネスは、サクヤたちの背後に向けて、確信の籠った言葉を投げかけた。

「……やはり遅かったみたいだね」

言葉は返され、驚愕に目を丸くするサクヤたちの間を通りながら、ペイラーはヨハネスを見上げた。

「我々は今この一瞬ですら存亡の危機に立たされ続けているのだ！」

その一言を引き金に、ヨハネスは今までため込んでいたものを吐き出すかのように捲し立てた。

「日々世界中で報告されているアラガミの被害など、まだ緩やかなもの。星を喰らうアラガミが、ノヴァが出現し破裂すれば、その時点でこの世界は消え去るのだ！ そのタイミングはいつだ？ 数百年後

か？ 数時間後か？ やがては朽ちる運命のエイジスに身を隠して終末を待つなど、私はごめんだ！ 避けられない運命だからこそ、それを制御し、選ばれた人類を、次世代に向けて残すのだ！」

それは、どこか演劇的一幕を思わせる演説であった。緩急のついた台詞回し。大仰な身振り手振りは、熟練の役者も真っ青だ。

実際これは彼にとって演劇のような物なのだろう。地球という大舞台の中で、長い年月をかけて準備した盛大な演劇。酷く下らない悲劇の茶番劇の最終章。それが今日なのだ。

満願成就の日がやって来た。今の今まですべてをひた隠しにしてきたヨハネスが、悲願の達成を目前にして演技の仮面を脱ぎ捨てた結果が、演劇の役者じみた言動になるとは、何という皮肉であろうか。

一息に言い切ったヨハネスは再びペイラーへと目を向け、糾弾するかのように指を指した。

「君が特異点を利用して行おうとしていたことも、結局は終末を遅らせるだけでしかない。違うかね？ 博士」

ヨハネスの目を逸らさずに受け止めるペイラーの顔に、いつもの笑みは無い。

「どうかな……」

彼の脳裏には、果たしていかなる感情が渦巻いているのであろうか。その真顔からは、まるで真意を見通すことが出来ない。

「いったい……どういうことですか、博士!？」

彼の背に向けて、総意を代弁するサクヤに、長い沈黙ののち、ペイラーは答えた。

「私は……限りなく人間化したアラガミを生み出すことで世界を『維持』しようと考えた。完全に自立し、捕食本能をもコントロールできる存在として育成していくことで、終末捕食の寸前で留保し続けようと試みたのさ」

それは独白のようでいて、どこか懺悔しているようにも聞こえた。

「そしてそのために君たちを利用した……許してくれ」

ペイラーの声色は普段とあまり変わらなかったが、静かで張り詰めた空間だからこそ、拳を握りしめる音が良く聞こえた。

「アラガミと共生か……昔からそうだ。君は科学者としてはずいぶんロマンチスト
夢想主義すぎる」

「そういう君は人類に対して悲観主義過ぎたんじゃないか？」
「少し違うな博士」

ペイラーの皮肉交じりの返しに、ヨハネスは否定した。

「私は人間という存在自体にはどうに絶望している」

しかし、とヨハネスは続ける。

「だが私は知っているのだ。それでも人類は賢しく生き続けようとすることを！ アラガミやノヴァと何ら変わらない、その本能、飽くなき欲望の先にこそ、人の本能も拓かれてきたことも！」

「……これ以上は、平行線だね」

もはや道は違えた。どれだけ言の葉をかわそうとも、考えを改めさせることはできないと悟ったペイラーは、会話を打ち切った。

「そうだよペイラー。これ以上は無意味だ」

「そうか、残念だよ」

「……私もだ」

ほんの、ほんの一瞬だけ会話は途切れ、2人の科学者の視線が交じり合った。

やがてどちらともなく視線をそらした。

「私は失敗した。彼を欧州へ仕向け時間を稼いだつもりだったけど、残念ながら時が肩入れしたのは私達では無く彼の方だったみたいだ」

そこでペイラーはこの場に来て初めて口の端を緩め、ふと笑った。しかしそれはいつもの胡散臭いものではなく、自嘲的な、普段の彼からは考えられないほど皮肉気な笑みであった。

「そう悲観することは無い。この特異点は、次なる世界の道標として、この星の新たな秩序を示すだろう。いわば、神が定めたもうた新たな摂理だ」

ヨハネスの言葉が引き金となったかのように、ガゴンという音とともに彼の足元からせり上がってくる物があった。

それはまるで金色でできた蕾のような物体であった。

「そして……その摂理の頂点にあるものは、新たなる世界にあっても……人間であるべきなのだ！」

ヨハネスの叫びに呼応して、『蕾』の花がゆっくりと開かれ、中にある物をさらけ出した。

「そう、人間は！」

『女神』はその美しい肢体を惜しげもなくさらし、ゆっくりと、優雅さすら感じる所作で地に降りた。

「我々こそ！」

一拍子遅れて『男神』が『女神』の背後にゆっくりと降下し、寄り添った。

「神を喰らうものなのだ!!!」

『神』を前にして、誰も言葉を発しなかった。

ヨハネスはリフトから踏み出し、『男神』の真上へと落ちた。

『男神』はヨハネスを『迎え入れた』

あつという間の出来事であった。『男神』の背が割れ、中身をさらけ出した次の瞬間、まるで神機の捕食器官めいた物体が飛び出し、瞬間にヨハネスの体を引きずりこんだのだ。

「人が神となるか、神が人となるか、大変興味深かったけど、そうだね。この勝負は私の負けだ。完敗だよ。まったく……」

ペイラーはどこか呆れを孕んだ声色で独り言ち、首を振った。

「今の君は、アラガミと何ら変わらない。尤も君はそれを承知の上だ

ろうけどさ」

ペイラーはいつも通りの感情の機敏が読み取りづらい笑みを浮かべた。

「ならば、ここから先は私がでしやばるべきじゃ無い。私の役目は終わった。後は君たちの役目だ。頼んだよ、神を喰らう者たち」

そう言い残し、ペイラーは去った。

後には神を喰らう者たちと、荒ぶる神だけが残った。

「——少し、待っていてくれ」

ソーマは抱えていたシオの亡骸をそつと地面に下ろして立ち上がると、幽鬼の如き足取りで、『神』の前に立った。

ソーマは『神』を前に言葉は無く、ただその瞳は煮え滾る熔鉄めいて黒く燃えていた。

「リンドウ、見てる？ やつとここまで辿り着けたわ。ここにいる皆のおかげよ……」

一言一言を、まるで噛みしめるかのように、毅然とした表情で、サクヤは『神』へと銃口を向ける。

「俺、これまでずっと家族や皆が安心して暮らせる居場所を誰かが作ってくれるのを待っていたんだ。でも、気づいたら簡単な事だった。自分がその居場所になればいいんだって。それを作るために……俺、戦うよ！」

コウタは『神』を前にひるむことなく自らの意思を語り、決意を籠

めた眼差しで、眼前の『神』を見据えた。

「私も……みんながいたから気付けたんです。こんな自分でも誰かを守れるんだ……って！」

アリスの瞳には、もうあの時の迷いはない。彼女は決断的な意思のもと神殺しの武器を『神』へと向けた。

「お喋りはここまでだ……背中は任せませ」

ソーマは煮え滾る憤怒をまるで感じさせぬ穏やかな口調で語りかけた。

「方舟は動き出した」

『神』はゆつくりと歩を進めながら、うたう。

「後に残された罪深き者どもは、溢れ出した贖罪の津波に押し流されるだろう」

神を喰らう者たちは次々と神殺しの武器を構え始めた。

「水面に浮かぶ最後の板きれを手にするのは……」

両者の視線が交わり、火花を散らす。

「このわた——」

不意に、『男神』の姿が掻き消えた。その一瞬遅れて衝撃波が放射状に放たれた。あまりに突然の事に、この場の誰もが絶句した。

困惑するかのように首を巡らす『女神』を前に、しかし彼らは見た。

『男神』の腕に噛みついた、黒い狼の姿を。

脳裏に浮かんだ黒い影が閃いた時、第一部隊の全員が彼の意図に気が付いた。

『大狼オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

『男神』憤怒の雄たけびと、何か大きなものが叩きつけられる破碎音があったのはほぼ同時だった。

それが引き金となって、『女神』と第一部隊のメンバーは激突した。

人類存亡をかけた戦いが、今始まった。

希望（中編）

『制圧対象は、極東支部支部長、ヨハネス・フォン・シツクザール。正面の構造物はアラガミに極めて近いオラクル兵器と断定しました。最後まで全力でサポートします！ ……武運を！』

ヒバリからの通信で目の前の『女神』の情報を得た彼らは、『男神』と合流しようとする『女神』の進路を妨害するように立ち回り、この場に留めるべく攻撃を開始した。

「ハアッ！」

アリサの横薙ぎの斬撃を滑るように回避し、反撃の殴打を繰り返す『女神』に、コウタとサクヤがかさず銃撃を撃ち込んで攻撃の妨害をする。

『00011101001110』

『男神』と引き離されて不調でも起こしたのか、『女神』の口からはノイズじみた雑音しか聞こえなかった。

しかし、それでもどこか煩わし気な目で2人を見やると、無造作に右腕を振った。

遠距離武器を相手に当然空振りに終わると思われたが、次の瞬間腕が蛇腹剣じみてセグメント分解され、何倍にも伸びた腕がまるで鞭のように振るわれてコウタとサクヤに襲い掛かった。

「くっ!？」

「うおおっ!？」

サクヤは咄嗟に跳ねる事で、コウタは神機でガードする事でかろう

じて傷を負わずに済んだものの、あまりの衝撃に後方に大きく跳ね飛ばされてしまった。

「コウタ!? くそが!」

呼びかけに手を振って応じたコウタに安堵しつつも、仲間を傷つけられて即座に激昂したソーマは伸び切った隙を晒した『女神』に向かって渾身の振り下ろしを繰り出した。

『00011110101011!?!』

これをまともに食らった女神はバウンドし、床をゴロゴロと転がった。

が、すぐさま立ち上がり、『女神』は機械的に眼前の敵へと向けて砲弾めいた勢いで突っ込んでいった。

女神の胴体にはうっすらと切り傷が浮かんでいた。ソーマ渾身の一撃をまともに食らってその程度の傷しか与えられない事実には、彼らは驚愕を禁じ得なかった。

しかしそれでもやらなければならない。

幸いにして、『死神』の時の様に傷一つ付けられないわけではない事がかかったので、あの時に比べればずいぶんマシである。

何より。

「戦えている……!」

そうだ。彼らは事実この恐るべきアラガミを前に戦えているのだ。

それは彼らが今まで数多の戦闘を通じて築き上げた努力が、敗北の挫折が、鍛錬の成果がここで発揮されていたのだ。どれもが無駄では無かった。あらゆる経験の全ての蓄積の果てに、彼らはこうしてこの大舞台上で戦えている。

「こいつは私（俺）たちが倒す！」

サクヤが、アリサが、コウタが、ソウマが、吠える様に言うと、全員が一斉に『女神』に向かって攻撃を始めた。

『01101s0101110マ00101011』

『女神』は相変わらず不明瞭なノイズを垂れ流しながら、『人』を滅ぼすために、迎え撃った。



第一部隊と『女神』の戦いを、遠くから眺めている存在があった。

カカシは目を細めながら彼らの戦いぶりを、その魂の輝きを、飽きる事無く見つめていた。

『それを吸い終わったら、始めようか』

『男神』に言われ、カカシは視線を『男神』へと向け、ふと口元を緩めながら啜っていたタバコを指で挟み、紫煙を吐き出した。

『私は君が、こちら側に来ると思っていた』

カカシからの疑問の視線に、『男神』は確信の籠った返答を返した。

『君は私と同じように、人類に絶望している。違うか?』

質問に答えず、カカシは曖昧に微笑んだ。いつものように。

『ツ！ 答える大狼！ 何故だ……なぜ!? 君は「ヨハネスさん」ツ!?』

被せられた声は『男神』に比べれば殆ど囁きにも近しかったそれは、しかし、嫌に良く聞こえた。

静かかつ穏やかに告げられた言葉は、理由は分らないが二の句が継げない程の迫力があつた。『男神』は思わず黙り込む。

「あなたは凄い人だ」

第一部隊と『女神』の魂を震わせるかのような戦いを見つめながら、カカシは口を開く。

「たった一人でここまで来た。ここまで来るのに、どれだけの苦しみを、どれだけの悲しみを、どれだけの失望を……どれだけの希望を抱いてきたのか。俺は頭が悪いから想像もつかないけど、きっと俺には想像もできない程の険しい道のりだったのでしょね」

『……』

吹き飛ばされたソーマを受け止めたアリサの隙をカバーするように射撃をするサクヤ。それを援護する形でコウタがスタングレネードを放り投げ、見事『女神』は行動不能に陥り、援護射撃により『女神』は堪らず後退した。

援護射撃のおかげで体勢を復帰し、ソーマとアリサは再び裂帛の気合と共に流星めいて『女神』を穿たんと突貫した。

素晴らしい戦いぶりであった。彼らの雄姿は、まさしく人類最後の砦というべきに相応しい。……自分と違って。

「彼らも、あなたと同じようにたくさんの方の苦しみや悲しみがあつた。そしてそれを乗り越えて、今ここにいます」

『だから何だ？ 私にも同じことをしろと？ 馬鹿馬鹿しい！』
「ヨハネスさん」

カカシは紫煙を吐いた。

『何だ？』

「あなたの質問に、まだ答えていませんでしたね。ほら、どうして俺があなたの計画に乗らなかつたのかつて」

『……』

『男神』は黙り込んだ。それが自分の話を聞くためだと知り、生真面目だなあと内心思いながら、カカシは言った。

「あなたのアーク計画と同じように、俺にもちよつとした『計画』があるんです」

『なに!?!』

驚いたように声を上げる『男神』に構わず、カカシは続ける。

「あなたの様な綿密かつ周到な計画という訳ではありません。むしろ運任せの行き当たりばつたりの計画とすら言えないようなお粗末なもの」

でもね、と告げるカカシの顔は、酷くくたびれ、すり切れていた。

「でも、これが上手くいきさえすれば、今いる人類の大半を殺す事無く世界を救うことが出来る。人も地球も誰も傷つかずに済むんだ」

『馬鹿な！ そんな方法がある訳が無い！』

『ヨハネス』は絶叫した。

当然だろう。それは今まで何度も模索し、結論が出せずに捨て去らざるを得なかった机上の空論だった。

それを、目の前のたかが仮初の名を持つ者が出来ると、しかも本人曰く場当たりの計画とすらいえない物だというではないか。

ふざけるなど言いたくなるのも無理はない。

しかしカカシは知っているのだ。この世界の一つの結末を。その先に起こる悲劇を。

「今のところ計画は実に順調なんだ。まあ流れに身を任せているだけなんだけど。それに、今まではあまり派手な動きは出来なかったけど、この事件で一気に動きやすくなる」

『ッ！』

その一言で、『ヨハネス』は全てを察した。

カカシは肺に残った紫煙をすべて吐き出すと、煙草を踏み消し『男神』へと向き合った。

「これが俺があなたの計画に乗らない理由です。分かってくれましたか？」

『……ああ、理解したよ』

二者は無言で、しばしの間見つめ合った。

どうしてこうなった？

二者は全く同じことを考えた。

どうしてこうなった？ 志は同じはずなのに、どうして争わねばならない？

何百、何千と問うてきた疑問に、今再び両者は襲われていた。

しかし疑問は刹那。結論は瞬く間に弾き出された。

もはや問答は埒も無し。とうに賽は投げられた。結局の所、アプローチの仕方が根本的にかみ合わなかったのだ。彼は全てを切り捨てた。彼は全てを切り捨てられなかった。要はそれだけだ。

「ヨハネスさん……」

バキバキと軋み音が聞こえ、次の瞬間カカシの口元は『牙』に覆われた。

『カカシ君……』

『男神』は己の体に力を巡らせた。己の血肉、己の細胞一片に至るまで、眼前の敵を完全に粉碎するために。

『「君（あなた）が邪魔だ（です）」』

対峙する二者の体から、この空間に満ちる異様な力すら吹き飛ばすほどのオラクルが放射された。

『消えてくれないか（ませんか）？』』

この話し合いは、要するにどちらの計画を進めるかどうかの交渉のような物であった。

結果は決裂。そして話し合いで解決しないのであれば、後に残されたのは酷く原始的でシンプルな手段だった。

即ち、敵対者を排除する事である。

大狼は、『男神』は、同時に地を蹴り、ぶつかり合った。

黒幕同士の戦いが始まった。



『ハアッ！』

『男神』の大ぶりのフックを大狼は上体を仰け反らせることでかわし、そのまま逸らした勢いでバク転をうち、着地の反動をバネに突貫。刀身が霞んで見える程の速度で神機を振り下ろした。

『見えるぞー！』

もはや人間の限界を何段階も超えているであろう極めて恐るべき大狼の斬撃を『男神』は紙一重でかわし、お返しとばかりにストレートパンチを放った。

大狼は盾を展開し、破城槌めいた一撃を受け止めた。

更に大狼はインパクトの瞬間に盾を傾け、『男神』のストレートパンチを逸らした。

『んおっ!?!』

前につんのめる形で押し出された『男神』の体に、大狼は突きを放った。

『舐めるな!』

『男神』は宙に浮いている点を生かし、その場でコマめいて回転した。圧倒的パワーから繰り出される回転の勢いはすさまじく、大狼の突きは軽々と弾かれてしまった。

『食らえ!』

回転の勢いを維持したまま『男神』は猛烈な勢いで大狼へと迫った。さながら意思を持つ桃色の竜巻だ。

桃色の竜巻を相手に近接戦闘は不利と悟った大狼は神機を銃形態へと変え、ドローバツクショットで後方へ下がりながら銃撃を開始。

たちまち嵐の如き砲火に晒された桃色の竜巻はなおも回転の勢いを高め、砲火の嵐に真っ向から抗った。

桃色の竜巻は砲火の嵐に押し流されて後退したが、更に回転の勢いを増すことで逆に押し返し、今度は大狼が後退する羽目になった。

大狼は後退しながら死神の口から破滅の鉄火を放ち続けたが、背中にとんと衝撃を感じ、目を見開いて背後を見る。

あまりにも夢中になりすぎて、いつの間にか壁の端まで後退していたようだ。

「チツ」

無意識に出た舌打ち。瞬時の状況判断を下した大狼は砲撃を続けながら跳躍。さらに背後の壁を蹴ってもう一段。眼前にまで迫った桃色の竜巻を飛び越しにかかった。

『ハハ！ 無駄だ！』

『男神』は回転の勢いのまま片手を伸ばし、丸太のような腕を叩きつけにいった。

「そうかな？」

『何い!?!』

『男神』は思わず唸った。何と大狼は足の裏からオラクルを放出する事で空中で2段ジャンプをやつてのけたのだ。結果、叩き落すはずだった腕は空を切り、大狼は『男神』の背後へと着地した。

「ガアッ！」

『しまっ!?!』

大狼は無防備な隙を晒す『男神』へ横薙ぎの斬撃を放った。『男神』は咄嗟に反応した物の、神速の一撃ともいえる大狼の斬撃をかわし切ることは不可能であった。

咄嗟に掲げられた腕のガードの下をすり抜けるように振るわれた呪われし刃は、『男神』の脇の下を切り裂いた。

決して浅くない傷であった。血飛沫が舞い、鮮血が刃の軌跡に沿って宙に円弧を描いた。

『ぐおお?!』

産まれて初めて味わう激痛に堪らず悲鳴を上げる『男神』に、大狼はほんの、ほんの0コンマ数秒のあいだ躊躇いを覚えた。

が、それもすぐに消えた。代わりに湧き出たのが、嘲笑。

何をいまさら。

大狼は吐き捨てた。

命乞いをする者を、戦意の無くなった相手を、俺は一体どれだけ殺してきた？ それを思えば、今更それが一人増えたところで何を躊躇う事があるのか。

大狼は『牙』の下で自嘲気味な笑みを浮かべ、ふと湧いた同情の心に蓋をして、容赦なく追撃を加えた。

『ぐうっ!?!』

返す刀で胸のコアを切り裂かれた『男神』は堪らず後退した。

更に追撃を、と踏み込んだ大狼だが、その瞬間脳髓に電流めいて死のイメージが弾け、反射的に横に飛んだ。

一瞬遅れて彼のいた地点に桃色の光球が着弾し、光の柱を発生させた。

危ない所であった。あのまま切り掛かっていたら発射された光弾が直撃し、発生した光の柱に全身を焼かれていただろう。

『大狼オオオオ!!』

想像を絶する痛みを憤怒によって押し流した『男神』は大狼の着地点を狙い、追撃の光弾を発射した。

大狼は顔面を狙った光弾を首をかしげる事でかわし、その後立て続けに発射された光弾を稲妻めいた横移動をすることで回避した。

しかし、『男神』の執拗な射撃は時間が経つにつれ密度を増し、ついにかわし切れずに一条の光が大狼の脇腹の肉を吹き飛ばした。

「ぐっ!?!」

転倒こそ免れたものの、崩れた体幹を立て直すために強く踏み込まねばならず、その間に彼の体に何発もの光弾が着弾した。

ボボボボと断続的に光球は着弾し、肉片と血飛沫をまき散らし、大狼の姿は煙の向こう側へと姿を消した。

『ぐ……ク……ハ、ハハハハ！ どうだ効いたか!?!』

煙の向こう側で大狼の傷の具合は定かでは無いが、しかし確かな手ごたえを感じた『男神』はあの『大狼』の喉元に自らの牙が届くことが分かった事に歓喜した。

『男神』の脳裏にはかつて混沌の翁を屠り去った『大狼』の姿が未だこびり付いており、あの時感じた恐怖をいつの日か払拭すると固く誓っていたのだ。

しかしである。

『ハハハハハ……——ツ!?!』

高笑いしていた『男神』だが、その時、煙の向こう側でゆらり、と蠢く気配を感じ笑みを止めた。

彼は思い出すべきであった。大狼が真に恐ろしくなるのは、命にかわる様な甚大なダメージを負った後である事に。

直後、煙幕が爆散し、黒い閃光が弾けたかと思えば一直線に『男神』へ向けて引き絞られた矢のように突っ込んできた。

『く、やはり!?!』

『男神』は螺旋を描く突きをkarouうじて弾き、弾かれた反動を利用した回転切りにパンチを合わせて相殺。

黒い影は黄金の軌跡を後に残し、尋常じゃない程加速した斬撃を無数に放った。

『うおおお!!?!』

アラガミと一体化し、遥かに向上した動体視力をもつてしても大狼の動きは黒い影にしか見えなかった。

明らかに先ほどの攻防とはまるで別次元の動きに『男神』はまったく対応できなかった。

しかしそれも仕方のないことだ。元々彼は戦闘とは無縁の人間であり、対する大狼は百戦錬磨の戦闘者である。

経験が違う場数が違う。こと戦においては何もかもが目の前の相手とは隔絶していた。

だがそんな彼にも大狼に劣らない、否、絶対に凌駕しているであろうことが一つある。

それは執念。絶対に人類を救って見せるという、狂気にも近い人類への執念である。

『舐！ め！ る！ なあアアアアアアアアアアアア!!』

全身を走る苦痛を、すべてを切り捨てた苦汁を、執念で塗りつぶし、『男神』は獣のように吠え無我夢中で拳を振るった。

奇跡が起きた。

何とがむしやらに振るわれた拳の一つが、大狼のガードをすり抜けて腹部へと吸い込まれるように当たったのだ。

大型の重機が壁にぶつかったかのごとき破碎音。当たるとは思っていなかった『男神』は束の間放心した。

そしてその時はじめて煙から姿を現した後の大狼の姿を視界に収めた彼は絶句して再び硬直した。

大狼の体は全身が血にまみれており、わき腹の肉は吹き飛ばされて未だ修復が済んでいないのか肉の断面が垣間見えた。

殴られた衝撃で骨が押し折れたらしく、更に体を突き破って何本か体外に露出していた。

どう見ても即死、どう見ても戦える体ではない。それでも彼は生きていた。

大狼は神機を握っていない方の腕を突き出された『男神』の拳に乗せ、俯いていた顔を上げた。『男神』は思わず息を呑んだ。

下顎を覆う『牙』は破壊されており、剥き出しとなった口元は大型の肉食獣めいて犬歯がむき出しとなり、見開かれた瞳は黄金の光で煌々と輝き、光の点にしか見えない瞳からは何者も真意を読み取る事は出来ないだろう。

だが『男神』はそんな瞳が宿す思いを共有していた。

それは人類を憂う心。同時に人類への失望と嘆きである。

お互いの思いを再確認した両者だが、視線の交差は一瞬。言葉はとうに語りつくした。後は相争う以外に道は無く、それは二人が言葉を交わす事無くわかり切った物事の内の一つであった。

示し合わせた訳でもなく、『男神』と大狼は再び切り結び合った。

『男神』のフックをかわし大狼は切り付ける。『男神』は後方へ滑るように動いて刃をかわし光弾をばら撒いた。

大狼は頭部や重要な器官を狙ったもの以外一切頓着することなく構わず突進。

肉を、血を景気よくばら撒きながらも大狼は『男神』へと迫り、『男神』は目前に迫った大狼へ迎撃のラリアットを繰り出すも大狼は易々と潜り抜け、全身のバネをきかせて跳ね起きながら昇り切りを繰り出した。

『ガアアアアアアッ?!?!』

絶叫が、鮮血と共に迸った。

『男神』は切り飛ばされた己の腕の付け根を押さえつけながら、宙をふ

らついた。

ここを好機と見た大狼の瞳がギラリと光った。

大狼は血と肉を練り固め、再び『牙』を口元に生成すると『男神』を袈裟懸けに切り裂いた。

『グハツ!?!』

更にもうひと振り。

『グウツ!?!』

更にもうひと振り。

『ぐ、オオオオオオオオオオオオ!!!』

ここで『男神』が意地を見せた。

切り裂かれながらも男神は残った腕を振るい、大狼から神機を弾き飛ばした。

「ッー」

弾き飛ばされた神機を目で追う大狼へ、『男神』は渾身のストレートパンチを繰り出した。ありったけの力を籠めた一撃は凄まじいまでのオラクルが迸り、桃色の光が流星めいて大狼へと迫った。

対する大狼は、何と逃げるところかその場にどっしりと腰を据え、思い切り腕を引き絞った。

(何を!?)

訝しむ『男神』だが、次の瞬間驚愕に目を見開くこととなった。大狼は『男神』と同じようにパンチを放ったのだ。それだけならば驚くに値しなかっただろう。武器を失った人間の咄嗟に放った儂い抵抗でしかないからだ。

問題は振るわれた拳が彼と同じように凄まじいオラクルを纏っていたことだ。黒と金の悍ましいオラクルを。

黒と金の光と桃色の光が衝突する寸前、両者の主観時間が泥めいて鈍化し、世界のほぼ全てが静止した。

暗黒の世界にあるのは金髪の男と、黒髪の男のみ。

金髪の男は目を伏せた。黒髪の男は頷いた。

瞬間、暗黒の世界は消え去り、泥めいた時間は流れ出した。

黒と金の光と桃色の光が激突した。

閃光が弾けて周囲を染め上げ、音が一瞬だけ消え去った。次の瞬間破滅的な炸裂音が迸り、『男神』は『女神』の方へと、大狼は第一部隊の方へと弾丸めいて弾かれた。

「うおおおおっ!」

突如吹き飛んできた大狼に面食らいはしたものの、危うげなくコウタは大狼の体をキャッチした。すぐさま無事を確かめようとしたのだが、前方から聞こえた怨嗟の絶叫を聞き、反射的に前へと顔を向けた。

『まだだあああああああああああ!!!!!!』

満身創痍の『男神』と『女神』は、それでもなお不退転の意思を持って立ち上がり、最後の攻勢へ打って出ようとした。

戦いはついに最終局面へと移行したのだった。

希望（後編）

“妊娠したわ、私”

君からそう告げられたとき、私は酷く動揺したのを覚えている。

まだ世界が今ほど荒れていなくて、被害もたかだか一日十万人程度の犠牲で済み、人々が未だ希望という虚像に縋りつく気力があつた、今に比べれば天国のような時代。人にとつても。私にとつても。

その日は穏やかな日だった。空は珍しく冴え渡り、爽やかな風が空けられた窓の外から流れ込み、カーテンを優しく揺らめかせていた。ラジオからは陽気な旧時代の音楽が流れ、その旋律に合わせて、君は体をゆすっていたね。

そう、君からのその宣言は私を構成している世界への、文字通り全てを揺るがすほどの大事件だったのだ。

動揺する私を見て、君は笑っていたな。

“もう、そういう時は動揺するんじゃないくて、笑うべきよ！”

目の端に残る涙を、ほっそりした指先で拭い去りながら、君は私に言ったな。

“だって真の祝福は、心からの笑みから与えられる物なのよ！ 生まれてくる子供に、あなたはそうやって動揺する気？”

この時の私は、いったいどういう顔をしているのか酷く疑問に思ったものだが、ぷつと噴き出した君の顔を見ておおむね予想がついた。

きつとこの時の私はそれはもう困った顔をしていたに違いない。私はいつだって君の言動に驚かさされ、君に笑われてきたのだから。

なんて事の無い一日だった。君がいて、私がいて、ペイラーがいつものように芝居がかった言動でひよっこり現れて、談笑して、研究に明け暮れ、三人で顔を突き合わせてはああでもないこうでもないという意見を見を交わし合う。

君が新たな命が授かってからも、変わらない日々は続いた。談笑して、研究に明け暮れ、三人で顔を突き合わせてはああでもないこうでもないという意見を見を交わし合い、人々が淡々と命を落とす。

刻々と地獄へと世界が様変わりしてゆくのを横目に、私達の計画、即ちマーナガラム計画の臨床試験を行うべき段階へと至り、そしてペイラーとの決裂。そして忌まわしい事件。

ペイラーはきつとこうなる事を見越していたのだろうか、私達はそれでも信じたかったのだ。私たちの『希望』が、奇跡を起こしてくれることを。

君の死は、私にとって世界が終わるのと同じ語だった。あの瞬間に、私は君と一緒に死んだのだ。

肉体は生きている？ それがどうしたというのか。

私にとって君は父であり、精霊であり、子であり、アダムであり、イヴだった。

海であり、陸であり、天地万物を包み込む空でもあった。

とどのつまり君なくして私はどうやっても生きてはいけないそんな脆弱な男であった。だが半身が欠けて、どうやって生きてゆけばい

い？

胸の真ん中にぼつかりと大穴が開いているかのようなだった。しばらくの間、どんな刺激を受けても、何も反応できなかつた。色彩を失った世界を茫然と彷徨う私に数多の声がかけられたが、全てはその風穴に吸い込まれ虚ろへと消えていつてしまった。

再び色彩を取り戻す頃には、私の風穴の奥には虚ろ色に燃える炎が轟々と音を立てて滾っていた。

世界への憎しみは、人類を救うという意味の炎と混ぜ合わさった。

もう止まらない。止まらない。

何をしてでも人類を生き残らせる。何をしてでも。何を捨てても。も。

だが、そう思い込む度に、私の視界にちらつく、小さな祝福の子。私たちの奇跡。私たちが未来へ託すはずだった『希望』。

君の誕生は祝福とは縁遠い地獄の底で行われた。

君を抱き上げるはずだった聖母は血の海に沈み、君を包み込むはずだった毛布は荒ぶる神の手によつてずたずたに引き裂かれた。

真の祝福とは心からの笑みから与えられる物だと、君は言ったな。

地獄の腸の中で産声を上げる『希望』を抱き上げ、君の亡骸を茫然と見下ろす私は、一体どういう顔をしていたのだろうか？

笑っていたのだろうか？ 泣いていたのだろうか？

今はもう、思い返す事も出来ない。そんな資格も無ければそんなつもりもない。……そんな時間も無い。

何せ、もう――

燃え上がるような強い意志を宿し、こちらを射抜くように睨む君譲りの青い目と、目が合う。

私はこの時、どんな顔をしているのだろうか、すでに手遅れにも拘らず、場違いにもそう思った。

『君』が高々と掲げる神を殺す刃は、さながら罪人の首を切り落とすための大鉦のようだ。

刃の輝きが極限を迎えた時、ついに刃は振り下ろされた。審判の時を告げる熾天使のように。

世界から音が消える。

時の流れが穏やかな川のように緩やかになり、ゆっくりと迫りくる刃を見つめながら、私は濁流のように去来する感傷に身を委ねた。

後悔。憤怒。絶望。悲しみ。かつての喜びや、君と過ごした黄金の月日について。

そうして身を委ねていれば、ついには断罪の刃が私の躰をゆっくりと裂き始めた。

だが痛みは無かった。

断罪は、私が考えていたほど恐ろしいものではなく、ずっとずっと

優しいものだった。

そうか。

私はようやく悟った。

断罪とは、祝福と同じものだったのだ。



この事件が落ち着けば、ようやくこちらの計画を本格的に進められる。

そう思うと、嬉しくてたまらなかった。

何の意味も無く生まれ、誰かに迷惑しかかけられなかったこの命が、この世界に住むすべての命の安寧をもたらす為に捧げられると思うと、胸の内が煮溶けた鉛を流し込まれたような熱を持つんだ。

そうする事で、この世界はようやく完璧になる。

異物は消えねばならない。

だってそうだろう？ 大河のど真ん中に大岩があったら、正しく流れないじゃないか！

あゝあ、早く死にたいなあ。早く消えたいなあ。

でもただ死ぬだけじゃだめだ。それじゃだめ。今まで散々迷惑か

けてきたのに、このまま何も無く無駄死にするなんていうのはあつてはならない。

役に立って死ね。何もかも救い、そして何一つ残さず消えろ。

それが俺の贖罪であり、俺の使命だ。

え？ 計画が始まったばかりで何もう終わった気でいるのかだつて？

まあ確かに、何かを揃えてやった気になるっていうのは悪いことだし、皮算用は良くないと思うけど。

でも人間って、そういうもんじゃない？



塩を孕んだ風が叩きつけるように吹き荒れ、『僕』は堪らず顔を覆った。

『僕』達は海辺にあるカフェにいて、思わず風の吹いてきた方向を見ると、丁度海面から七色に輝くイルカたちが見事なジャンプを披露していたところだった。

宙空へと身を躍らせたイルカたちは陽光の輝きを乱反射させ、極彩色の輝きを放ちながら音も無く着水し、波紋を広げては再び海から顔をのぞかせ、またぞろ宙へと身を躍らせるのだった。

『僕』は瞬き一つせずに、遊び跳ねるイルカたちを見つめていた。

カフェには僕たちの他に誰もおらず、さざ波の音以外何一つ聞こえ

ない静寂の世界に、不意に、『僕』の隣からくすくすと上品な忍び笑いが聞こえた。

顔を正面に戻すと、水色の可愛らしい服を着た女の子が『僕』を見てくすくすと笑っていた。

彼女は細めていた目をぱつちりと開き、海原の様な青色の瞳で『僕』を見るとおもむろに立ち上がり、『僕』の手を取って歩き始めた。

カフエを出て、しばらくのあいだ砂浜に背を向けて歩き進んでゆくと、『僕』達の前に噴水が現れた。

噴水の中には様々な魚が泳いでいた。

赤色、白色、黄色に緑。とにかく色とりどりの魚が、思い思いの方へ向へ気ままに泳いでいた。

『僕』達は噴水の淵に手を置き、身を乗り出して噴水の中を泳ぐ魚たちを見下ろした。

魚たちは突然現れた『僕』達なんか気にも留めずに泳ぎ回っていた。赤白黄色、青に緑に灰色に黄土色。

行き交う魚に目を奪われていると、不意に、水面を突き破り、黒色の魚が宙へと身を躍らせた。

『僕』は目を丸くして、宙を泳ぐ黒色の魚を凝視した。いつの間にか女の子は魚を見るのをやめ、『僕』の事をじっと見つめていたのだけけれど、『僕』はさっぱり気が付かなかった。

黒い魚の体には模様がなかった。模様は絶えず形を変え、流れ去り、浮かんでは消えた。

意識がどんどん魚の模様へと、吸い込まれる様に消えてゆく感覚があった。

戻り始めていたのだ。あの日の『俺』に。

ようやく計画を始められるというだけなのに、まるですべてが終わったみたいに安堵する、そんなどうしようもなく愚かな、あの日の『俺』に。



「やあー！」

『0011011101101!?!?』

蛇腹状に伸ばされた左腕にアリサの渾身の一撃が叩きつけられた。度重なる攻撃は、堅牢な女神の装甲を少しずつ削ってゆき、ついには切断するに至った。

見れば、『女神』の体も大小さまざまな傷がつけられていた。その傷一つ一つには、その傷をつけた者の執念が宿っていた。絶対に倒すという執念が、まるで炎のように纏わりつき、難攻不落の『女神』の装甲をさらに焼いた。

しかし、その執念深い傷跡たちは、限界を超えた力によってもたらされた奇跡のような物で、第一部隊の面々は満身創痍の体で、肩で息をし、膝をつく者までいた。

だが『女神』を睨むその目は、その意志は、誰一人としてくじけておらず、不屈の炎が使命という名の薪をくべられ、未だ轟々と猛っていた。

『00100111110001……』

『女神』は切断された腕を一瞥し、それから視線を彼らに戻す。

能面のような表情には相変わらず感情の起伏が見えない無表情を

張り付けているが、その赤い瞳は、どこか苛立たしげに見えた。

『1101010111』

体勢を立て直した女神は再び宙に浮かび上がると、天輪を煌々と瞬かせた。とたんに発せられる圧力はいや増し、第一部隊の面々を戦慄させた。

が。

「へ、ようやくあいつも本気になったって事か」

口内に溜まった血をつばと共に吐き捨てながら、ソーマはバスターブレードを担ぎ直した。

「こつちも息が整いました。まだいけますー！」

膝をついていたアリサはすつと立ち上がり、口の端から流れていた血を払うと神機を構えた。

「相手だつて弱っているはず。もう一押しよー！」

「へん、こつちだつてまだまだ本気じゃないもんねー！」

サクヤもコウタもあちこち擦り傷だらけだが、気力は未だ衰え知らずの様相で『女神』を睨む目にはメラメラとした戦意が燃えていた。

『女神』の圧と第一部隊の圧がぶつかり合い、バチバチと火花を散らし、今まさにぶつかり合おうとしていた。

そんな時だった。

『これは……膨大な……とてつもなく膨大なオラクル反応を確認！
そんな……こんな事って!?!』

という切羽詰まったヒバリの通信を聞くまでも無く、第一部隊の面々は目の前で天輪を掲げて光り輝く『女神』と『男神』の放とうとする破滅の予感をひしひしと感じていた。

『まだだ!』

『男神』の目がギラリと光った。

直後、『男神』の背後のパイプがびくりと震えたかと思えば、まるで蛇のように鎌首をもたげだしたではないか。のたくるパイプたちは点々バラバラにゆらゆらと揺れ、そして次々と男神の背に向けて殺到し、突き刺さった。

『ヌウ……ヌウウウウウ!!!
!!!』

『男神』は歯を喰いしばってパイプから送り込まれてくる膨大なエネルギーに耐えた。送り込まれる力に呼応するように、『男神』と『女神』の色が明るいピンク色からどす黒い黒紫へと変色した。アルダノーヴア墮天

「……………」

ソーマが、アリサが、コウタが、サクヤが、世界を塗り替えるべく死に物狂いで抵抗する『男神』の神々しさすら覚える威容を前に、死に物狂いで打開策を模索していた。

通信からはヒバリ、ツバキ、リツカから退避しろと血を吐くような絶叫が続いていた。

そんな中で。

「第一部隊、各員に告ぐ」

天と地が鳴動し、風が恐れ戦き荒れ狂う中で、凧いだ海面を思い起こさせる穏やかな声が聞こえた。

同時に、突如として現れた黒い影が『男神』達から放たれる病んだ光を遮った。

「え？ カカシ……!?!」

いつの間にか軽くなった腕に驚きつつ、目の前に立ったカカシに呼び掛けるコウタだったが、そこではじめて彼の負っている傷を目の当たりにし、絶句した。

わき腹の肉は抉れており、未だ再生が追いついていないのか、赤黒く濡れた筋肉が垣間見えた。どこもかしこも血まみれで全身の至る所の肉が抉れており、何より目を引くのが左腕の傷だ。

指はあちこちにねじ曲がり、爆ぜたとしか思えない二の腕からは筋繊維が垂れ下がっていた。ぽたぽたと滴る血は止まることなく、足元に血の海を作り出していた。最早それは腕の形をかううじて残しているだけの肉塊だった。

「か、カカシさん!」

「カカシ! おい平気なのか!?!」

「カカシ君!」

「総員」

仲間からの呼びかけに答えず、影は淡々と言葉を紡ぐ。

「俺の後ろへ」

「ッ！」

それだけで彼の意図は伝わった。

『待つてください！ 後ろについて、まさか受け止めるつもりですか!』『無茶だよ！ 君の神機は無茶の連続で大分ガタがきてるんだよ!』受け止めきれぬわけないじゃん！ そんなことしたら、本当に壊れちゃうよ!?!』

『よすんだ！ 退け！ 退くんだ!』

抗議の声を上げたのはオペレーターをしている3人だった。当然だろう。観測史上類のないレベルのオラクル反応だ。そこから齎される破壊の規模は、それこそ計り知れないものとなるろう。

それを真正面から受けようなどとは狂気の沙汰だ。迫り来る雪崩をストロー一本に流し込むに等しい。

だが、彼は本気だった。彼らは本気で、この男一人に全てを賭けるつもりでいた。

「俺が君たちの盾に……豪雨を受け止める傘となるろう」

光はどんどん強くなり、ついには目も開けられない程の極光となったが、カカシが前に立って遮ってくれたおかげで、彼らには決して届かなかった。

(なんて……大きいのだろう)

満身創痍で、立っているどころか意識があるのすら不思議に思うほどの怪我を負って尚、他者を慮り、気遣うその姿に、アリサは父の姿を見出した。いつも柔らかく微笑み、暖かな掌で背を押してくれた父

の背中を。

「でも、多分だけど、俺はそれで終わる」

だから、と振り返り、言う。

「後の事はお願いね」

「ああ（はい）（了解）!!!」

第一部隊は力強く頷き返した。

『……最早何も言うまい』

その決意の強さに、ツバキは諦念に満ちた、呆れたような声色で呟いた。

『だがやるからには決して失敗は許さん。生きて帰れ、帰ってこい！』

ゴツドイーター！』

『オオオオオオオオオ!!!』

ツバキの激励は、天地を引き裂く閃光の轟音にかき消されて消えた。しかし、彼らにはしかと届いていた。

カカシは前を見据え、決して逸らさず、ともすれば笑みすら浮かべて、展開していた狼頭めいた捕食器官を振りかぶり、そして思い切り前方に叩きつけた。

どおおん、という世界が震える大轟音。衝撃。そして、凄まじい勢いで後方へと押し流された。

「ぐわあああああ!!!」

受け止めた瞬間にカカシの体に凄まじい衝撃が、オラクルが流れ込み、全身の隅々まで、細胞の一片までにも行き渡り、耐えきれずに爆ぜた。

カカシの全身が爆発した。舞い乱れ飛ぶ血液は後方の第一部隊の頭上へと擦り注ぎ、彼らはたちまち紅色の血化粧で全身を染めた。

「ツ!!」

彼らは固唾を飲み、しかし決して前へ出ようとせず、奥歯が砕けんばかりに噛みしめてカカシの後方でただひたすらに耐えた。

何ゆえカカシが前に出て自らの身を犠牲にしても自分たちを守ろうとするのか。

愚問である。

任せたからだ。託したからだ。最後の一撃を。『希望』を！

「だから！」

アリスはカカシの背を押した！

「お前は！」

ソーマはカカシの背を押した！

「俺たちが！」

コウタがカカシの肩を押さえた！

「支える！」

サクヤがカカシの肩を押さえた！

後退が……止まった。

ギシ……ギシ……ギシ、とカカシの肉体から極限の負荷を死に物狂いで耐える音が彼らの耳元で大きく響いた。それは彼を構成するすべてが放つ、抵抗の声であった。

破滅の光に、抗っているのだ。筋肉が、骨が、細胞が、原子の一つ一つが。意志が。魂が！

名無之カカシの目がギラリと光った。

それまで耐えるばかりだった足が、一步前へと踏み出した。緩慢な動作であった。普段の彼からは想像もつかないほどゆっくりとした動きで、だが確かに踏み出したのだ。

後はもう、前に進むのみ。最初の一步から始まり、同じような速さで二歩目、次いで三歩目。

四歩。

五歩。

歩みの速さは歩を進める度に着実に早まり、ついには駆け出し始めた。それでも足りないとはかりにカカシは捕食器官に噴出機構を作り出し、オラクルを噴出し、加速した。

『馬鹿な。お前たちの何処にそんな力が……』

『男神』は当惑した。しつつも、自らが自壊するのも厭わずに更に出力を上げた。

凄まじい衝撃だ。だが第一部隊は怯まない。どころかささらに加速して、ただひたすら目の前の『アラガミ』を打ち倒さんと前進する。

「終わらせない！」

アリサが叫ぶ。

「俺たちは死なない！」

コウタが咆哮する。

「あの人の意志を！」

サクヤが歌う。

『させるか……させるかアアアアアアアアアアアア!!』

『ヨハネス』も不退転の意思である。幾多の同胞を騙し、欺き、時に命さえ奪いさえした。全ては人類を生かす為に。

双方ともに不退転。押し通るにはどちらかを打ち倒し、その屍を喰いつくし、明日へと続く糧とする他はない。

ここにきて両者は完全に拮抗した。

『ヨハネス』は崩れつつある肉体の維持を完全にやめ、出力を極限まで跳ね上げた。膨大な光。莫大な力。

カカシは、ソーマは、アリサは、コウタは、サクヤは抗った。

神の意志に。運命に。星の意志に。己に！

『オオオオオオオオオオオオ!!!』
「オオオオオオオオオオオオ!!!」

一進一退の攻防。両者譲らず。

しかし、永遠に続く綱引きは無いのと同じで、この攻防も、ついに終わりを迎える時が来た。

その勝敗の行方は――。

『0010ソール1011m10』

極限の光を飲み干し、ついに大狼の顎が『女神』を捉えた。抵抗する間もなく、『女神』は大狼に丸呑みにされた。

そこで。名無之カカシの体力は尽きた。口元を覆っていた『牙』が砕け散り、突貫の勢いのまま地を滑り、ピクリとも動かない。

だが彼らは振り返らない。なぜならばそれが我らの役目であるゆえに。

「おりゃあー!」

「ソーマ！ アリサ！」

コウタとサクヤの放ったオラクルの弾丸が、『男神』を撃ち抜き、隙を作った。

「はあああ!!!」

アリサの渾身の一撃が、『男神』の残っていた腕を打ち据えた。カカシとの戦いと限界を超えた砲撃のダメージにより、『男神』の腕はついに崩壊した。

『……』

『男神』は崩壊した腕を不思議そうに見ていた。崩れた組織は地に落ち、黒ずみ、そして風に乗って雲散した。

顔を正面へと戻す。凄まじいオラクルの刃を形成し、今まさに処刑人めいて神機を振り下ろそうとする彼の『希望』を、『男神』はじつと見つめる。

「――あばよ、親父」

ソーマ・シツクザールは最大まで溜めたチャージクラッシュを振り下ろした。

ヨハネス・フォン・シツクザールは最後の力を振り絞り、迎え入れるかのように胸を張った。

オラクルの刃は、崩壊寸前まで酷使された肉体をあつさりと叩き割り切った。

『ソーマ……私は――』

言葉はそこで途切れた。切り裂かれた傷跡から光が漏れ、溢れ、エ
イジス全域を覆いつくすほどにまで膨れ上がり、そして――



気が付くと、砂浜の上に大の字で横たわっていた。頭だけを動か
し、横を見やると、燦燦ときらめく太陽の光を反射して、透き通った
海原がきらめいていた。さざ波の立てる音が心地よくて、ふとすれば
再び微睡んでしまいそうだ。

『僕』は立ち上がり、砂を払って、潮騒を聞きながら、歩く。

カモメたちの歌声に耳を澄ませ、砂浜に足跡を残しながら、歩く。

しばらく歩いていると、目の前に小舟があつて、その上には一組の
男女が仲睦まじく寄り添って座っていた。

傍らに立つと、男の人が振り向き、微笑んだ。

「私は、ただひたすら、人を生かそうとした。その行いが彼女の死を報
われたものにすると思つて」

ヨハネスさんは海原へと視線を向けた。きらめく海に穢れは無く、
彼方では虹色のイルカが跳ね回っていた。

「愚かだった。そんな事をしたところで、アイーシャは蘇らないとい
うのに」

そうやって、ヨハネスさんは隣の女の人の肩に手を置いた。

「馬鹿な男だったよ。私は」

「そうね。あなたはとつてもお馬鹿さんだったわ」

女の人はくるりとこちらに向き直り、その綺麗な顔に笑みを浮かべ、どこか見覚えのある青い瞳で、愚かできみしがりやな夫を優しく見つめた。

「本当にお馬鹿さん。あなたがまず最初にやるべきだったのは死者への弔いではなく、『希望』を信じる事だったのよ」

ヨハネスさんはアイーシャさんの頬をそつと撫でた。彼の顔は、まるで聖母を前にした殉教者みたいだった。『僕』もきつと同じような顔をしていたと思う。だって彼女はこの世の者とは思えないほど美しく、この世の全ての善い物を内に宿していた。彼女は真の死者だったのだ。

この世にはたくさん善いとされる物が存在する。

富。名声。力。

だけれどそんな物はいつか滅び去り、薄れ、誰の記憶にも残らずに忘れ去られてしまう。永遠に存在する物は無く、どんな素晴らしい考えや思想もいつかは消えてしまう。

盛者必衰。全ては風の前の塵に同じ。だからこそ、絶対不変である死というものは尊いのだ。

どれだけ功罪があろうが、どれだけ全き存在だろうが、『僕』達はいずれ同じ場所へ逝く。地獄に行くにしろ天国に行くにしろね。

どんな罪人であれ、どんな善人であれ、人にしろアラガミにしろ、

我々が最後に行くべき道はその二つこつきりだ。

「ならば私はきつと地獄へ行くのだろうか。何せ、あまりにも多くの者を傷つけてきたのだから」

ヨハネスさんの顔は諦念に満ち、しかし完全に己が迎えるであろう末路を受け入れていた。処刑を目前にした罪人のように。アイーシャさんは彼を見つめ、何も言わない。でもその顔は慈悲深い笑みを浮かべたまま変わりなく、きつと『僕』と同じことを考えている事は明白であった。

「そんな事無いよヨハネスさん」

訝し気な目を向けるヨハネスさんに『僕』は続ける。

「確かにあなたは罪を犯した。少なくとも人を傷つけ、少なくとも人を殺しました。でも、それでああなたの魂が穢れた事にはならないんです」

海原が爆発したかのように爆ぜ、その内側から大きな大きな魚が空中へと身を躍らせた。

「悪人は人を一人二人殺しますが、善人は何百、何千の人を殺します。そういう人にはね、真に尊い事をやり遂げた人には、神様は天国に特別席を用意してくれるんです」

海原を突き破り、空高く身を躍らせていた魚は着水し、同じように海面を爆発させ再び海水を空へと巻き上げた。

それに呼応するように、船がひとりでに動き出し、徐々に、徐々に海へと進み始めた。

「……簡単な事だったんだな」

「そう簡単な事だったのよ」

二人は寄り添った。

「信じればよかったんだ」

「信じればよかったのよ」

二人は更に強く身を寄せ合った。混ざろうとするかのように。分かち難く。永遠に。

「私たちの『希望』を、彼らを」

「今からでも遅くないわ」

ヨハネスさんは頷くと、懐に手を伸ばし、キラキラとした何かをこつちに放ってよこした。

放られたそれを掴み、あらためると、それはUSBメモリだった。

「そこに、私の計画や、資金の在りかが記してある。もうほとんど使ってしまったが、君の計画の足しにはなるだろう」

ヨハネスさんはその時初めて心から笑ったみたいだった。屈託のない笑みだった。この世の全てのしがらみから抜け出した、無垢な笑顔だった。それはつまり、彼が真に死者の仲間入りを果たした証だった。

「彼らを……私たちの『希望』を、よろしく頼む」

「ありがとうカカシ君。君が血を流してくれたおかげで、私達はようやく逝ける。どうか、あの子をお願いね」

死者たちを乗せた船はどんどん遠ざかってゆく。彼らに追走するように、色とりどりの魚が海原へと泳いでゆく。

小さな点になり、ついには見えなくなってしまっても『僕』はそこから動かなかった。

いつまでそうしていたのだろう。時間の感覚が曖昧で、何十時間もそこにいたような気がするし、ほんの数秒しか経っていないようにも思えた。

そこでふと傍らに気配を感じ、振り向くと、そこに綺麗な女の子がこちらを見つめていた。

腕に人形を抱きかかえた女の子は、ようやく振り向いてくれた『俺』にはにかむような笑みを浮かべた。

光り輝くような笑みだった。

あまりにも眩しすぎて、俺の視界まで真っ白になってゆく。

俺の耳も、記憶も、全てが白に――



どれだけの時間そうしていたのか分からない。ただ空気の流れから、全てが終わったという事だけは分かった。

軋む体に鞭打って立ち上がり、カカシはソレを見た。

風穴の空いたエイジスの天井から差し込む緑化した月の光を反射した、天使の羽のような神機を担ぐソーマト、同じように空を見上げるアリサ、コウタ、サクヤの後姿を。

降り注ぐ月光をその身に受けて、美しい緑化した満月と共にある彼らは、あまりにも美しく、あまりにも尊かった。

彼らはずっと月を見ていた。沈み、陽の光が顔を覗かせるまで、いつまでもいつまでも。



速く逃げなければならない！

早くしなければ、あの猟犬に追いつかれてしまう！

計画がとん挫し、脇目も振らずに遁走した。

自身の痕跡を徹底的に消し去ったにもかかわらず、気配はずっと消えず、延々彼の背後の一定を保ったまま追い回した。それが幾日も幾日も続き、大車ダイゴは限界目前だった。

装甲車の扉を乱暴にこじ開け、無造作に閉める。

滝のような脂汗を流し、息を荒げながらポケットに入れた鍵を取り出し、何度も取り落としながらようやく差し込み、捻った。

「やった！」

喜んだのも束の間、火薬が爆ぜる断続的な音が聞こえたかと思えば、フロントガラスにいくつもの蜘蛛の巣状の罅が入った。

「ひっ?!」

次の瞬間叩き割られたフロントガラスの向こう側から、黒い手が伸びてきて、大車ダイゴの頭を鷲掴みにし、檻褌雑巾めいて無造作に外に叩きだした。

「ぎゃひっ?!」

硬い地面に叩きつけられた大車ダイゴは落下の痛みには呻く間もなく足に生じた激痛に堪らず転げ回った。

「いだい~~~~~いだい~~~~~いいいいいい!!!」

その悲鳴をうっとおしく思ったのか、黒い影は大車ダイゴの腹を蹴飛ばし、また淡々と腹に弾丸をぶち込んだ。

「ぶふ……コヒュー……コヒュー……」

仰向けとなり、虫の息の大車ダイゴは太陽を背にこちらを見下ろす黒い影を茫然と見上げた。

影は右手で持った突撃銃から空の弾倉を引き抜き、弾丸が満たんに詰まった弾倉と交換した。手慣れた様子だった。

「このままお前を殺してやってもいい」

「はぎゃぎゃっ?!」

殺すという単語の過剰に反応した大車ダイゴの呼吸は一層荒く激

しいものとなった。

「だが、殺すには、お前の能力は、惜しい」

影は無感情に呟くと、銃底で大車ダイゴの額を割った。

「お前に一つ、提案がある」

芋虫のように身を捻る罪人を見下ろす名無之カカシの表情は逆光で遮られ、窺えない。

「受けるかどうかは、任せる」

それは月が緑化し、世間がエイジス計画の失敗への落胆から立ち直った、次の日の出来事であった。

第一章 終わり

第2章 『ゴツドイーターバースト編』 リスタート・ニューデイズ

世界全土を『アラガミ』が覆いつくし、人類が希望という名の幻想を捨て去って久しい近未来。人類によるアラガミへの完全勝利など、稚気染みた夢。

人々はいつ来るとも分からぬ終わりを無意識の内に悟りつつも、それでもなお死への怖れを抱き、仮初の平和という名の箱庭の中へと逃避する。

ここは『神』に捨てられた者どもが集う場所『極東』。世界有数の激戦区である。

「ハアー！・ハアー！」

降りしきる雨の中、一人の男が息を切らして疾走していた。

男の出で立ち特徴的であった。右手の手首部分に生活に支障が出そうなほど太く大きな腕輪を嵌めており、その背には身の丈を超す大きさの刃を背負っているのだ。

そして、そのような大物を背負って尚トップアスリート並みの疾駆。

彼こそは人類の希望たる『ゴツドイーター』。アラガミの力をその身に宿し、超人的な力を得た、人類の最後の砦である。

しかし、常人を遥かに超えた力を手にし、中型アラガミと互角以上

に渡り合えるほどの男が、よもや逃走を選ぶ以外にない状況に追い込まれるなどは、彼自身も予想だにしていなかったことだろう。

いつも通りの仕事のはずだった。

廃墟と化した街のE地点付近に、中型アラガミ『グボロ・グボロ』が小型アラガミ複数の群れと共に出現したという情報が入った。

『例の計画』が失敗した影響か、アラガミの活動が緩慢になっており、今回現れたアラガミの反応も、今まで出てきた物に比べればひどく弱い反応だった。

『一人で十分』

仲間たちやオペレーターの『ヒバリ』にそう宣言したとおり、彼は一人でアラガミの群れを相手取った。そして、見事討伐しきつただ。

いつも通り、楽な仕事だった。そうなる筈だった。

思いもしなかった。突如切羽詰まった警告が鼓膜を震わせたかと思えば、倒壊したビルを突き破り、大型アラガミが現れるなどは。

稲光纏う赤くたなびくマントの威容を目にした瞬間、彼はセオリー通りに動いた。即ち撤退。有無を言わさぬ逃走であった。

「ハアー！・ハアー！」

息を乱し、しきりに背後を振り返りながら闘争を続ける彼の顔に、中型アラガミの群れを殲滅した時の格下への嘲りと誇らしさを感じさせる余裕はない。

あるのは、唯々原始的な、醜いと思えるほどの生存への欲求だけ。

男の背後に、あの大型アラガミの姿はない。しかし、常に何者かの視線を感じていた。ずしんずしんと、重量を感じさせる足音が途切れることなく聞こえていた。

その焦りから、彼は判断を誤った。地形は頭に叩き込んである。だが切羽詰まった状況に陥った事により、一次的に頭から吹っ飛んでしまった。

気が付けば、彼はF地点の袋小路へと迷い込んでいたのだ。

「はは……はは？」

眼前に広がる、一面の壁。

呆然と立ちすくむ彼の背後に、一際大きな雷鳴が聞こえた。

「GRRRRRRR!」

禍々しい咆哮が、狭い袋小路に反響し、爆音となって男の鼓膜を、全身を震わせた。

「ひ、ひいー!」

耳を押さえ、男は思わずしゃがみ込んでしまう。その目の前に、太く、たくましい前足が石畳を叩き割りながら振り下ろされた。

男は魚めいて口をパクパクさせながら、少しでも距離を取ろうと後退したが、壁が無慈悲にその背を止めた。

「あ、ああ……」

もはや万事休す。かすれ声を漏らしながら、男は荒ぶる神の禍々しき威容を、ただ茫然と見上げた。

「グルル……」

大きな体に、たくましい四肢。兜を思わせる厳めしい顔。全身に雷光を纏い、紅いマントを広げたその姿はまさに獣神。男を見つめる眼差しはぞつとするほどの無感情であった。

獣神は何ら感情を揺り動かす事なく、稲妻を纏う前足を振り上げた。

(死ぬ……死ぬ？ ……ナンデ？ 俺が死ぬナンデ？)

幸福の絶頂から、あまりにも唐突に引きずり降ろされ、そして、何の抵抗も許さぬ幕切れ。凄まじいまでの落差に、男の精神は限界を迎えていた。

アラガミに殺されるなど、今の時代では子供ですら驚かない。さつきまで話していた同僚が物言わぬ肉塊と成り果てるなど、飽きるほど経験してきた。

死神の前には、行列ができている。誰しもがその列に、生まれた時から並ばされている。いつ自分の番が来るかは、その時が来なければ分からない。ただ、自分の番が来るのは相当先だろうと、心のどこかで思い込んでいた。

本当にどうしようもない事は、先触れなど無い。あまりにも唐突に現れ、そしてあまりにも無慈悲に刈り取ってゆく。死神は彼の前に訪れた。何の前触れもなく。

男は、いつかその日が来るだろうことは覚悟していた。その日が今日になるとは考えてはいなかった。先触れ無き死に対する覚悟など、

男にはできてはいなかったのである。

かくして鉄槌は打ち下ろされた。アドレナリンが湧き出し、ゆつくりと流れる時の中で男は振り下ろされる前足をただ漠然と目で追っていた。

……こういった光景は、この世界ではしばしば見受けられた。小型アラガミを蹴散らし、中型アラガミと対等に戦えるようになって、自分が強いと確信したゴツドイーターの寿命は短い。

そういった者の末路は決まって、対処不能な大型アラガミとの邂逅で終わりを告げる。

彼もまたそういった者と同じ末路を辿るだろう。そしてリストに刻まれ、瞬く間に忘れ去られるであろう。残しておくには、あまりにもありふれた出来事であるがゆえに。

だが、一つだけ、男は忘れていた。獣神は知らなかった。

この世界はアラガミに侵食されつつある。その浸食を食い止める最後の砦がゴツドイーター。その事実を揺るがない。

彼は忘れていた。人類の守護者、最後の砦がゴツドイーター。その砦の前に居座る者を。神殺しの魔狼を！ 地獄の番犬を！

男は見た。鈍化した視界の端。獣神の真横の壁が膨れ上がり、内側にはじけ飛んだ様を！ 闇よりもなお黒い影を！ 獣神に喰らい付く大狼の顎を！

「ARRRRGH!?!」

獣神は関節から先を噛み千切られた前足を振り回しながら、苦痛と

困惑の叫びを上げた。

「あ……ああ……」

男は仰ぎ見た。獣神の雷光を浴びてなお染まらぬ黒き姿を。狼の尾の如く揺れる束ねられた黒髪を。どす黒い紫色の刀身を持つ第2世代型神機を。

黒き影は振り返った。男の呼吸は止まった。

「ハアアアア……」

口元を覆う『牙』から凄まじい蒸気を吐きだしながら、『大狼』は男の様子を頭からつま先までつぶさに観察した。

金に輝く人外の瞳に見つめられた男はがちがちと歯を鳴らし、死への恐怖を超える恐れによつて身を縮こませた。

大狼は男の様子に目を細め、何か言おうとして口を開きかけたが、背後で身動ぎする気配を感じて振り返った。

「GRRRRRRR!」

そこには痛みから脱し、怒りに双眸を燃やす獣神が青白い雷球を今まさに発射した瞬間であった。

「ひっー!」

男は短く悲鳴を上げる。離れていても分かる程の膨大な熱が、熱風となつて頬を撫でた。当たれば灰すら残らないであろう。盾でガードしたところで、防ぎきれるかどうか。

しかし男の懸念など、埒外の怪物はたちまちの内に覆した。

超速で迫り来る雷球に対し、大狼は無造作に神機を振りかぶり、目と鼻の先まで迫った瞬間に振り抜いた。

まるで蠅を払うかのようなごく自然動作で、雷球は真つ二つに切り裂かれて背後の壁に着弾した。

「ツ!?」

尋常ならざる光景に、男と獣神は、この時全く同じ思いを抱いた。

“何だこいつは!?”

呆けた様子で硬直する獣神の眼前に、大狼は『出現』した。

「ガルツ!」

目を剥く獣神に、大狼は情け容赦ない一撃を繰り出す。

「ARRRRGH!」

咄嗟に掲げられたもう片方の無事な前足は、その一撃で根元から切り飛ばされた。夥しい血が傷口から迸り、辺りはたちまちツンとした臭いに満たされた。

「ガ……ガガ……」

呻き声を上げながら、獣神は堪らず後退した。あの怪物が、今まさに自分の命を奪うはずだった死神が、たった一人の人間に追い込まれている。

界を塗り替えられるには、十分な時間であった。

アラガミは人を虫か何かの様に殺す。そして世界全土を塗りつぶしつつある。ゴッドイーターという存在がその波を多少なりとも食い止めているが、その抵抗はあまりにも儂いと言わざるを得ない。

それが、今までの彼の認識であった。

しかし男は思い知った。

そのアラガミを虫か何かの様に殺す天敵の事を。名無之カカシがいる事を！

屈み込み、瞬きを一切せずに凝視する金の瞳を見つめながら男は乾いた笑みを浮かべ、そして、白目を剥いて気絶した。